鳥取県教育文化財団調査報告書　68

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡2

2000

財団法人　鳥取県教育文化財団

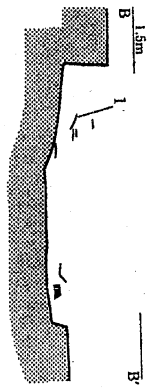
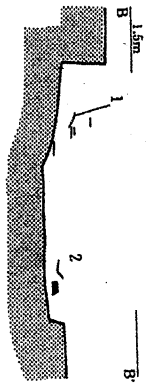
建設省　鳥取工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書　68
一般国道９号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
『青谷上寺地遺跡２』

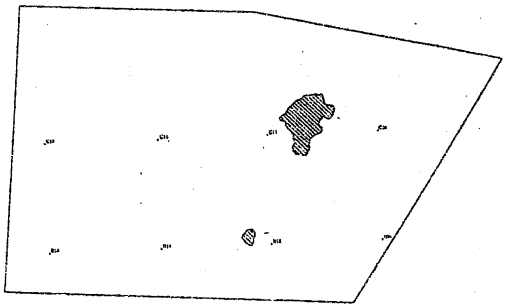
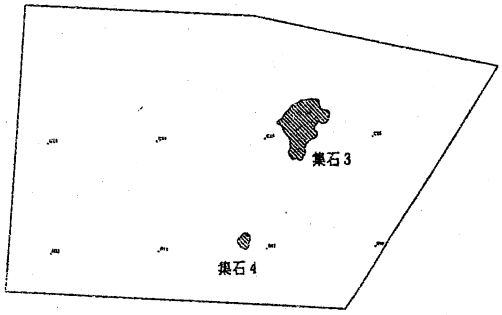
正　誤　表

お手数ですが、以下のとおり訂正のうえ、ご活用下さい。

66ページ　第97図

誤	正
	

71ページ　第106図

誤	正
	

３区ＳＤ27、ＳＡ11検出状況（北東から）

巻頭図版２

３区ＳＤ27、ＳＡ11検出状況（北から）

３区ＳＤ27護岸施設（北西から）

3 区ＳＤ28、36、37検出状況（北から）

3 区ＳＤ28杭列（南西から）

巻頭図版４

１区ＳＤ11木器溜検出状況（北から）

１区ＳＤ11矢板列検出状況（北から）

１区ＳＤ33木器溜検出状況（南東から）

１区ＳＤ33完掘状況（南東から）

巻頭図版 6

3 区ＳＡ15～17検出状況（西から）

3 区漂着人骨 1 検出状況（東から）

3 区 S K201検出状況（北東から）

3 区 S K201検出状況・近接（北から）

巻頭図版 8

3 区 卜骨集積遺構 1 検出状況（南東から）

3 区 S K287遺物出土状況（北西から）

一般国道9号（青谷・羽合道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

鳥取県気高郡青谷町

青谷上寺地遺跡2

2000

財団法人　鳥取県教育文化財団

建設省　鳥取工事事務所

序　　文

一般国道９号は、京都市を起点として福知山市及び兵庫県但馬地方を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、下関市に至る延長約674kmの主要幹線道路であり、西日本の産業・経済活動の大動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省鳥取工事事務所では、岩美郡岩美町（鳥取・兵庫県境）から気高郡青谷町までの約48.5kmを管理しており、広域交流を進める道づくり、暮らしを豊かにする道づくり等各種の道路整備事業を実施しています。その一つに環日本海交流の基幹軸の一環を担う高規格幹線道路（自動車専用道路）の一部となる青谷羽合道路のうち、青谷工区の整備を鋭意進めているところです。

このルート上には、多数の周知の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁へ通知した結果、事前に発掘調査の実施と記録保存を行うこととなりました。

このうち、平成10年度から平成11年度にかけて、「青谷上寺地遺跡」について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもと発掘調査が行われました。

本書はこの調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるために寄与し、また教育及び学術研究のために広く活用されることを望みますとともに、建設省としても、道路事業の実施にあたっては文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることに対して皆様に理解いただけることを期待するものであります。

終わりに、事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集に至るまでご尽力いただいた鳥取県教育委員会、及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位に対し心から感謝申し上げます。

平成12年３月

建設省中国地方建設局
鳥取工事事務所長　中　島　英一郎

例　　言

1．本報告書は平成10年度から11年度にかけて行った「一般国道９号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査」による、埋蔵文化財発掘調査記録のうち、調査区１区から３区までの遺構に関する報告である。１区から３区の遺物及び４区、５区に関する報告は次年度刊行予定である

2．本発掘調査は、建設省の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。

3．本発掘調査は、下記の遺跡を対象として実施された。
青谷上寺地遺跡（鳥取県気高郡青谷町大字青谷字上寺地ほか所在）

4．本報告書は、並行して行われた「一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業」に係る青谷上寺地遺跡発掘調査報告書と体裁の一致を図っている。

5．本発掘調査に至る経緯及び発掘調査の経過については、一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ『青谷上寺地遺跡１』にまとめられている。

6．本発掘調査の実施にあたっては、遺構、遺物に関する指導を（財）ユネスコ・アジア文化センター文化財保護協力事務所工楽善通先生、大阪府立弥生文化博物館金関恕先生、京都国立博物館難波洋三先生、芦屋市教育委員会森岡秀人先生、名古屋大学渡辺誠先生、愛媛大学下條信行先生、村上恭通先生に、堆積物に関する現地指導を放送大学赤木三郎先生に、人骨等の取り上げ、鑑定を鳥取大学井上貴央先生に、木製品の樹種鑑定を鳥取大学古川郁夫先生に、木製構造物の年輪年代測定を奈良国立文化財研究所光谷拓実先生にそれぞれお願いした。また佐賀大学和佐野喜久生先生には、炭化米について本報告書に御寄稿いただいた。明記して深甚の謝意を表します。

7．本発掘調査の実施にあたっては、土壌分析、珪藻分析及び木製品の保存処理の一部をそれぞれ専門業者に、現地における基準点測量、遺構の写真測量、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を業者に委託した。

8．本報告書の作成は調査員の討議に基づいて行い、編集は北浦が行った。
本報告書に掲載した図面、図版は、調査員が作成した。遺物の実測、図面の浄書は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。

9．本報告に関わる記録類及び出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．現地調査及び報告書の作成に当たっては、上記の先生方のほかに、多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して深謝いたします（敬称略、順不同）。
松本岩雄　田中義昭　平野芳英　松井　章　深澤芳樹　和田晴吾　宮崎泰史　橋本裕行　永島利春　寺沢　薫
佐原　眞　岡村道雄　扇崎　由　西谷　正　比佐陽一郎　西尾克己　西本豊弘　白田義彦　林　日佐子
村田晃一　豆谷和之　廣瀬常雄　細川金也　重藤輝行　田中正弘　宮腰健司　野口哲也　原田　幹　楠　正勝
橋本正博　孫　明助　趙　現鐘　白石　純　藤田三郎　村上年生　青谷町　青谷町教育委員会
青谷町立青谷中学校　青谷町立あおや郷土館　奈良国立文化財研究所　島根県立八雲立つ風土記の丘
銅鐸博物館　（財）大阪府埋蔵文化財調査研究センター　大阪府立弥生文化博物館　田原本町教育委員会
愛知県教育委員会　（財）愛知県埋蔵文化財センター　基山町教育委員会　佐賀県教育委員会
福岡市埋蔵文化財センター　金沢市教育委員会　小松市教育委員会　京都国立博物館

凡　　例

1．本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海抜高である。Ｘ＝、Ｙ＝の数値は、国土座標第Ｖ系の座標値である。

2．発掘調査時における遺構名は、報告書作成時において大幅に変更している。新旧の対照は、第１章に示した対照表を参照されたい。

3．本報告書において、遺構名に略称を用いたものは次のとおりである。
ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝状遺構、ＳＡ：杭列
遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。

4．本報告書における遺構番号は、一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ『青谷上寺地遺跡１』からの通し番号である。

5．遺物には原則的に遺跡名（略称ＫＪＢと表示）、グリッド名、遺構名、取上番号、取上年月日を記入した。遺構名については、旧名を記入している。

6．遺構の時期決定に際しては、下記の土器編年に依っている。
清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』株式会社木耳社。
松井　潔　1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会。

目　　次

序文

例言、凡例

目次

第１章　調査の概要
　第１節　はじめに …… 1
　第２節　基本層序 …… 2
　第３節　遺構、遺物の概要 …… 10
　第４節　古環境と遺跡の変遷 …… 12

第２章　弥生時代中期中葉～後葉の遺構
　第１節　土坑 …… 13
　第２節　溝、杭列 …… 23
　第３節　卜骨集積遺構 …… 30
　第４節　漂着人骨 …… 31

第３章　弥生時代後期初頭～後葉の遺構
　第１節　土坑 …… 33
　第２節　溝 …… 56

第４章　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構
　第１節　土坑 …… 65
　第２節　溝、杭列 …… 91
　第３節　土器溜 …… 99
　第４節　集石 …… 103

第５章　古墳時代以降の遺構
　第１節　土坑 …… 105
　第２節　土器溜 …… 109
　第３節　集石 …… 111

第６章　関連諸分野の成果
　第１節　はじめに …… 113
　第２節　青谷上寺地遺跡の炭化米特性と稲作起源 …… 佐賀大学　和佐野喜久生　114
　第３節　青谷上寺地遺跡におけるプラント・オパール分析 …… 株式会社古環境研究所　124
　第４節　青谷上寺地遺跡における花粉分析 …… 株式会社古環境研究所　129
　第５節　青谷上寺地遺跡における珪藻分析 …… 株式会社古環境研究所　134

第７章　おわりに …… 139

抄録

図版

挿　図　目　次

第１図　青谷上寺地遺跡国道調査区配置図 …… 2
第２図　１区土層図（１） …… 2
第３図　１区土層図（２） …… 3
第４図　２区土層図（１） …… 4
第５図　２区土層図（２） …… 5
第６図　２区土層図（３） …… 6
第７図　３区土層図 …… 7
第８図　弥生時代中期中葉～後葉遺構分布図 …… 8
第９図　弥生時代後期初頭～後葉遺構分布図 …… 8
第10図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
遺構分布図 …… 9
第11図　古墳時代以降の遺構分布図 …… 9
第12図　焼土66 …… 10
第13図　弥生時代中期中葉～後葉３区遺構配置図　13
第14図　弥生時代中期中葉～後葉２区遺構配置図　14
第15図　ＳＫ192及び出土遺物 …… 16
第16図　ＳＫ193及び出土遺物 …… 16
第17図　ＳＫ194及び出土遺物 …… 17
第18図　ＳＫ195及び出土遺物 …… 17
第19図　ＳＫ196及び出土遺物 …… 17
第20図　ＳＫ197及び出土遺物 …… 18
第21図　ＳＫ198及び出土遺物 …… 18
第22図　ＳＫ199及び出土遺物 …… 18
第23図　ＳＫ200及び出土遺物 …… 19
第24図　ＳＫ201 …… 20
第25図　ＳＫ201土層図及び出土遺物 …… 22
第26図　ＳＡ８～10及び出土遺物 …… 23
第27図　ＳＤ27、ＳＡ11木器溜検出状況 …… 25
第28図　ＳＤ27護岸施設、ＳＡ11検出状況 …… 26
第29図　ＳＤ27護岸施設立面図 …… 27
第30図　ＳＤ27出土遺物（１） …… 28
第31図　ＳＤ27出土遺物（２） …… 29
第32図　卜骨集積遺構１ …… 30
第33図　漂着人骨１検出状況 …… 31
第34図　弥生時代後期初頭～後葉１区遺構配置図　34
第35図　弥生時代後期初頭～後葉３区遺構配置図　34
第36図　弥生時代後期初頭～後葉２区遺構配置図　35
第37図　ＳＫ202及び出土遺物 …… 36
第38図　ＳＫ203及び出土遺物 …… 36
第39図　ＳＫ204及び出土遺物 …… 36
第40図　ＳＫ205及び出土遺物 …… 37
第41図　ＳＫ206及び出土遺物 …… 37
第42図　ＳＫ207 …… 37
第43図　ＳＫ208及び出土遺物 …… 39
第44図　ＳＫ209及び出土遺物 …… 39
第45図　ＳＫ210及び出土遺物 …… 39
第46図　ＳＫ211及び出土遺物 …… 41
第47図　ＳＫ212及び出土遺物 …… 41
第48図　ＳＫ213及び出土遺物 …… 41
第49図　ＳＫ214及び出土遺物 …… 42
第50図　ＳＫ215及び出土遺物 …… 42
第51図　ＳＫ216 …… 42
第52図　ＳＫ217及び出土遺物 …… 43
第53図　ＳＫ218及び出土遺物 …… 43
第54図　ＳＫ219及び出土遺物 …… 43
第55図　ＳＫ220及び出土遺物 …… 45
第56図　ＳＫ221及び出土遺物 …… 45
第57図　ＳＫ222及び出土遺物 …… 45
第58図　ＳＫ223及び出土遺物 …… 47
第59図　ＳＫ224及び出土遺物 …… 47
第60図　ＳＫ225及び出土遺物 …… 47
第61図　ＳＫ226及び出土遺物 …… 48
第62図　ＳＫ227及び出土遺物 …… 48
第63図　ＳＫ228及び出土遺物 …… 48
第64図　ＳＫ229及び出土遺物 …… 48
第65図　ＳＫ230及び出土遺物 …… 48
第66図　ＳＫ231及び出土遺物 …… 49
第67図　ＳＫ232及び出土遺物 …… 49
第68図　ＳＫ233 …… 49
第69図　ＳＫ234 …… 49
第70図　ＳＫ235 …… 49
第71図　ＳＫ236 …… 49

第72図　ＳＫ237 …… 51
第73図　ＳＫ238 …… 51
第74図　ＳＫ239 …… 51
第75図　ＳＫ240及び出土遺物 …… 51
第76図　ＳＫ241及び出土遺物 …… 51
第77図　ＳＫ242 …… 51
第78図　ＳＫ243 …… 51
第79図　ＳＫ244 …… 54
第80図　ＳＫ245 …… 54
第81図　ＳＫ246 …… 54
第82図　ＳＫ247 …… 54
第83図　ＳＫ248 …… 54
第84図　ＳＫ249 …… 54
第85図　ＳＫ250 …… 54
第86図　ＳＫ251 …… 54
第87図　ＳＫ252 …… 54
第88図　ＳＫ253 …… 54
第89図　ＳＫ254及び出土遺物 …… 55
第90図　ＳＫ255 …… 55
第91図　ＳＫ256及び出土遺物 …… 55
第92図　ＳＤ28～32及び出土遺物 …… 57
第93図　ＳＤ11木器溜検出状況 …… 58
第94図　ＳＤ11矢板列検出状況 …… 59
第95図　ＳＤ11断面図、土層図及び出土遺物 …… 61
第96図　ＳＤ33及び出土遺物 …… 63
第97図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
1区遺構配置図 …… 66
第98図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
3区遺構配置図① …… 66
第99図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
3区遺構配置図② …… 66
第100図 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭
2区遺構配置図 …… 67
第101図 ＳＫ257及び出土遺物 …… 68
第102図 ＳＫ258及び出土遺物 …… 68
第103図 ＳＫ259及び出土遺物 …… 68
第104図 ＳＫ260及び出土遺物 …… 69
第105図 ＳＫ261及び出土遺物 …… 69
第106図 ＳＫ262及び出土遺物 …… 71
第107図 ＳＫ263及び出土遺物 …… 71
第108図 ＳＫ264及び出土遺物 …… 72
第109図 ＳＫ265及び出土遺物 …… 73
第110図 ＳＫ266及び出土遺物 …… 73
第111図 ＳＫ267及び出土遺物 …… 74
第112図 ＳＫ268及び出土遺物 …… 74
第113図 ＳＫ269及び出土遺物 …… 74
第114図 ＳＫ270及び出土遺物 …… 75
第115図 ＳＫ271及び出土遺物 …… 75
第116図 ＳＫ272及び出土遺物 …… 77
第117図 ＳＫ273及び出土遺物 …… 77
第118図 ＳＫ274及び出土遺物 …… 79
第119図 ＳＫ275及び出土遺物 …… 79
第120図 ＳＫ276及び出土遺物 …… 80
第121図 ＳＫ277及び出土遺物 …… 80
第122図 ＳＫ278及び出土遺物 …… 80
第123図 ＳＫ279及び出土遺物 …… 81
第124図 ＳＫ280及び出土遺物 …… 81
第125図 ＳＫ281及び出土遺物 …… 81
第126図 ＳＫ282及び出土遺物 …… 83
第127図 ＳＫ283及び出土遺物 …… 83
第128図 ＳＫ284、285及び出土遺物 …… 85
第129図 ＳＫ286及び出土遺物 …… 85
第130図 ＳＫ287及び出土遺物 …… 86
第131図 ＳＫ288及び出土遺物 …… 87
第132図 ＳＫ289及び出土遺物 …… 87
第133図 ＳＫ290及び出土遺物 …… 87
第134図 ＳＫ291及び出土遺物 …… 87
第135図 ＳＫ292 …… 89
第136図 ＳＫ293 …… 90
第137図 ＳＫ294 …… 90
第138図 ＳＫ295 …… 90
第139図 ＳＫ296 …… 90
第140図 ＳＫ297 …… 90
第141図 ＳＫ298及び出土遺物 …… 90
第142図 ＳＫ299 …… 92
第143図 ＳＫ300 …… 92
第144図 ＳＫ301 …… 92
第145図 ＳＫ302 …… 92
第146図 ＳＫ303 …… 93
第147図 ＳＫ304 …… 93

第148図 ＳＫ305 …… 93
第149図 ＳＫ306 …… 93
第150図 ＳＤ34及び出土遺物 …… 94
第151図 ＳＤ35 …… 94
第152図 ＳＡ12～14 …… 95
第153図 ＳＤ36、37、ＳＡ15～17 …… 97
第154図 ＳＤ36、37、ＳＡ15～17断面図、土層図及び出土遺物 98
第155図 土器溜７及び出土遺物 …… 99
第156図 土器溜８及び出土遺物 …… 100
第157図 集石２及び出土遺物 …… 101
第158図 集石３ …… 102
第159図 集石４ …… 102
第160図 古墳時代以降１区遺構配置図 …… 106
第161図 古墳時代以降３区遺構配置図 …… 106
第162図 古墳時代以降２区遺構配置図 …… 107
第163図 ＳＫ307及び出土遺物 …… 108
第164図 ＳＫ308及び出土遺物 …… 109
第165図 ＳＫ309及び出土遺物 …… 109
第166図 ＳＫ310及び出土遺物 …… 110
第167図 ＳＫ311及び出土遺物 …… 110
第168図 土器溜９及び出土遺物 …… 111
第169図 集石５及び出土遺物 …… 112
第170図 国道調査区１～５区配置図 …… 113
第171図 ３、４区資料検出地点 …… 113
第172図 青谷上寺地遺跡の所在地及びその周辺の地形図 …… 115
第173図 青谷上寺地遺跡の炭化米粒長の頻度分布図 … 117
第174図 比較基準遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布 … 118
第175図 青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒の粒長・幅平均値（付・95％信頼区間）… 118
第176図 青谷上寺地及び比較遺跡の炭化籾粒の平均値の分布（付・95％信頼区間）… 122
第177図 ５区プラント・オパール分析、花粉分析サンプリング地点 … 124
第178図 Ａ地点のプラント・オパール分析結果 126
第179図 Ｂ地点のプラント・オパール分析結果 127
第180図 Ｃ地点のプラント・オパール分析結果 127
第181図 青谷上寺地遺跡の花粉ダイアグラム … 132
第182図 ５区珪藻分析サンプリング地点 …… 134
第183図 青谷上寺地遺跡の主要珪藻ダイアグラム 137

挿　表　目　次

表１　遺構新旧対照表 …… 11
表２　青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差 116
表３　青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差 120
表４　青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差 120
表５　青谷上寺地及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表 121
表６　青谷上寺地及び比較遺跡の炭化籾粒特性の平均値及び標準偏差 122
表７　青谷上寺地遺跡（５区）のプラント・オパール分析結果 … 126
表８　青谷上寺地遺跡の花粉分析結果 …… 131
表９　青谷上寺地遺跡の珪藻分析結果 …… 131

図　版　目　次

図版１　調査区遠景
調査区全景
図版２　１区Ｂ13グリッド付近土層堆積状況
２区Ｂ18グリッド付近土層堆積状況
２区Ｂ22グリッド付近土層堆積状況
図版３　３区北壁Ｂ25グリッド付近土層堆積状況
３区北壁Ｂ26グリッド付近土層堆積状況
３区北壁Ｂ26グリッド付近土層堆積状況
図版４　ＳＫ193遺物出土状況
ＳＫ196遺物出土状況
ＳＫ196完掘状況
図版５　ＳＫ200検出状況
ＳＫ200遺物出土状況
ＳＫ200遺物出土状況・分銅形土製品
図版６　ＳＫ201遺物出土状況
ＳＫ201遺物出土状況
図版７　ＳＫ201遺物出土状況・部分
ＳＫ201遺物出土状況・部分
図版８　ＳＤ27、ＳＡ11検出状況
ＳＤ27、ＳＡ11検出状況
図版９　ＳＤ27、ＳＡ11護岸施設・杭、板材使用
ＳＤ27護岸施設・礫敷き
図版10　ＳＤ27遺物出土状況・土器
ＳＤ27遺物出土状況・不明木製品
ＳＤ27遺物出土状況・琴板
図版11　ＳＤ27遺物出土状況・鉋
ＳＤ27遺物出土状況・骨針
ＳＡ８、９検出状況
図版12　卜骨集積遺構１検出状況
漂着人骨検出状況
図版13　ＳＫ202遺物出土状況
ＳＫ205遺物出土状況
ＳＫ208遺物出土状況
図版14　ＳＫ213遺物出土状況
ＳＫ215遺物出土状況
ＳＫ217遺物出土状況
図版15　ＳＫ220遺物出土状況
ＳＫ220遺物出土状況・石錘
ＳＫ224遺物出土状況
図版16　ＳＫ241遺物出土状況
ＳＫ241完掘状況
ＳＫ243遺物出土状況
図版17　ＳＤ28検出状況
ＳＤ28検出状況
ＳＤ28検出状況・近接
図版18　ＳＤ11木器溜検出状況
ＳＤ11木器溜検出状況
図版19　ＳＤ11矢板列検出状況
ＳＤ11矢板列検出状況
図版20　ＳＤ11土層堆積状況
ＳＤ11完掘状況
図版21　ＳＤ11遺物出土状況・人形木製品
ＳＤ11遺物出土状況・流水文刻板状木製品
ＳＤ11遺物出土状況・連続渦文刻木製品
図版22　ＳＤ11遺物出土状況・盾
ＳＤ11遺物出土状況・木製高坏坏部
ＳＤ11遺物出土状況・木製高坏脚部
図版23　ＳＤ11遺物出土状況・田舟
ＳＤ11遺物出土状況・杁
ＳＤ11遺物出土状況・横鎚
図版24　ＳＤ33木器溜検出状況
ＳＤ33木器溜検出状況
図版25　ＳＤ33木器溜検出状況
ＳＤ33完掘状況
図版26　焼土66検出状況
焼土67検出状況
焼土68検出状況
図版27　ＳＫ257土層堆積状況
ＳＫ257遺物出土状況
ＳＫ257遺物出土状況・近接

図版28　ＳＫ258遺物出土状況
ＳＫ260遺物出土状況
ＳＫ260完掘状況
図版29　ＳＫ262遺物出土状況
ＳＫ264遺物出土状況
ＳＫ264遺物出土状況
図版30　ＳＫ266遺物出土状況
ＳＫ268遺物出土状況
ＳＫ270遺物出土状況
図版31　ＳＫ272遺物出土状況
ＳＫ274遺物出土状況
ＳＫ276遺物出土状況
図版32　ＳＫ275遺物出土状況
ＳＫ275完掘状況
ＳＫ278遺物出土状況
図版33　ＳＫ279遺物出土状況
ＳＫ281遺物出土状況
ＳＫ282遺物出土状況
図版34　ＳＫ283遺物出土状況
ＳＫ284遺物出土状況
ＳＫ285遺物出土状況
図版35　ＳＫ286遺物出土状況
ＳＫ287遺物出土状況
ＳＫ287完掘状況
図版36　ＳＫ288土層堆積状況
ＳＫ288遺物出土状況
ＳＫ295遺物出土状況
図版37　ＳＫ298遺物出土状況
ＳＫ302遺物出土状況
ＳＫ305遺物出土状況
図版38　ＳＡ12、13検出状況
ＳＡ12、13検出状況
ＳＡ12付近遺物出土状況・槽
図版39　ＳＤ36木器溜検出状況
ＳＤ36遺物出土状況・銅鏃
ＳＤ36遺物出土状況・木製容器
図版40　ＳＡ15検出状況
ＳＡ15検出状況
図版41　ＳＡ15～17検出状況
ＳＡ16検出状況
ＳＡ16検出状況
図版42　ＳＡ17検出状況
ＳＡ17検出状況
ＳＡ17検出状況
図版43　土器溜７検出状況
土器溜８検出状況
集石２検出状況
図版44　集石３検出状況
集石３検出状況
集石４検出状況
図版45　ＳＫ307遺物出土状況
ＳＫ307遺物出土状況・勾玉形土製品、土玉
ＳＫ307遺物出土状況・勾玉形土製品
図版46　ＳＫ308遺物出土状況
ＳＫ309遺物出土状況
ＳＫ310遺物出土状況
図版47　土器溜９検出状況
土器溜９検出状況
集石５検出状況
図版48　２区Ⅱ層、銅鐸形石製品出土状況
２区Ⅴ２層、輪付土玉出土状況
１区Ⅱ層、重圏文鏡出土状況
図版49　２区Ⅰ層、鹿角製柄付鑿状鉄製品出土状況
３区Ⅰ層、袋状鑿出土状況
３区Ⅲ１Ｓ層、素環頭刀子出土状況
図版50　２区Ⅰ層、鹿角製離頭銛出土状況
２区Ⅰ層、猪牙製結合式釣針出土状況
２区Ⅰ層、不明石製品出土状況
図版51　青谷上寺地遺跡の炭化米・籾粒写真（１）
図版52　青谷上寺地遺跡の炭化米・籾粒写真（２）
図版53　プラント・オパール顕微鏡写真（Ａ地点２層）
プラント・オパール顕微鏡写真（Ｂ地点４層）
プラント・オパール顕微鏡写真（Ｃ地点４層）
図版54　プラント・オパール顕微鏡写真（Ｂ地点４層）
プラント・オパール顕微鏡写真（Ａ地点２層）
プラント・オパール顕微鏡写真（Ｂ地点４層）
図版55　青谷上寺地遺跡の花粉・胞子遺体
図版56　青谷上寺地遺跡の珪藻

第１章　調査の概要

第１節　はじめに

本報告書では、１区から３区までの遺構を対象としており、遺物及び４、５区については、次年度の報告となる。発掘調査に至る経緯及び発掘調査の経過、位置と環境については、県道調査区報告書『青谷上寺地遺跡１』に掲載されており、本報告書では割愛する。次章以降に１区～３区の遺構について概要を記述するが、遺物整理の途上にあり、遺構の形状等事実記載に留めざるを得なかった。遺構の時期決定についても、土器の詳細な検討に至らない現状にあっては、凡例に示したとおり清水編年、松井編年に全面的に準拠することとした。このような前提にあって、本節では、本報告書の内容についての理解を少しでも容易にするため、県道調査区を含めた遺跡の全体像を、まずは概観しておきたい。

青谷上寺地遺跡の県道、国道両調査区は、青谷平野の中央部、日置川と勝部川の合流地点の南方に位置する。両調査区とも西から１～５区と呼称し、直線距離で県道調査区270m、国道調査区290mの区間にわたる。現況は、国道３区が水田上に造成された宅地であり、それ以外は全て水田である。それぞれの調査区間は農業用水路と農道によって、国道３～４区の間は町道によって区切られている。現況では、町道より西側の県道調査区１～５区及び国道調査区１～３区側が標高2.3～2.6m、東側の国道調査区４～５区側が標高1.9～2.1mと、町道を境に西側がやや高位を示す。度重なる圃場整備や造成のために表土層（近、現代）は１～２mと厚く、表土層中には暗渠が縦横に走る。全体に低湿な環境にあり、発掘時には調査区壁面から常時湧水がみられた。この表土層の厚みや低湿な環境が、遺構、遺物に幸いし、鉄製品や木製品、骨角器の遺存状態を極めて良好なものとした。

調査地においては、弥生時代前期頃までに微高地が出現し、微高地上に立地する県道調査区５区においては、弥生時代前期末～中期初頭の段階の土坑や方形周溝状遺構などが検出されている。中期段階において遺構の分布域は拡大し、県道調査区４区東半部や国道調査区２区西半部にまで遺構は広がりをみせる（第８図）。中期後葉段階に至ると、国道調査区３区に、微高地域の東側縁辺に沿う形で、護岸施設を伴う溝ＳＤ27が形成され、微高地と低地が区分されはじめる。弥生時代後期に至ると、ＳＤ27は埋没し、微高地の版図はさらに拡大し、土坑の分布は国道調査区３区にまで及ぶ（第９図）。後期後半段階には、微高地の西側と東側の縁辺に則して、矢板列を伴う溝が形成される。西側の溝は、県道調査区４区から国道調査区１区にかけて伸びるＳＤ11、東側の溝は国道調査区４区のＳＤ38である。ＳＤ11は、県道４区において祭祀場が設けられ、溝は微高地と低地を画する聖なる境界として意識されることとなる。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭に至ると、東西の溝ＳＤ11、38は埋没し、溝の埋土上面にまで土坑や土器溜が形成されるが、さらにその外側にまで及ぶことはない（第10図）。古墳時代前期以降になると遺構の数は極端に減少し（第11図）、遺跡の終焉を思わせるほどとなる。以降遺跡は往時の盛期を取り戻すことはない。

このように青谷上寺地遺跡は微高地を中心に展開するが、遺物包含層も微高地部分を中心に濃密に形成される。矢板列を伴う東西の溝、ＳＤ11とＳＤ38付近をボーダーラインとして、低地部分からの遺物の出土量は極端に少なくなる。低地部分では水田跡が確認されており、微高地西側の県道調査区２区で畦畔が検出された水田跡は、弥生時代前期末にまで遡る可能性がある。微高地東側の国道調査区４、５区においては、弥生時代中期後葉以降に水田化しており、微高地の西側低地の開発は、東側低地に先んじている。

結局のところ国道、県道両調査区は、南北に伸びる微高地を、東西方向に横断して延長した長大なトレンチのようである。このような調査区設定により、結果的に遺跡の履歴がより明確になり、さらに微高地域の特殊性が際立つものとなった。来年度県道調査区はさらに東に伸び、国道調査区４区、５区の北側にさしかかる。微高地の有り様が、さらに明らかになるものと思われる。

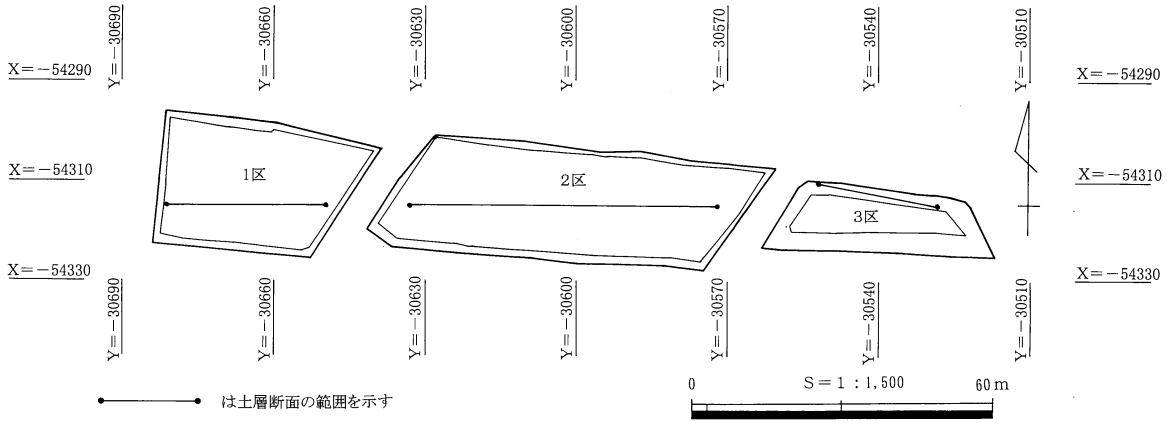
なお、調査において使用した調査区割は、国道、県道両調査区全体を網羅する範囲に、国土座標に従い10m画

のグリッドを設定し、その南西隅を起点として北に向かいＡ、Ｂ、Ｃ…、東に向かい１、２、３…と番号を付した。それぞれ交点となる杭には、Ａ１、Ｂ３などと名称を与え、グリッド名は南西隅の杭に従っている。ちなみに起点となるＡ１地点の国土座標第Ｖ系の座標値は、（Ｘ＝－54330、Ｙ＝－30800）である。

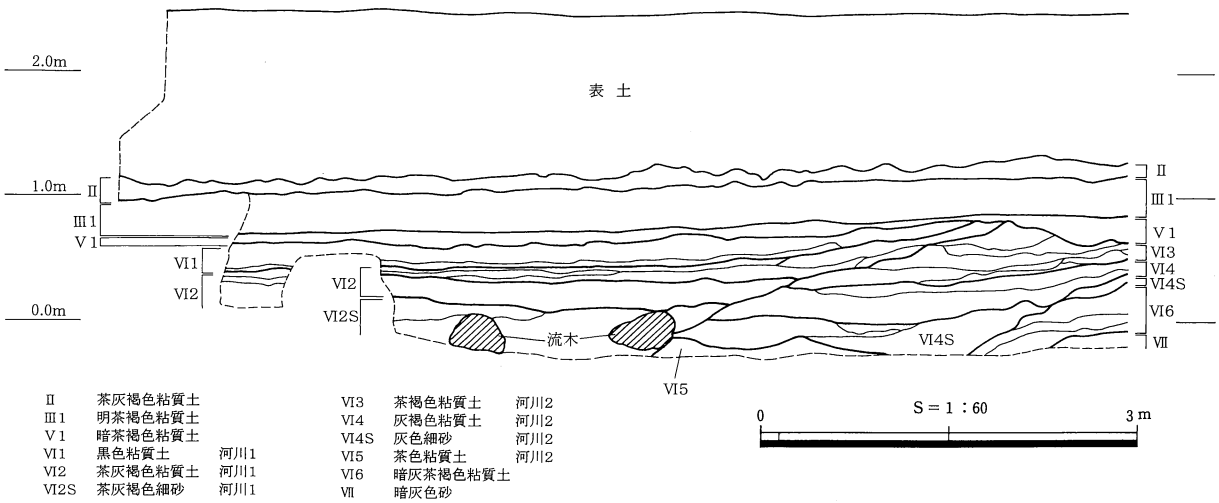
第２節　基本層序

本報告書に係る国道調査区１区～３区の基本層序について述べる。土層断面の観察地点は、１区及び２区については、東西軸のＢラインとＣラインの中間５ｍの地点にベルトを設定し、３区については調査区の北側壁面を利用した（第１図）。土層観察ラインは３区で若干方向性を崩すが、堆積状況は概ね把握されるものと考える。なお、土層番号として使用したⅠ～Ⅷは、土層相互の時期的な整合性を示すものであり、必ずしも同一層とは限らない。土質が特徴的で明確に区分される場合にのみ、１、２…といった枝番号を付した。砂層については、末尾にＳを付け、区別した。

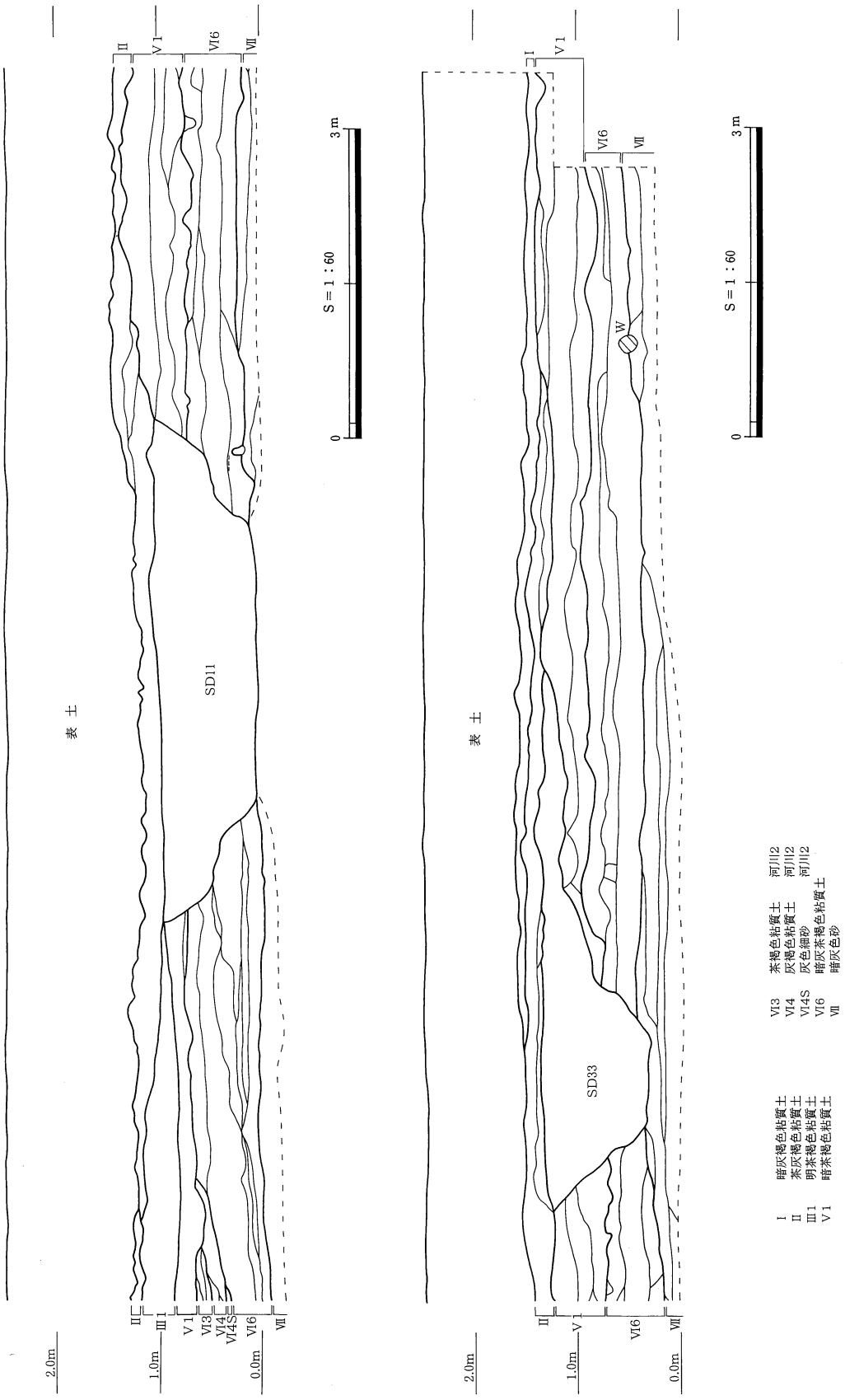
堆積状況は、微高地中心部と縁辺部では異なった様相を呈している。微高地中心部に相当する２区の表土下は、基本的に７層に区分される（第４～６図）。Ⅰ層は黒色砂混じり粘質土層で、弥生時代中期から奈良時代までの遺物を包含している。２区では一部撹乱域を除いて、全域に堆積している。Ⅱ層は黒灰色粘質土層で、弥生時代



第１図　青谷上寺地遺跡国道調査区配置図



第２図　１区土層図（１）


表土
SD11
SD33
W
S＝1：60
0
3m
2.0m
1.0m
0.0m
Ⅱ
Ⅲ1
Ⅴ1
Ⅵ3
Ⅵ4
Ⅵ4S
Ⅵ6
Ⅶ
Ⅰ　暗灰褐色粘質土
Ⅱ　茶灰褐色粘質土
Ⅲ1　明茶褐色粘質土
Ⅴ1　暗茶褐色粘質土
Ⅵ3　茶褐色粘質土　河川2
Ⅵ4　灰褐色粘質土　河川2
Ⅵ4S　灰色細砂　河川2
Ⅵ6　暗灰茶褐色粘質土
Ⅶ　暗灰色砂

第３図　１区土層図（２）

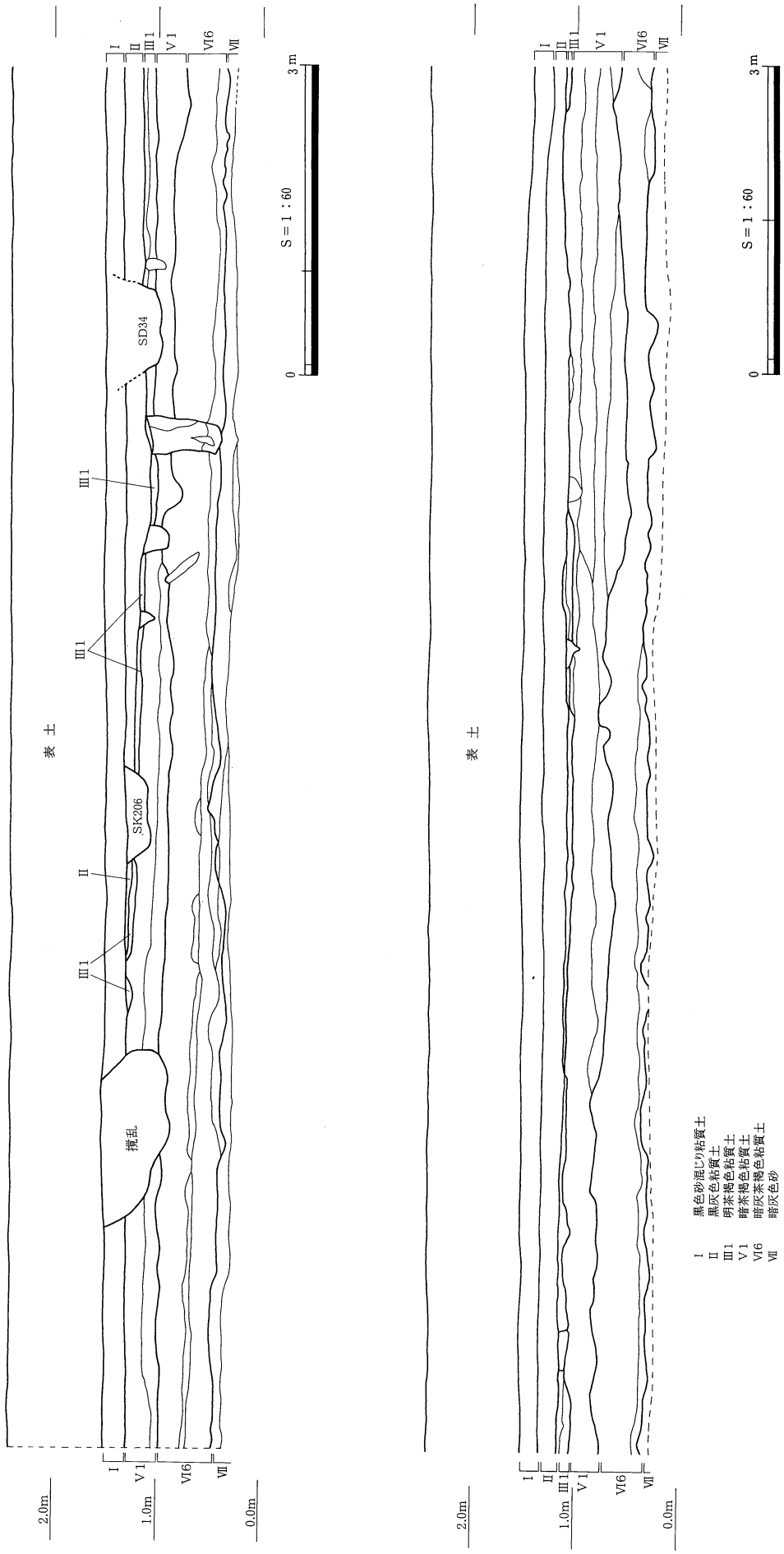
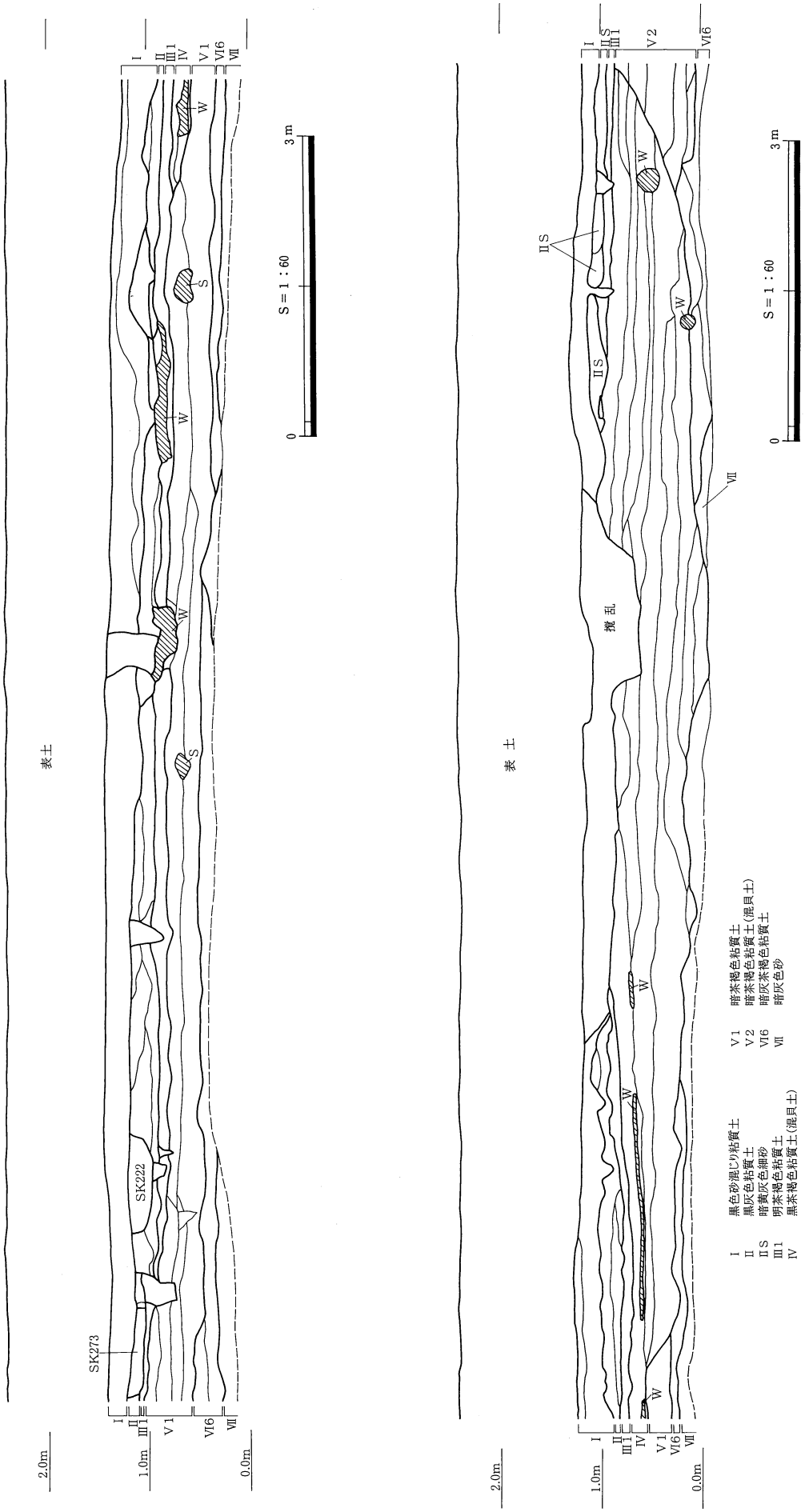
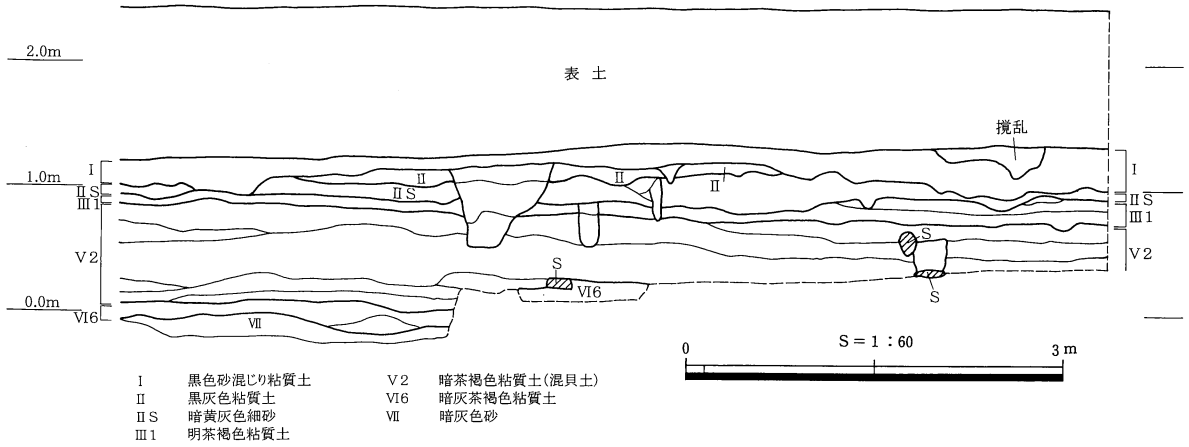


表 土
撹乱
SK206
SD34
Ⅲ1
Ⅱ
Ⅰ
Ⅴ1
Ⅵ6
Ⅶ
2.0m
1.0m
0.0m
S＝1：60
0
3 m
Ⅰ　黒色砂混じり粘質土
Ⅱ　黒灰色粘質土
Ⅲ1　明茶褐色粘質土
Ⅴ1　暗茶褐色粘質土
Ⅵ6　暗灰茶褐色粘質土
Ⅶ　暗灰色砂

第４図　２区土層図（１）


表土
SK273
SK222
S
W
I
II
III1
IV
V1
VI6
VII
2.0m
1.0m
0.0m
S＝1：60
0
3m
表土
攪乱
IIS
V2
黒色砂混じり粘質土
黒灰色粘質土
暗黄灰色細砂
明茶褐色粘質土
黒茶褐色粘質土(混貝土)
暗茶褐色粘質土
暗茶褐色粘質土(混貝土)
暗茶褐色粘質土
暗灰色砂

第５図　２区土層図（２）

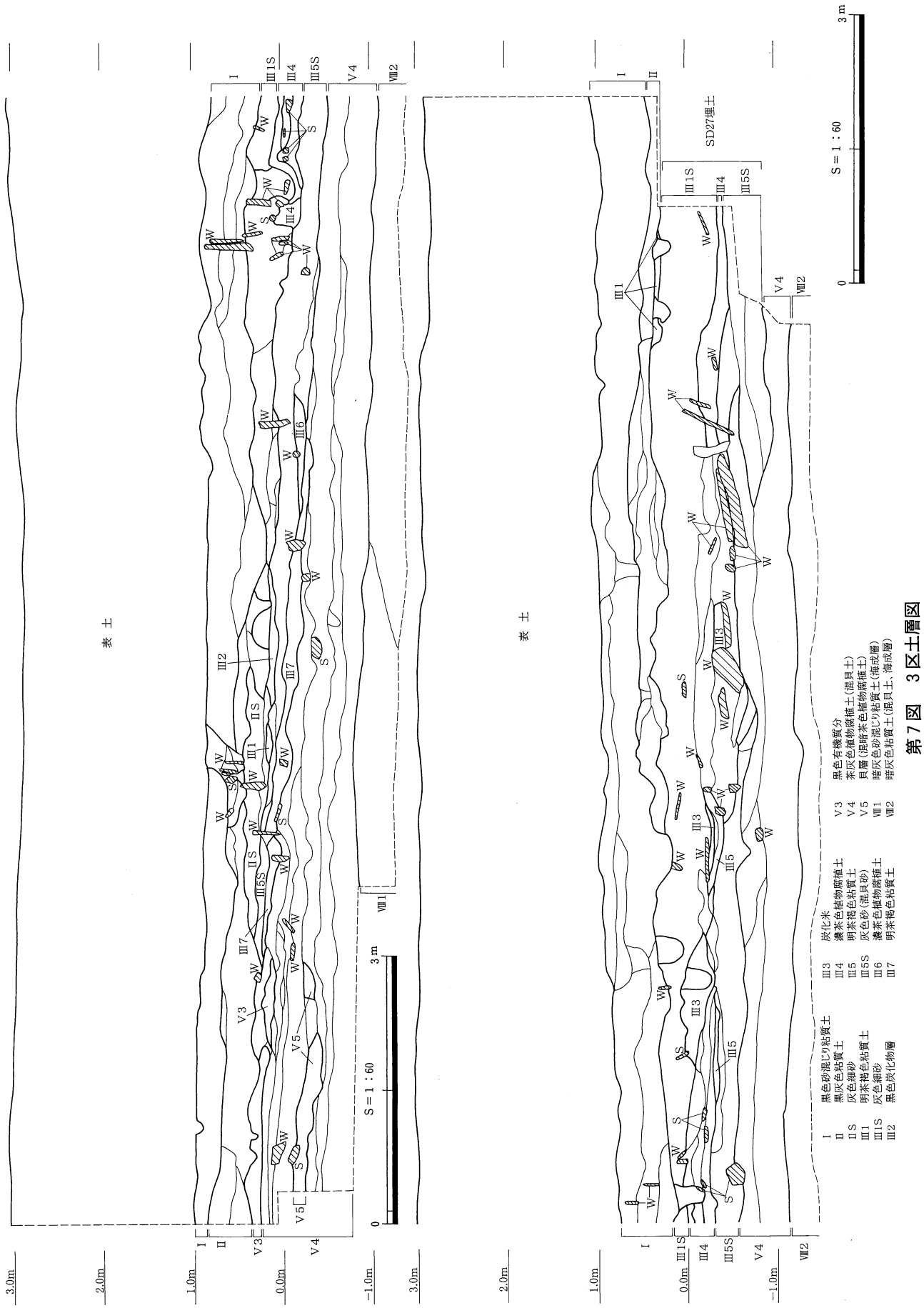


第６図　２区土層図（３）

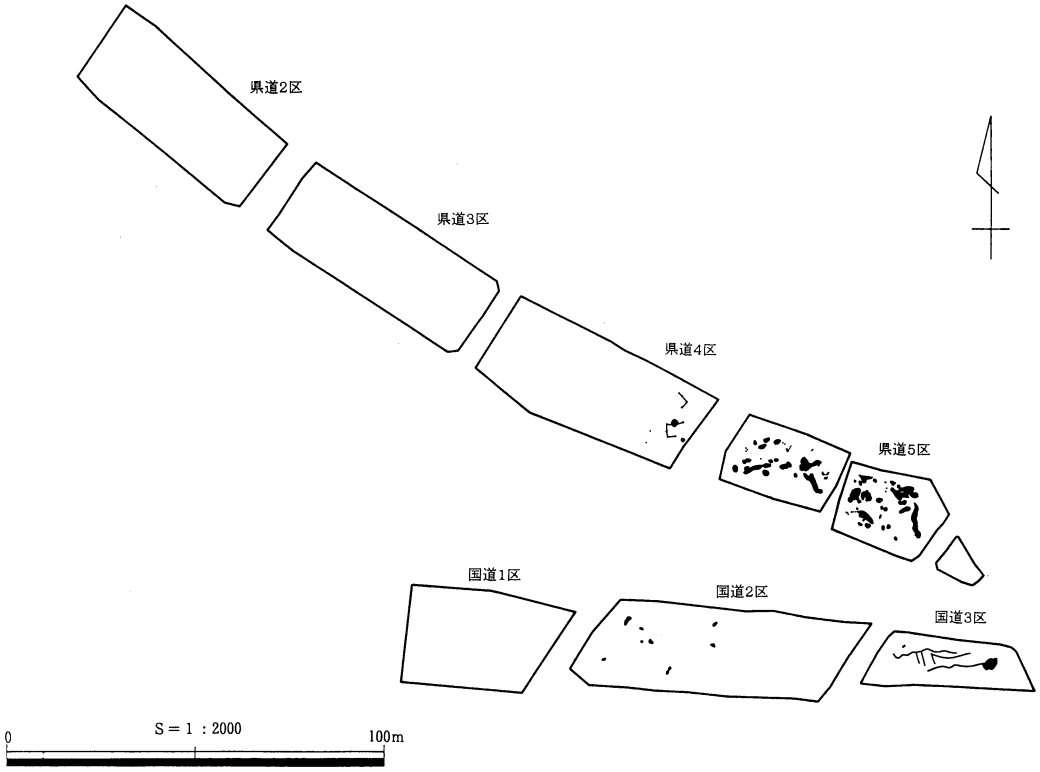
中期～古墳時代前期初頭の遺物を包含している。Ｉ層の下層にあたる。東西両端部で途切れるものの、概ね２区全域に堆積するといってよい。細分できなかったが、この層中に弥生時代中期から古墳時代前期初頭にかけての各時期の遺構面が存在するものと思われる。Ⅲ１層は明茶褐色粘質土層で、Ⅱ層の下層にあたり、弥生時代中期後葉以前に堆積した層である。極めてきめの細かい土質であり、全く土壌化されていない。途中途切れるものの、２区のほぼ全域に薄く堆積している。この層の上面は、Ⅱ層中で検出出来なかった遺構の検出面となる。Ⅲ１層下層以下では遺構は検出されなくなる。Ⅳ層は黒茶褐色粘質土層で、２区の東寄り部分にみられる落ち込み地形部分に堆積したものである。Ⅲ１層の下層であり、弥生時代中期の遺物包含層である。ムラサキイガイやマガキを主体とする混貝土層で、多量の木製品が出土している。Ｖ１層、Ｖ２層は暗茶褐色粘質土で、２区のほぼ全域に堆積している。Ⅳ層の下層にあたる。Ⅳ層堆積部分を挟んで、東側がＶ２層で、混貝土層となる。弥生時代前期末から中期にかけての遺物包含層である。Ｖ１層、Ｖ２層の下層はⅥ６層の暗灰茶褐色粘質土で、これより下層は無遺物層である。さらにその下層はⅦ層の灰色砂層となる。Ⅵ６層、Ⅶ層ともに、２区全域に堆積している。

１区では（第２、３図）、Ｉ、Ⅱ層相当層の土質が２区と異なる。Ｉ層は暗灰褐色粘質土、Ⅱ層は茶灰褐色粘質土となるが、包含する遺物の時期的な対応関係は、２区と整合する。Ⅱ層は１区全域に堆積するが、Ｉ層は１区の西側部分で途切れてしまう。矢板列を伴う溝ＳＤ11、33は、おそらくⅡ層中から掘り込まれているものと思われるが、判別できなかった。Ⅲ１層はＳＤ11より西側にのみ堆積しており、２区より堆積幅が厚い。Ⅲ１層下層のＶ１層は、２区と整合するものであるが、弥生時代前期後半～中期の遺物包含層であり、遺物の上限が２区より古く遡る。その下層からは無遺物層となる。ＶＩ層以下からは、遺構は検出されていない。Ⅵ６層、Ⅶ層は２区から続くもので、１区の西側にいたると、Ｖ１層とⅥ６層の間にⅥ１～Ⅵ５層の堆積がみられる。自然流路の堆積層であり、河川１と河川２が把握された。Ⅵ６層を大きく浸食するものと思われる。

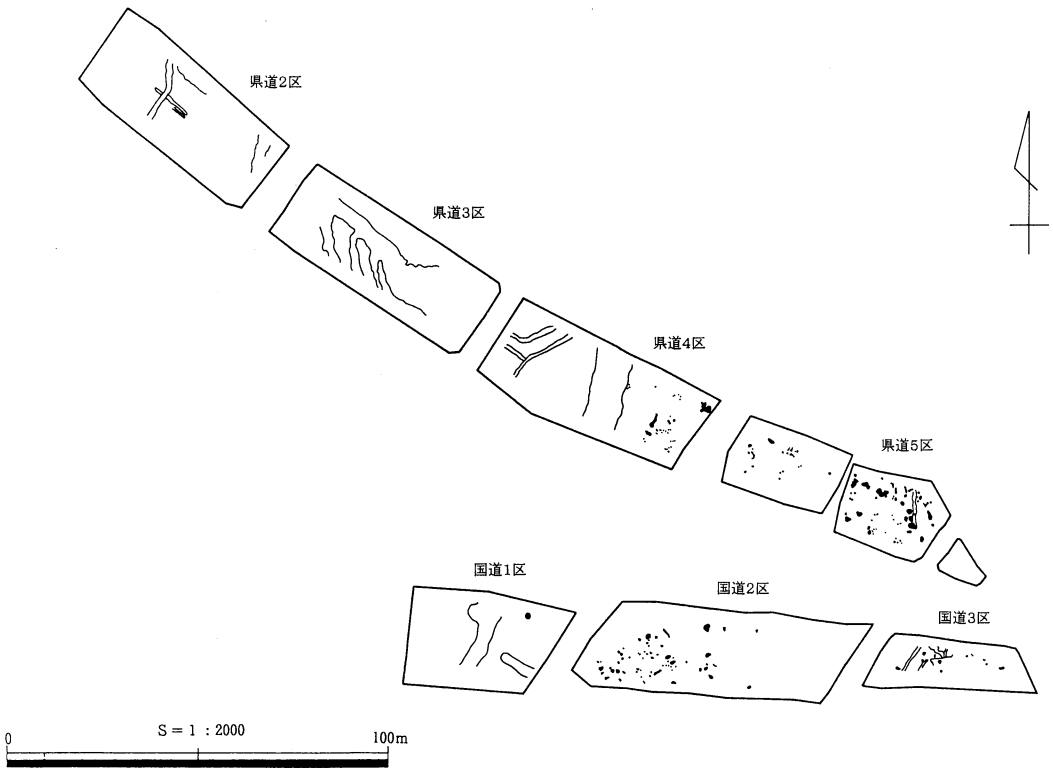
３区の堆積状況は、１、２区と様相を異にする（第７図）。Ｉ、Ⅱ層など上層部は、２区との整合性をみせるが、堆積レベルが0.5～１ｍ低くなる。Ⅱ層中からⅢ１Ｓ層上面にかけては、弥生時代後期以降の遺構面が存在する。Ⅱ層下層には、ごく部分的に明茶褐色粘質土層であるⅢ１層の堆積が確認できるものの、主に砂層（Ⅱ１Ｓ層、Ⅲ１Ｓ層等）が堆積し、一部黒色炭化物層（Ⅲ２層、Ｖ３層）も確認される。Ⅲ１Ｓ層は弥生時代中期後葉の遺物を包含している。Ⅲ１Ｓ層の下層には、濃茶色植物腐植土層であるⅢ４層が堆積しており、一時的に安定した状態が保たれたことが確認される。Ⅲ１Ｓ層との間層には、多量の炭化米が層を形成しており、漂着した状況を示している。Ⅲ４層の下層には、混貝土層の茶灰色植物腐植土層であるＶ４層が厚く堆積している。Ｖ４層は、沼沢地など湿地帯的な様相を示すものであるが、弥生時代中期後葉段階に、Ⅲ５Ｓ層がこれを浸食し、のちに護岸施設を伴う溝ＳＤ27が整備される。Ｖ４層の堆積は、海成層であるⅧ１、Ⅷ２層の上層から始まる。弥生時代中期の遺物包含層ではあるが、堆積過程で貝層であるＶ５層の形成がみられ、これが弥生時代前期末から中


表土
SD27埋土
S＝1：60
0
3m
3.0m
2.0m
1.0m
0.0m
−1.0m
Ⅰ 黒色砂混じり粘質土
Ⅱ 黒灰色粘質土
ⅡS 灰色細砂
Ⅲ1 明茶褐色粘質土
Ⅲ1S 灰色細砂
Ⅲ2 黒色炭化物層
Ⅲ3 炭化米
Ⅲ4 濃茶色植物腐植土
Ⅲ5 明茶褐色粘質土
Ⅲ5S 灰色砂(混貝砂)
Ⅲ6 濃茶色植物腐植土
Ⅲ7 明茶褐色粘質土
Ⅴ3 黒色有機質分
Ⅴ4 茶灰色植物腐植土(混貝土)
Ⅴ5 貝層(混暗茶色植物腐植土)
Ⅷ1 暗灰色砂混じり粘質土(海成層)
Ⅷ2 暗灰色粘質土(混貝土、海成層)

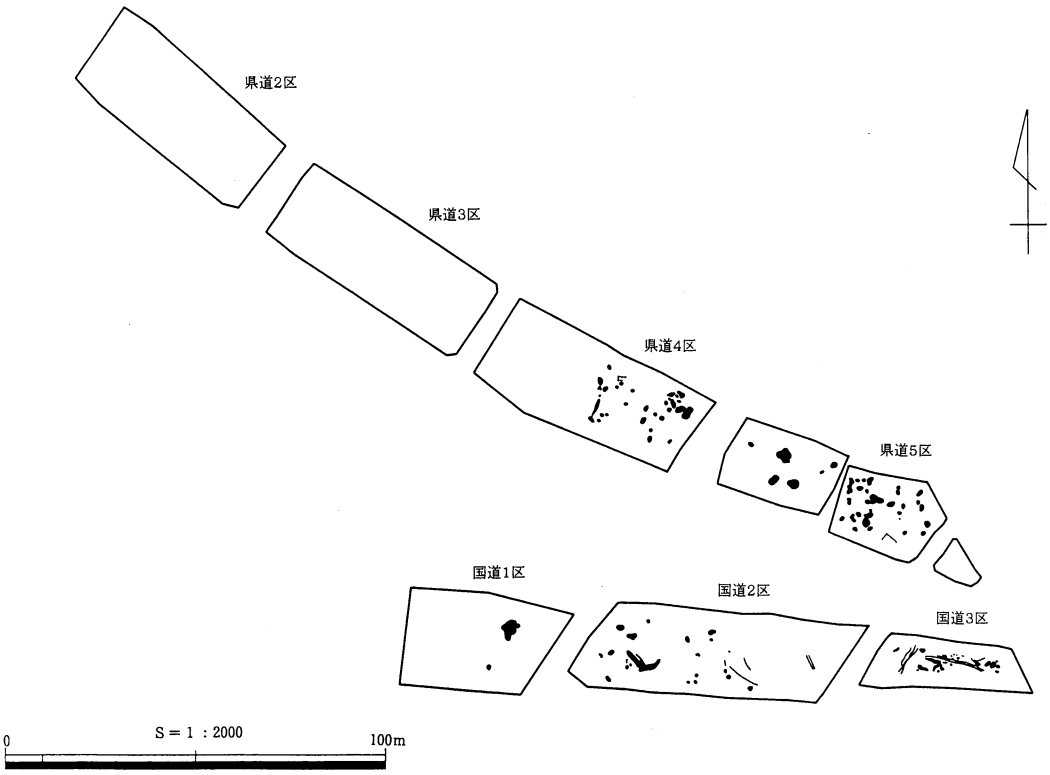
第７図　３区土層図



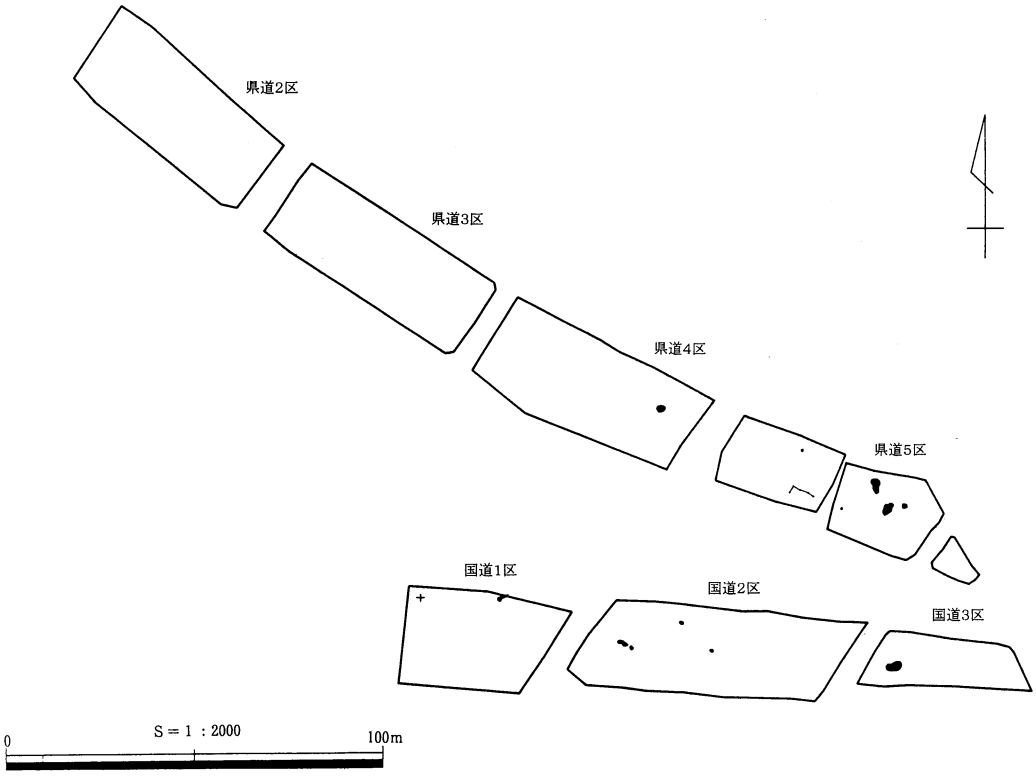
第８図　弥生時代中期中葉～後葉遺構分布図



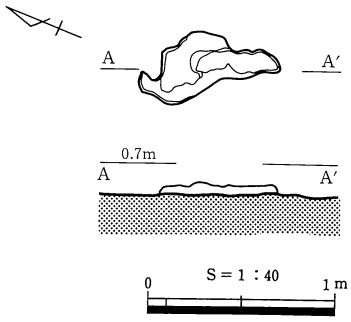
第９図　弥生時代後期初頭～後葉遺構分布図



第10図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭遺構分布図



第11図　古墳時代以降の遺構分布図



第12図　焼土66

期初頭に比定される県道調査区５区の貝塚に連なるものと思われることからＶ４層形成の開始は少なくとも弥生時代前期末以前にまで遡るものといえる。

弥生時代中期の遺物の出土レベルが、２区で標高０m付近までであるのに対し、３区では－１m付近まで下がることから、３区下層段階では２区と３区の間で地形が変換し、低地化していることが窺える。１、２区でみられた最下層のⅦ層は３区にはみられず、この砂層の堆積が微高地形成の遠因である可能性もある。その後、Ⅲ１Ｓ層など厚い砂層の堆積によって３区は微高地化し、弥生時代後期以降、土坑の分布域に取り込まれたものと考えられる。

最後に、県道調査区の堆積状況との整合性について触れておく。Ⅰ層、Ⅱ層は県道調査区まで広がっており、それぞれ同土色名の①層、②層に対応する。Ⅲ層は県道調査区にはほとんど存在せず、Ⅳ層、Ｖ１層は③層灰褐色粘質土に、Ｖ２層、Ｖ４層は④層淡茶色粘質土から⑦層淡褐色粘質土の範疇に相当する。Ⅵ６層は無遺物層であるが、④～⑦層の範疇に含まれるであろう。Ⅶ層は、⑧層緑灰色砂質土に対応するものである（県道調査区報告書『青谷上寺地遺跡１』　第３章　調査の概要　参照）。

第３節　遺構、遺物の概要

国道調査区１区～３区で検出された遺構は、土坑120基、溝12条、杭列10条、土器溜３基、集石４基、焼土７基、卜骨集積遺構１基であり、ほかに漂着人骨１体、ピット多数が検出されている。土坑は、各時期を通じて微高地上にあたる２区の西半部に集中し、溝は微高地縁辺部にあたる１区や３区に構築される傾向にある。県道調査区も含めた遺構、遺物の概要については、県道調査区報告書『青谷上寺地遺跡１』に掲載されており、本節では国道調査区の遺構分布状況についてごく概略を述べるに留める。なお、本報告書においては、検出された遺構を県道調査区報告書『青谷上寺地遺跡１』と共通する４つの時期区分にまとめて報告している。弥生時代中期中葉～後葉、弥生時代後期初頭～後葉、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭、古墳時代以降である。古墳時代以降とはいうものの、前期初頭を含まないことをお断りしておく。

県道調査区にみられる弥生時代前期末～中期初頭の遺構は、国道調査区では検出されていない。弥生時代中期中葉～後葉においては、２区西半部に土坑の集中がみられ、３区では微高地縁辺に沿って大型板材を用いる護岸施設を伴うＳＤ27が検出された。また卜骨集積遺構やイノシシの頭骨や穿孔のある下顎骨を伴う土坑ＳＫ201など、祭祀的色彩の窺われる遺構も検出されている。弥生時代後期初頭～後葉においては、３区のＳＤ27が埋没し、土坑の分布域が３区にまで及ぶ。全体的に土坑の数が増加する。１区では、矢板列を伴う溝ＳＤ11、ＳＤ33が築かれ、微高地西側が低地と画される。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に至ると、２区西半部における土坑の数が減少する。一方３区では、杭列や溝が築かれたのちに埋没し、その上面に土坑等遺構が集中的に形成される。１区では、ＳＤ11、33が埋没し、その上層に集石２基が形成され、さらに古墳時代前期に至ると、土器溜が形成される。

最後に、弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけて形成される焼土について触れておく。焼土は、不整形で多様な平面形を呈し、大きさ等に規格性がみられない。土坑を伴わず、地表面に形成された赤色硬化面であり、時に灰や炭化物の集積として検出される。第12図は焼土66で、弥生時代後期初頭～後葉段階に相当する。不整な形状を呈し、長軸75cm、短軸50cmを測り、灰分が５cm程度の厚みで遺存している。混入の土器細片が検出されるほかは、遺物は出土しない。焼土の本来的な目的は明らかではないが、成分分析を行っているので参照されたい。（白石純「青谷上寺地遺跡出土土器の付着物、焼土の分析」『青谷上寺地遺跡１』第９章第５節）

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
ＳＫ192	ＳＫ５	ＳＫ245	ＳＫ15	ＳＫ298	ＳＫ114
ＳＫ193	ＳＫ43	ＳＫ246	ＳＫ63	ＳＫ299	ＳＫ119
ＳＫ194	ＳＫ46	ＳＫ247	ＳＫ67	ＳＫ300	ＳＫ122
ＳＫ195	ＳＫ59	ＳＫ248	ＳＫ69	ＳＫ301	ＳＫ132
ＳＫ196	ＳＫ70	ＳＫ249	ＳＫ73	ＳＫ302	ＳＫ124
ＳＫ197	ＳＫ89	ＳＫ250	ＳＫ24	ＳＫ303	ＳＫ126
ＳＫ198	ＳＫ93	ＳＫ251	ＳＫ62	ＳＫ304	ＳＫ135
ＳＫ199	ＳＫ95	ＳＫ252	ＳＫ76	ＳＫ305	ＳＫ138
ＳＫ200	ＳＤ２	ＳＫ253	ＳＫ80	ＳＫ306	ＳＫ145
ＳＫ201	ＳＫ154	ＳＫ254	ＳＫ54	ＳＫ307	ＳＫ３
ＳＫ202	ＳＫ21	ＳＫ255	ＳＫ83	ＳＫ308	ＳＫ47
ＳＫ203	ＳＫ88	ＳＫ256	ＳＤ６	ＳＫ309	ＳＫ44
ＳＫ204	ＳＫ90	ＳＫ257	ＳＫ７	ＳＫ310	ＳＫ85
ＳＫ205	ＳＫ４	ＳＫ258	ＳＫ34	ＳＫ311	ＳＫ92
ＳＫ206	ＳＫ10	ＳＫ259	ＳＫ74	ＳＤ11	木器溜１
ＳＫ207	ＳＫ84	ＳＫ260	ＳＫ35	ＳＤ27	ＳＤ25
ＳＫ208	ＳＫ11	ＳＫ261	ＳＫ38	ＳＤ28	ＳＤ13
ＳＫ209	ＳＫ22	ＳＫ262	ＳＫ２	ＳＤ29	ＳＤ18
ＳＫ210	ＳＫ23	ＳＫ263	ＳＫ６	ＳＤ30	ＳＤ15
ＳＫ211	ＳＫ25	ＳＫ264	ＳＫ17	ＳＤ31	ＳＤ14
ＳＫ212	ＳＫ26	ＳＫ265	ＳＫ８	ＳＤ32	ＳＤ22
ＳＫ213	ＳＫ28	ＳＫ266	ＳＫ19	ＳＤ33	木器溜２
ＳＫ214	ＳＫ29	ＳＫ267	ＳＫ20	ＳＤ34	ＳＤ４
ＳＫ215	ＳＫ32	ＳＫ268	ＳＫ27	ＳＤ35	ＳＤ５
ＳＫ216	ＳＫ57	ＳＫ269	ＳＫ33	ＳＤ36	ＳＤ11
ＳＫ217	ＳＫ37	ＳＫ270	ＳＫ40	ＳＤ37	ＳＤ12
ＳＫ218	ＳＫ41	ＳＫ271	ＳＫ42	ＳＡ８	ＳＤ27
ＳＫ219	ＳＫ61	ＳＫ272	ＳＫ51	ＳＡ９	ＳＤ27
ＳＫ220	ＳＫ50	ＳＫ273	ＳＫ56	ＳＡ10	ＳＤ28
ＳＫ221	ＳＫ53	ＳＫ274	ＳＫ68	ＳＡ11	ＳＤ25
ＳＫ222	ＳＫ55	ＳＫ275	ＳＫ75	ＳＡ12	２区杭列
ＳＫ223	ＳＫ58	ＳＫ276	ＳＫ78	ＳＡ13	２区杭列
ＳＫ224	ＳＫ65	ＳＫ277	ＳＫ112	ＳＡ14	２区杭列
ＳＫ225	ＳＫ71	ＳＫ278	ＳＫ115	ＳＡ15	ＳＤ16
ＳＫ226	ＳＫ72	ＳＫ279	ＳＫ116	ＳＡ16	ＳＤ20
ＳＫ227	ＳＫ77	ＳＫ280	ＳＫ123	ＳＡ17	ＳＤ21
ＳＫ228	ＳＫ81	ＳＫ281	ＳＫ125	土器溜７	ＳＫ136
ＳＫ229	ＳＫ86	ＳＫ282	ＳＫ127	土器溜８	ＳＫ103
ＳＫ230	ＳＫ87	ＳＫ283	ＳＫ128	土器溜９	土器溜１
ＳＫ231	ＳＫ91	ＳＫ284	ＳＫ130	集石２	SD11上層集石
ＳＫ232	ＳＤ３	ＳＫ285	ＳＫ129	集石３	集石１
ＳＫ233	ＳＫ121	ＳＫ286	ＳＫ131	集石４	集石２
ＳＫ234	ＳＫ142	ＳＫ287	ＳＫ133	集石５	集石3
ＳＫ235	ＳＫ139	ＳＫ288	ＳＫ137	焼土66	焼土５
ＳＫ236	ＳＫ143	ＳＫ289	ＳＫ140	焼土67	焼土６
ＳＫ237	ＳＫ144	ＳＫ290	ＳＫ141	焼土68	焼土７
ＳＫ238	ＳＫ150	ＳＫ291	ＳＫ146	焼土69	焼土１
ＳＫ239	ＳＫ149	ＳＫ292	ＳＫ66	焼土70	焼土２
ＳＫ240	ＳＫ148	ＳＫ293	ＳＫ52	焼土71	焼土３
ＳＫ241	ＳＫ147	ＳＫ294	ＳＫ64	焼土72	焼土４
ＳＫ242	ＳＫ153	ＳＫ295	ＳＫ111	卜骨集積遺構１	ＳＫ155
ＳＫ243	ＳＫ151	ＳＫ296	ＳＫ113	漂着人骨１	ＳＫ156
ＳＫ244	ＳＫ14	ＳＫ297	ＳＫ118		

表１　遺構新旧対照表

第４節　古環境と遺跡の変遷

今回の調査にあたっては、調査地内各地点から採取した土壌について、自然科学的な分析を行っている。その結果については、県道、国道両調査報告書の巻末に詳細が掲載されているので参照頂くとして、本節においては、その成果と発掘調査の内容との整合を試み、遺跡をとりまく環境の変遷と遺跡の推移の対応について概観する。なお花粉分析を、微高地部分にあたる県道調査区５区と西側低地にあたる県道調査区３区、東側低地にあたる国道調査区５区で行い、プラント・オパール分析を、西側低地にあたる県道調査区２区、３区、東側低地にあたる国道調査区５区で行った。また、標高－2.5mまで達する土層断面を観察し得た５区では、珪藻分析を行っている。

遺構形成前の青谷上寺地遺跡は、縄文時代晩期の土器の包含が確認されている。縄文時代相当層として土壌採取されたのは、微高地上の県道調査区５区と東側低地にあたる国道調査区５区からである。国道調査区５区では、検出された珪藻遺骸の種類構成によって、縄文期に３期の環境変遷が推定された。土壌採取最下層にあたるⅠ帯では、採取地点が当時河口域にあたり、潮間帯の最上部の環境が考えられている。Ⅱ帯では、河川の流入する沼沢地の環境へと変化し、潮の干満の影響を強く受けたことが推察されている。Ⅲ帯では、海水の影響を強く受ける干潟の環境への変遷が推察され、縄文期の国道調査区５区は、海水の影響を少なからず受ける水域の環境にあったことが推定された。一方、微高地にあたる県道調査区５区においては樹木花粉が多く検出され、周囲にスギ林、カシ林の分布が推定される結果となった。また、イネ科とヨモギ属の草本の生育が推定されており、県道調査区５区付近まで、水域が及んでいなかったことが推察され、微高地の出現の萌芽は、縄文期にまで遡ることが想定される。

弥生時代前期末～中期初頭に至ると、県道調査区２区において水田が形成されることとなる。このことと呼応するように、県道調査区５区においても、弥生時代前期末～中期前葉相当層では、イネ科花粉の検出量が増加することが確認されている。またカシ林の減少や、やや乾燥した人為的な環境を好むヨモギ属などの草本の生育など、遺構群の出現に伴う環境変化が読み取れる結果を得た。東側低地の国道調査区５区においては、弥生時代中期相当層において、下層から上層へと向けて、周辺地域におけるカシ林の減少、スギ林の拡大が読み取れ、気候の冷涼化、湿潤化の進行が推測されている。わずかにイネのプラント・オパールが検出されたものの水田と認定できるほどの検出量にはなく、国道調査区５区では低湿な環境にはあったものの、水田開発には至っていない。西側低地の水田開発が東側低地に先んじるのは、東側低地が長らく沼沢地等の水域にあったことが原因であろう。なお、鞭虫卵の検出をみており、近隣の遺跡地からの汚染と考えられ、遺跡の規模の拡大が影響したものと推察される。

弥生時代後期に至ると、西側低地にあたる県道調査区２区や東側低地の国道調査区５区において、濃密なイネのプラント・オパールが検出され、この期に至って、東西両低地が水田化することが推察された。県道調査区３区では、イネ科花粉の増加に対し、周辺地域におけるスギ林の減少が確認でき、水田開発の影響が見て取れる。

以上のような古環境の変遷は、遺構の分布状況など遺跡の時間的推移と矛盾するものではない。というよりもむしろ、人為環境の変遷が自然環境に影響を及ぼした結果といえる。弥生時代中期後葉段階にあたるＳＤ27の大型板材使用の護岸施設や、後期後葉段階のＳＤ11、ＳＤ38の矢板列などは、大型土木工事に伴うスギ材の大量消費を想定させ、スギ林の伐採が、水田開発のみならず用材供給という主体的な目的性をもつものであったともいえる。しかし、スギ林の分布域の縮小という現象は、弥生時代後期の段階に如実に現れ、治山治水等に少なからぬ影響を与えたことは想像に難くない。古墳時代以降における遺跡衰退の一因をなすものであった可能性も否定できない。

第2章　弥生時代中期中葉～後葉の遺構

第1節　土坑

ＳＫ192（第15図）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区に位置する。長軸71cm、短軸60cmを測る土坑である。検出面の平面形は北東隅が突出する不整な隅丸方形状を呈し、底面の平面形は北側と南側から内側にくびれる形態である。西側は柱穴状のピットによって切られている。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは6.0cmを測る。埋土は２層に分層され、黒灰褐色粘質土と明茶褐色粘質土が堆積している。中央やや西よりの底面より0.5～3cm浮いた状態で、甕の口縁部から肩部にかけて（１）が、２片に分かれた状態で出土している。（１）は、口縁端部を上方につまみあげ、繰り上げ口縁とし、２条の凹線を施している。胴部外面は粗いハケ調整、内面はナデ調整である。

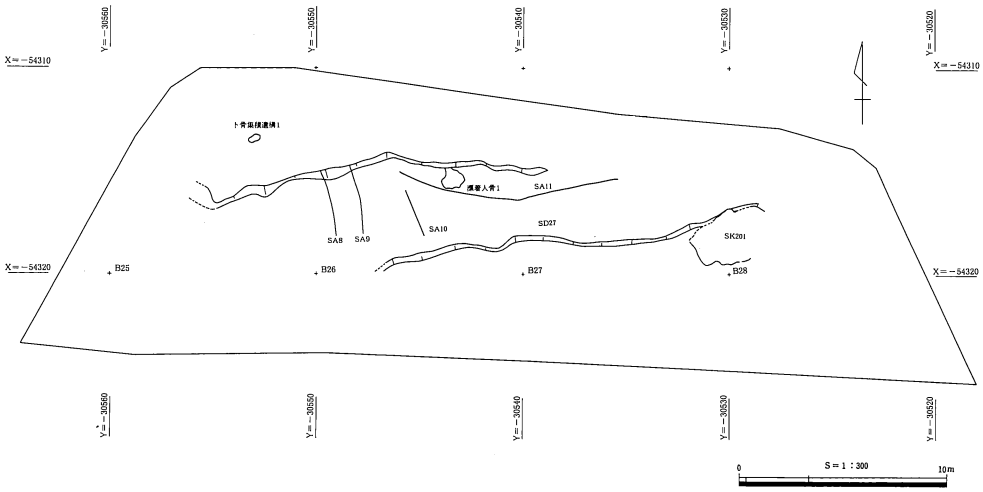
ＳＫ193（第16図・図版５）

国道２区Ｂ20グリッドＮＥ区に位置する。東西1.11m、南北99cmを測り、検出面、底面の平面形がともに、北側が内側に湾曲した不整形の土坑である。断面形は逆台形状を呈し、底面は中央部に向けてかすかに傾斜する。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は黒灰褐色土１層で、砂を僅かに含む。北東部底面には15cm画程度の角礫が置かれ、これを覆うように甕または壺と思われる胴部から底部にかけての部位２個体分（２、３）が破砕された状態で出土した。底面より４～６cm浮いた状態となる。これより約20cm離れた南側の地点では底面より１cm浮いた状態で、鹿角製の弭状加工品（４）が出土している。遺物は土坑内東側部分に片寄る傾向にある。

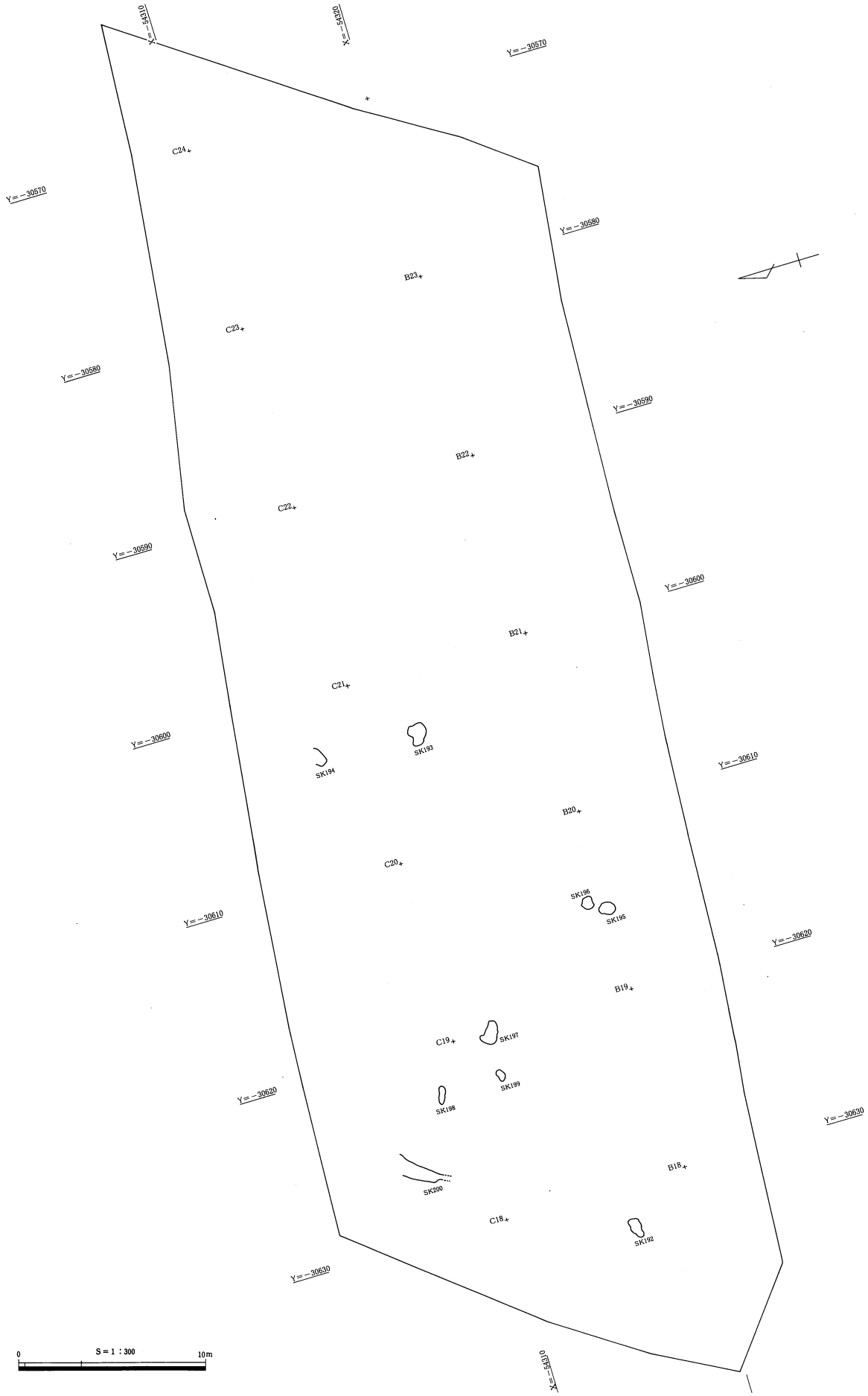
（１）は、埋土中より出土した甕である。口縁部から肩部にかけての破片で、内傾する複合口縁をなす。口縁部に２条の凹線が巡り、胴部外面にハケ調整、内面ナデ調整を施し、肩部内面に指押さえがみられる。（２）は、胴部最大径部分よりやや下位から底部にかけての部位で、径9cmの平底を呈する。外面は細かいハケ調整後部分的にナデ消し、底部近くに縦方向の工具痕があり、内面は縦方向のケズリを施す。

ＳＫ194（第17図）

国道２区Ｃ20グリッドＳＥ区に位置する。北側は調査に伴う排水溝に切られ、長径残存86cm、短径66cmを測る土坑である。検出面・底面ともに楕円形を指向すると思われる。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは14.5cmを測る。埋土は微量な混入物の差によって３層に細分できたが、暗灰褐色粘質土を基本とする。細分層は中央にくぼむ断面形を呈し、①層と③層の分層ラインに則して加工板材を検出したが、この



第13図　弥生時代中期中葉～後葉３区遺構配置図



第14図　弥生時代中期中葉～後葉２区遺構配置図

くぼみが作為的なものか否かは判断できなかった。中央やや西よりの埋土上層から高坏と思われる脚部片（1）が出土している。

（1）は、底部端部を上方に摘み出し、ヘラ状工具による刻みを連続して施している。凹線は走らず、ヨコナデによる稜線が巡る。体部は外面縦方向のミガキ調整で、裾部で横方向のミガキ調整となる。内面粗いケズリ調整で、底部内面は一定の幅でヨコナデが巡る。

ＳＫ195（第18図）

国道２区Ａ19グリッドＮＷ区からＢ19グリッドＳＷ区にかけて位置する。長径87cm、短径65cmを測り、検出面・底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は変則的な逆台形状を呈し、検出面からの深さは、5.2cmを測る。底面は多少凹凸がある。埋土は２層に分層できたが、暗灰茶褐色粘質土を基本とする。南東側の下端線寄りの底面直上から甕の口縁部（1）が出土し、これより約30cm離れた南西側下端線寄りの底面直上から出土した胴部の破片がこれに接合する。

（1）は、内傾して上下に拡張する繰り上げ口縁に２条の凹線が巡る。胴部は最大径付近まで遺存し、外面は縦方向のハケ調整、内面は右下がりの斜位方向のハケ調整後、左下がりの斜位方向のミガキ調整を施す。ミガキは上位ほど密である。

ＳＫ196（第19図・図版５）

国道２区Ｂ19グリッドＳＷ区からＳＥ区にかけて位置する。西側空白部は、後世のピット状の落ち込みにより、撹乱されている。長径65cm、短径62cmを測り、検出面、底面ともに不整な円形状を呈する土坑である。断面形は本来逆台形状と思われ、検出面からの深さは、6.8cmを測る。底面は北から南に向かって傾斜する。遺物は、北東側部分に片寄り気味だが、南西側部分にもやや拡散し、いずれも底面直上から出土する。ほぼ１個体分の甕（1）とともに、イヌの骨（2～4）が集積されている。（2）は頭骨で、（1）の甕に近接しており、口吻が南東方向を向く。（3）も頭骨で、口吻が北東方向を向いて（2）と近接する。（4）は下顎骨で、（2）の頭骨と同一個体のものである。このほかに四肢骨や椎骨などが検出されているが、いずれにも解体痕は観察されない。２頭分のイヌの全身骨角が揃わないが、おそらく西側空白部の撹乱部によって損なわれているものと思われ、本来は２頭分のイヌの埋葬土坑であると考える。２頭は中型犬で、ほぼ同じ年齢を示す。

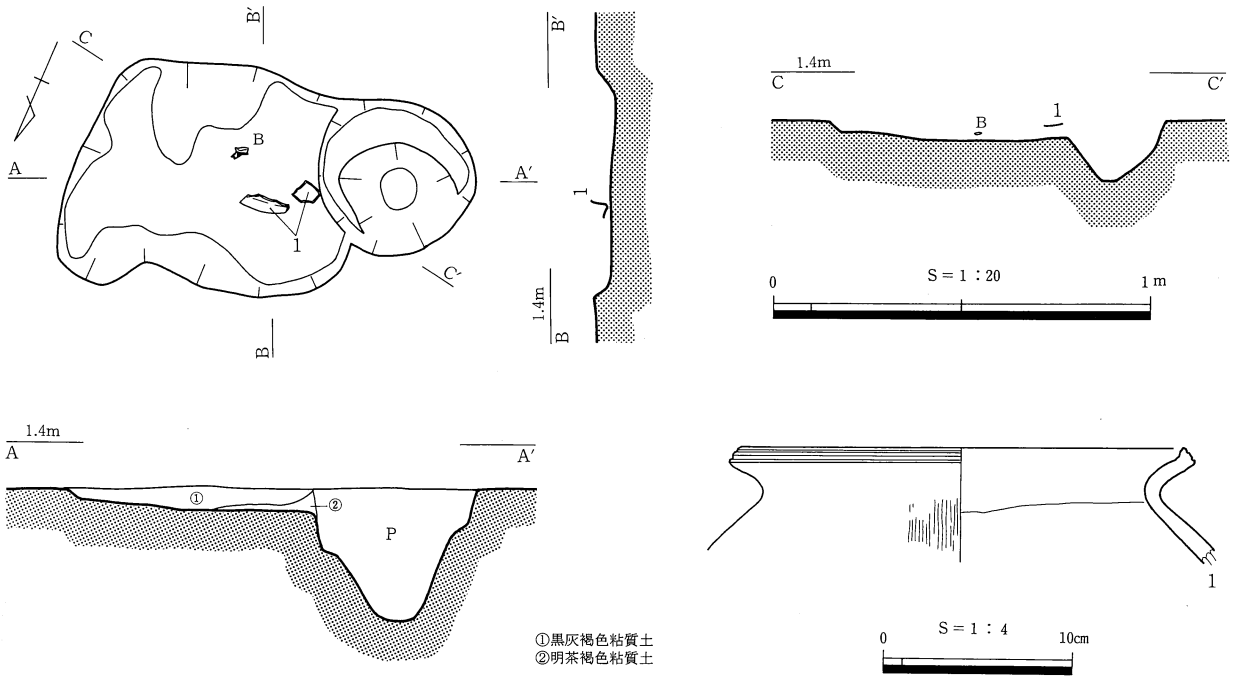
（1）は、口縁端部を上方に摘み上げた繰り上げ口縁で、内傾する口縁端面に凹線は巡らず、ヨコナデが施されている。胴部は最大径が中位より上方にある倒卵形を呈し、底部は径6.4cmの平底である。口縁部及び胴部中位には煤が付着し、胴部内面から底部にも有機質分の付着がみられる。調整は、胴部外面が縦方向のハケ調整後肩部にのみ疎らなミガキ調整、内面は縦方向のケズリ調整が最大径付近まで施され、それより上位は斜位のハケ調整である。

ＳＫ197（第20図）

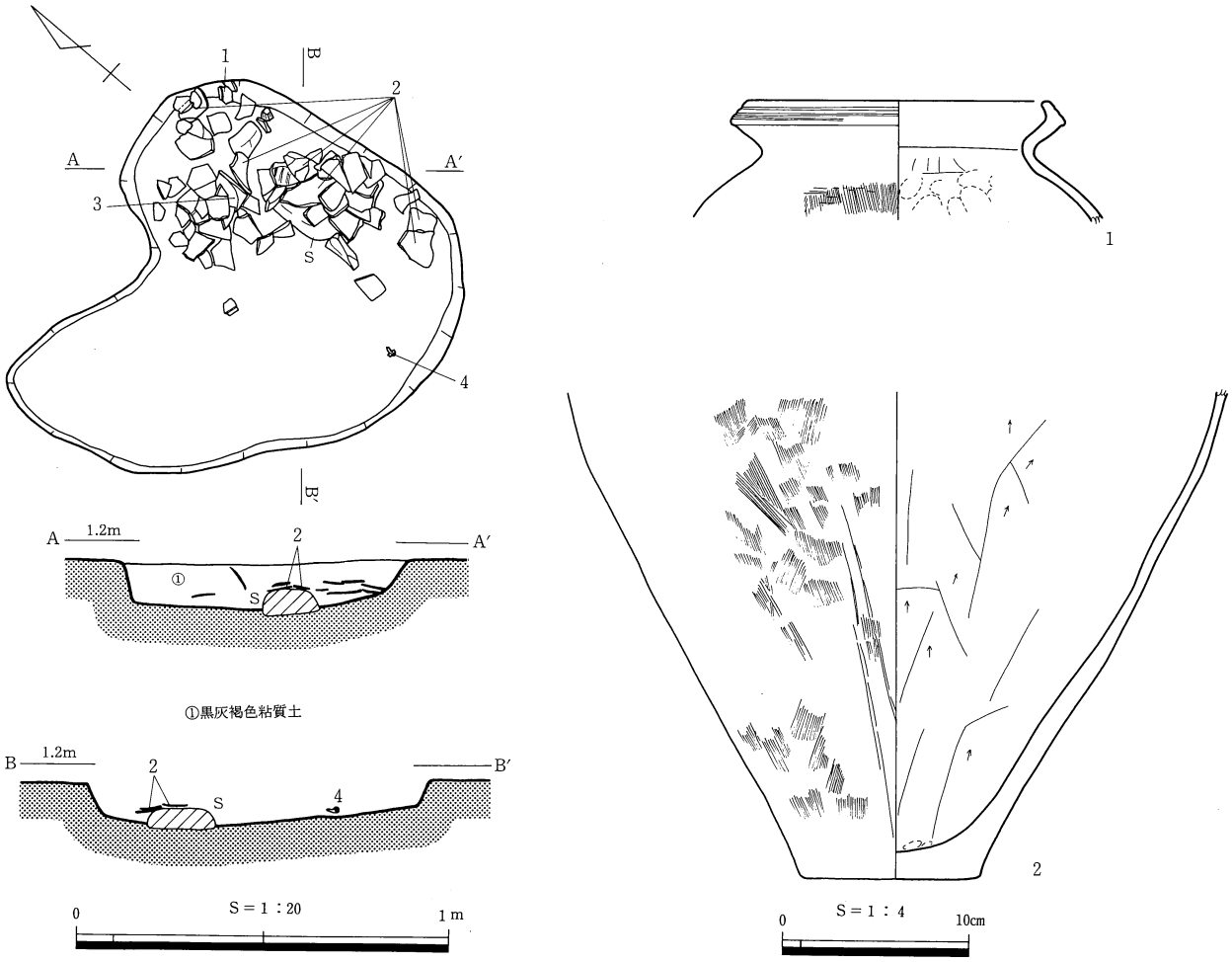
国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区からＢ19グリッドＮＷ区にかけて位置する。長径62cm、短径33cmを測る土坑である。検出面は北側と西側が突出した不整な楕円形状であり、底面も不整な楕円形状を呈する。北西側に不整形なテラス状の段がある。底面中央部が直径約18cmの円形状にわずかに窪み、断面形は概ね浅い逆台形状を呈し、中央部分がさらに逆台形状にくぼむ。検出面からの深さは、30cmを測り、中央部はさらに10cm深くなる。埋土は２層に分層できたが、暗灰茶褐色粘質土を基本とする。①層中には炭化物が混じる。埋土中より甕（1）と土玉（2）１点が出土している。（1）は甕と思われる口縁部片で、口縁端部を上下に肥厚させ、口縁端面を作り出す繰り上げ口縁である。３条の凹線が巡る。

ＳＫ198（第21図）

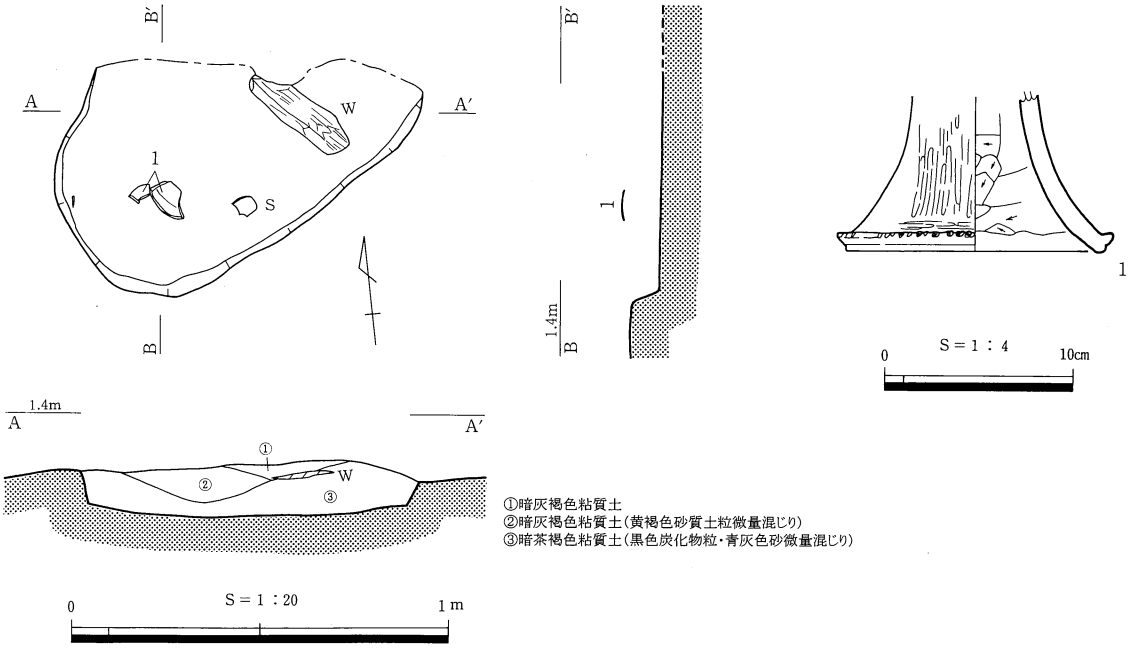
国道２区Ｃ18グリッドＳＥ区に位置する。長径92cm、短径28cmを測り、検出面、底面ともに不整な長楕円形を呈す土坑である。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は１層で暗灰色粘質土である。埋土中より高坏か器台と思われる脚部片（1）が出土している。底部端部を上下に肥厚させて端面を作り出し、２条の凹線を巡らせている。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整である。外面に赤色塗彩している。



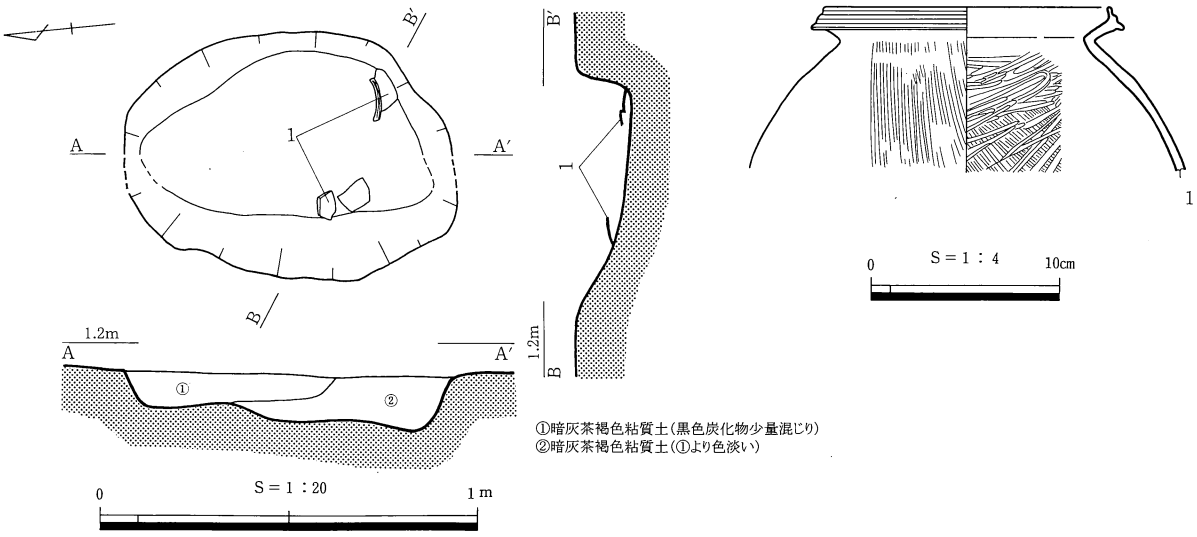
第15図　ＳＫ192及び出土遺物



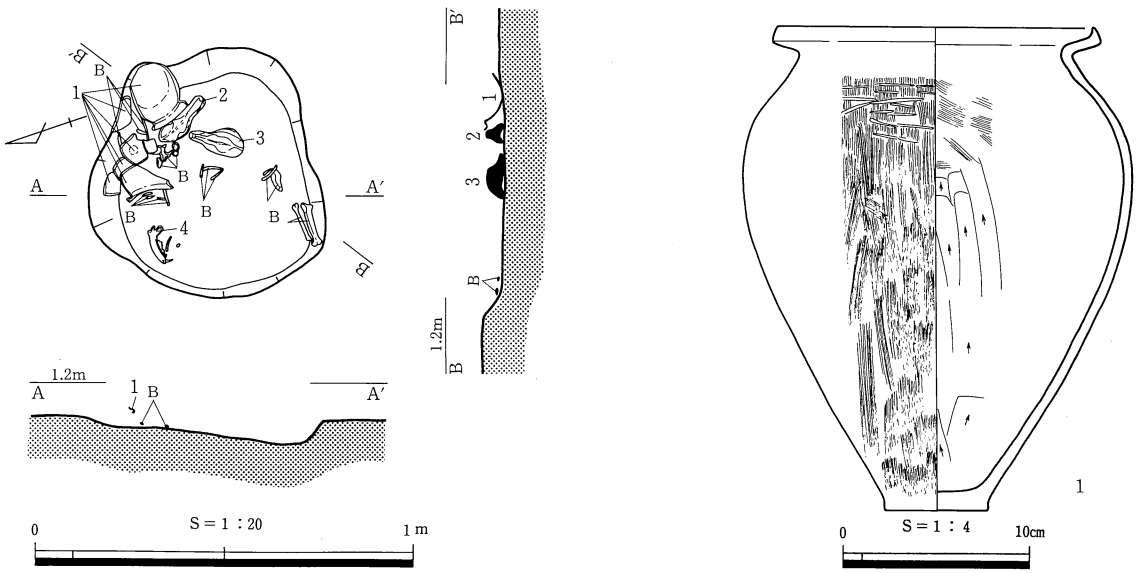
第16図　ＳＫ193及び出土遺物



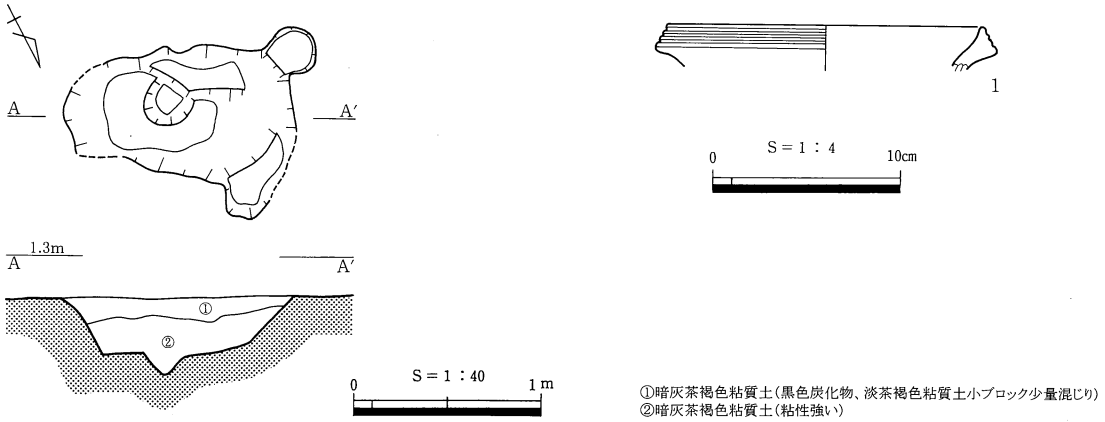
第17図　ＳＫ194及び出土遺物



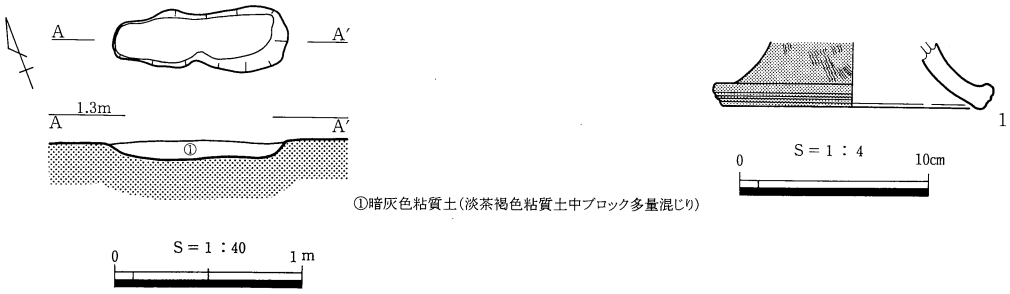
第18図　ＳＫ195及び出土遺物



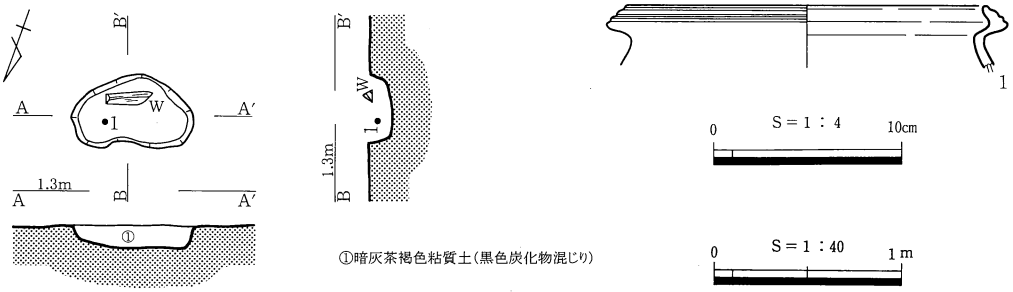
第19図　ＳＫ196及び出土遺物



第20図　ＳＫ197及び出土遺物



第21図　ＳＫ198及び出土遺物



第22図　ＳＫ199及び出土遺物

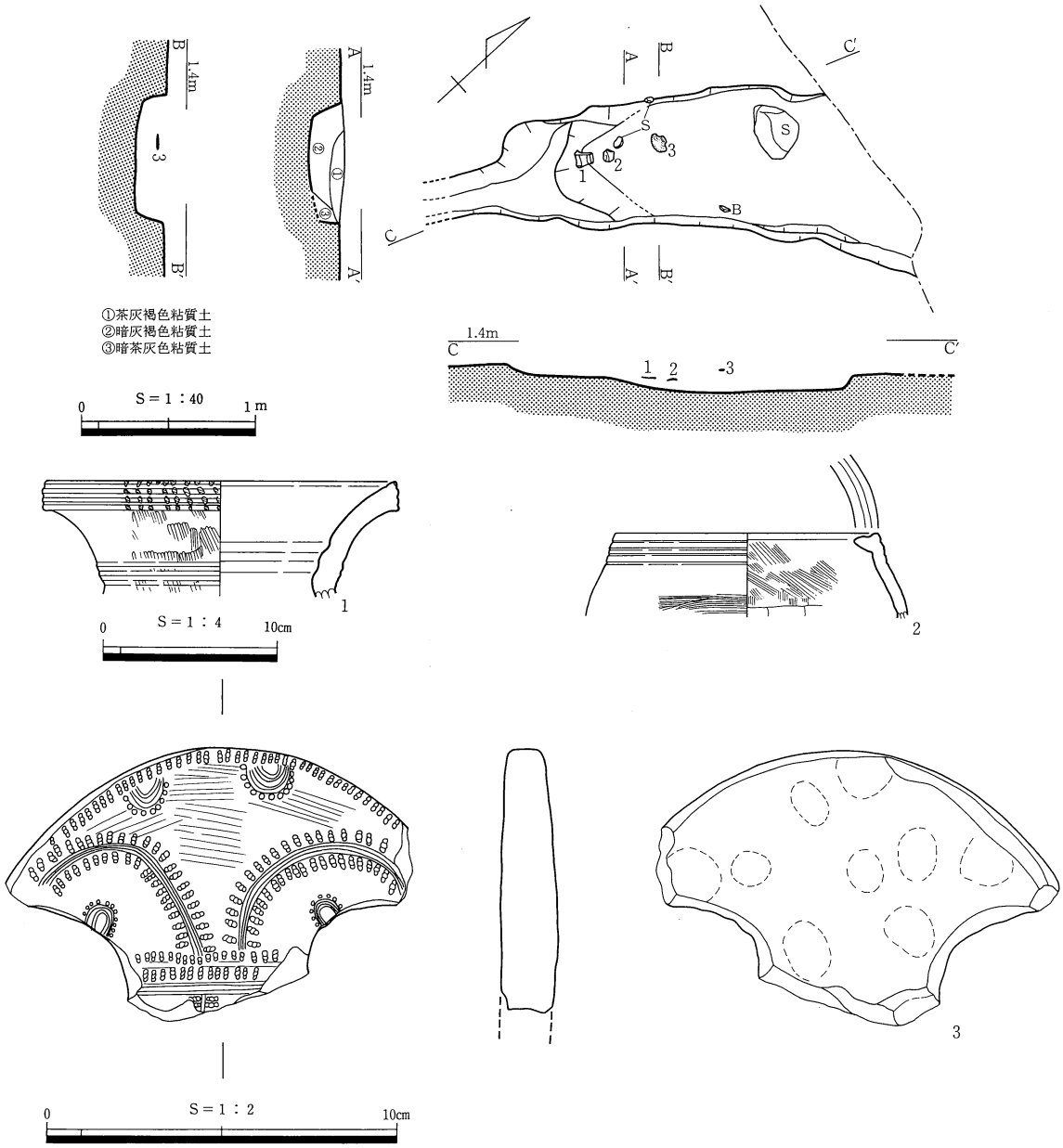
ＳＫ199（第22図）

国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区に位置する。長径66cm、短径36cmを測り、検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状に近く、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは13cmを測る。埋土は１層で暗灰茶褐色粘質土である。南東側の埋土上層からは、長さ24cmの角材が検出されており、中央やや北東側の埋土中上層より甕の口縁部片（１）が出土している。端面が内傾する繰り上げ口縁で、３条の凹線が巡る。

ＳＫ200（第23図・図版４）

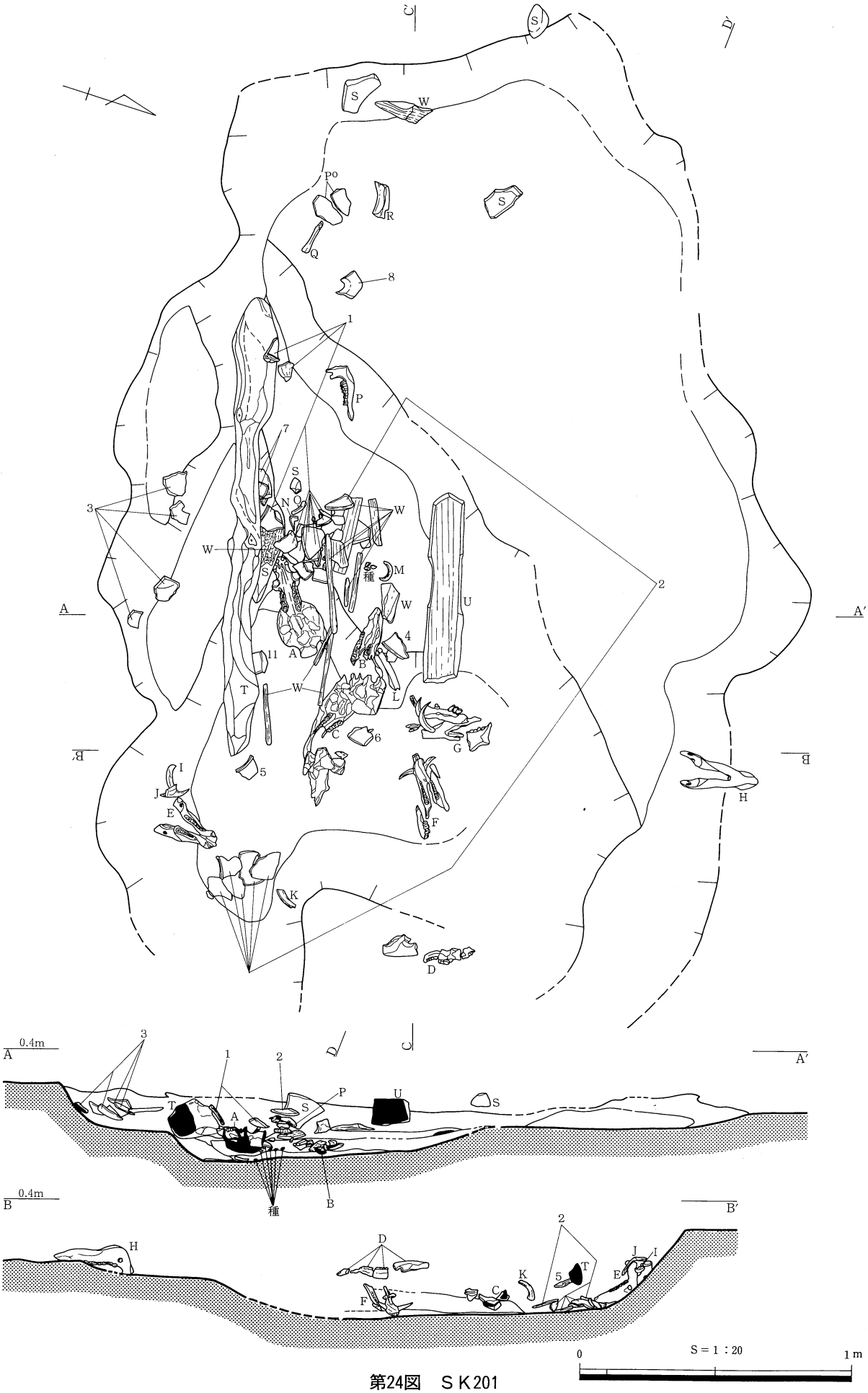
国道２区Ｃ18グリッドＳＷ区に位置する。北東側は調査に伴う排水溝によって切られ、南西側はＳＫ264によって切られる。長軸残存2.50m、短軸71cmを測る土坑である。南西部分は幅23cmにすぼまり、全体的に溝状である。断面形は逆台形状を呈すが、南西寄りの部分で段差がつき、南へ向けて浅くなる。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は３層に分層されるが、灰褐色を基本とする粘質土であり、ＳＫ264との切り合いは明瞭である。北西地点からは底面から浮いた状態で長さ16cm、幅12cm程度の角礫が検出され、中央部の埋土中中程より壺の口頸部（１）と無頸壺の口縁部（２）及び破損した分銅形土製品（３）１点が出土している。

（１）は、器壁が厚く、大型の器形となるであろう壺で、外反する口縁端部を上下に若干肥厚させ、口縁端面



第23図　ＳＫ200及び出土遺物

を拡張している。そのため、口縁端面はほぼ直立するが、上位で僅かに内傾する形状となる。３条の凹線が巡り、その上からヘラ状工具による刻みが施されている。頸部外面には、口縁部直下よりミガキ調整が施され、その上に３条の凹線が巡る。内面は口縁部以下ナデ調整である。（２）は、内傾する体部の端部内側に粘土紐を貼り付け、上面に１条の凹線を巡らす無頸壺である。口縁部下に３条の凹線が巡り、胴部外面に横方向のハケ調整が施されている。内面は口縁部下斜位のハケ調整で、胴部最大径付近からケズリ調整となる。（３）は、約２分の１を欠く分銅形土製品である。約４分の１ほどの円弧から急激にすぼまるくびれ部を呈し、成形時の指押さえが観察される。ハケ調整の上から施文され、文様は櫛状工具による沈線文と刺突文によって構成されている。沈線文は３条を１単位としており、くびれ部に平行に引く以外は、弧文状に施している。刺突文は１個の場合もあるが、連続する３個を基本としており、側縁部や沈線文に即して施され、くびれ部以外は円弧状の配列となる。結果的に人面のような意匠となっている。施文は片面のみで、裏面や側面にはなく、穿孔もみられない。赤彩も観察されない。



第24図　ＳＫ201

ＳＫ201（第24、25図・図版６、７）

国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区からＢ28グリッドＳＷ区にかけて位置する。調査区の南東隅にあたり、下層のＳＤ27南東部の岸辺部分を掘り窪めている。排水溝で切られているため全貌は把握できないが、さらに東側に続くものと思われる。外形ラインが蛇行しており、極めて不整な楕円形状を呈する。西側には長径2.55m、短径1.25mの範囲で、半円形に近い形状のテラス部分があり、南側にも半月形状の小テラスが２ヶ所設けられている。これらのテラスの間隙にも１段低い三角形状のテラスがあり、東側から突出するテラスとの間が深くなって、いびつな三角形状の底面をなしている。断面形は２段の皿状で、壁面の立ち上がりは緩やかな弧状を呈する。東西の検出長は3.55m、南北長は2.6mを測り、検出面からの深さは、最深部で34cm、西側のテラス部で11cmを測る。検出面の標高は0.17mから0.29mで南側が高く、底面最深部の標高は－0.05mである。埋土は６層に分層されるが、東側の深み部分が埋没後、③層の暗灰色粘質土層が全体を覆うように堆積し、下層の深み部分のため生じた③層上面の窪み部分に①、②層が堆積するという状況である。④、⑥層は混貝土層で、③、⑤層にも少量貝殻が混じる。本土坑内に貝塚が形成されたというよりも、本土坑のベース層である混貝土が周囲から流入したものと思われる。

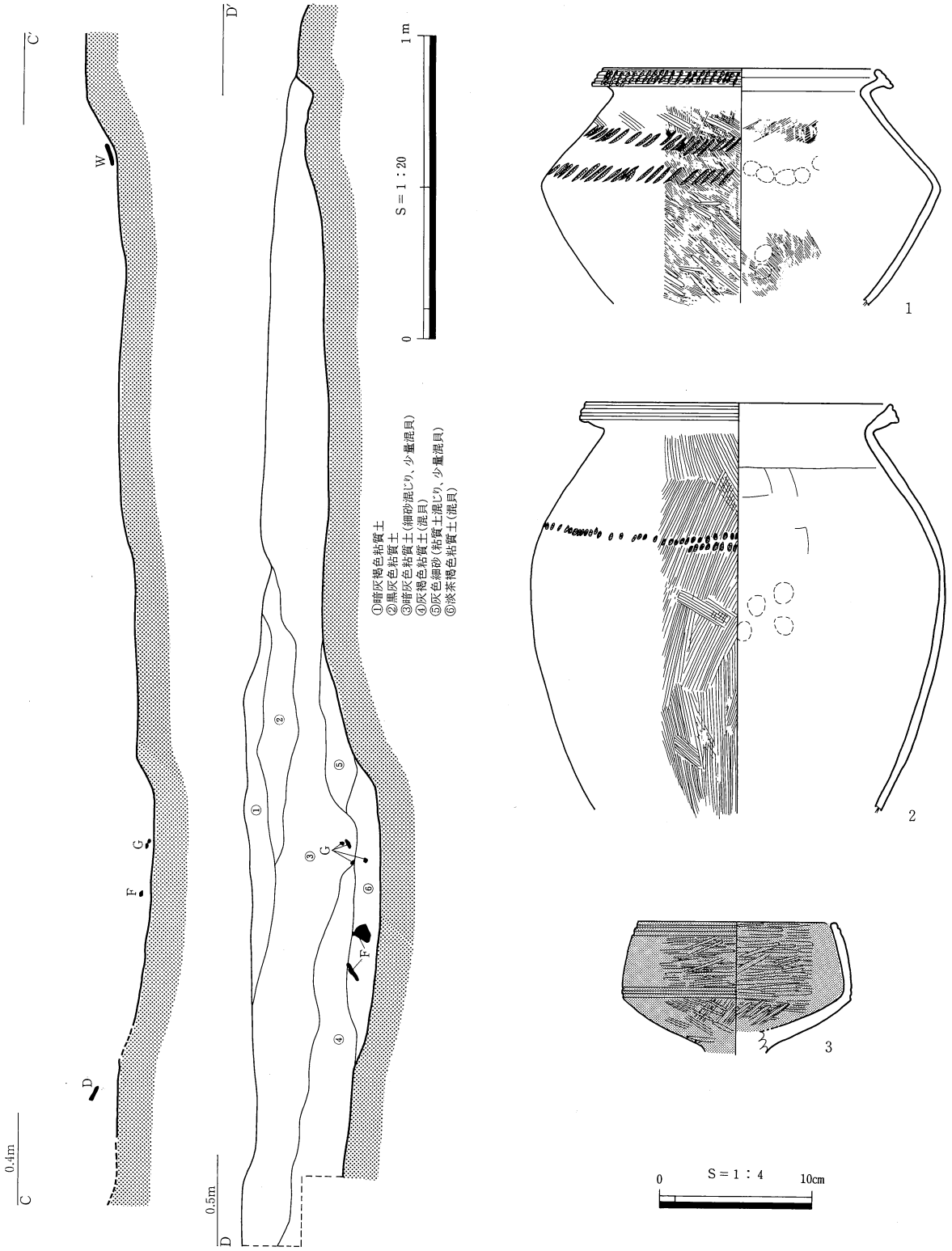
検出された遺物は、加工木及び自然木、礫、土器、獣骨、そして種子の５種に大別される。遺物の出土は、平行する自然木（Ｔ）と加工木（Ｕ）の間隙約60cmに集中し、さらに西側のテラス部分にも一部拡散するという概況であるが、遺物の種別によって特徴的な出土傾向を示す。自然木（Ｔ）は、長さ1.69m、径11cm程度を測り、土坑の長軸に平行して検出された。加工木（Ｕ）は、長さ70cm、幅13cm、厚さ9cmを測る角材で、両側面に浅い抉りを入れている。西側端は尖形をなす。加工木材片は概ね両者の間に集中し、長軸を東西方向に向けた状態で出土している。出土レベルは、いずれも底面より浮いている。(11）は有孔栓状の建築部材で、本土坑出土加工木中唯一器種が判明するものであり、自然木（Ｔ）の下位で検出された。

礫は、板石状の角礫３点が西側のテラス部分で検出され、いずれも混入の様相を呈する。自然木（Ｔ）の下位で検出されたものは破断面をもつ楕円形の礫で、他の礫とやや趣を異にする。

出土土器のうち、出土位置を捕捉できた個体は８点であるが、概ね３ヶ所に集約される。①赤色塗彩された高坏（３）が出土した自然木（Ｔ）の南側小テラス上、②壺（１）、甕（２）の破片、甕（７）が出土した（Ｔ）と（Ｕ）の間、③甕（２）が出土した東側部分である。出土レベルは、底面直上、またはやや浮いた位置にある。（１）は南西側にも拡散し、自然木（Ｔ）に寄り掛かるような位置で検出されており、また（２）は、破片が（１）の方まで散乱している。甕（４）～（６)、（８）も断片的な出土状況であり、完形になる個体がないことなどから、土器はプライマリーな状態で出土していないといえる。このほかに高坏（９)、土玉（10）などが埋土中から出土している。

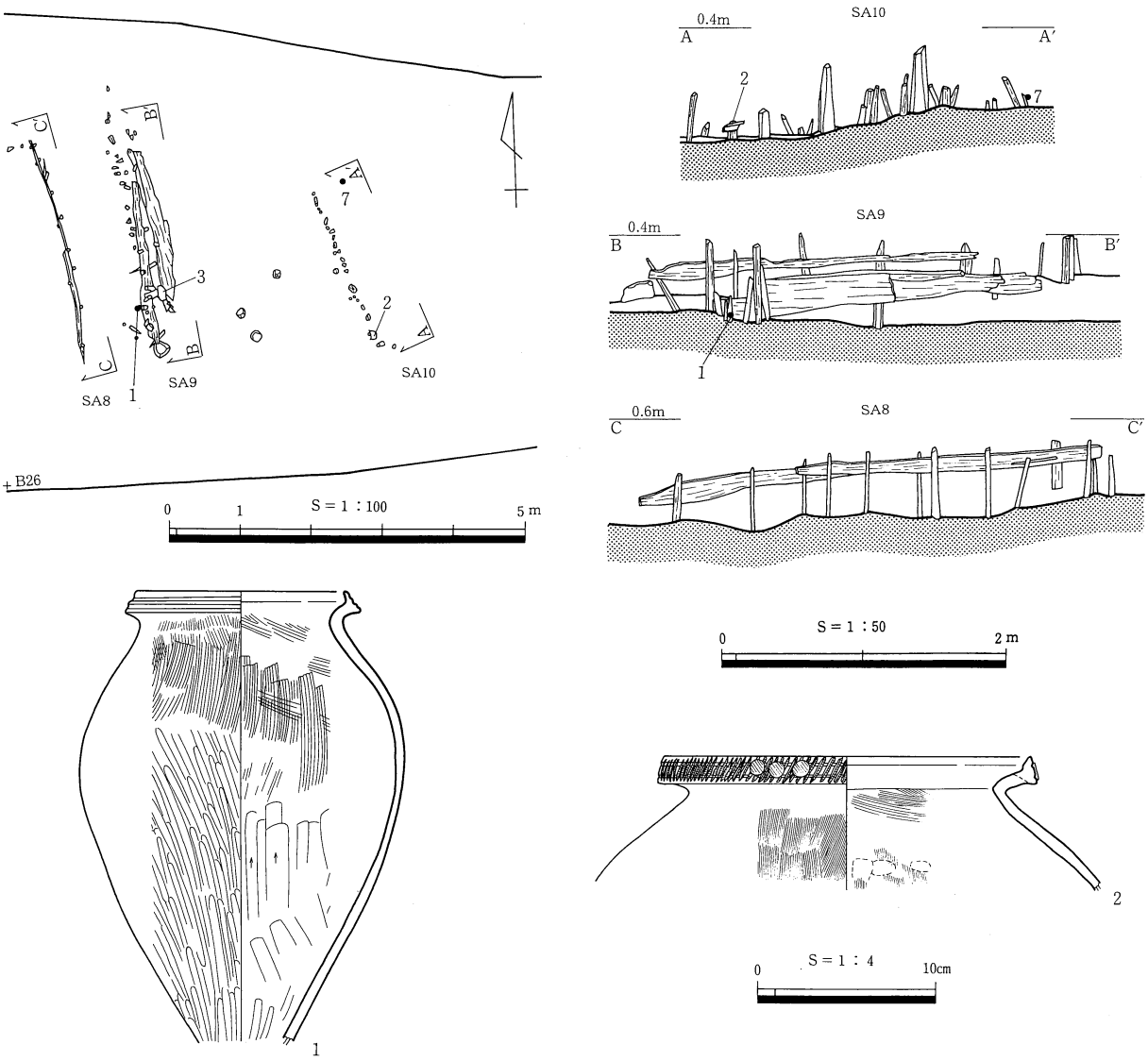
獣骨の出土は、土坑中央の深み部分に概ね集中しているが、西側のテラス部分や土坑の北側肩部分にも、一部拡散している。獣骨（Ａ）～（Ｄ）は、イノシシの頭骨、（Ｅ）～（Ｈ）はイノシシの下顎骨で、うち（Ｅ）と（Ｈ）は下顎枝の咬筋窩付近が穿孔されている。（Ｆ)、（Ｇ）については、破損のため穿孔を確認できない。（Ｉ)、（Ｋ)、（Ｍ）は猪牙、（Ｐ）はシカの下顎骨で、（Ｒ）はシカの肩甲骨である。イノシシの頭骨は、西から東へ順に（Ａ）→（Ｄ）と並び、（Ａ）～（Ｃ）については頭頂部を下に向けている。下顎骨は南から北へ向けて順に（Ｅ）→（Ｈ）と並ぶが、（Ｈ）のみ下顎枝を下に向け、土坑外にはみ出している。出土レベルがいずれも底面直上であり、意図的な配置がなされたものと看取される。獣骨についての詳細な分析については、次年度の報告書に委ねることとし、本土坑の性格について言及するのはこれを待ちたいが、出土骨種が限定され、四肢骨や肋骨がほとんど欠落することや、獣骨以外の遺物の出土状況にも作為的なものが窺われることから、単なる廃棄土坑とは認定し難い。なお、イノシシの頭骨（Ａ）の西側、壺（１）の破片が集中する部分の下側にあたる底面上で、桃の種様の種子20点が集中的に検出されたことは、極めて示唆的である。

（１）は、算盤玉形の胴部を呈する壺で、脚台を伴う可能性もある。口縁部は端部を上下に拡張して繰り上げ口縁とし、端面に３条の凹線を巡らせる。凹線上をヘラ状工具によって連続的に刻み付け、押圧がやや弱いため



第25図　ＳＫ201土層図及び出土遺物

か、刻みが凹線部で途切れている。胴部外面はハケ調整をベースとし、下半部にミガキ調整を加えている。上半部にはヘラ状工具による２段の連続刺突が巡り、この上位にやや粗く規則的な斜位のハケ調整痕が連続するが、文様か否か判断できない。胴部内面は頸部までハケ調整で、肩部付近に指頭圧痕が連続する。（２）は、口縁端部を三角形状に肥厚させる甕で、端面に２条の凹線が巡る。胴部外面はハケ調整で、肩部付近に棒状工具による連続刺突文が１周以上巡る。胴部内面は肩部付近までケズリ調整され、その後ナデ調整されているが、あまり丁



第26図　ＳＡ８～10及び出土遺物

寧ではなく、ケズリの単位が確認できるほどである。（３）は、高坏の坏部で、内外面ともに赤色塗彩されている。内傾気味に立ち上がる口縁部を有し、比較的深い坏部を呈する。内外面ともにハケ調整をベースとし、その後ミガキ調整を加えている。外面には２条の凹線が２段巡っている。

第２節　溝、杭列

ＳＡ８～10（第26図、図版11）

３区Ｂ26グリッドに位置する杭列である。ほぼ南北方向に３条の杭列が平行して直線的に延びる。以下、西側から順にＳＡ８、９、10と呼称する。ＳＡ８～10はＳＤ27の上層を直交方向に延びるかたちとなる。ＳＡ８の１m東にＳＡ９、ＳＡ９の2.3m東にＳＡ10が位置する。

ＳＡ８は長さ3.3m、ＳＡ９は長さ3.9m、ＳＡ10は長さ2.5mを測る。ＳＡ８、９の検出面の標高は北側で約０m、南側で－0.15m前後、杭の頂点の標高は0.3～0.4m、ＳＡ10の検出面の標高は北側で－0.17m、南側で－0.4m、杭の頂点の標高は最も高いところで0.28mである。ＳＡ８、９には横板が伴い、横板は杭の頂点より10～20cm低位に設置されている。横板の規模は幅10cm前後、長さ１m弱であり、杭、横板とも転用材が用いられている。ＳＡ10は杭列のみが検出されたが、本来横板が伴っていた可能性がある。

ＳＡ８～10は砂層と細砂混じり粘質土の互層状堆積の中から検出され、ＳＤ27の埋没途中または埋没後に構築されたものと考えられる。杭列周囲の埋土は同一で、土層断面からはこれらの杭列に溝が伴った形跡は確認できなかった。

ＳＡ９からは、東側の杭列の杭根元付近より甕（１）が出土している。口縁端部は上下にややつまみ出し、端面に凹線を巡らせる。外面は頸部から肩部にハケメ、胴部から底部にかけてヘラミガキが見られる。内面は胴部のほぼ中央より上半はハケメ、下半はヘラケズリ調整が施される。

ＳＡ10の遺物としては、杭列南端の杭の根元よりやや浮いた地点で、甕口縁（２）を検出している。肥厚した口縁端部は上にややつまみ出される。口縁端面は２条の凹線を巡らせたのち、ヘラ状工具で刻目を付け、円形浮文を３つ並べて配し装飾している。肩部外面は横方向のタタキ調整後にハケメを施しており、肩部内面にはハケメと指頭圧痕がみられる。

ＳＤ27、ＳＡ11（第27～31図、図版８～11）

３区を南西から北東にかけて縦断する溝状遺構である。溝の北岸約16m、南岸19mを検出した。検出幅は5.3mで、検出面からの深さは南西側の最深部で36cm、北東側の最深部で89cmを測る。検出面の標高は北岸、南岸ともほぼ０m前後、底面の標高は南西側で－0.35m前後、北東側で－0.8m前後であり、南西から北東に向かう流れが想定される。

南岸の護岸施設は、板材を部分的に重ね合わせながら壁面に垂直に沿わせ、背後より板を杭で支える構造である。杭には５～８cm角の太めのスギ製角材が用いられており、内側からの圧力に板が耐えられるよう、板幅の倍近くの長さの杭が地面に垂直に打ち込まれる。壁面に沿わせる板には、長さ２～3.5m、幅20～60cm前後、厚さ１～２cm前後のスギ製板材が用いられている。比較的大型の板材が使われている東側では、杭の本数は板１枚に対し４、５本と少ないが、やや小振りの板材が使用される西側では杭が密に打たれている。護岸施設は、Ｂ26グリッドＳＷ区で、南岸にほぼ直交する長さ１ｍほどの杭列までを検出している。

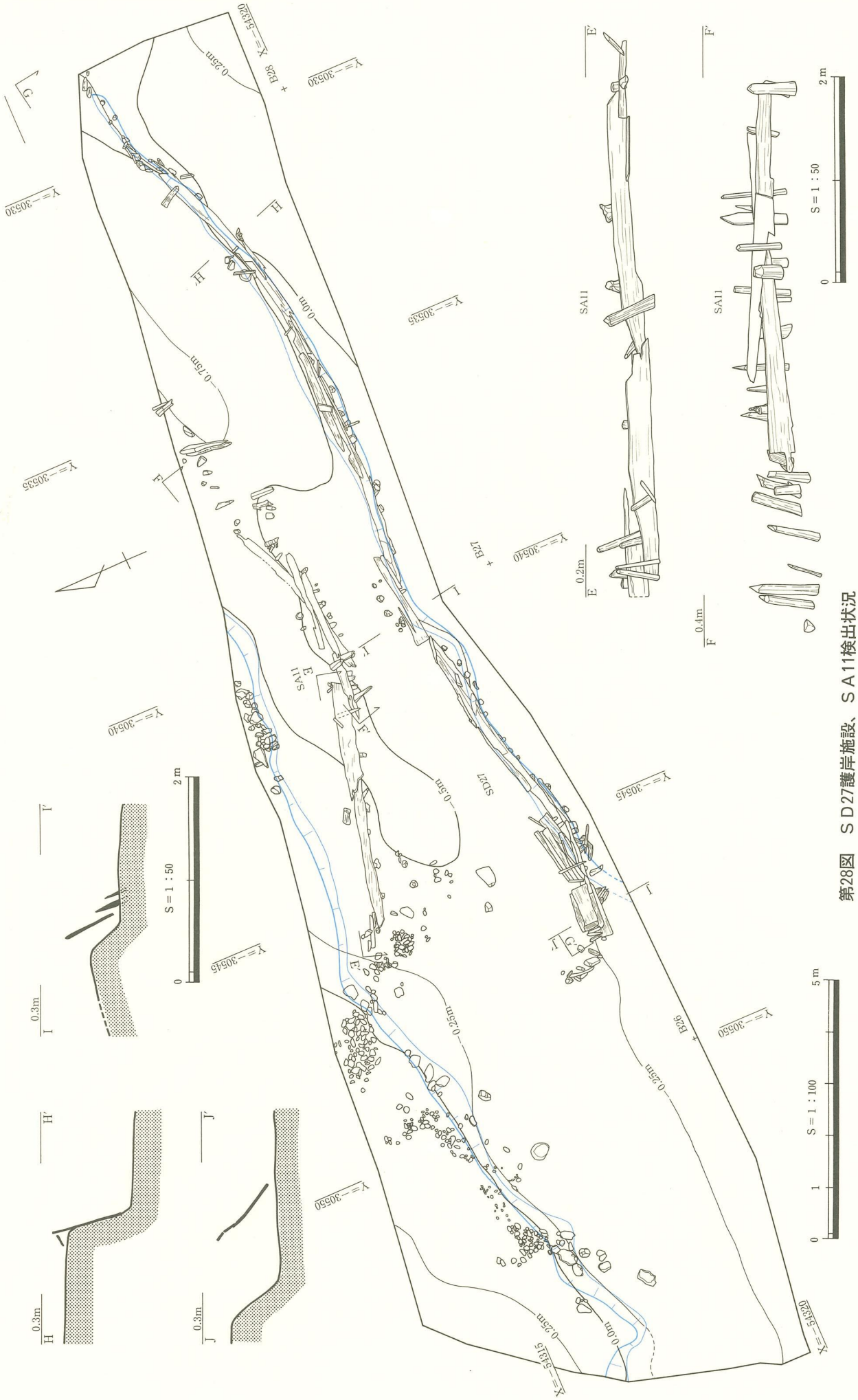
北岸の護岸には小振りな自然礫が用いられる。礫の集中する部分は岸辺に３ヶ所認められ、溝の壁面よりも肩上に顕著に遺存する。

Ｂ27グリッドでは、南岸と北岸の中間、南岸の内側２ｍに、両岸のラインとほぼ平行して延びる１条の杭列ＳＡ11が位置し、杭列はＢ26、27グリッドの境界付近から西北へ向かって弓なりにカーブを描いて続き、北岸の手前で終息する。ＳＡ11は長さ約12m、杭検出面の標高は－0.5～－0.7m、杭の頂点の標高は0.2m前後である。杭列には長さ２ｍ前後、幅25cm前後、厚さ１～２cm程度の横板が付随する。横板は杭の頂点より10～20cm程低位に設置され、板と板とは１ｍ前後の重複部分をとりつつ横一列に繋げられる。横板、杭とも転用材が用いられているが、杭は角材のほか、先端にくびれのみられる加工木、焼けた痕跡の残る建築廃材、自然木なども利用されている。ＳＡ11の西北端では、杭列の途切れた部分を補うかのように、ＳＡ11の延長線上に礫が帯状に北岸の肩上まで敷き詰められている。なお、溝の内部には50cm前後の大きさの自然礫が点在しているが、これらが護岸より転落したものか、別の用途で溝内に入れられたものかは不明である。

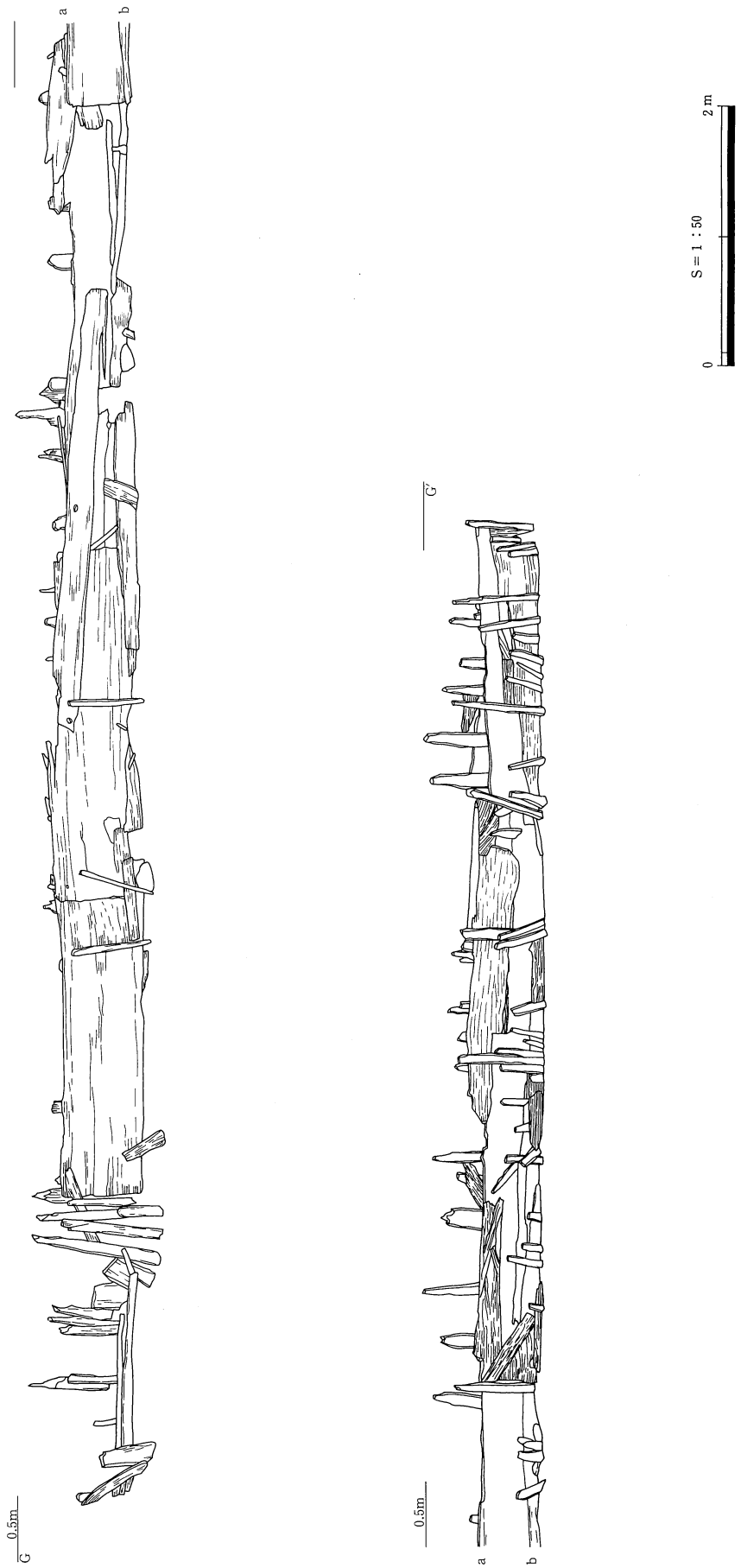
溝の埋土は、木器溜りを包含する濃茶色植物遺体混じり粘質土と暗灰色系の砂の互層状堆積からなる。各護岸施設の時期差、対応関係は土層断面の観察からは明らかに出来なかった。ＳＡ11の中央付近から北東側にかけては、大量の炭化米が16cmほどの厚みをもって堆積しており、炭化米に混じって織物の小片も検出されている。

溝の埋土中からは大量の木器および流木を検出している。木器は溝全体に広がっているが、とりわけ両岸沿いには大型の建築部材、板材などが重なりあって濃密な木器溜りを形成している。建築部材に混じって木製高坏、槽、アカトリ、田舟、鳥形木製品、編篭などの多彩な木製品・植物質製品も出土した。遺構に伴う土器には壺、長頸壺、無頸壺、台付壺、甕、台付甕、高坏、鉢、器台、水差形土器などが挙げられる。壺（１）は口縁端部を断面三角形状に肥厚させ、上方につまみ出し、端面に４条の凹線を巡らせる。頸部には５条の凹線、肩部には５条の沈線を巡らせ、肩部から胴部にかけてを３段の波状文で装飾している。内面頸部以下には指頭圧痕が顕著に見られる。（２）はＳＤ27の東南側の木器溜り底面付近から出土した長頸壺である。やや開き気味に直立する口

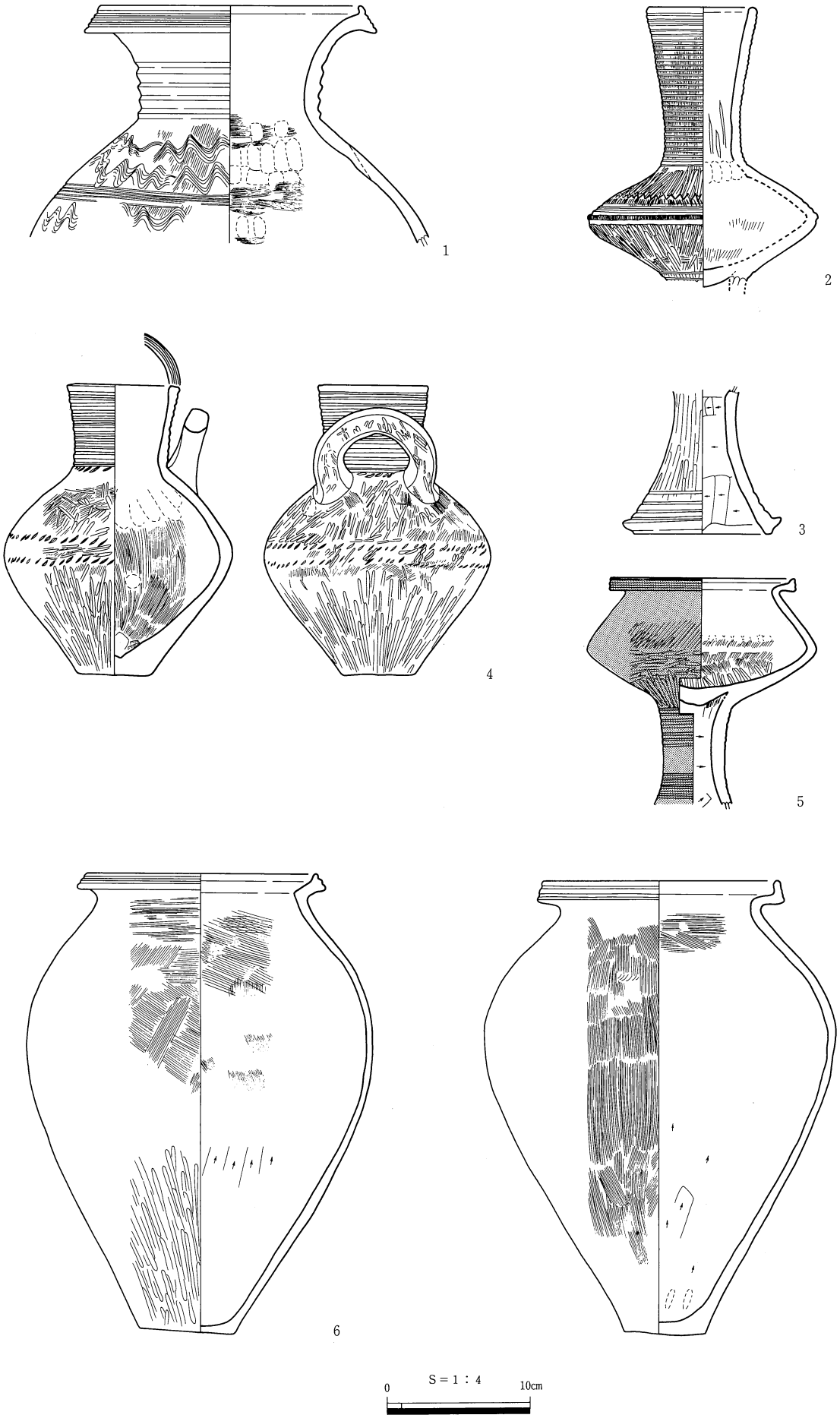
第27図　ＳＤ27、ＳＡ11木器溜検出状況



第28図　ＳＤ27護岸施設、ＳＡ11検出状況

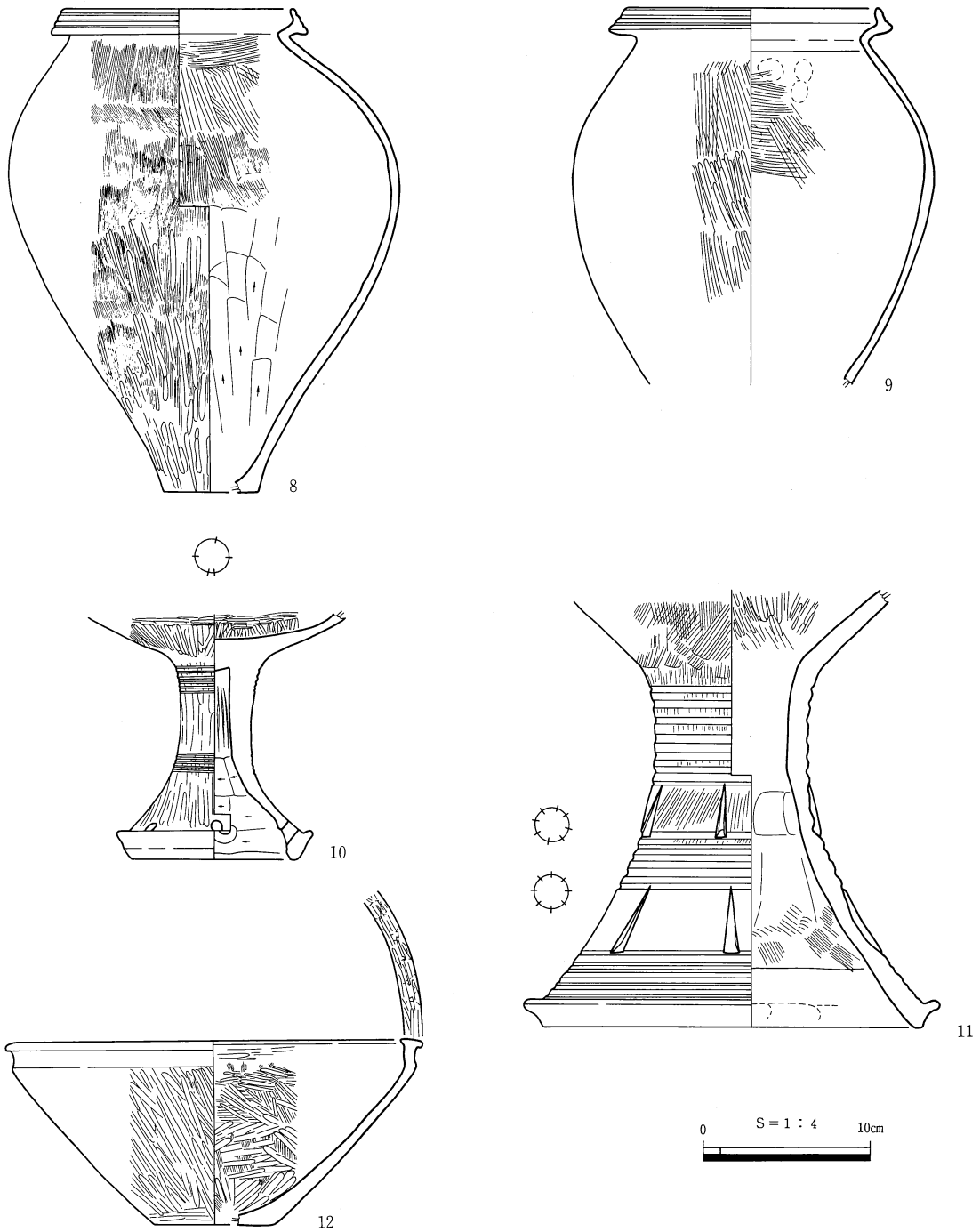


第29図　ＳＤ27護岸施設立面図



第30図　ＳＤ27出土遺物（１）

頸部には、ハケメ調整ののち31条の凹線を巡らせる。体部は算盤玉状の形態で、体部中央より上1／2を、細かい連続山形文、4条の凹線文、小さな半裁竹管状の工具による連続刺突文などで装飾する。体部は全体にヘラミガキが施されるが、下半にわずかにタタキ調整の痕跡が窺える。口頸部内面下半には絞りと指頭圧痕がみられる。脚台がつくものと思われ、（3）のようなものが想定される。（3）は「ハ」の字状に開き、外面脚裾部に4条の凹線を施す。脚端部は内傾して面をなし、わずかに上方へつまみ出される。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。（4）は杭列の西側、溝の底面付近から検出された水差形土器である。やや開き気味に直立する口頸部及び口縁端部には凹線が巡り、頸部から肩部への変換点及び体部中央付近にはヘラ状工具による連続刺突文が施される。把手は、頸部裾から肩部にかけて片側につけられる。外面はハケメ調整後ヘラミガキが施され、



第31図　ＳＤ27出土遺物（2）

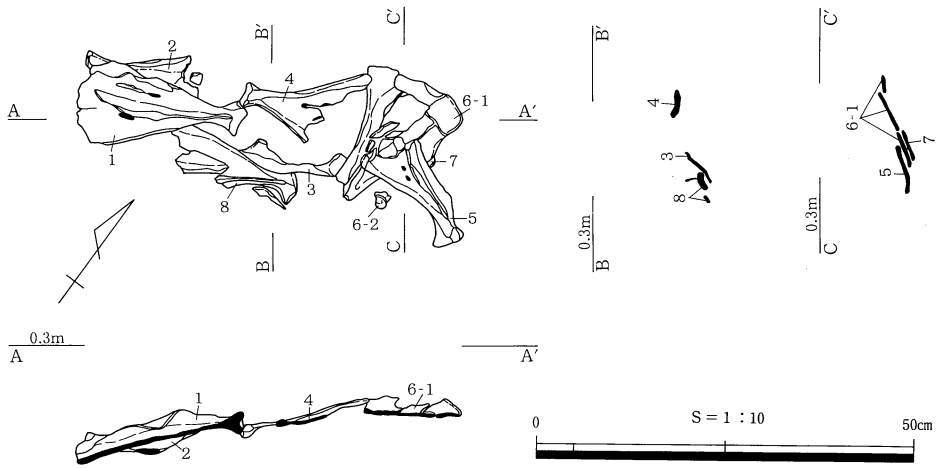
内面は肩部以下にハケメ、肩部と胴部の一部に指押さえが見られる。底部は平底である。（５）は溝の西側の埋土中より出土した台付壺である。ほぼ直立する短い複合口縁に算盤玉状の体部、凹線文で装飾された脚柱部がつき、外面は赤彩が施されている。口縁外面は２条の凹線が巡り、体部上半はハケメ後ナデ、体部下半は横方向、体部裾は縦方向のヘラミガキがみられる。内面は体部中央よりやや上に指頭圧痕が見られ、底はハケメを施したのちヘラミガキで仕上げている。（６）、（７）、（８）、（９）は複合口縁の甕である。口縁形態は微妙に異なるものの、端面には２～３条の凹線が施され、外面は上部にハケメ、下部にヘラミガキ、内面は胴部中央以下にヘラケズリ、体部上半はハケメがみられる。また内面肩部から胴部に一部指頭圧痕が残るものもある。（10）は脚台である。脚は「ハ」の字状に広がり、脚端部は断面逆三角形状に肥厚し上方につまみだされる。脚柱部には５～６条の凹線文帯が２段にわたって巡らされ、脚裾には円形の透し孔が５方向に開けられている。（11）は器台の脚部である。「ハ」の字状に広がる脚の端部は上方に拡張される。脚柱部から脚裾部にかけて５～６条の凹線文帯が３段巡り、凹線文の間の空間には未貫通の三角形の透し孔が８方向に切られる。脚部内面は主にナデ調整がなされており、上向きに広がる体部下半の内面はヘラミガキが施されている。（12）は鉢である。口縁端部は水平方向にやや拡張され、端面には指頭圧痕後ヘラミガキ調整がみられる。底面は平底を呈する。内外面ともハケメを施したのちヘラミガキ調整を行なっている。

第３節　卜骨集積遺構

卜骨集積遺構１（第32図・図版12）

国道３区Ｂ25グリッドＮＥ区、調査区の北西隅に位置する。ＳＤ27北西部の岸辺下層にあたる。木製用材による護岸施設が付設されないＳＤ27の北西河岸が、堆積埋没していく過程で形成された遺構である。植物腐植土混じりで混貝土である濃茶色粘質土の堆積層中で検出された。周辺を精査したが、土坑は確認されなかった。卜骨接地面の標高は、0.15～0.21mである。東西55cm、南北23cmの幅で検出され、長軸方向は北東－南西を指す。接地面は平坦ではなく、北東から南西に向けて、また北西から南東へ向けて傾斜し、それぞれ両端で6cmと4cmの比高差がある。遺構は、８点の肩甲骨によって構成され、その組成はイノシシ７点（１）～（７）、シカ１点（８）である。うち（７）は幼獣である。左右の構成は、（１）、（３）、（５）、（７）が右、他はすべて左である。完形に近い状態で遺存するのは（１）のみで、他は欠損部を有する。

（１）はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。後縁と背縁の一部が欠損する。肩甲棘を一部削平しており、棘上窩と棘下窩にそれぞれ焼灼痕が認めれる。（２）はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。前縁から背縁にかけてと、後縁から背縁にかけての部分、及び関節上結節を欠損する。肩甲棘を一部



第32図　卜骨集積遺跡１

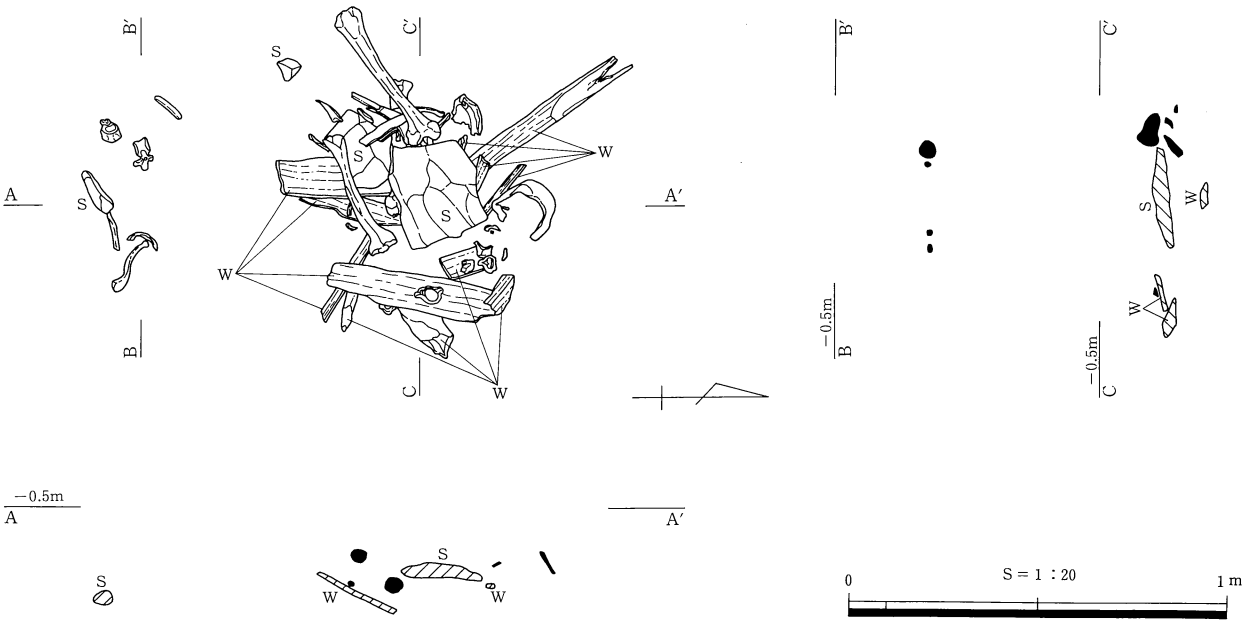
削平しており、棘下窩に焼灼痕が認められる。（３）はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部から棘上窩、棘下窩にかけてを欠損する。焼灼痕はみられないが、肩甲棘を削平しており、欠損部に本来焼灼痕があったかもしれない。（４）はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。前縁から背縁にかけてと一部肩甲棘を欠損する。肩甲棘は削平しておらず、棘下窩に焼灼痕が認められる。（５）はイノシシの右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部から棘上窩にかけてを欠損する。肩甲棘を一部削平しており、棘下窩に焼灼痕が認められる。（６－１）はイノシシの左肩甲骨で、肋骨面を上向きにしている。関節上結節を欠くが、（６－２）と接合した。背縁部を一部欠損する。肩甲棘は削平しておらず、棘上窩部分の肋骨面側に焼灼痕が認められる。（７）はイノシシ幼獣の右肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁側３分の２部分を大きく欠損する。焼灼痕は認められないが、肩甲棘の削平が確認できる。（８）はシカの左肩甲骨で、肋骨面を下向きにしている。背縁部を欠損する。肩甲棘を削平し、棘上窩、棘下窩に焼灼痕が認められる。

これら卜骨は、イノシシの左右の肩甲骨を、関節上結節を逆向きにして肋骨面同士を合わせたものを１単位とし、これを３組東西方向に列状に配置している。卜骨の配置の規則性については、解剖学的検討の結果を待って、さらに詳細に検討するものとするが、従前の出土例のように廃棄されたものとは言い難い状況である。また土坑が確認されず、埋納されたものではないと判断される。人為的な配列と判断され、卜骨集積遺構とした。

第４節　漂着人骨

漂着人骨１（第33図・図版12）

国道調査区３区Ｂ26ＳＥ区からＮＥ区にかけての調査区ほぼ中央部に位置し、ＳＤ27の北西岸の下層にあたる。ＳＤ27埋土の最下層である灰色砂層より下層の、混貝土である茶灰色植物腐食土混じり粘質土中（３区土層図のＶ－４層）から検出された。周辺の精査を一応試みたが土坑は確認されず、出土層が湖沼堆積層とみられることから、埋葬遺構ではなく、湖沼内で漂着した遺体と判断される。人骨は標高－0.6～－0.8m、20cmの高低差の間で検出され、その範囲は南北1.17m、東西81cmを測る。特に北側に人骨は片寄り、南北60cm、東西81cmの範囲に集中する。そこから南に37cm離れた地点で、南北20cm、東西52cmの範囲で６点の骨の散乱がみられる。南側の人骨では、検出レベルがほぼ揃うものの、北側ではばらつきをみせる。検出範囲の長軸方向は、ほぼ南北軸に



第33図　漂着人骨１検出状況

平行する。

遺構は、人骨が加工木や礫と撹拌されたかのような状態にある。北側の人骨群は、最下に上腕骨と肋骨の集積があり、その上に加工板材や平石2点が乗りかかる。平石の下部には、加工角材が北西方向から斜めに突き刺さった状態にある。平石や加工板材の上には、大腿骨2本や椎骨が乗った状態にあり、中央の平石の北側からは、頭骨が出土している。南側の人骨群は、肋骨や椎骨である。これらの人骨は熟年男性のものである。骨の解剖学的な位置関係に極端な矛盾はないものの、撹乱や欠落部位が生じており、人骨が漂着したものであるとする所見と齟齬をきたさない。伴に検出された板材や平石が意図的に置かれたものとは認め難く、湖沼中で漂着した遺体と混ざり合ったものと推察される。なお、人骨の解剖学的な検討の結果を待って、さらに詳細に検討するものとする。

第3章　弥生時代後期初頭～後葉の遺構

第1節　土　　坑

ＳＫ202（第37図・図版13）

国道２区Ｃ21グリッドＳＥ区に位置する。南側は柱穴状のピットを切る。長径74cm、短径37cmを測る土坑である。検出面、底面ともに、北側が内側にやや湾曲する不整な楕円形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは24cm測る。埋土は２層に分層できたが、黒茶灰褐色土を主体とする。埋土中中程から甕（１）が1点出土している。（１）は、口縁端部が上下に拡張され、端面が内傾し、６条の凹線が巡る。内面は、頸部以下に単位の細かいケズリ調整がなされている。

ＳＫ203（第38図）

国道２区Ｃ18グリッドＮＥ区に位置する。長軸61cm、短軸55cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な隅丸方形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。底面はほぼ平坦だが、南東側が若干傾斜する。埋土は１層で、炭化物を多量に含む暗灰茶褐色粘質土である。埋土中位で、土坑底面をほぼ覆うほどの加工板材が出土したが、これの上下で埋土は変わらない。板材は斜位で出土し、これの上位に接近して角材、砥石２点（２、３）が検出された。埋土中より甕の破片（１）が出土している。（１）は、口縁端部を三角形状に肥厚させ、端面が凹面をなして１条の凹線が巡る。本来多条のものが、ナデ消されたものか。内面は頸部以下がケズリ調整されている。

ＳＫ204（第39図）

国道２区Ｂ19グリッドＮＷ区に位置する。長径58cm、短径38cmの楕円形状部分に、長軸32cm、短軸28cmの隅丸方形部分が合体した鈎形をなす土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは17.5cmを測る。埋土は１層で、暗灰茶褐色粘質土である。埋土中から２個の角板材が立位または斜位で出土しており、それぞれ直交する位置関係にある。いずれも底面より浮いた状態である。また埋土中より甕（１）が出土している。（１）は、口縁端部を三角形状に肥厚させ、口縁端面は内傾し、３条の凹線が巡る。

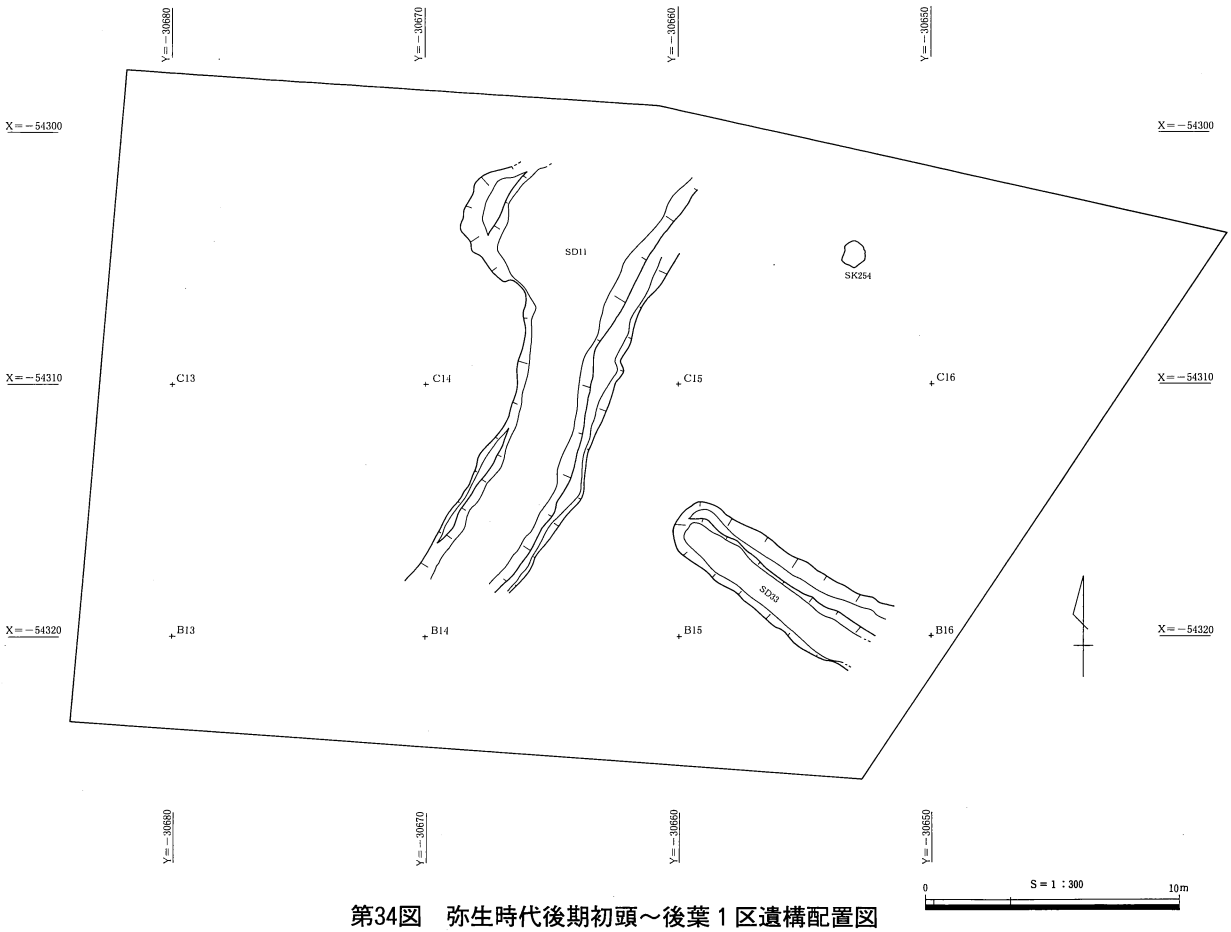
ＳＫ205（第40図・図版13）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区に位置する。長径1.34m、短径89cmを測る土坑である。検出面、底面ともには不整な楕円形状を呈し、北東側底面が不整な楕円形状に落ち込む。断面形は不整な逆台形を呈し、検出面からの深さは21cmを測り、北東側底面はさらに7cm深まる。埋土は４層に分層できたが、黒灰色系の粘質土を基本とする。中央部底面直上から土器片が出土しているが、図化できたのは埋土中中位から出土したものである。北西側からは２個体の小型の甕（１、２）が、南東側からは胴部から底部にかけての土器片（３）が出土している。このほか、土玉も１点（４）出土している。

（１）は、口縁部がやや外傾し、ヨコナデ調整のみで無施文である。端面上端部は丸く収め、下端部は下垂しない。胴部は最大径が中位より若干上にあり、底部は僅かに上げ底の平底である。外面は、頸部が横方向の、胴部が斜位のミガキ調整で、口縁部内面はケズリ後ナデている。胴部内面はケズリ調整であるが、頸部付近でミガキ調整が加えられている。（２）は、胴部最大径がほぼ中位にあり、球形の胴部を呈する。口縁部は僅かに外傾し、ヨコナデ調整のみで凹線等巡らない。端面上端部は丸く収め、下端部を下垂させる。底部は平底である。胴部外面は上半が横方向の、下半が斜位のミガキ調整で、内面は頸部以下ケズリ調整である。

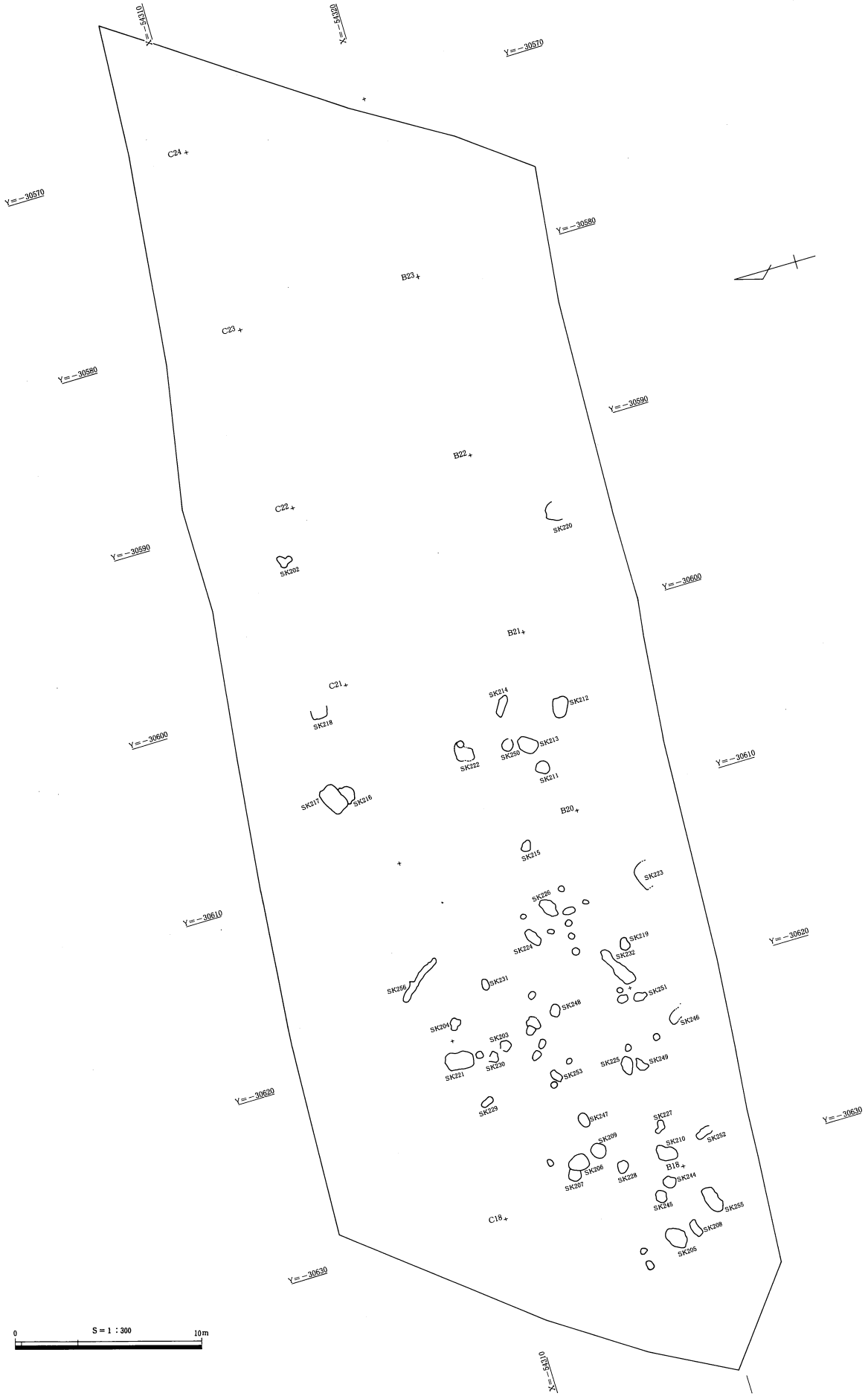
ＳＫ206（第41図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区からＢ18グリッドＮＷ区にかけて位置する。北西側ではＳＫ207を切っている。長径1.12m、短径86cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。南西側の底面には、長径45cm、短径26cm、深さ12cmの浅い落ち込みがある。断面形は逆台形状で、南西側の落ち込みは弧状を描く。

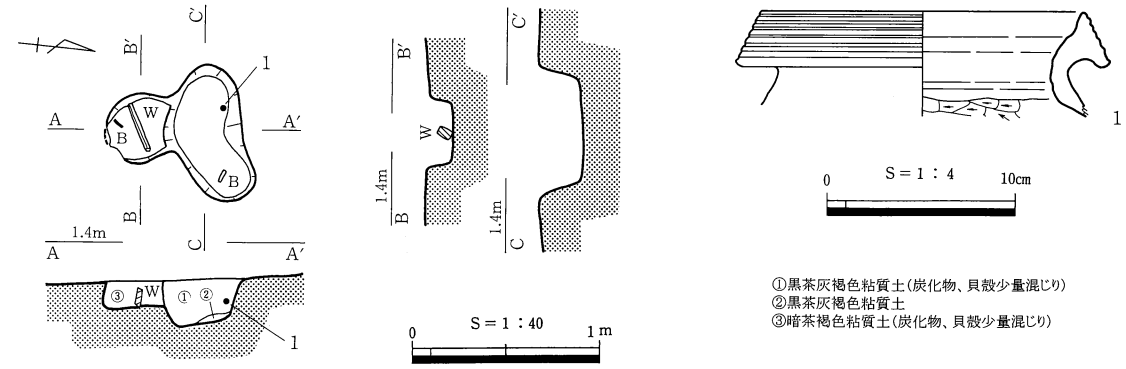


第34図　弥生時代後期初頭～後葉１区遺構配置図

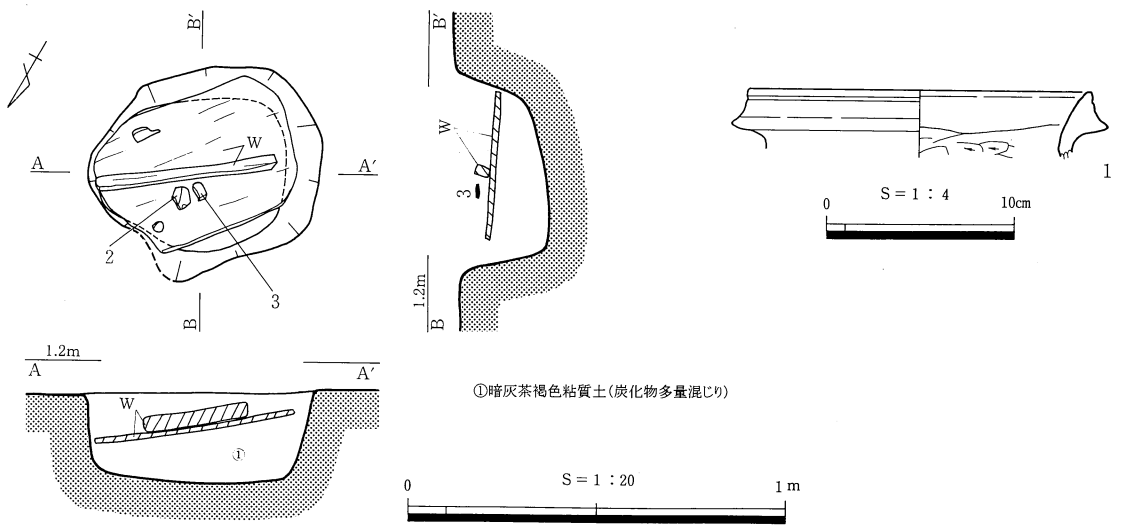
第35図　弥生時代後期初頭～後葉３区遺構配置図



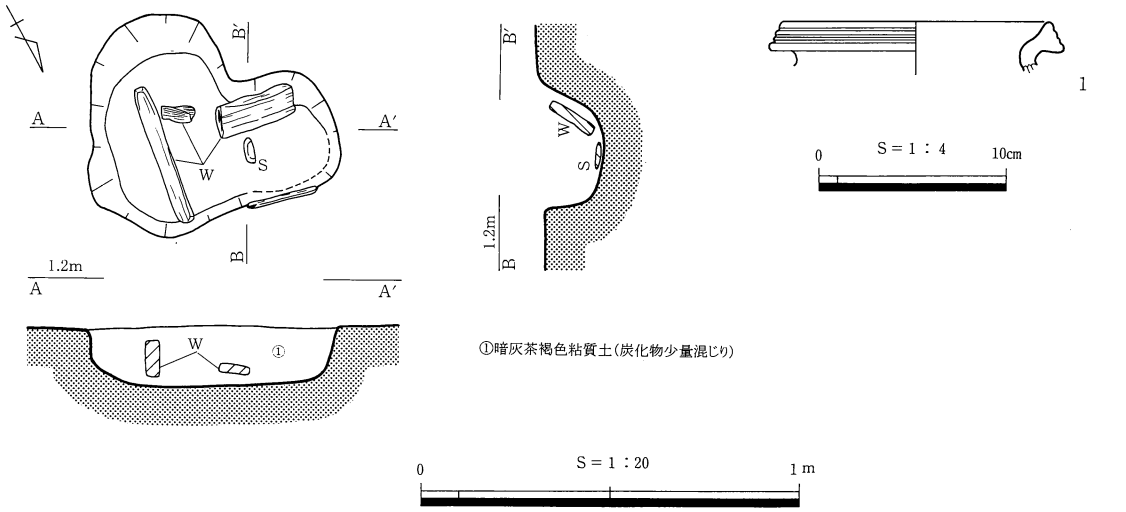
第36図　弥生時代後期初頭～後葉２区遺構配置図



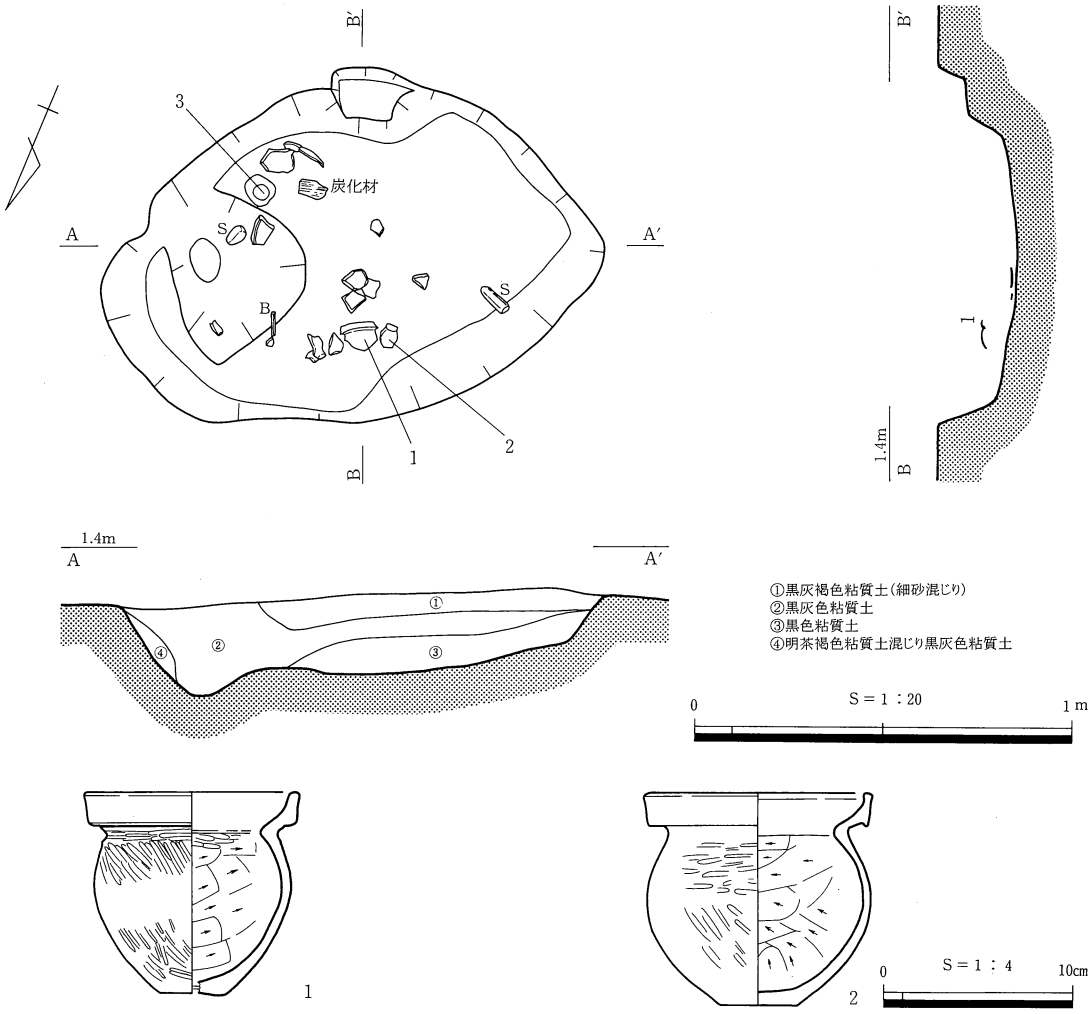
第37図　ＳＫ202及び出土遺物



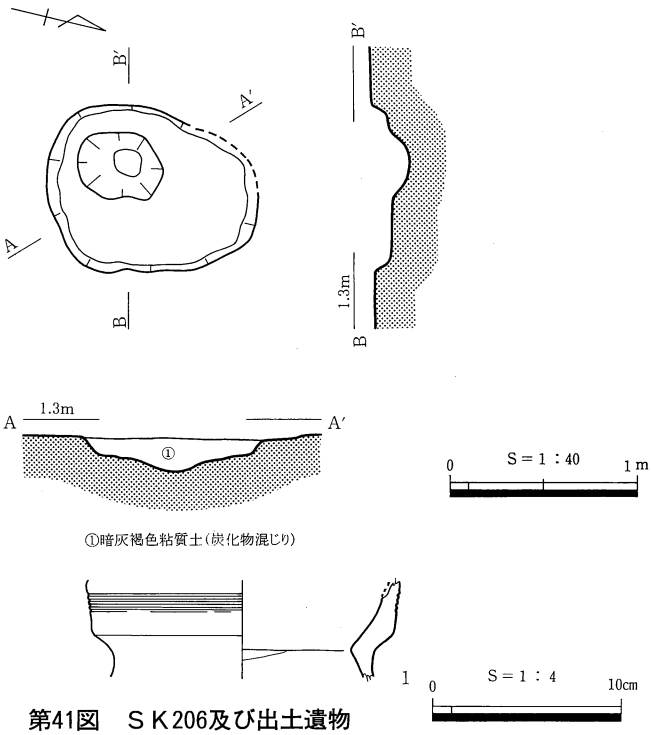
第38図　ＳＫ203及び出土遺物



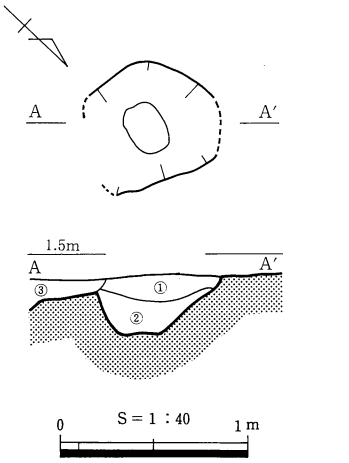
第39図　ＳＫ204及び出土遺物



第40図　ＳＫ205及び出土遺物



第41図　ＳＫ206及び出土遺物



第42図　ＳＫ207

検出面からの深さは10cmで、南西側でさらに12cm深まる。埋土は１層で、暗灰褐色粘質土である。埋土中より甕か壺と思われる口縁部片（１）が出土している。（１）は、直立気味の口縁部で、４条の擬凹線が巡る。端面上端は欠損しており、下端は下垂しない。頸部内面はケズリ調整である。

ＳＫ207（第42図）

国道２区Ｂ18グリッドＮＷ区からＳＷ区にかけて位置する。東側はＳＫ206に、北西側はピットによって切られており、検出面が長径推定72cm、短径64cmを測る不整な円形状の土坑である。底面は不整な楕円形状を呈し、長径26cm、短径19cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。埋土は暗茶灰褐色粘質土を基本とし、混入物の微妙な差異で２層に細分される。遺物は出土しなかった。

ＳＫ208（第43図・図版13）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区に位置する。長軸81cm、短軸38cmを測る土坑である。検出面では隅丸長方形状を呈し、底面は南西側の段のため鈎形状をなす。東西の断面の立ち上がりは東側で緩やかで、西側では段をなす。南北の断面形は逆台形状を呈する。検出面から底面までの深さは13cmで、西側の段までは５cmを測る。埋土は１層で、黒灰褐色粘質土である。南西隅の段の底面直上からは甕の口縁部（１）が、また北側中央部の底面直上より器台の受部（２）が出土している。

（１）は、直立気味の口縁で、５条の擬凹線が巡る。端面上端は丸く収め、下端をやや下垂させる。胴部外面には、縦方向のハケ調整後、横方向の疎らなミガキ調整が施されている。内面は、口縁部に横方向の細かいミガキ調整が施され、頸部以下はケズリ調整である。（２）は、外反する口縁部からさらにすぼまる筒部を呈し、口縁端面に多条の平行沈線が巡る。外面ミガキ調整で、筒部に２条の沈線を確認できる。内面全面ケズリ後ミガキ調整で、平滑な器面に整えている。

ＳＫ209（第44図）

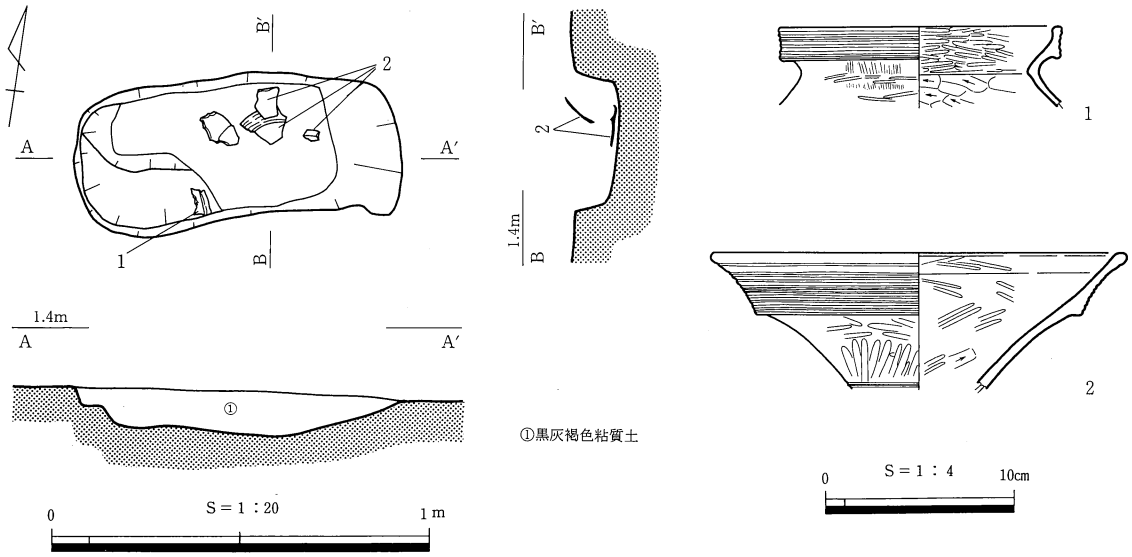
国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。検出面、底面ともに円形状を呈す土坑である。検出面で径80cm程度を測り、底面では径76cm程度である。断面形は皿形状をなし、底面はくぼむ。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は１層で、黒色粘質土である。埋土中より、甕の口縁部片（１）と土玉１点（２）が出土している。（１）は、直立する口縁部で、３条の凹線が巡る。端面上端は幅広で、下端は斜め下方に突出気味である。肩部外面にはミガキ調整が、内面には頸部以下にケズリ調整が施されている。

ＳＫ210（第45図）

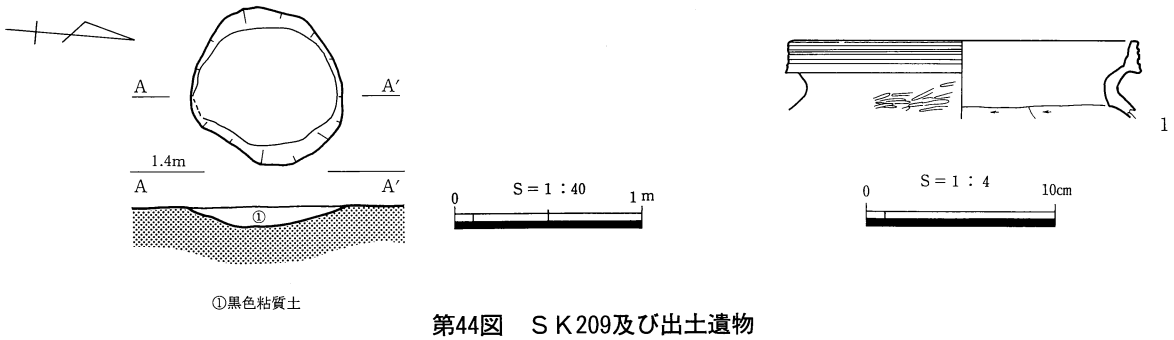
国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。長軸1.19m、短軸79cmを測る土坑である。楕円形に半円形が合体したような検出面形で、北東側の半円形状部分は段になる。本体部分の底面形は、北側で湾曲する不整な楕円形状を呈する。断面形は皿状を呈し、北東側で検出面から９cmほどの段をなし、さらに８cmほど深まる。埋土は１層で、黒灰褐色粘質土である。南側の底面付近では、甕（１）が内面上向きの状態で出土している。（１）は、やや外反する口縁部で、櫛描き平行沈線が巡る。器壁の厚い口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は斜め下方に僅かに突出する。外面は、肩部に貝殻腹縁による押引き沈線文が施され、胴部に横方向のミガキ調整が疎らに加えられる。内面は、頸部以下ケズリ調整である。

ＳＫ211（第46図）

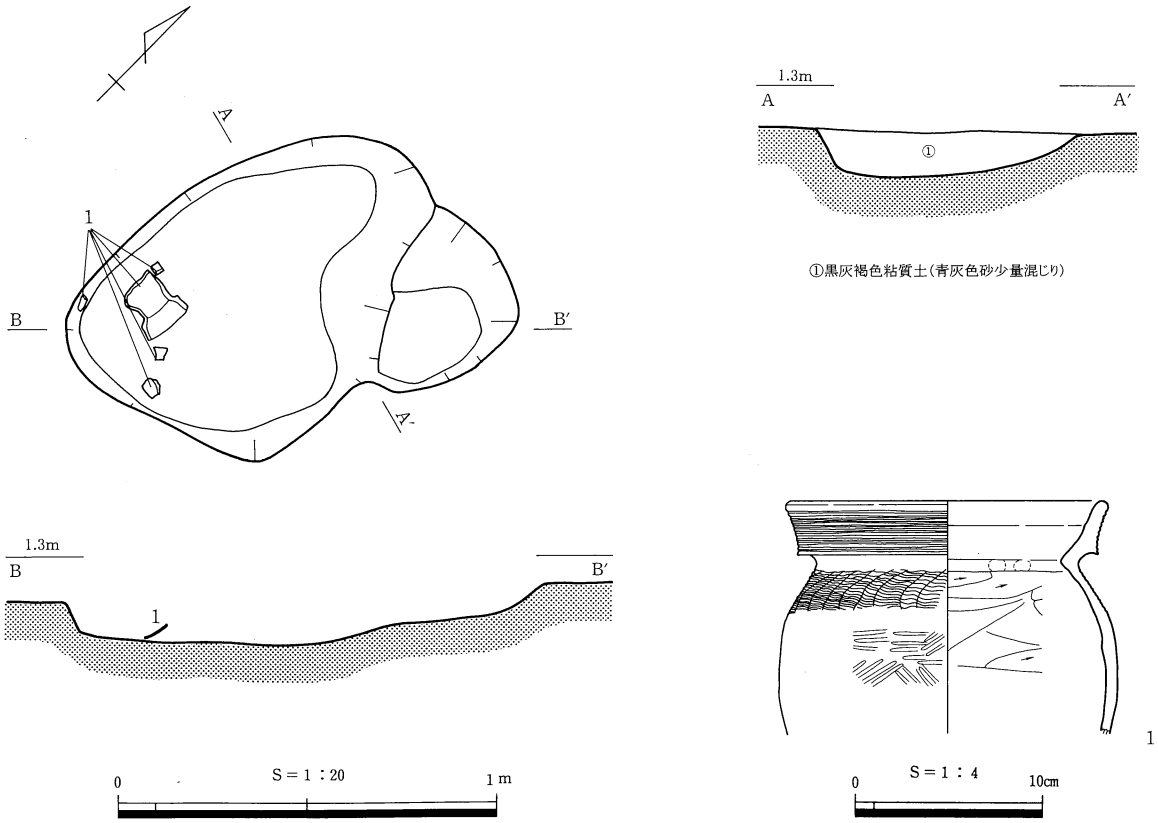
国道２区Ｂ20グリッドＳＷ区に位置する。長径80cm、短径68cmを測る土坑である。検出面、底面ともにやや不整な円形状を呈す。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦面をなす。検出面からの深さは12cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を基本とし、混入物の差異で２層に細分された。埋土中より甕（１）、土玉（２）のほか、動物の歯牙や植物の種が出土している。（１）は、直立する口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面が弧状に反るため、下端が横方向に突出するようにみえる。上端は丸く収めている。口縁部内面には、一部にミガキ調整がみられ、頸部内面には、横方向の緻密なミガキ調整が施されている。それ以下はケズリ調整である。



第43図　ＳＫ208及び出土遺物



第44図　ＳＫ209及び出土遺物



第45図　ＳＫ210及び出土遺物

ＳＫ212（第47図）

国道２区Ａ20グリッドＮＥ区に位置する。長軸1.15m、短軸77cmを測る土坑である。検出面形、底面形ともに側がややいびつな隅丸長方形を呈す。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。埋土は３層に分層でき、最下層は灰褐色の砂が堆積する。遺物は、埋土中より甕（１）が出土しているほか、加工木片が底面直上から埋土上面にかけて重なりをみせながら検出された。特に意図的な配置は看取されない。（１）は、口縁部の外反する器形で、端面は無施文である。端面の上端は丸く収め、下端はやや下垂する。口縁部内面は緻密なミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整である。

ＳＫ213（第48図・図版14）

国道２区Ｂ20グリッドＳＷ区に位置する。長径1.09m、短径78cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。底面に２ヶ所の部分的な落ち込みがみられる。断面形は概ね逆台形状を呈する。検出面からの深さは最大21cmを測る。埋土は１層で、灰青色砂混じりの黒灰褐色粘質土である。西側寄り埋土中からは、加工木材、木材破片が散在した状態で検出された。また、南西側隅と北東側隅の埋土中より甕の口縁部（１、２）が、東側の埋土中より土玉１点（３）が出土している。

（１）は、外反する口縁部で、端面中程に櫛描き平行沈線が巡る。端面は上端を丸く収め、下端は横方向に突出させる。肩部外面はハケ調整、内面は口頸部でミガキ調整、以下ケズリ調整の上からミガキ調整を施している。（２）は、外反する口縁部で、６条の擬凹線が巡る。端面は弧状に反り、上端部は特に肥厚させて強調されており、横方向に突出する。下端部も斜め下方に突出している。肩部外面にハケ調整が施され、内面は頸部以下ケズリ調整である。

ＳＫ214（第49図）

国道２区Ｂ20グリッドＳＥ区に位置する。長軸1.1m、短軸39cmを測る不整な長方形状を呈する土坑である。底面に複雑な段差があり、断面形はいびつである。検出面からは最深部で24cmを測る。埋土は３層に分層できるが、最下層が粘質土混じりの細砂層である。遺物は底面付近から出土するものが多いが、混入と思われる土器の細片、加工木の小片などである。北西側では下端線寄りの底面近くで甕の口縁部（１）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、櫛描き平行沈線が施されている。端面は弧状に反り、上端は丸く収め、下端は斜め下方にやや突出させている。胴部外面にハケ調整が観察され、内面は、口頸部にミガキ調整、それ以下はケズリ調整である。

ＳＫ215（第50図・図版14）

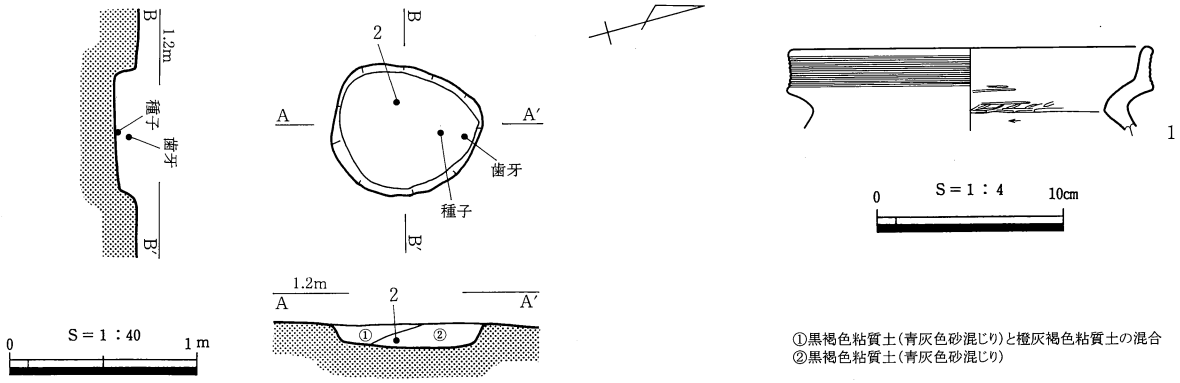
国道２区Ｂ19グリッドＳＥ区に位置する。長径61cm、短径46cmを測る不整な楕円形状を呈する土坑である。南東側に小さな段をもつ。底面は中央部に向けやや下がるが、断面形は概ね逆台形を呈し、検出面からの深さは12.5cmを測る。埋土は１層で、黒褐色粘質土である。遺物は埋土中に拡散しており、混入と思われる土器の細片が多数出土している。北東側の壁面近くでは埋土中中程から甕の口縁部（１）が出土しており、また、中央やや東側の埋土上層より土玉が１点（２）出土している。（１）は、外反する口縁部で、２単位の多条の擬凹線が終結する部分を観察できる。内面は口頸部にミガキ調整が施され、口縁部上端はヨコナデされている。

ＳＫ216（第51図）

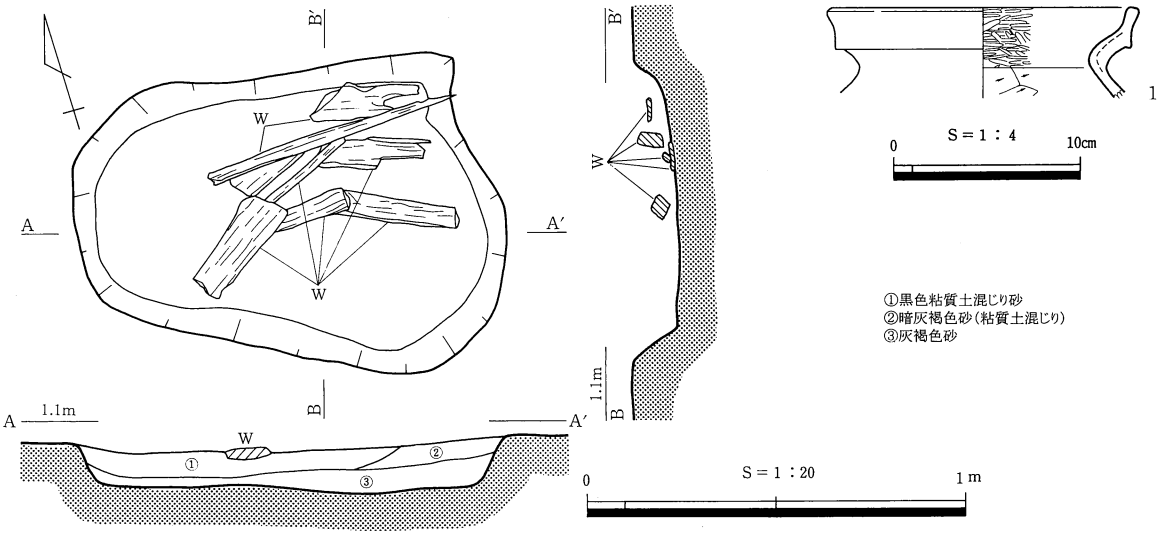
国道２区Ｃ20グリッドＳＷ区に位置する。北側はＳＫ217によって切られており、全体の形状は不明であるが、検出面、底面ともに楕円形を呈すると思われる。長軸87cm、短軸残存43cmを測る土坑である。断面形は逆台形状を呈すると思われ、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は１層で、暗灰褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＫ217（第52図・図版14）

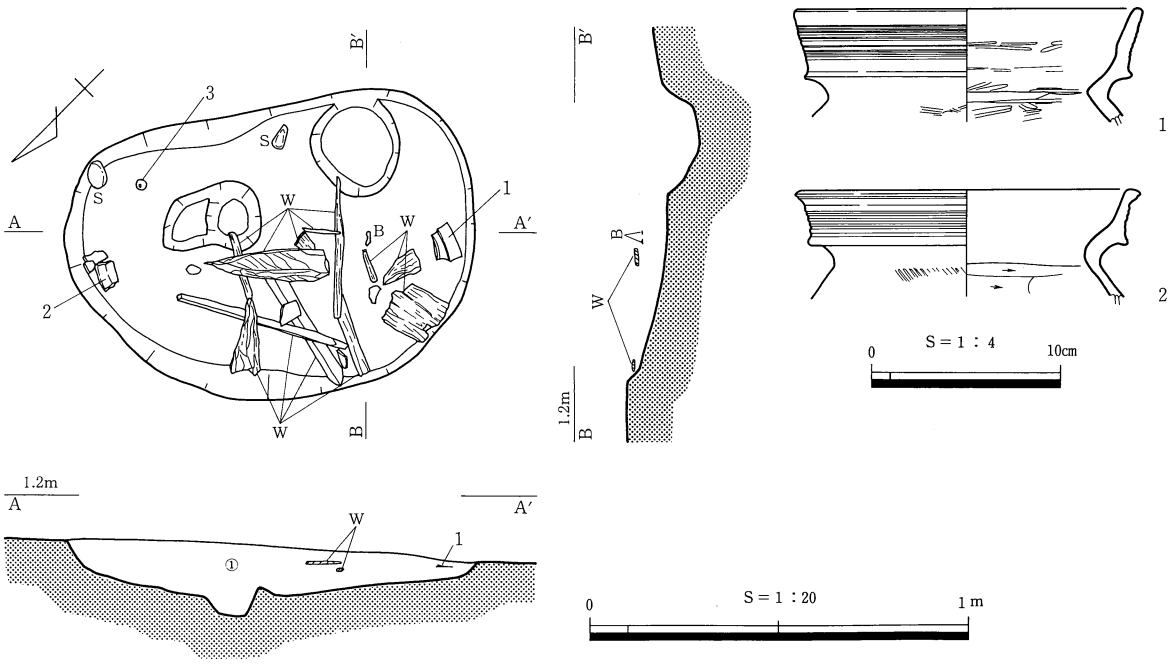
国道２区Ｃ20グリッドＳＷ区からＳＥ区にかけて位置する。南東側でＳＫ216を切っている。長軸1.53m、短軸99cmを測る土坑である。検出面、底面ともに端整な隅丸方形状を呈す。底面は中央部が最も深く、断面形は椀形状に近い。検出面からの深さは27cmを測る。東半部では、埋土中から板材、木材破片が集中的に出土しているが、作為性は認められない。また埋土中より、甕が２点（１、２）と管状骨製の刺突具（３）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、櫛描き平行沈線が巡る。端面の立ち上がりは直線的で、上端部は丸く収め、



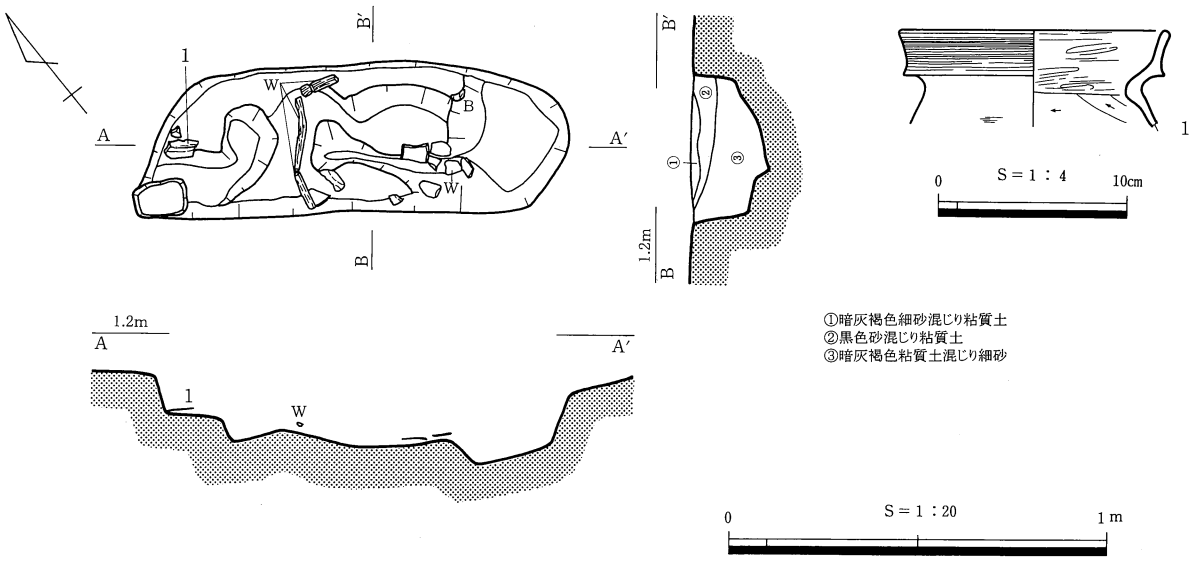
第46図　ＳＫ211及び出土遺物



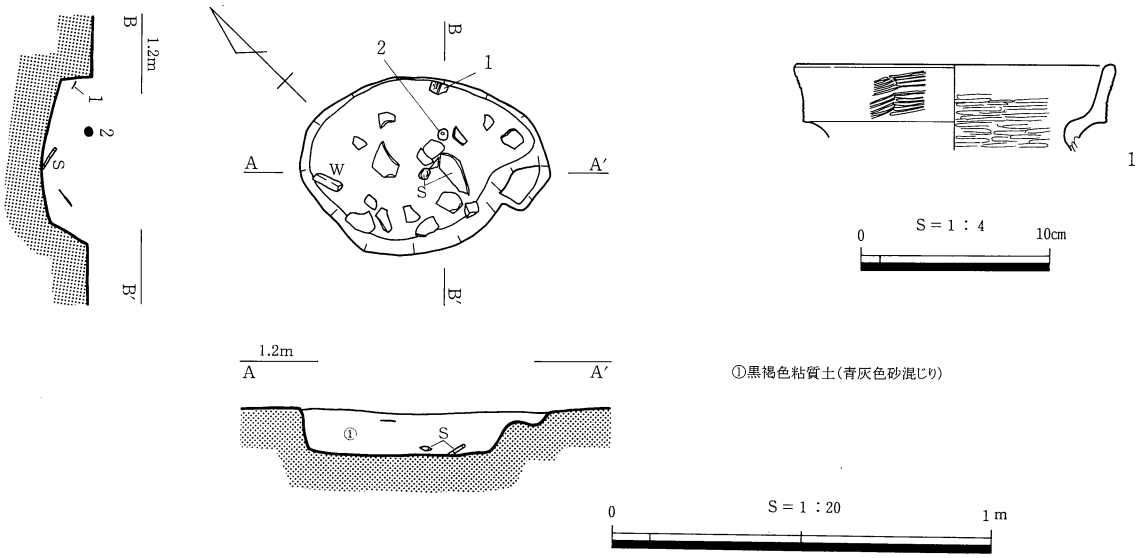
第47図　ＳＫ212及び出土遺物



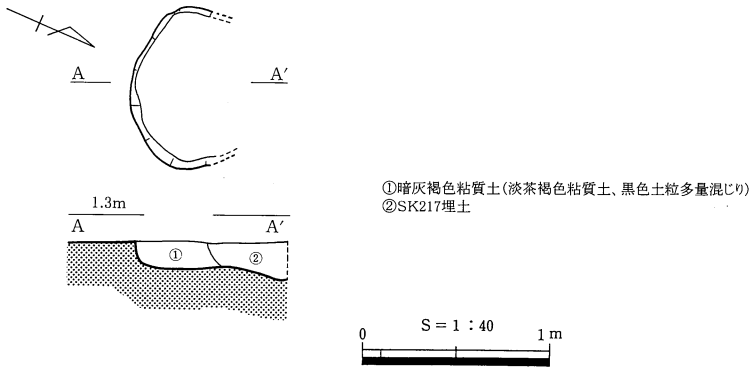
第48図　ＳＫ213及び出土遺物



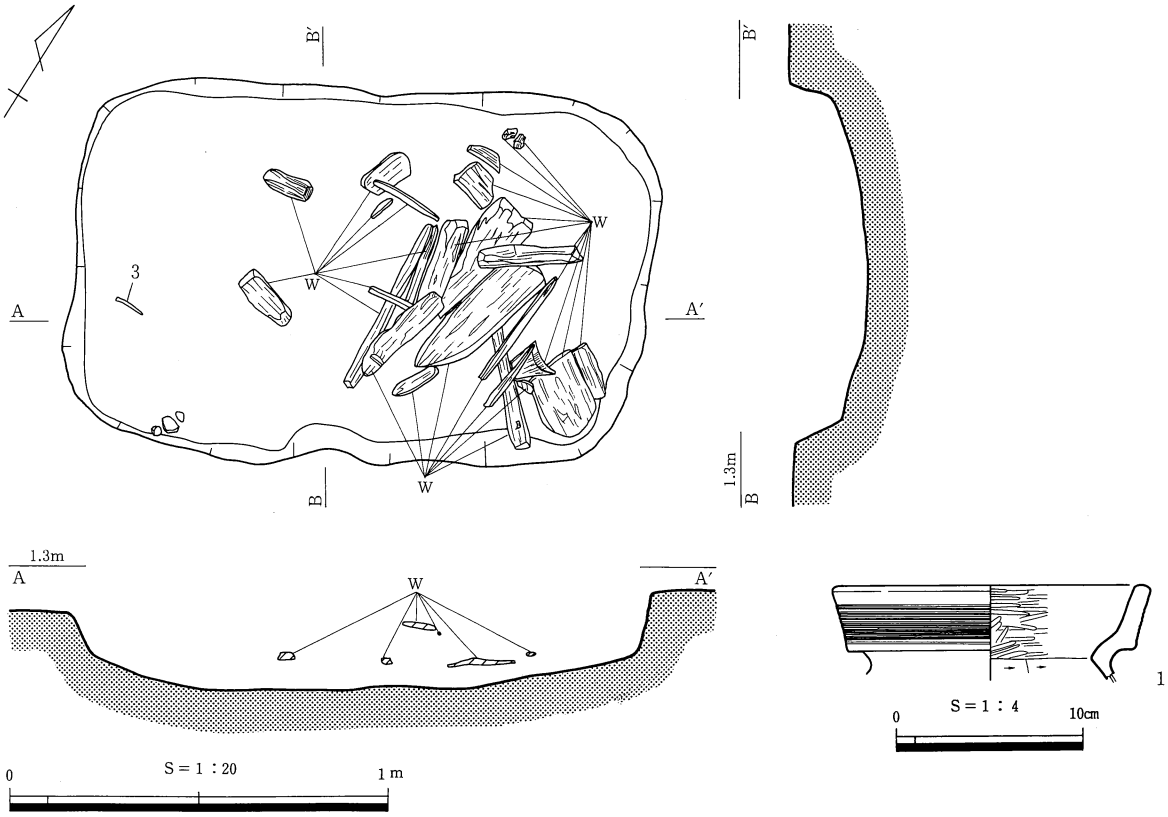
第49図　ＳＫ214及び出土遺物



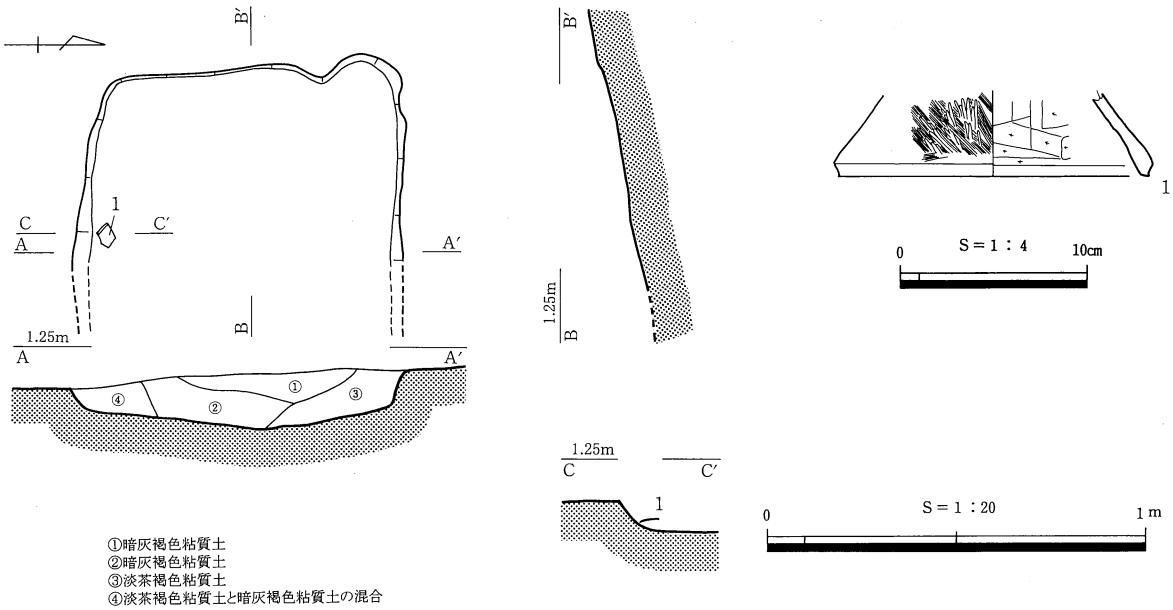
第50図　ＳＫ215及び出土遺物



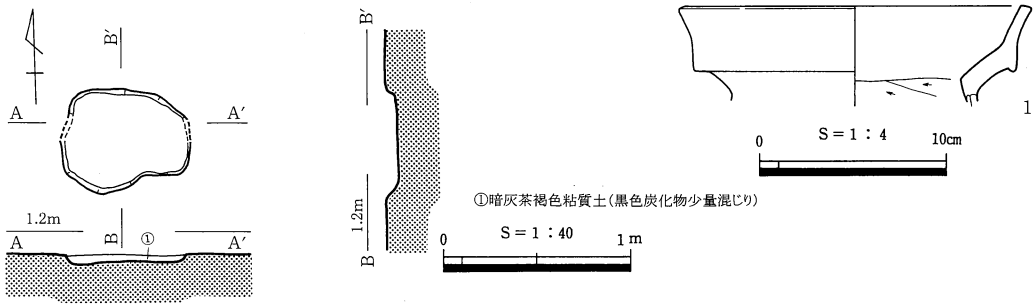
第51図　ＳＫ216



第52図　ＳＫ217及び出土遺物



第53図　ＳＫ218及び出土遺物



第54図　ＳＫ219及び出土遺物

下端部は突出しない。内面は、口頸部にミガキ調整、胴部以下ケズリ調整である。

ＳＫ218（第53図）

国道２区Ｃ20グリッドＳＥ区に位置する。東側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、長軸85cm、短軸残存52cmを測る隅丸方形を呈する土坑と思われる。底面は、南北軸では中心に向かって下がり、東西軸では、東方向へ傾斜して下がっている。南北方向の断面形は不整な逆台形状を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。埋土は４層に分層できたが、内側の暗灰褐色粘質土と外側の淡茶褐色粘質土の２つにまとめられる。南側の壁面寄りでは、埋土下層から器台と思われる脚部の破片（１）が出土している。（１）は、底部端部を面取りしてヨコナデし、外面はハケ調整後その上から疎らなミガキ調整を施している。内面はケズリ調整を施すが、底部端部はヨコナデしている。

ＳＫ219（第54図）

国道２区Ａ19グリッドＮＷ区に位置する。長径69cm、短径54cmを測る不整な楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈する。検出面からの深さは６cmである。埋土は、暗灰茶褐色粘質土の単層で、炭化物が少量混じっている。遺物は、甕か壺と思われる口縁部片（１）が、遺構中央部の埋土中より出土している。（１）は、外反する口縁部で、端面は無施文である。端面上端は面取りし、下端は下垂する。内面頸部以下ケズリ調整を施す。

ＳＫ220（第55図・図版15）

国道２区Ａ21グリッドＮＥ区に位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、長径１m、短径残存73cmを測る土坑である。検出面、底面ともに、本来不整な楕円形状を呈するものと思われる。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。加工木片や木材破片、獣骨や植物の種などが埋土中から散在した状態で検出されたが、これらに混じって、甕の口縁部片（１、２）や紡錘形の有溝石錘（３）、石製加工品（４）が出土している。（３）は底面直上から、（４）は底面付近から検出された。（１）は、強く外反する口縁部で、端面の立ち上がりは弧状を描き、上端は丸く細く収め、下端部は斜め下方に突出する。端面には無施文で、肩部外面に波状文が僅かに確認される。口頸部内外面はミガキ調整で、内面胴部以下はケズリ後ミガキ調整を加えている。

ＳＫ221（第56図）

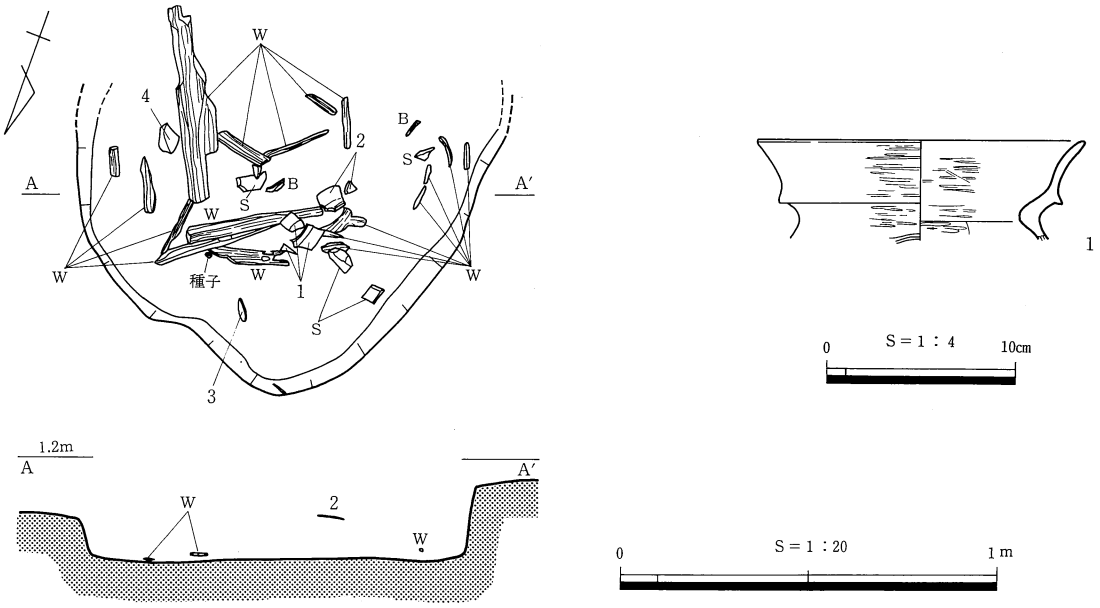
国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区からＣ18グリッドＳＥ区にかけて位置する。長軸1.53m、短軸89cmを測る土坑である。検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。底面は多少のくぼみはあるものの概ね平坦で、断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは８cmを測る。遺物は南側寄りの埋土上面から出土しており、小型の甕（１）と胴部から底部にかけての破片（２）が近接して出土している。さらに東へ30cmの地点で土玉１点（３）が出土している。（１）は、口縁部が僅かに外反しており、頸部が確認できる。口縁端部が面取りされて内傾する形状をとり、端面をやや強めにヨコナデしている。口縁端面に１条の凹線が巡る。複合口縁とは言い難いが、端面下端が横方向にやや突出する。口縁部内面はミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整されている。

ＳＫ222（第57図）

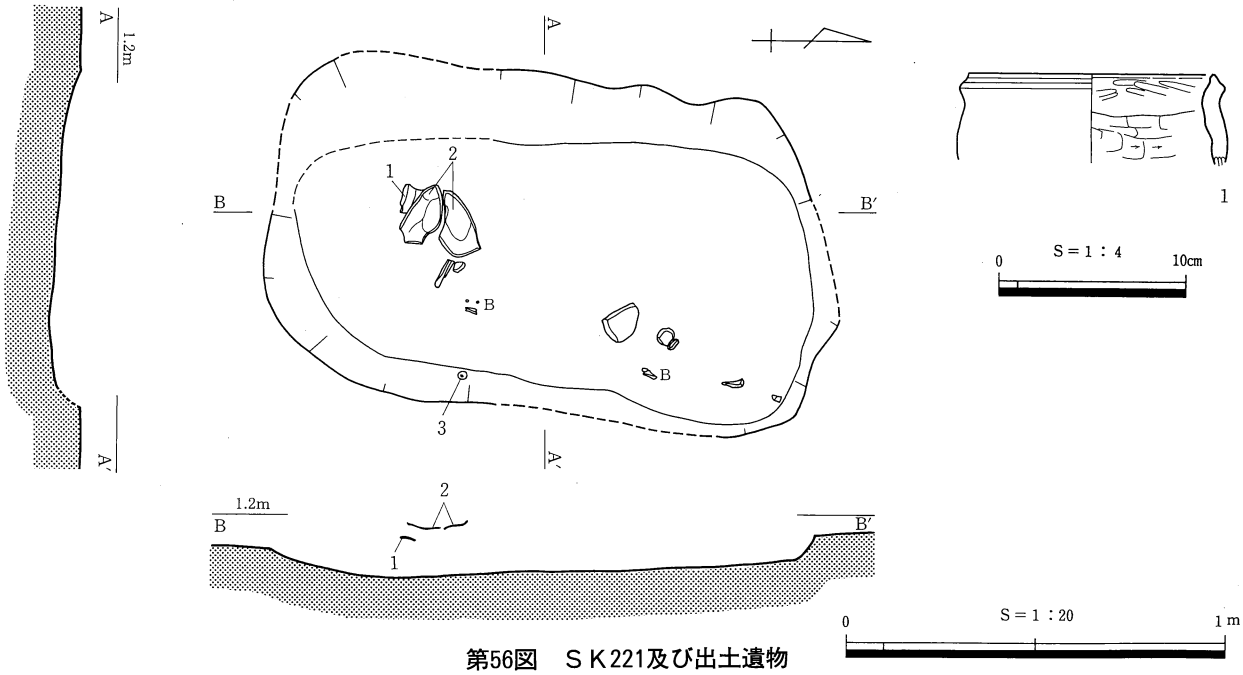
国道２区Ｂ20グリッド中央部に位置する。北東側はピットに切られている。長軸1.26m、短軸85cmを測る土坑で、検出面、底面ともに不整な形状を呈する。断面形はほぼ逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は５層に分層されるが、茶褐色系の粘質土が主体となる。北側の埋土上面より器台の受け部（１）が出土しており、また埋土中より甕（２）と高坏と思われる脚部（３）が出土している。（１）は、外傾する口縁部で、端面中程に櫛描き平行沈線が巡る。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。頸部外面及び口縁部内面には、ミガキ調整を施している。

ＳＫ223（第58図）

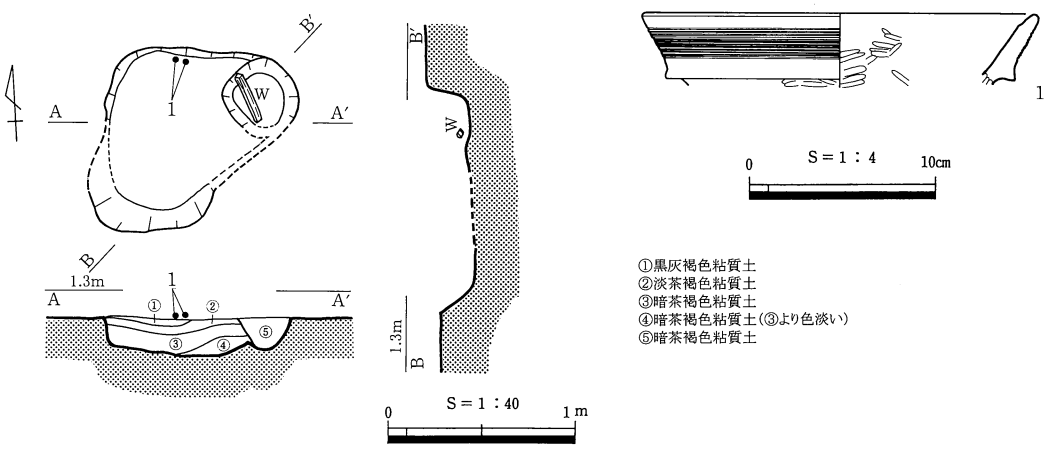
国道２区Ａ19グリッドＮＷ区からＮＥ区にかけて位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明であるが、検出面、底面ともに隅丸方形状を呈する土坑と思われる。検出した範囲で



第55図　ＳＫ220及び出土遺物



第56図　ＳＫ221及び出土遺物



第57図　ＳＫ222及び出土遺物

は長軸1.47m、短軸残存57cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは14.5cmを測る。埋土は1層で、暗灰茶褐色粘質土であり、若干の加工木片を含む。埋土中から、甕の口縁部（１）と蓋形のミニチュア土器（２）が出土している。（１）は、直立する口縁部で、端面は本来巡っていた多条の沈線をナデ消しており、その後ミガキ調整を施している。沈線は、下端に１条だけ残っている。端面上端は丸く収め、下端はナデ消しのためやや肥厚気味となる。頸部外面、口縁部内面はミガキ調整で、内面頸部以下ケズリ調整後ミガキ調整を加えている。

ＳＫ224（第59図・図版15）

国道２区Ｂ19グリッドＳＷ区に位置する。長径1.02m、短径53cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は、西側で僅かに深くなる。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は黒褐色土を基本とし、微細な混入物の差異によって２層に細分される。底面付近では、中心軸に即して加工長板材が検出された。これより上層から角板材や木片が折り重なるように出土しており、これらのうちには木庖丁（２）が含まれる。また埋土中より甕か壺と思われる口縁部（１）が出土している。（１）は、直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面は上端が外側にやや屈曲し、下端は微かに下垂する。頸部内外面にミガキ調整が施され、胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ225（第60図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区に位置する。東側では深さ28cmを測る掘り込みによって切られている。長径98cm、短径58cmを測り、検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは16cmを測る。埋土は２層に分層できたが、暗灰褐色粘質土を基本とする。北側では底面直上から埋土中中程にかけて甕と思われる口縁部（１）の破片が出土している。また、埋土中より土玉（２）が１点出土している。（１）は、内傾する口縁部で、端面に施文はない。端面は上下に拡張されており、斜め下方への下垂は明瞭である。口縁部内外面及び頸部外面には、細かいミガキ調整が施されている。

ＳＫ226（第61図）

国道２区Ｂ19グリッドＳＷ区からＳＥ区にかけて位置する。長径62cm、短径36cmを測る検出面、底面ともに楕円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは４cmを測り、北側底面に落ち込みがあるため、さらに８cm深まる。埋土は４層に分層でき、①層には炭化物が含まれる。埋土中より甕（１）、底部片（２）が出土している。（１）は、ナデ消し気味の多条の擬凹線が巡り、外傾する口縁部である。端面は上端が丸く収まり、下端は若干下垂気味である。頸部内面はミガキ調整、胴部以下はケズリ調整である。

ＳＫ227（第62図）

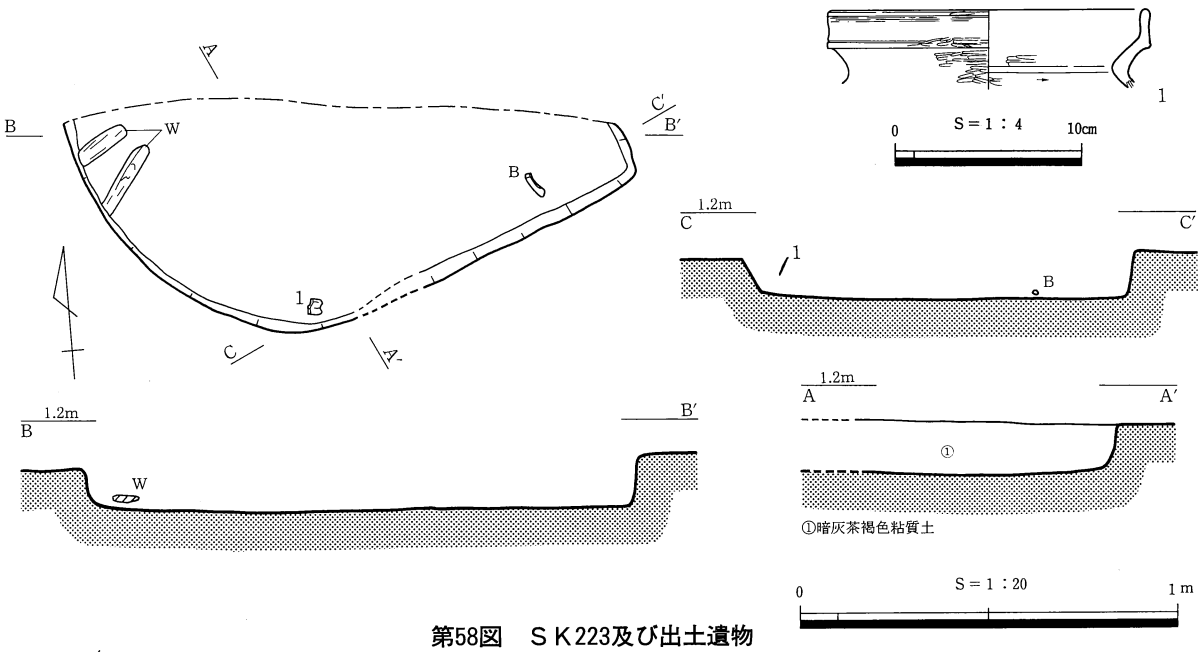
国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。長軸1.48m、短軸96cmを測る土坑である。検出面は北東側が屈曲した不整な形状で、細かい段差がある。壁面の立ち上がりは明瞭で、検出面からの深さは最大18cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の１層で炭化物を含んでいる。埋土中より甕の口頸部（１）が出土している。（１）は、外傾する口縁部で、多条の擬凹線が巡る。端面上端部は欠損し、下端は下垂しない。口頸部内面はミガキ調整を施し、胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ228（第63図）

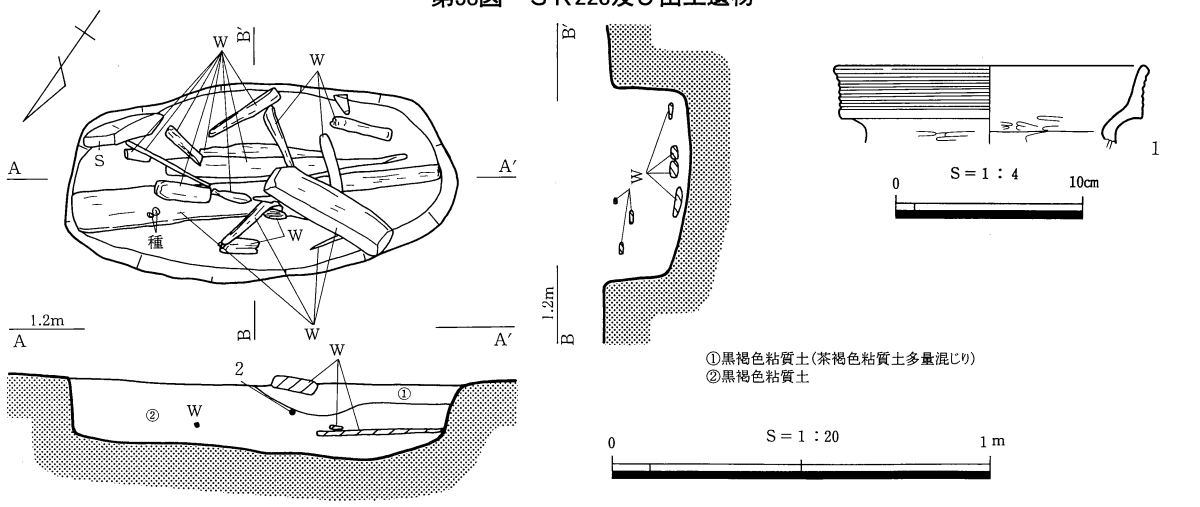
国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。長径73cm、短径59cmを測る検出面、底面ともに円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは８cmを測る。埋土は１層で、黒茶褐色粘質土である。埋土中より甕（１）が出土した。（１）は、外傾する口縁部で、櫛描き平行沈線が巡る。端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。口頸部内面はミガキ調整で、口縁端部をナデ消している。胴部以下はケズリ調整で、その上にミガキ調整を加えている。

ＳＫ229（第64図）

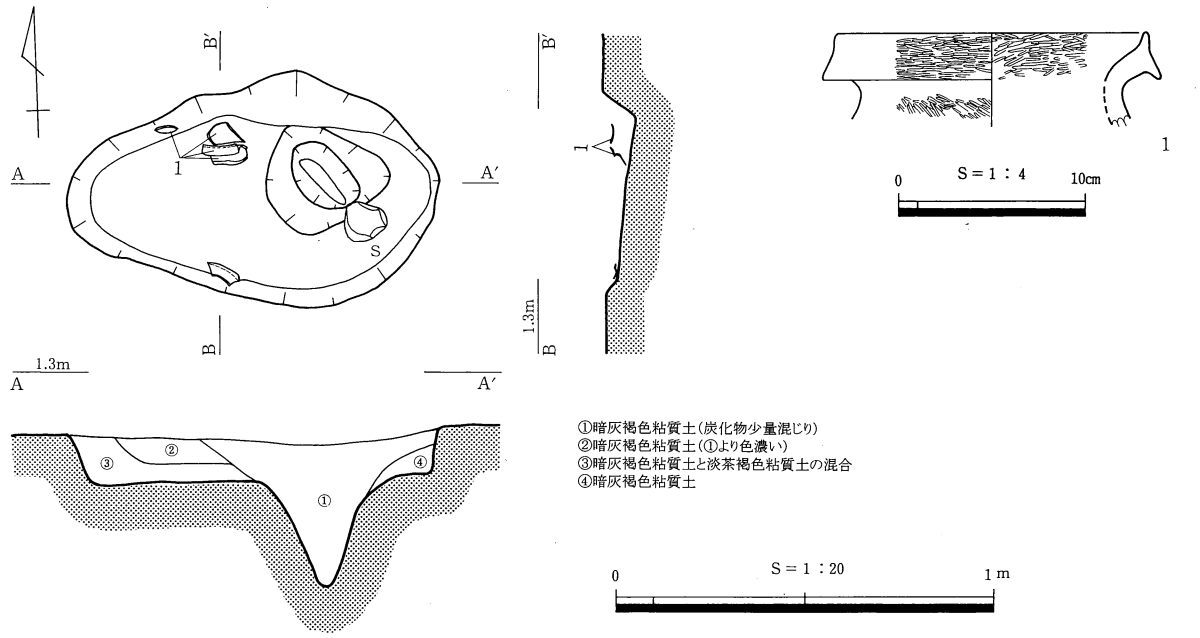
国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区に位置する。長径70cm、短径33cmを測る検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。北側壁面に僅かな段をつくる。底面は南東側で部分的に落ち込むが、概ね平坦である。断面形は逆台



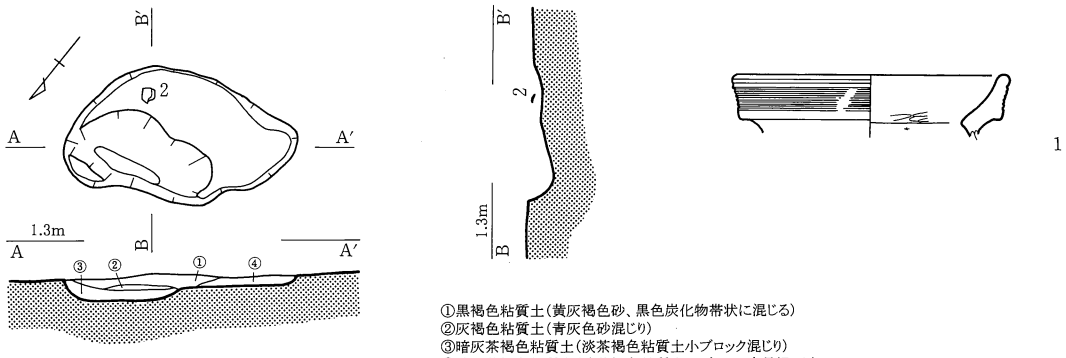
第58図　ＳＫ223及び出土遺物



第59図　ＳＫ224及び出土遺物

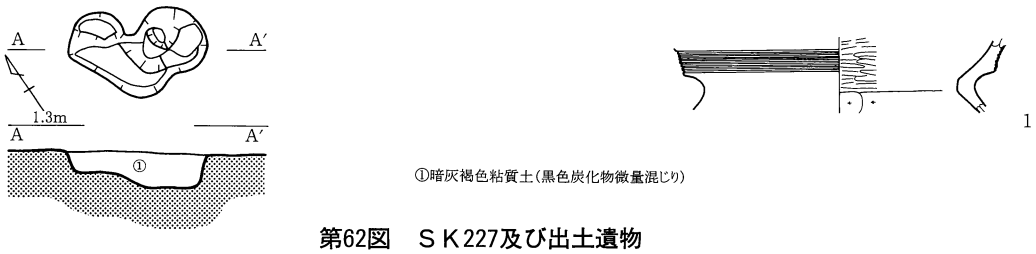


第60図　ＳＫ225及び出土遺物



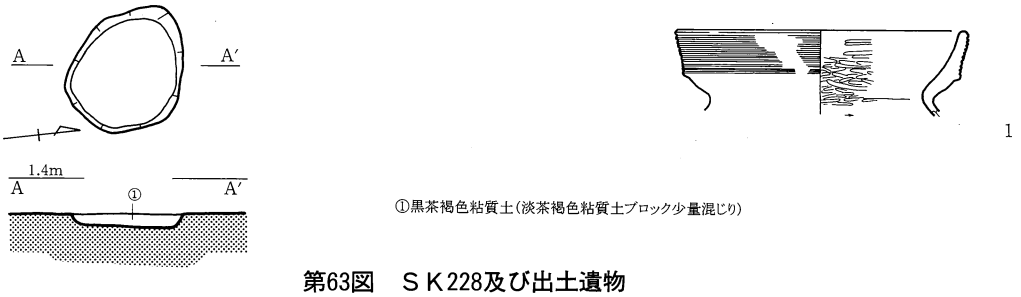
①黒褐色粘質土（黄灰褐色砂、黒色炭化物帯状に混じる）
②灰褐色粘質土（青灰色砂混じり）
③暗灰茶褐色粘質土（淡茶褐色粘質土小ブロック混じり）
④暗灰茶褐色粘質土（淡茶褐色粘質土小ブロック多量混じり）

第61図　ＳＫ226及び出土遺物



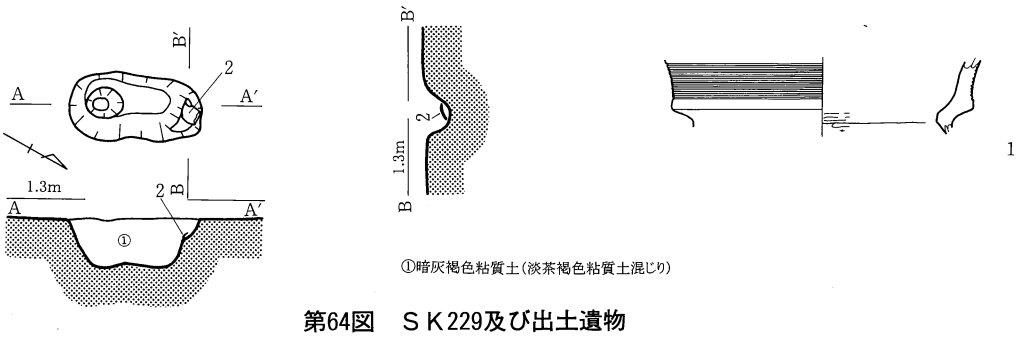
①暗灰褐色粘質土（黒色炭化物微量混じり）

第62図　ＳＫ227及び出土遺物



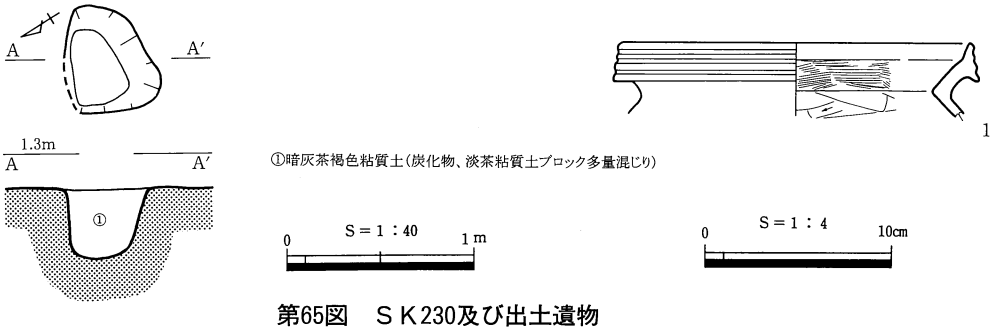
①黒茶褐色粘質土（淡茶褐色粘質土ブロック少量混じり）

第63図　ＳＫ228及び出土遺物



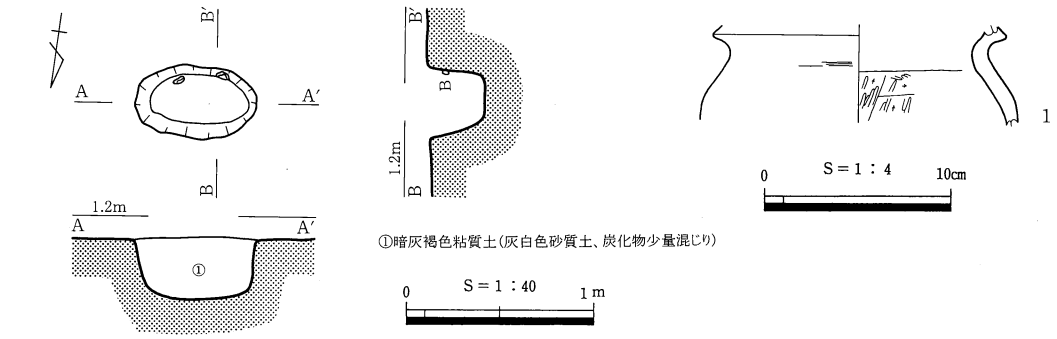
①暗灰褐色粘質土（淡茶褐色粘質土混じり）

第64図　ＳＫ229及び出土遺物

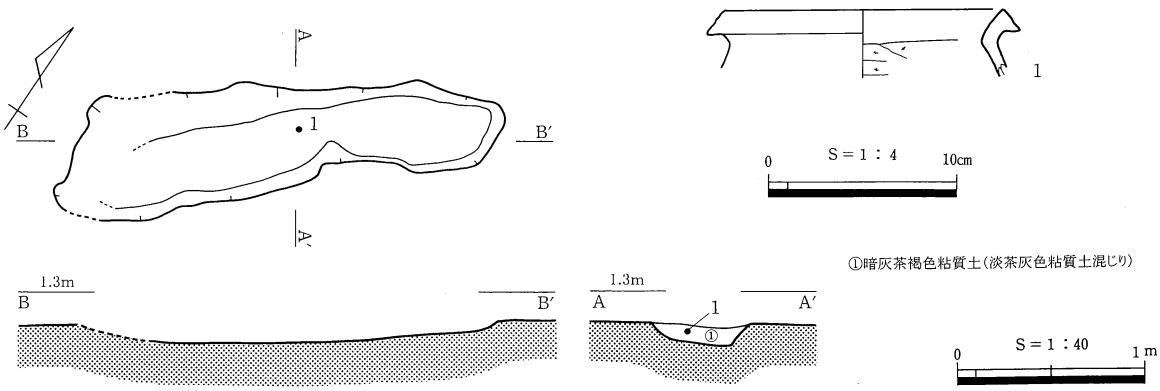


①暗灰茶褐色粘質土（炭化物、淡茶粘質土ブロック多量混じり）

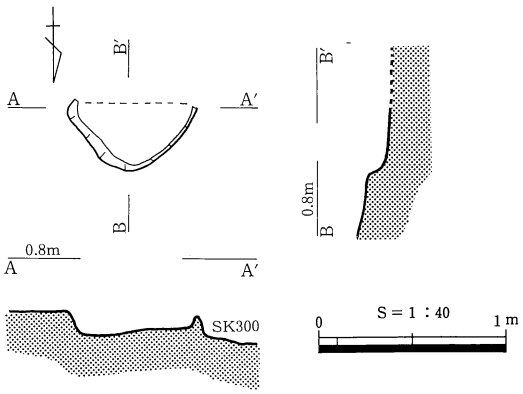
第65図　ＳＫ230及び出土遺物



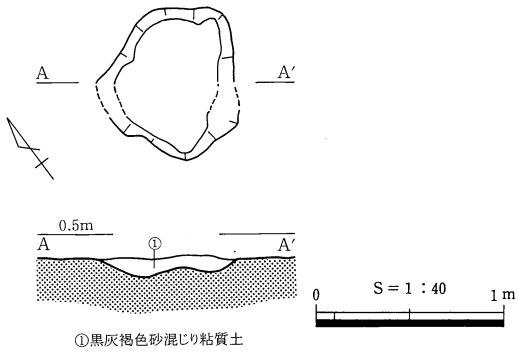
第66図　ＳＫ231及び出土遺物



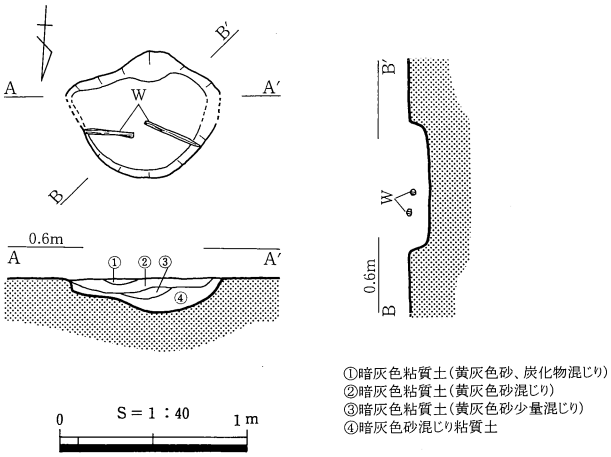
第67図　ＳＫ232及び出土遺物



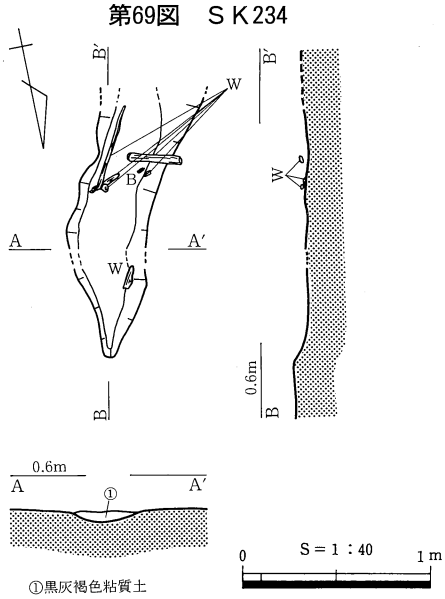
第68図　ＳＫ233



第69図　ＳＫ234



第70図　ＳＫ235



第71図　ＳＫ236

形状を呈し、検出面からの深さは27cmを測る。埋土は１層で、暗灰褐色粘質土である。遺物は北側壁面の段の底面直上から器台（２）が出土した。また埋土中より甕（１）が出土した。（１）は外傾して、櫛描き平行沈線が巡る口縁部で、上端を欠損する。端面は弧状に反り、よって下端が突出気味となるが、下垂はしない。頸部内面はミガキ調整で、胴部内面はケズリ後ミガキ調整を加える。

ＳＫ230（第65図）

国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区に位置する。長軸56cm、短軸46cmを測る検出面、底面ともに不整な台形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは37cmを測る。埋土は１層で、炭化物が混じる暗灰茶褐色粘質土である。埋土中より甕（１）が出土している。（１）は、３条の凹線が巡り、端面の内傾する口縁部で、端面下端は斜め下方に下垂する。口縁部内面はハケ調整で、端部側をヨコナデして消している。胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ231（第66図）

国道２区Ｂ19グリッドＮＷ区に位置する。長径87cm、短径64cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈す。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土の１層であり、炭化物が少量混じっている。底面近くで加工板が検出されたが、壁面から突き出たものであり、遺構との関連はない。埋土中より甕（１）が出土した。（１）は、内傾する口縁部で上端を欠く。端面に施文はない。胴部内面はケズリ調整で、頸部寄りの部分にはミガキ調整を加えている。

ＳＫ232（第67図）

国道２区Ａ19グリッドＮＷ区からＢ19グリッドＳＷ区にかけて位置する。長軸2.3m、短軸50cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な長方形状を呈する。断面の立ち上がりは緩やかで、底面は細長い平坦面となっている。検出面からの深さは12cmで、断面形は逆台形状を呈する。埋土は１層で、暗灰茶褐色粘質土である。中央部の埋土上層より甕（１）が出土している。（１）は、内傾する口縁端面で、断面は三角形状を呈し、凹線等は巡らない。胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ233（第68図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。南側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明であるが長軸68cm、短軸残存38cmを測り、本来隅丸方形状を呈する土坑だと思われる。底面は平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ234（第69図）

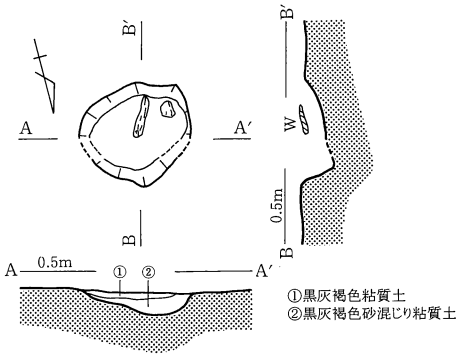
国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区からＢ26グリッドＮＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。長軸81cm、短軸72cmを測る検出面、底面ともに不整な五角形状を呈する土坑である。断面は皿状で、底面には凸凹がある。検出面からの深さは11cmを測る。埋土は１層で、黒灰褐色砂混じり粘質土である。遺物は検出されなかった。

ＳＫ235（第70図）

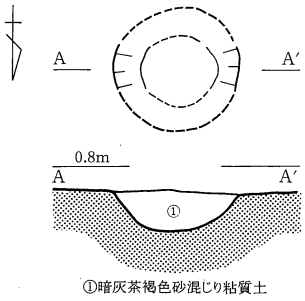
国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。長径68cm、短径61cmを測る検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは17cmを測る。埋土は４層に分層できたが、暗灰色粘質土を基本とする。埋土中に木片がみられたほかは、遺物は出土しなかった。

ＳＫ236（第71図）

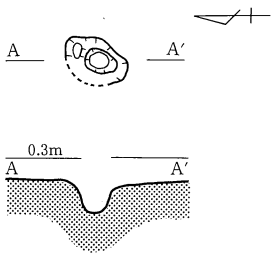
国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。ＳＫ241の上層で、かつＳＫ299とＳＡ15より下層に築かれ、西側にはＳＫ237が近接する。南西側はトレンチによって切られており全体の形状、規模は不明である。長軸残存1.37m、短軸39cmを測る土坑で、北側が先細りする溝的な形態をとる。断面は皿状で、底面は曲面を呈し、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は1層で、黒灰褐色粘質土である。埋土中から木片が検出されたほかは、遺物は



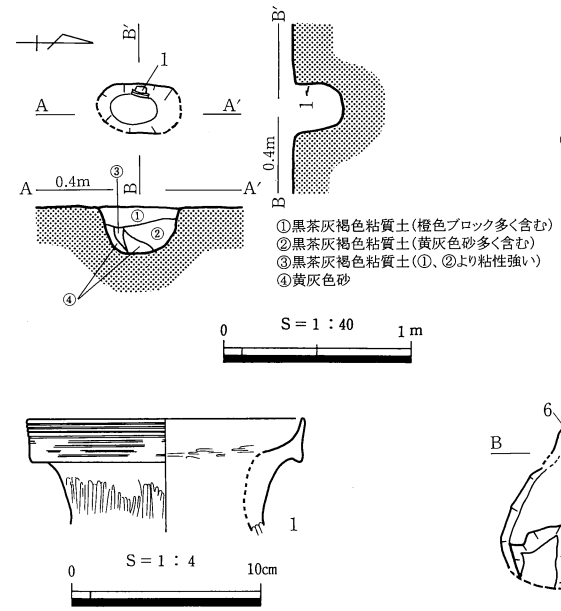
第72図　ＳＫ237



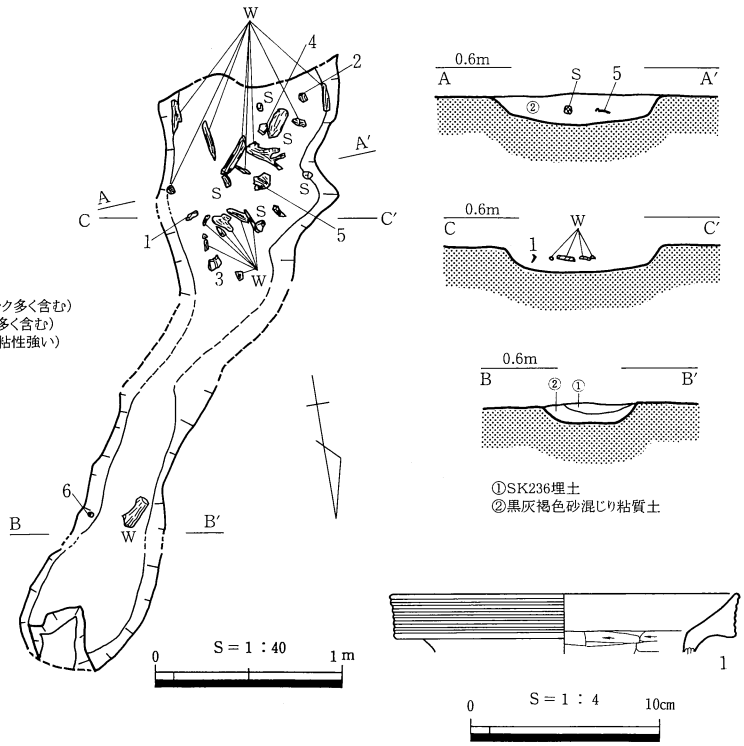
第73図　ＳＫ238



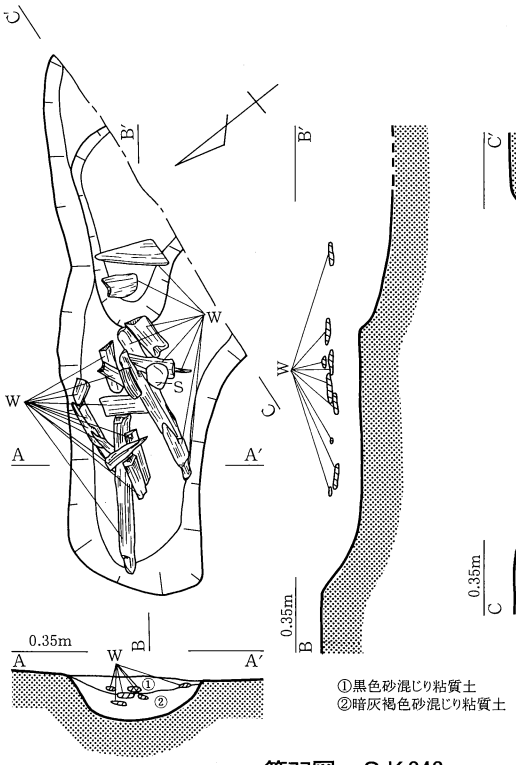
第74図　ＳＫ239



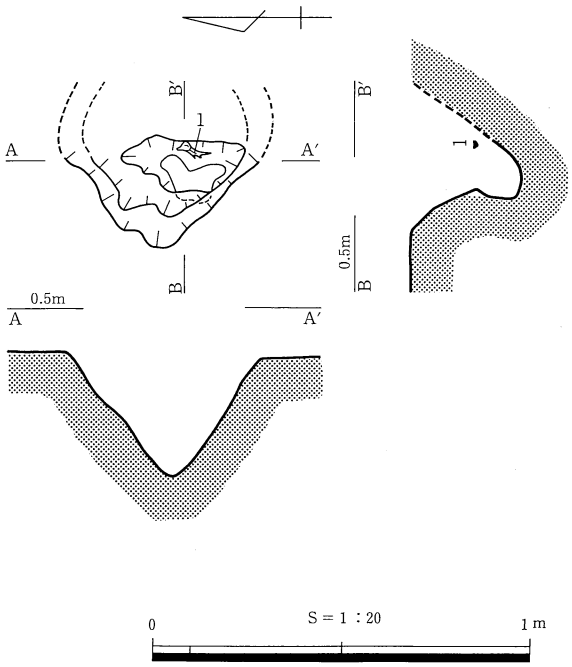
第75図　ＳＫ240及び出土遺物



第76図　ＳＫ241及び出土遺物



第77図　ＳＫ242



第78図　ＳＫ243

出土していない。

ＳＫ237（第72図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたり、東側にはＳＫ236、ＳＫ241が近接している。径57cmの検出面、底面ともに円形状を呈する土坑である。断面は皿状で、底面は凹面となる。検出面からの深さは最大18cmを測る。埋土は黒灰褐色粘質土を基本とし、砂の有無によって２層に細分された。埋土中から木片が検出されたほか、遺物は出土していない。

ＳＫ238（第73図）

国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。土層断面観察用ベルト中から検出されたため、北側と南側の形状は不明であるが、径65cm程のほぼ円形を呈する土坑と思われる。断面形は半円形を呈し、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は１層で、炭化物片を含む暗灰茶褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ239（第74図）

国道３区Ｂ27グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたり、北西側はＳＫ240に切られている。長径37cm、短径残存18cmを測る土坑で楕円形状を呈すると思われる。断面形はＵ字形で、底面に径５cm程度の小さな平坦面をもつ。検出面からの深さは19cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ240（第75図）

国道３区Ｂ27グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたり、南東側でＳＫ239を切っている。また、遺構北側は調査に伴う排水溝で切られているため、全体の形状、規模は不明である。長径は推定で45cm、短径27cm、検出面からの深さ26cmを測る。検出面、底面ともに楕円形を呈すると思われる土坑である。埋土は４層に分層でき、黒茶灰褐色粘質土を基本とするが、黄灰色砂がブロック状にみられる。埋土上層では西側の壁面に接して壺の口縁部片（１）が出土している。（１）は直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が巡り、端面下端は下垂する。擬凹線は部分的にナデ消されている。頸部外面と口縁部内面はミガキ調整を施し、口縁端部内面はミガキをナデ消している。

ＳＫ241（第76図・図版16）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＫ236、297、299、ＳＡ15より下層にあたり、西側にはＳＫ237が近接している。遺構の南側は調査に伴う排水溝によって切られているため、全体の形状、規模は不明である。長軸残存3.38m、短軸43cmを測る土坑で、溝的な細長い形状を呈する。検出面からの深さは８cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は１層で、黒灰褐色砂混じり粘質土である。木片が南側に片寄って出土しており、いずれも底面から浮いた状態である。埋土中より甕か壺と思われる破片（１）、甕（２）小型の甕（３）、壺（４、５）、土玉（６）1点が出土している。（１）は直立気味の口縁部で、多条の擬凹線が巡る。口縁部の断面は三角形に近い。胴部内面はケズリ調整を施している。

ＳＫ242（第77図）

国道３区Ｂ25グリッドＳＷ区からＳＥ区にかけて位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。南側は調査に伴う排水溝によって切られているため全体の形状、規模は不明である。長径残存1.44m、短径40cmを測る土坑で、検出面、底面ともに不整な長楕円形状を呈すると思われる。断面の立ち上がりは比較的緩やかであり、底面はほぼ平坦だが、南側に落ち込みがみられる。検出面からの深さは９cmで、南側でさらに10cm深まる。埋土中から、加工木材片がほぼ一定のレベルでまとまって出土しているほかは、遺物の出土はみられない。

ＳＫ243（第78図・図版16）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ32より上層で、ＳＡ15より下層にあたる。東側はトレンチによって切られているため全体の形状、規模は不明である。長軸52cm、短軸残存30cmで、検出面からの深さは34cmを測る。断面形は逆三角形状を呈するが、一部袋状となり、壁面には凹凸がある。埋土中より、シカの肩甲骨によるト骨が１点検出された。関節窩を上にし、東側壁面に接した状態で出土している。

ＳＫ244（第79図）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区に位置する。長径71cm、短径57cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面の西側はトレンチによって切られている。底面は平坦で、検出面からの深さは14cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は単層で、炭化物を少量含む暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ245（第80図）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区に位置する。一部撹乱を受けているが、長径61cm、短径58cmを測る、円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは13cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は１層で、暗灰茶褐色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ246（第81図）

国道２区Ａ18グリッドＮＥ区に位置する。南側は調査に伴う排水溝によって切られている。長軸60cm、短軸残存50cmを測る土坑である。検出面、底面は本来楕円形状を呈するものと思われ、断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。埋土は１層で、暗茶褐色粘質土である。遺物の出土はなかった。

ＳＫ247（第82図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。長径79cm、短径52cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。検出面からの深さは12cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土の１層で炭化物を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

ＳＫ248（第83図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区からＢ19グリッドＳＷ区にかけて位置する。長径65cm、短径49cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは16cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色粘質土の１層で、炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

ＳＫ249（第84図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区に位置する。長軸82cm、短軸43cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な形状を呈する。検出面からの深さは11cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。埋土は暗灰茶褐色粘質土の１層で、炭化物を含んでいた。遺物は出土していない。

ＳＫ250（第85図）

国道２区Ｂ20グリッドＳＷ区に位置する。長径73cm、短径60cmを測る土坑である。検出面、底面ともに楕円形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは13cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は３層に分層できたが、底面直上に部分的に細砂が堆積している。南東部の埋土上面で円礫が検出されており、埋土中に木片が混入している。遺物は出土していない。

ＳＫ251（第86図）

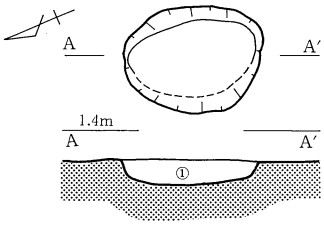
国道２区Ａ18グリッドＮＥ区に位置する。長径76cm、短径45cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈す。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は１層で、暗茶灰色粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ252（第87図）

国道２区Ａ18グリッドＮＷ区に位置する。南東側は、調査に伴う排水溝によって切られている。長径残存92cm、短径37cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な長楕円形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは８cm、断面形は皿状を呈する。埋土は１層で、暗灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

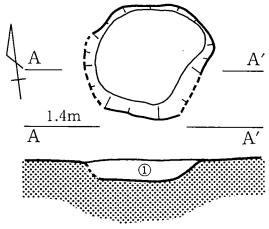
ＳＫ253（第88図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区からＮＥ区にかけて位置する。南東側はＳＤ５との切り合いがみられる。長径72cm、短径残存44cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整な楕円形を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは12cmを測り、断面形は逆台形状を呈す。遺物は出土していない。



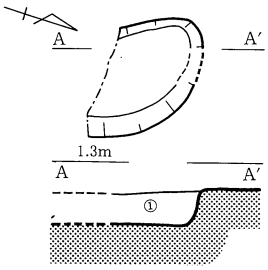
①暗灰褐色粘質土

第79図　ＳＫ244



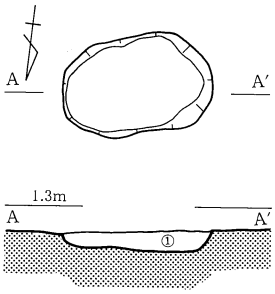
①暗灰茶褐色粘質土

第80図　ＳＫ245



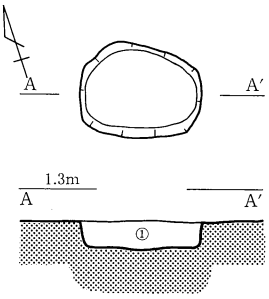
①暗茶褐色粘質土

第81図　ＳＫ246



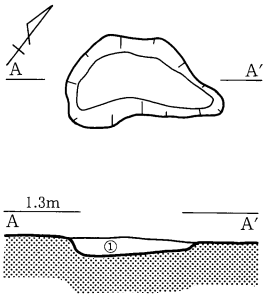
①暗灰褐色粘質土

第82図　ＳＫ247



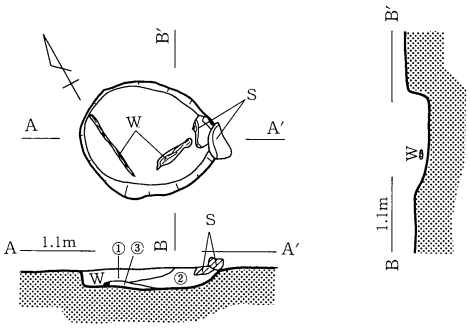
①暗茶灰褐色粘質土

第83図　ＳＫ248



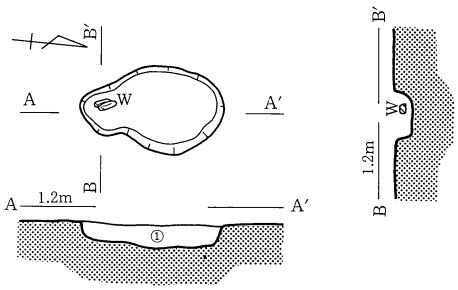
①暗灰茶褐色粘質土

第84図　ＳＫ249



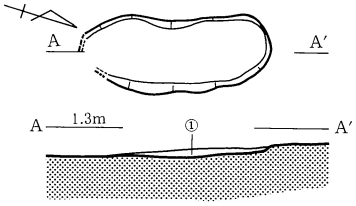
①暗灰褐色細砂混じり粘質土
②黒色細砂混じり粘質土
③暗灰色粘質土混じり細砂

第85図　ＳＫ250



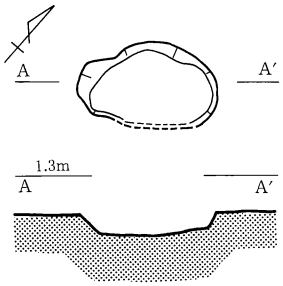
①暗茶灰色粘質土

第86図　ＳＫ251

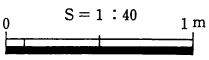


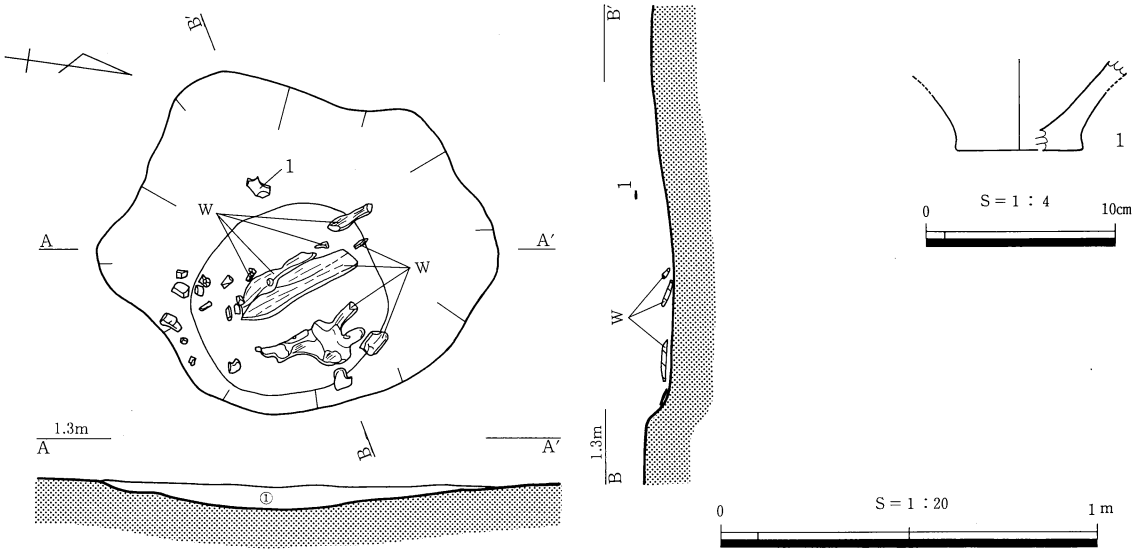
①暗灰褐色粘質土

第87図　ＳＫ252



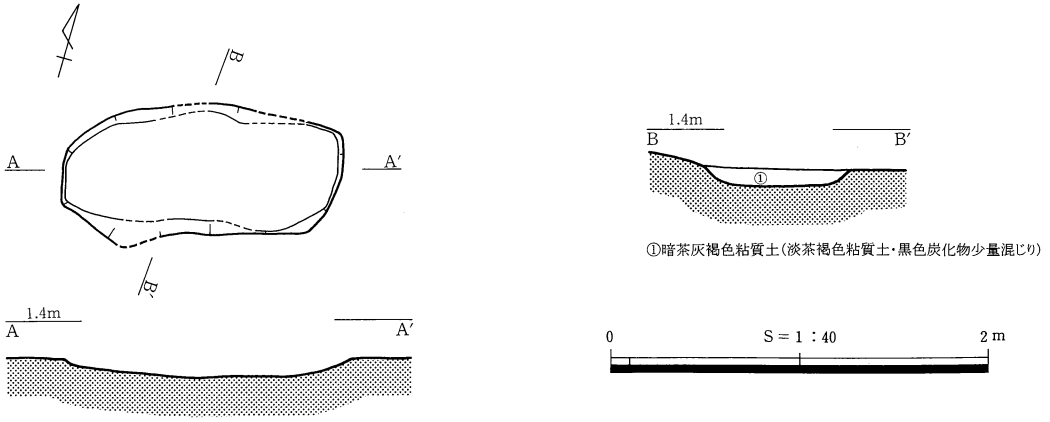
第88図　ＳＫ253





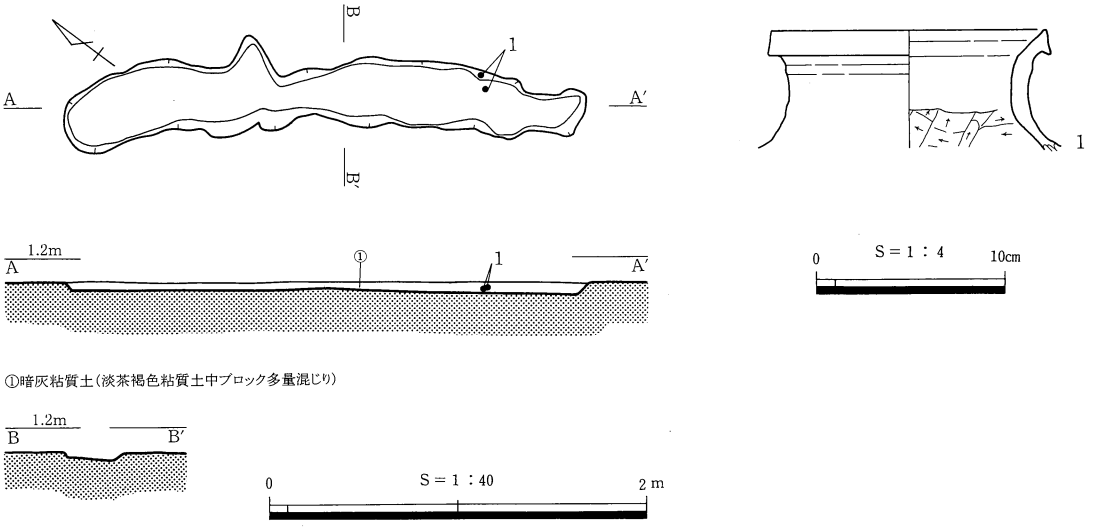
①暗茶灰褐色粘質土(炭化物混じり)

第89図　ＳＫ254及び出土遺物



①暗茶灰褐色粘質土(淡茶褐色粘質土・黒色炭化物少量混じり)

第90図　ＳＫ255



①暗灰粘質土(淡茶褐色粘質土中ブロック多量混じり)

第91図　ＳＫ256及び出土遺物

ＳＫ254（第89図）

国道１区Ｃ15グリッドＮＥ区からＳＥ区にかけて位置する。長径1.06m、短径86cmを測る土坑である。検出面は不整な円形状を呈し、底面はほぼ円形を呈す。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは7.5cmを測る。埋土は１層で炭化物混じりの暗茶灰褐色粘質土である。底面直上からは炭化した加工木材や自然木が検出され、火焚き場的な様相である。埋土中から、底部片（１）が出土している。（１）は平底で、風化のため内外面とも調整不明である。

ＳＫ255（第90図）

国道２区Ａ17グリッドＮＥ区に位置する。長軸1.43m、短軸71cmを測る土坑である。検出面、底面ともに隅丸長方形状を呈する。底面は平坦で、検出面からの深さは19cm、断面形は皿状を呈す。埋土は暗茶灰褐色粘質土の１層で、炭化物が少量混ざる。遺物は出土していない。

ＳＫ256（第91図）

国道２区Ｂ19グリッドＮＷ区からＣ19グリッドＳＷ区にかけて位置する。長軸2.76m、短軸32cmを測る土坑である。検出面、底面ともに不整ながら、直線状に延びる溝状を呈する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは７cmを測る。埋土は１層で、暗灰色粘質土である。埋土中から壺（１）、土玉２点（２、３）が出土した。（１）は、若干内傾する口縁部で、端面下端が下垂する。凹線等は巡らない。胴部内面は肩部以下ケズリ調整である。

第２節　溝

ＳＤ29～32（第92図）

ＳＤ32は３区Ｂ26グリッド南側に位置する。東西方向に約５ｍの長さで延び、幅約1.2m、深さ20cm前後の、木器溜りを伴う不整形な溝状遺構である。北東側でＳＤ15、18と接している。南西側は非常に浅くなるため、遺構の続きを検出することができなかった。検出面の標高は北側で0.3～0.35m、南側で0.25m前後である。底面形も不整形で、所々に浅い澱み状の落ち込みがみられる。

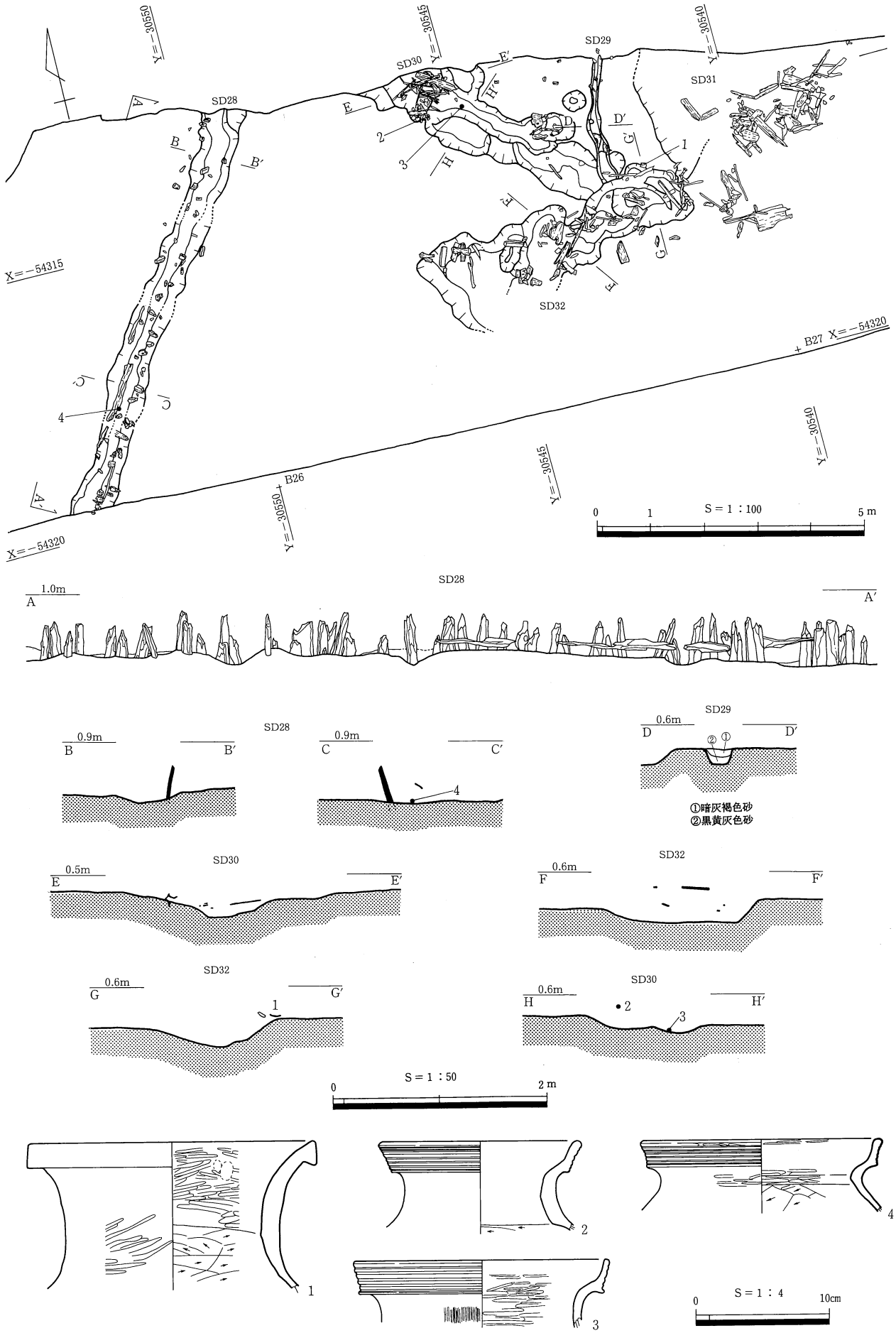
ＳＤ31はＳＤ32の北東側に位置する木器溜りを伴う落ち込みである。東側へと緩やかに傾斜する落ち込みの上端ラインは南北に2.5mほど延びるが、北側は調査区外へと続いており、東側・南側では立ち上がりを検出できなかったため、遺構の全体像は不明である。落ち込みの深さは検出面より10cm前後である。

ＳＤ29、30はＳＤ32の北岸に接している。両者とも北側は調査区外へと続くため全体像は不明だが、ＳＤ30は南東から北西方向、ＳＤ29はほぼ南北方向に直線的に延びている。ＳＤ29は南端でＳＤ30の東肩を一部切る。検出した範囲内での各規模は、ＳＤ30が長さ4.3m、検出面の幅約１ｍ、底面幅20cm前後、深さ15cm前後、ＳＤ29が長さ2.3m、検出面の幅約30cm、底面幅15cm前後、深さ15cm前後を測る。ＳＤ15、18とも、断面形は基本的に逆台形状を呈する。ＳＤ29の底面は平坦であるが、ＳＤ30の底面は北西側にやや傾斜する。またＳＤ30は所々にテラス状の浅い段が付随し、深さを増した北西側には木器溜も形成されている。

ＳＤ30～32の埋土は暗灰茶褐色系の砂混じり粘質土、ＳＤ29の埋土は黒灰褐色系の砂質土で、土層断面からＳＤ29がＳＤ30を切っていることが確認できた。木器溜はＳＤ31、32の検出面付近、ＳＤ30の北側で検出された。ＳＤ32では溝全体に角材、板材などが散乱した状態を確認している。一方、ＳＤ31は比較的大型の板材、角材などが２m四方ほどの範囲に集中している。ＳＤ30の壁面沿いからは、赤色塗彩された木製高坏が出土している。

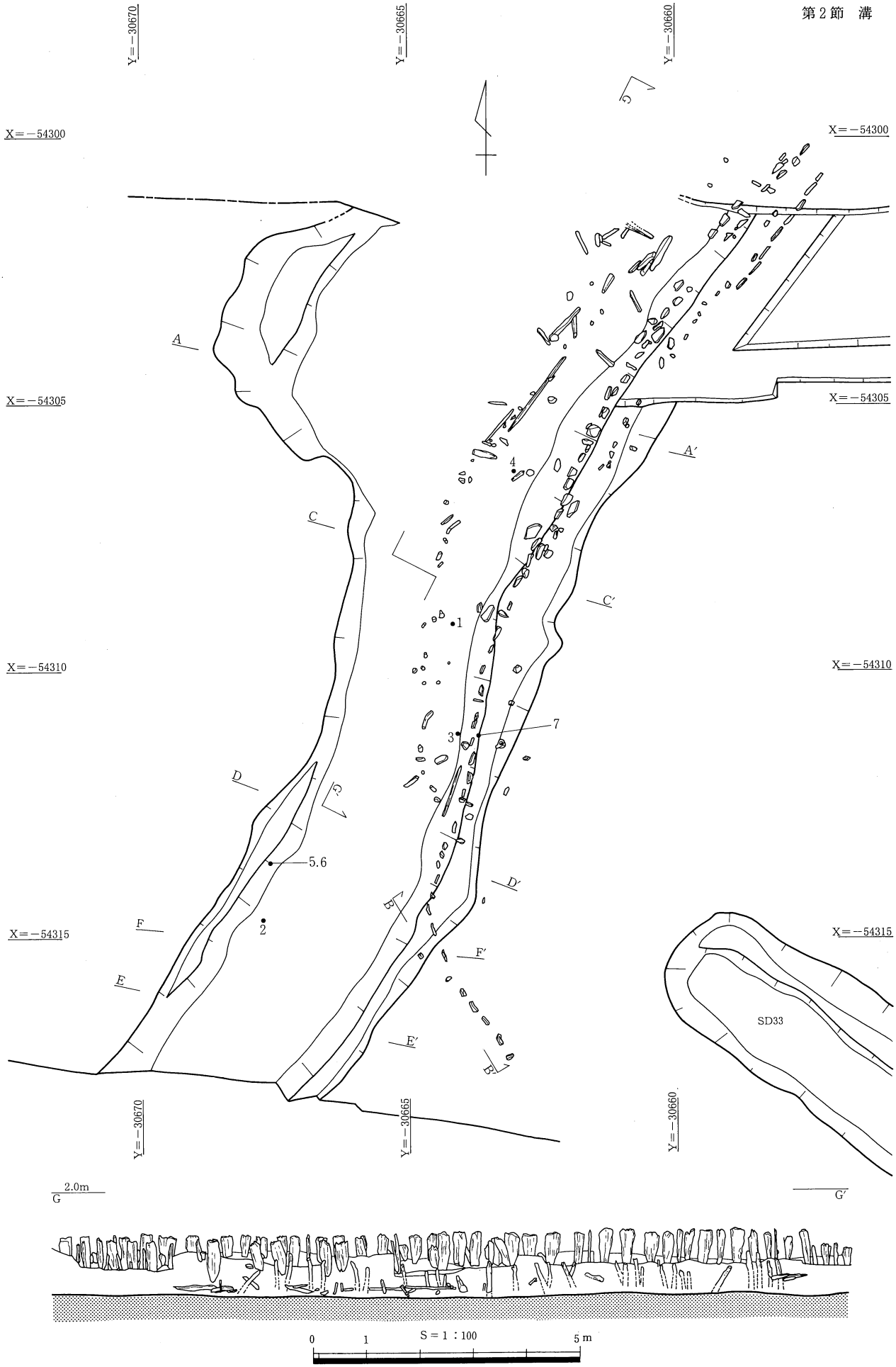
ＳＤ32に伴う土器は、溝の北東側の肩から出土した壺（１）が挙げられる。口縁は肥厚し直立する。全体に器壁は厚く、外面は口縁部から頸部上半分にかけてナデ、頸部下半にヘラミガキ、内面は口縁から頸部上半分にかけてヘラミガキ、頸部下半部以下はケズリが施される。

ＳＤ30に伴う遺物は、北側の検出面付近より出土した壺（２）、北側の底面直上から出土した壺（３）が挙げられる。（２）は外反、（３）は外傾する複合口縁で、いずれも口縁外面には多条の擬凹線が巡り、若干のナデ消



第92図　ＳＤ28～32及び出土遺物

第93図　ＳＤ11木器溜検出状況



第94図　ＳＤ11矢板列検出状況

しが施される。（２）は頸部内外面ヨコナデ、肩部にヘラケズリが見られる。（３）は頸部外面にハケメ、口縁部から頸部の内面にはヘラミガキがみられる。

ＳＤ28（第92図、図版17）

３区Ｂ25グリッドＳＥ区～Ｂ26グリッドＮＷ区にかけて位置する。北側、南側とも調査区外へと続いているため全体像は明らかでないが、北東から南西方向に直線的に延びる溝状遺構である。検出した範囲内での規模は、長さ15.5m、幅約1.5m、深さは30cmを測る。西側には後続する時期のＳＤ36、37が平行し、西側の肩はＳＤ37によって切られる。約５ｍ東にはＳＤ29～32の溝状遺構群が位置している。

溝の底面及び壁面には10～30cmほどの間隔で杭が打ち込まれ、溝に平行する杭列をなす。溝の南西側では、杭に支えられる横板も見られる。溝の検出面の標高は北側で0.4m、南側で0.3m、杭の頂点の標高は0.7m前後、横板は杭の頂点より20cmほど低位に設置されている。杭列には５～８cm前後の角材と一部に転用材である板が使用されており、比較的整然とした列をなす。本来的には杭列全体に横板が付随するものと思われ、溝の護岸施設と考える。

遺物は溝の南西側の底面直上より甕（４）が出土している。外反する複合口縁の外面にはややナデ消し気味の擬凹線が巡り、口縁端部はまるく収められる。頸部外面及び口縁部から頸部の内面にはヘラミガキが施され、肩部内面にはヘラケズリがみられる。

ＳＤ11（第93～95図、図版18～23）

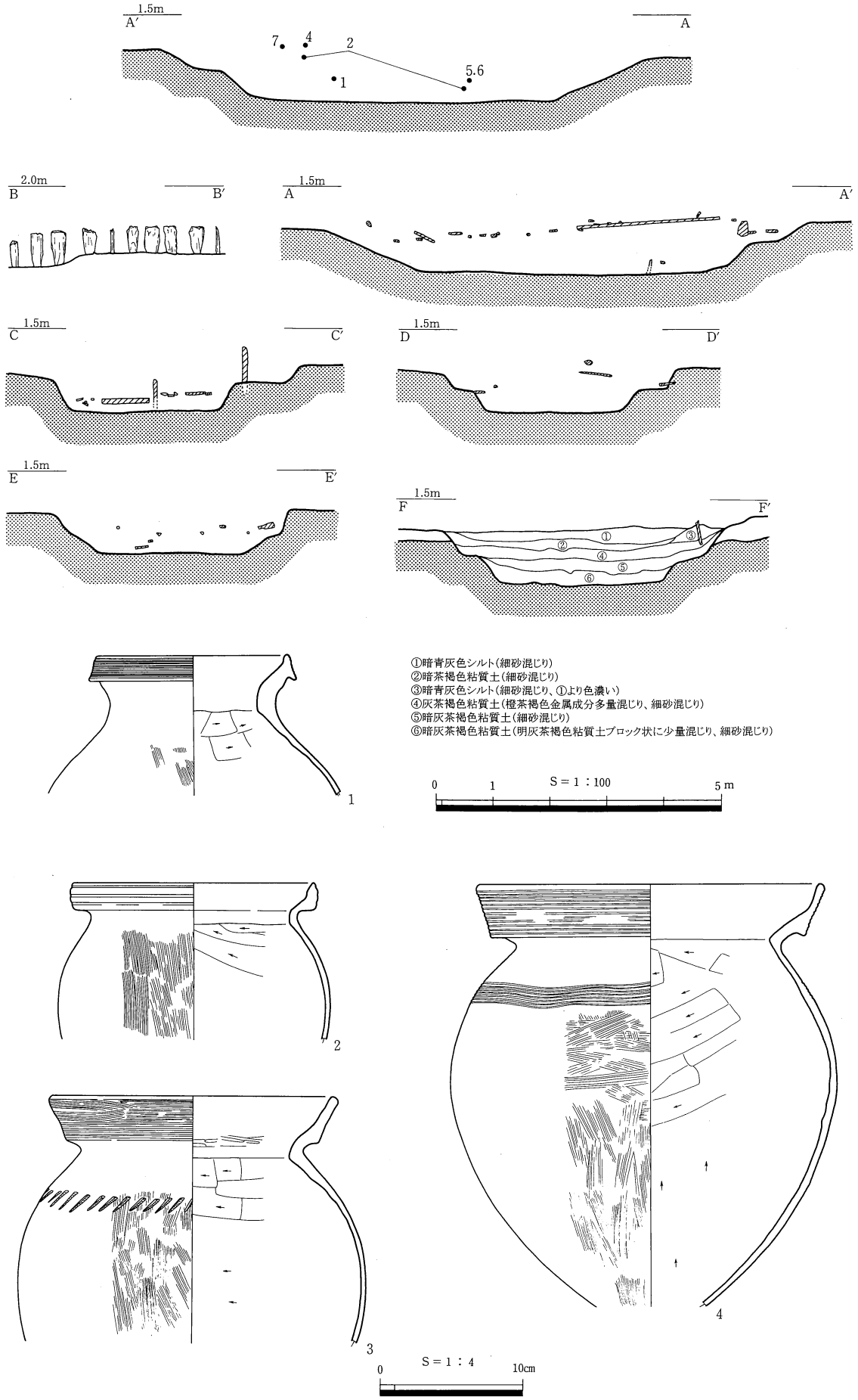
１区Ｂ14、Ｃ14、15グリッドにかけて位置する溝状遺構である。１区の中央付近を横断するかたちで北北東から南南西に延びる。溝の南東側の、東岸から約４ｍ離れた地点には、ＳＤ11の直交方向に延びる同時期の溝ＳＤ33の西端が位置している。ＳＤ11の規模は、検出した範囲内で長さ18.5m、検出面の幅は南側で3.8m前後、北側では最大幅8.5mを測る。底面幅は南側で2.4m前後、北側で５ｍ前後である。検出面の標高は北側で0.7～0.9m、南側で0.8m前後、底面の標高は北側で0.05～0.1m、南側で－0.03～0.05mである。わずかに南側の底面が低いことから、北から南へ向かう非常に緩やかな流れが想定される。

溝は南側ではほぼ一定の幅を保つが、北側では蛇行し幅が広がる。断面は逆台形状を呈し、東岸と西岸の一部は、壁面をＬ字状に掘削し、テラス状の段が形成される。東岸より4.5m内側の溝の底面には、東岸にほぼ平行する杭列が位置する。この杭列はＣ14グリッドＳＷ区とＳＥ区の境界付近からカーブし、東岸にぶつかり終息する。杭は径５cm程度の自然木、４cm角の角材などが用いられており、間隔はまばらである。

東岸のテラスの平坦面は30～80cmの幅をもち、平坦面の西端に矢板を打ち込んだ護岸施設が作られる。矢板には長さ50～80cm前後、幅30cm前後、厚さ３～４cmのスギ製板材が用いられる。板の片側をＶ字状に削り、矢羽根状の形態に加工したものである。矢板は東岸14mにわたって設置されるが、Ｂ14グリッド中央付近でカーブを描きつつ南東に方向を変え、溝のラインから遠ざかり、3.5mほど延びて終息する。基本的に矢板は壁面に板の平坦な面が沿うかたちで打たれているが、４、５枚に１枚程度、溝の壁面に矢板の平坦面が直交するかたちで打たれるものがある。北側では、50cmほど背後にもう一列、6.8mにわたる矢板列が見られ、その内北端から2.3ｍは比較的大形の矢板が密に打たれている。隣接する矢板と矢板の間には、５～10cm程度の隙間が開く。南東付近で矢板列が溝から離れる部分では、矢板の間隔が30cm近く開く。埋土は４層に分けられるが、基本的に灰茶褐色系の細砂混じり粘質土で、レンズ状堆積をみせる。矢板列は③層が堆積した段階で打たれたものである。

一方西岸は、南側に狭長な平坦面のテラス、北側の蛇行した部分に半月形の平坦面のテラスが存在するが、矢板は一枚も打たれていない。地形的にＳＤ11を境に東側が微高地となることから、矢板列は護岸としてのみでなく、この岸辺を境界とする区画の意味を持って打たれたものと推察する。ＳＤ11は50mほど北側に位置する県道調査区４区の溝状遺構ＳＤ11につながっていくものと想定される。

ＳＤ11の内部には、大型の建築部材や木製品、自然木からなる濃密な木器溜が形成されている。その方向は基本的に溝の流れと同一であるが、大型の建築部材などが溝のなかで縦横に重なる様も見受けられる。上層には板材、柱材などの比較的大型の木器が溜り、下層に近付くにつれ小型の木製品の出土が多くなる。また、南側より



第95図　ＳＤ11断面図、土層図及び出土遺物

も北側に大形の木器が顕著で、南側は角材、破材を中心とした溜が形成される。南側では、テラス上の矢板と壁面との間から盾が出土しており、その西側１ｍの地点では、板を加工し頭と胴、脚を表現した人形を検出した。北側では赤色塗彩された木製高坏を検出している。その他、木器溜りから出土した製品には、桶、杓子、木鎌、田舟、盾、斧柄、鋤、砧などが挙げられる。土器は埋土中から（１）～（４）を検出した。いずれもローリングを受けていない遺存状態の良好なもので、溝内部に廃棄されたものと考える。

（１）は壺で、口縁端部が上下に拡張され、端面が内傾する。細かい櫛描き平行沈線が巡る。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。（２）は甕で、口縁端面が凸面を呈し、３条の凹線が巡る。端面下端は下垂しない。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。（３）は甕で、外傾する口縁部を呈する。端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には櫛描き平行沈線が巡り、内面ミガキ調整で大半をナデ消している。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整で、肩部にヘラ状工具による連続刺突が巡る。内面はケズリ調整である。（４）は甕で、外傾する口縁部を呈する。端面上端は丸く収め、下端はやや下垂する。端面には多条の擬凹線が巡り、内面はナデ調整している。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整で、肩部にハケ状工具による平行沈線が巡る。内面はケズリ調整である。

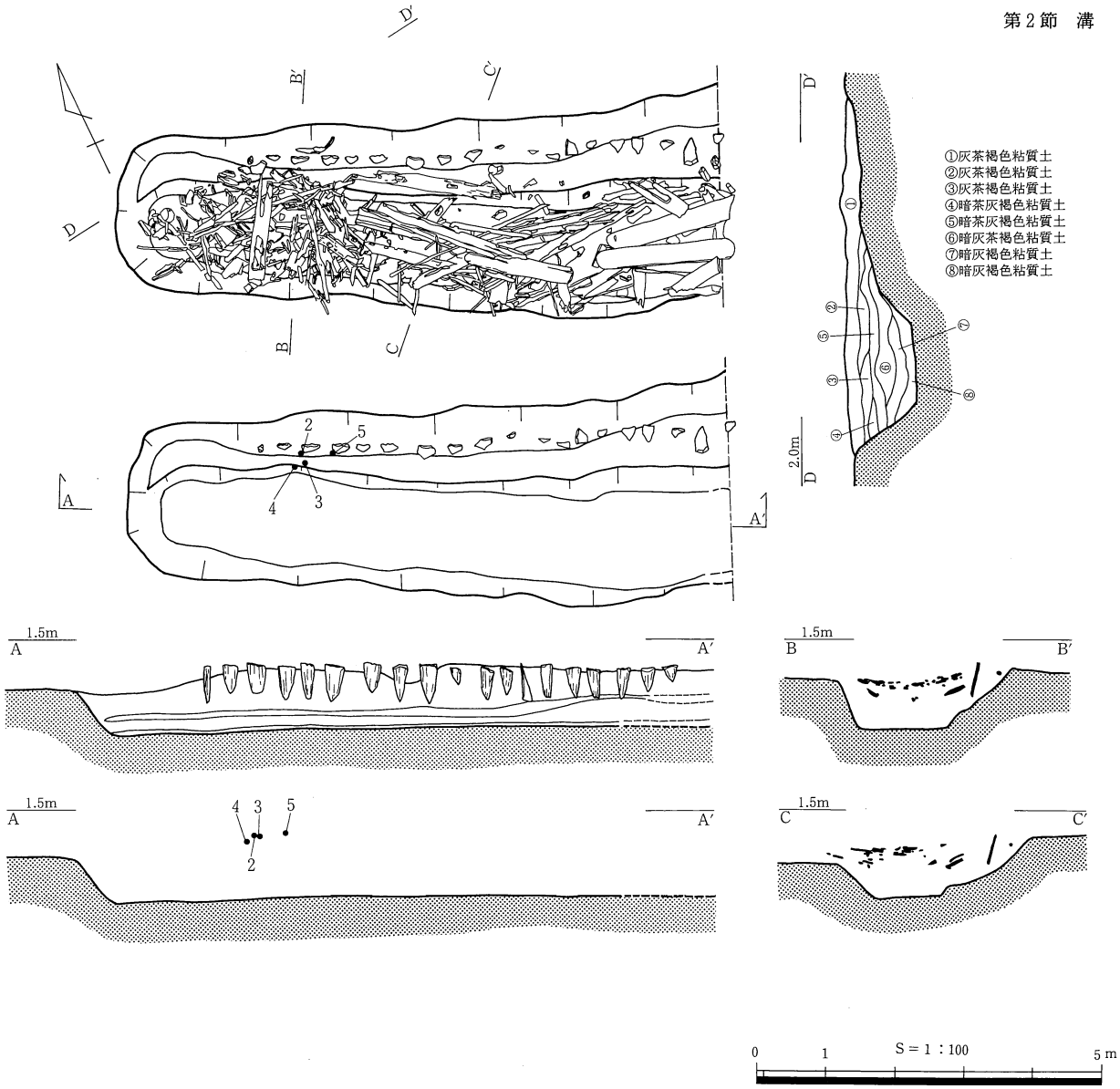
ＳＤ33（第96図・図版24、25）

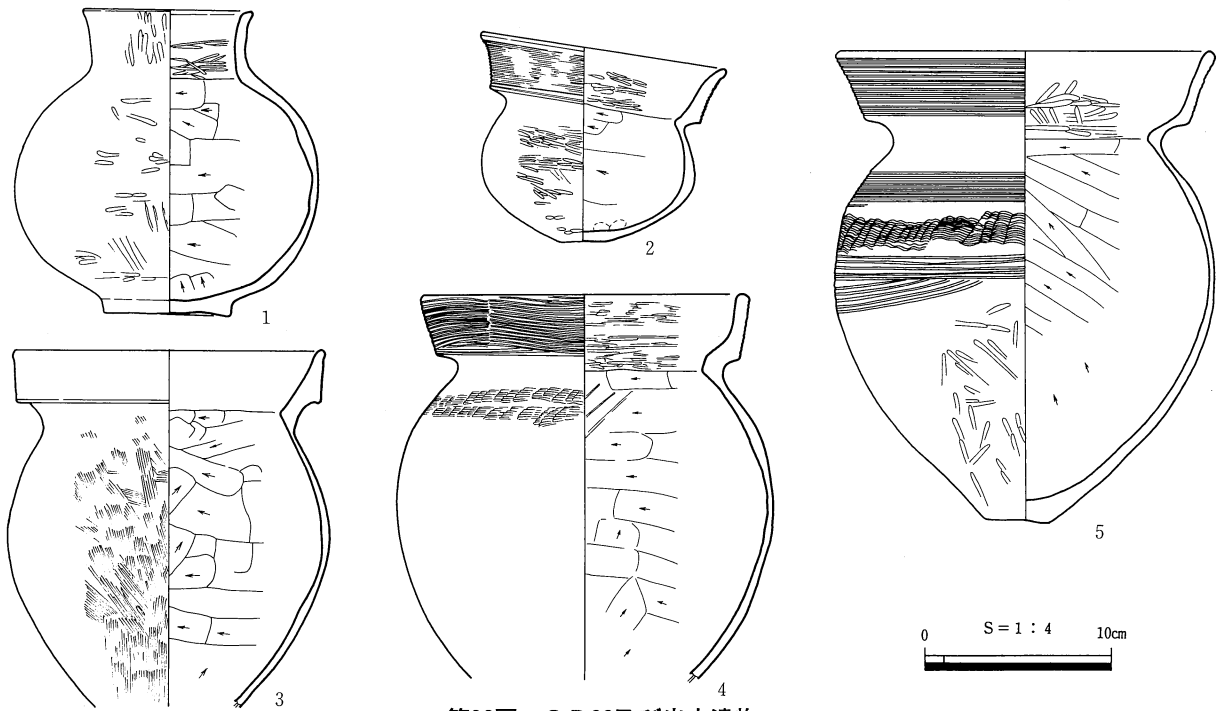
国道１区Ｂ15グリッドＳＷ区に位置する。ＳＤ11とは直交する位置関係にあるが合流はせず、4.2mの幅の陸橋状部分を挟んだ位置から南東方向に向かい、調査区外へ伸びる。ＳＤ11に伴う矢板列は、東岸に即して南北に伸びているが、陸橋状部分を過ぎると、ＳＤ33と並走する方向に向きを変え、そこで途切れている。検出長8.7m、最大幅2.9mを測る。北東岸の標高は1.1m、南西岸の標高は0.7mで、最深部の標高は0.2mを測る。よって溝の深さは50～90cmとなる。北東側に溝の方向に平行する向きで段状部分が細長く伸び、よって溝の断面は北東側で段になる逆台形状を呈する。段状部は、溝底面から20～25cmの高さにある。北東岸には、遺存長25～50cmの矢板19枚を段状部の壁面側に用いた護岸施設が付設され、長さ6.8mにわたって検出された。溝の完掘状態では矢板の先端が露出するので、矢板は当初から打ち込まれたものではなく、溝が埋没する過程で打設されたものであるといえる。土層断面からみて、下層の堆積層である⑥層から⑧層が上層と土質を変え、矢板のレベルともほぼ合致することから、矢板は⑤層堆積以降に打たれたものである可能性もある。なお、南西岸には矢板が打たれておらず、矢板はＳＤ11と同様な在り方をみせる。

溝の上層には、濃密な木器溜まり層が形成されている。標高0.6～１ｍの範囲にあたり、断面では中心がややくぼむ弧状の堆積をなしている。木製品の構成は、長さ１ｍを越える比較的大型の角材や板材などの建築材が主体を占め、容器類や農工具類はみられない。南東端では、両端を弧状に加工した長い板材が２枚出土している。概ね溝の軸に平行な方向で出土するが、西端ではむしろ溝に直交する方向で堆積している。

土器は、溝の北東岸の西寄りで集中的に出土し、木器溜に混入した状態で検出されている。出土した標高は0.5～1.2mの範囲で、木器溜の上部と下部で出土した破片同志が接合したものもある。溝の規模に比して出土した土器の量は多く、かつ完形近くまで遺存しており、しかも時期的にまとまる傾向にあり、溝への一括投棄が窺われる。これら土器の出土状況から勘案するに、木器溜も漂着したものではなく、岸辺から投棄されたものであると考えられる。

（１）は、口頸部がやや外傾気味に立ち上がる壺で、胴部は球形を呈し、底部は高台状の平底である。口頸部内外面はミガキ調整で、胴部外面はミガキ調整、内面はケズリ調整である。（２）は小型の甕で、歪みのために口縁端部のラインが傾いている。口縁部は外反し、端面上端は肥厚気味に丸く収め、下端は下垂しない。端面には櫛描き平行沈線が巡る。内面はミガキ調整で、端部はナデ消している。胴部は寸の詰まった球形を呈し、底部は小さな平底である。胴部外面はハケ調整後ミガキ調整を加え、内面はケズリ調整で底部に指押さえがみられる。（３）は口縁端面が直立する甕で、口縁部内外面ともヨコナデしている。胴部はあまり肩が張らず、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。（４）は外傾する口縁部の甕で、端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には櫛描き平行沈線が巡り、内面はミガキ調整する。胴部は肩が張らず、外面肩部にハケ状工具による押引き平行





第96図　ＳＤ33及び出土遺物

沈線が施されている。内面はケズリ調整である。（５）は外反する口縁部の甕で、端面上端は丸く収め、下端は下垂しない。端面には多条の擬凹線が巡り、内面はミガキ調整し、端部はヨコナデする。胴部はやや肩が張り、底部は小さめの平底である。外面ミガキ調整で、肩部にハケ状工具による押引き平行沈線とこれを挟んで上下に平行沈線が施されている。内面はケズリ調整である。

第4章　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構

第1節　土　　坑

ＳＫ257（第101図・図版27）

国道3区Ｂ17グリッドＮＥ区に位置する。長径1.14m、短径98cmを測る土坑である。検出面、底面ともにほぼ円形状を呈する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土は2層に分層でき、黒茶褐色粘質土を基本とするが、①層には炭化物を含んでいる。埋土中より甕（1）、鉄製の棒状製品（2）、鉄器片が出土している。（1）は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。内外面ともナデ調整である。

ＳＫ258（第102図・図版29）

国道2区Ａ19グリッドＮＥ区からＡ20グリッドＮＷ区にかけて位置する。長径96cm、短径73cmを測る土坑である。検出面、底面ともに北側と南側が外側に張り出す不整な楕円形状を呈する。底面は中心部に向かって傾斜する。断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは13cmを測る。埋土は黒灰褐色土の1層で、貝殻片を含んでいる。埋土下層から、加工木片や自然木片が東側にやや片寄った状態で出土している。また、埋土中より甕（1、2）が出土している。（1）は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。胴部外面にハケ調整、内面にはケズリ調整を施している。

ＳＫ259（第103図）

国道2区Ｂ18グリッドＳＥ区に位置する。長径57cm、短径46cmを測り、検出面、底面ともに不整な円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形状を呈し、検出面からの深さは13cmを測る。埋土中から甕（1）が出土した。（1）は、外反する口縁部の上端を欠損し、下端は横方向に突出している。口縁部内外面ともにミガキ調整で、頸部以下はケズリ調整後ミガキ調整を加えている。

ＳＫ260（第104図・図版30）

国道2区Ｂ21グリッドＮＷ区に位置する。長径1.2m、短径53cmを測る土坑である。検出面、底面ともに長楕円形を呈する。底面は概ね平坦で、検出面からの深さは最大22cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土中には10cm前後の礫が混入しており、南東側では25cm前後の角礫が2個、立位で検出された。ただし、底面からは浮いた状態である。遺物は、埋土中から甕（1）、ほぼ中央部の底面直上より中手足骨製で断面三角の骨鏃（2）、中央部やや北西側の底面直上で軽石加工品（3）が出土している。（1）は外反する口縁部で、端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面にはハケ状工具による波状文が施され、胴部内面はケズリ調整である。

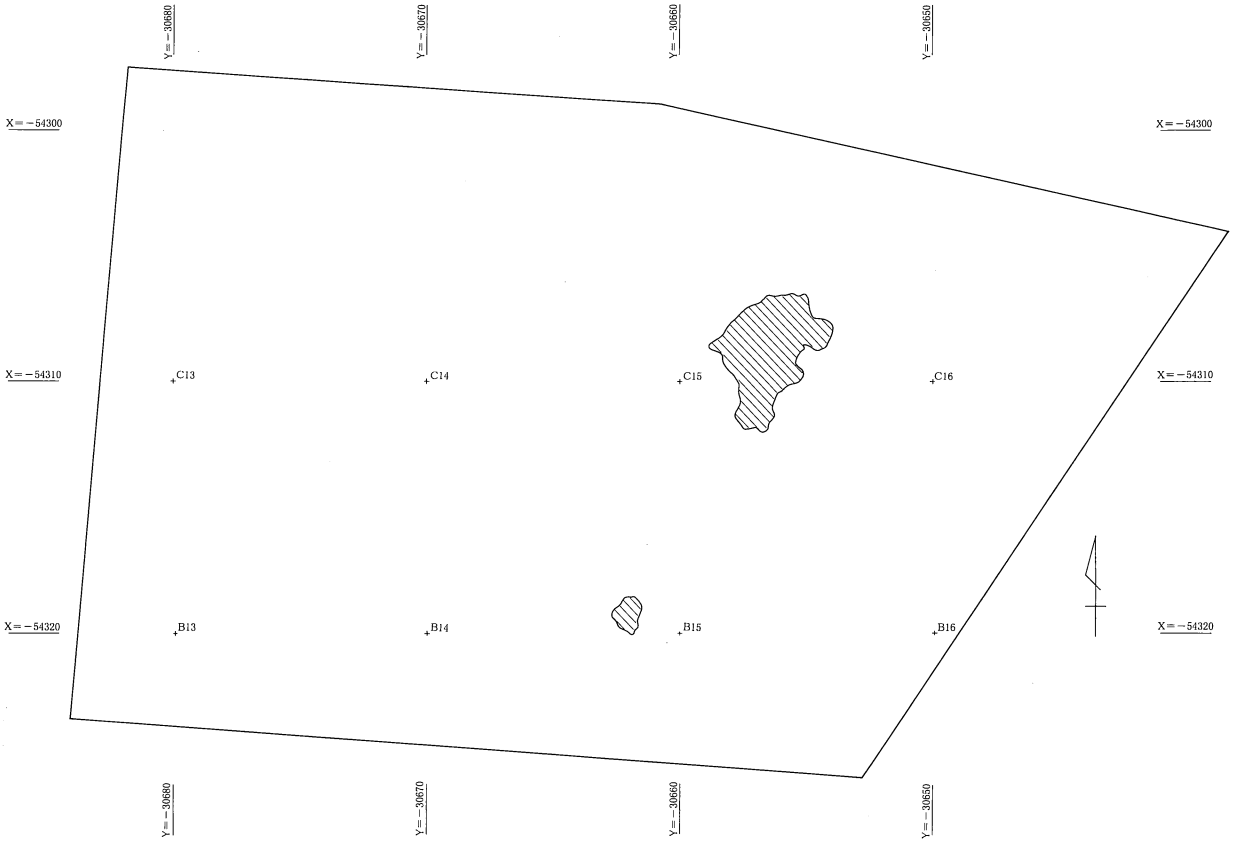
ＳＫ261（第105図）

国道2区Ｂ20グリッドＮＷ区の北西隅に位置する。長軸1.48m、短軸89cmを測る土坑である。北側の短辺は弧状を描き、それ以外の外形は直線的である。検出面、底面ともに隅丸長方形を呈する。底面は、北側でやや傾斜し、平坦面へと続く。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは21cmを測る。埋土は3層に分層できたが、灰褐色系の粘質土を基本とする。埋土中には、礫や木片が混入している。

埋土中からは、甕の口縁部片（1、2）、底部片（3）が出土している。（1）は、外反する口縁部で、端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出させている。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整後ハケ状工具による波状文が施され、胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ262（第106図・図版28）

国道2区Ｃ18グリッドＳＥ区から19グリッドＳＷ区にわたって位置する。遺構北側が排水溝で切られているが、ほぼ円形状を呈すると思われる。検出した範囲では径78.5cm、深さ4cmを測るが、土層断面から復元すると深

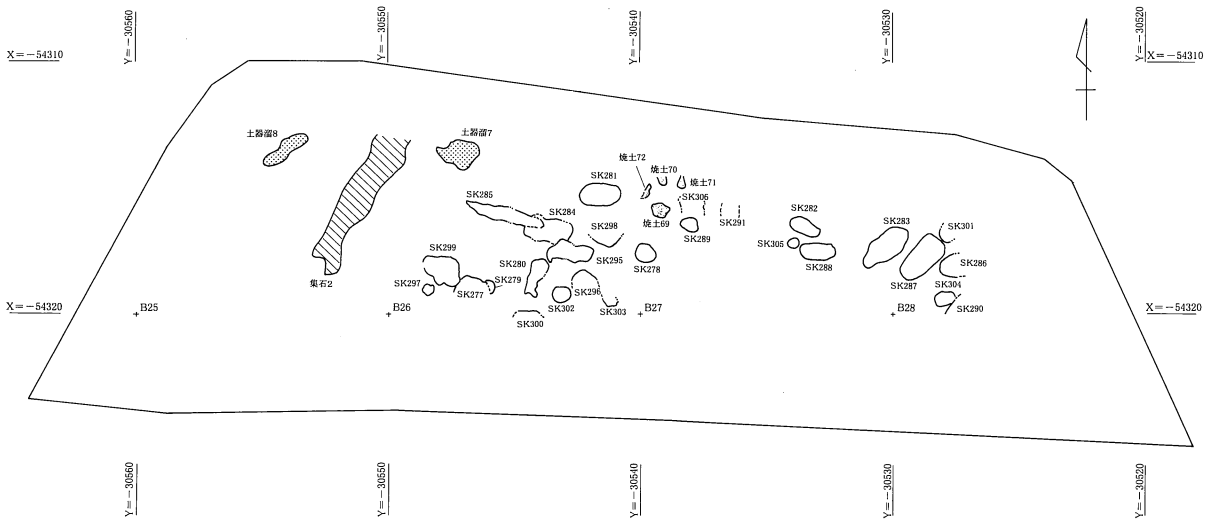


第97図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭１区遺構配置図

S＝1：300　0　10m

第98図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭３区遺構配置図①

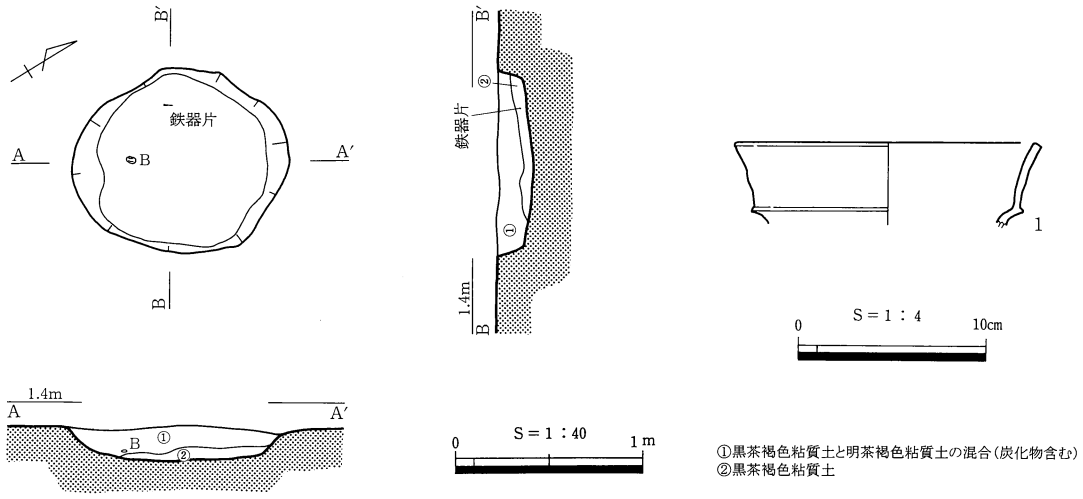
S＝1：300　0　10m



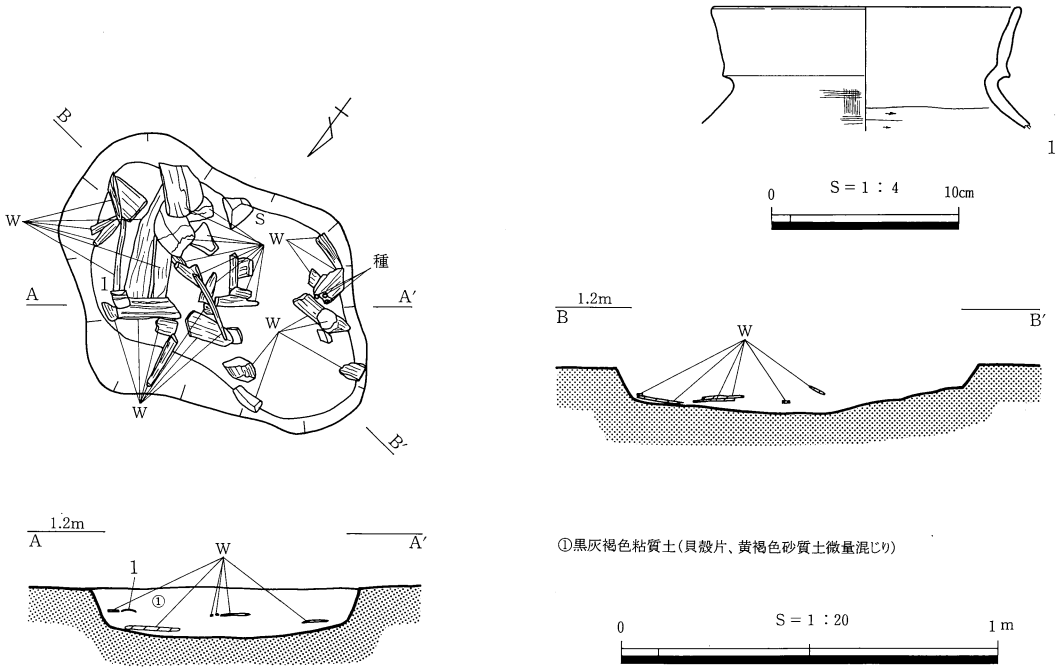
第99図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭３区遺構配置図②

S＝1：300　0　10m

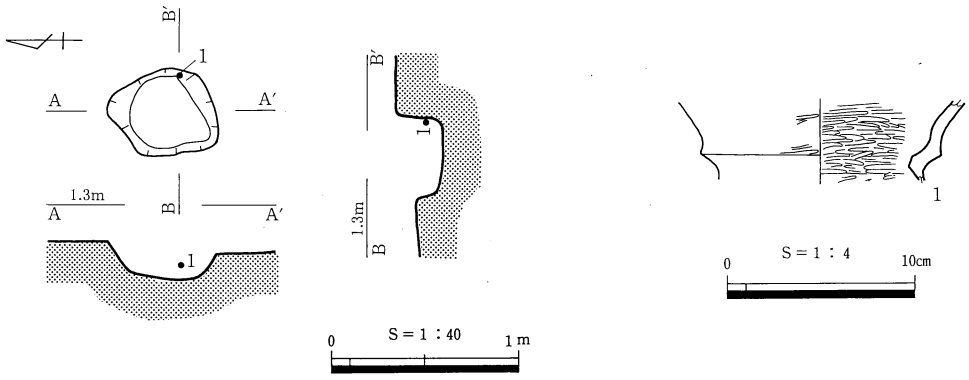
第100図　弥生時代後期末～古墳時代前期初頭２区遺構配置図



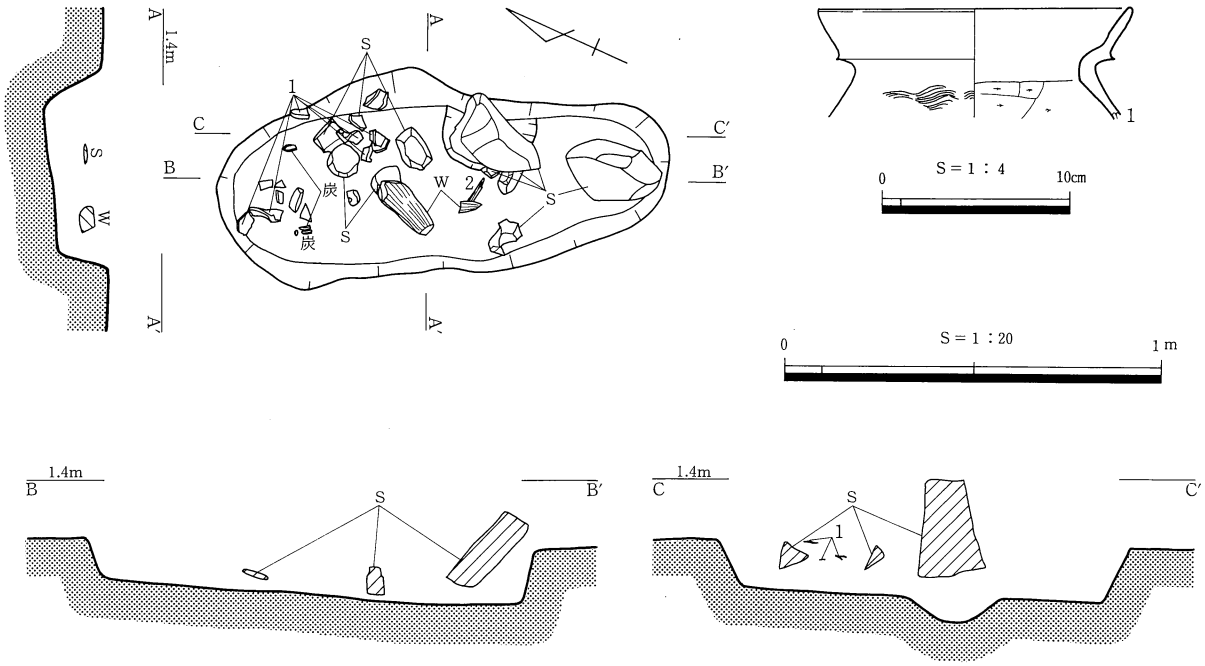
第101図　ＳＫ257及び出土遺物



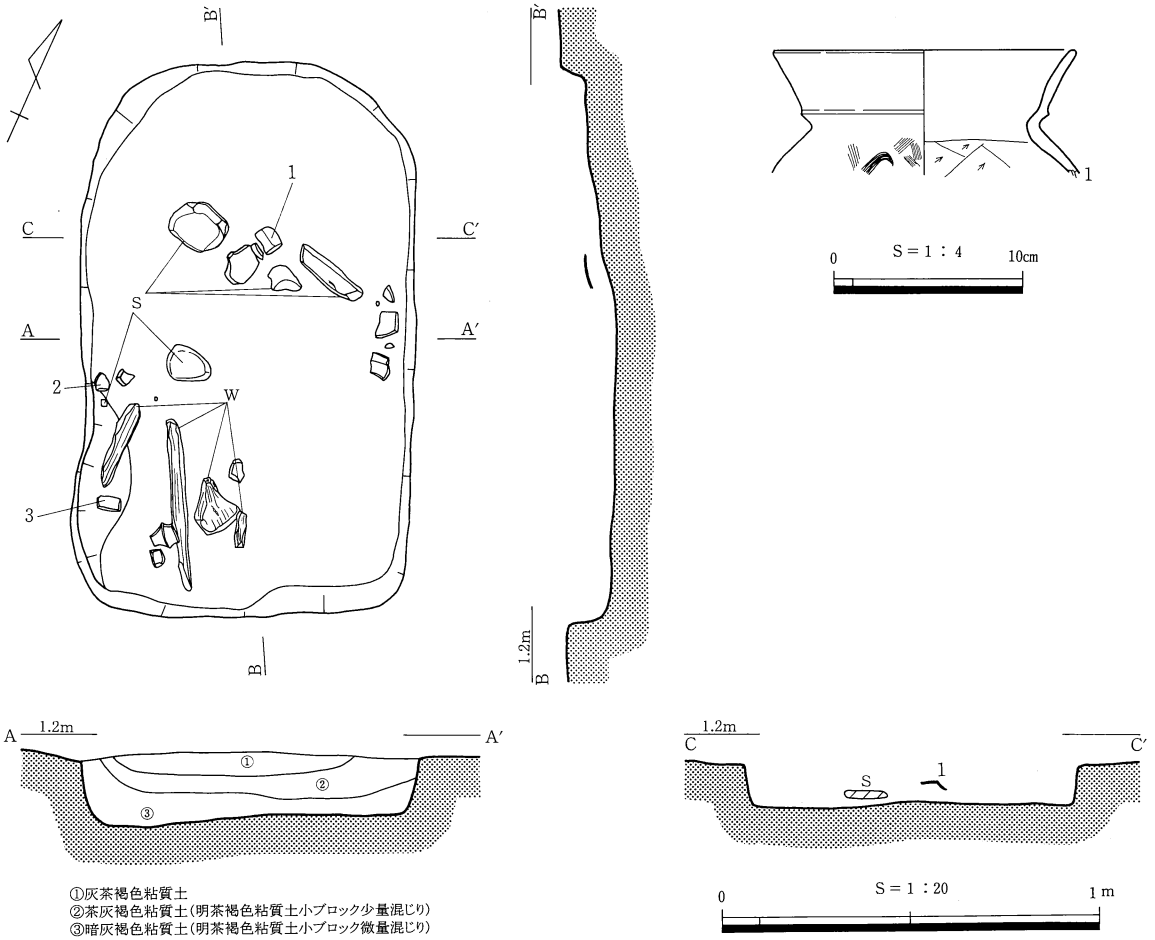
第102図　ＳＫ258及び出土遺物



第103図　ＳＫ259及び出土遺物



第104図　ＳＫ260及び出土遺物



第105図　ＳＫ261及び出土遺物

さ17.8cmとなる。底面は南西側がやや低くなる。埋土は４層からなり、炭化物を含む黒褐色系の粘質土を基本としている。遺物は南半部にやや集中し、主に①層中から出土している。出土レベルに幅があるが、相互に時期的な隔たりはない。甕（１、２）と高坏と思われる脚部（３）が出土している。（１）、（２）は、ともに外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端はやや斜め下方に突出する。（２）の方が小型である。ともに口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部内面はケズリ調整である。

ＳＫ263（第107図）

国道２区Ｂ18グリッドからＣ18グリッドにかけて位置する。長軸2.39m、短軸1.38m、深さは11cmを測る不整形の土坑である。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土が主体であり、加工木や礫の混入がみられる。遺物は全て底面から浮いており、遺構前面に散らばるような印象である。埋土中から甕（１）、小型の甕（２）、土玉３点（３～５）、軽石加工品（６）が検出された。（１）は、外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整である。胴部は、やや肩の張る形態で、外面ハケ調整にハケ状工具による平行沈線と波状文が施される。内面はケズリ調整である。

ＳＫ264（第108図・図版28）

国道２区Ｃ18グリッドＳＷ区に位置する。北東部でＳＫ200を切っている。長軸1.72m、短軸1.21mで検出面、底面ともに隅丸長方形状を呈する土坑である。底面は平坦で、断面逆台形状を呈し、検出面からの深さは19.2cmを測る。埋土は２層に分層でき、黒色粘質土が主体である。遺物は、土器片や獣骨が遺構内に拡散しており、全て底面から浮いた位置で出土している。埋土中から甕（１、２、３）、蓋のつまみ部（４）が出土している。

（１）～（３）は、いずれも外反する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整である。（１）は肩が下がる器形で、（２）はやや肩が張り、（３）は寸が詰まって最大径が胴部中位にくる器形となる。いずれも胴部外面ハケ調整後施文し、胴部内面はケズリ調整である。（１）はハケ状工具による平行沈線が巡り、（２）はハケ状工具による平行沈線と押し引き気味の連続刺突文が施される。（３）はハケ状工具による平行沈線と波状文が巡る。

ＳＫ265（第109図）

国道２区Ｂ17グリッドＳＥ区からＮＥ区に位置する不整形な土坑である。北西部はピットで切られている。検出した範囲では長軸90.5cm、短軸72.0cm、深さは６cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で、木片を含んでいる。埋土上層付近から甕の口縁部（１）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端はやや斜め下方に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部内面はケズリ調整である。

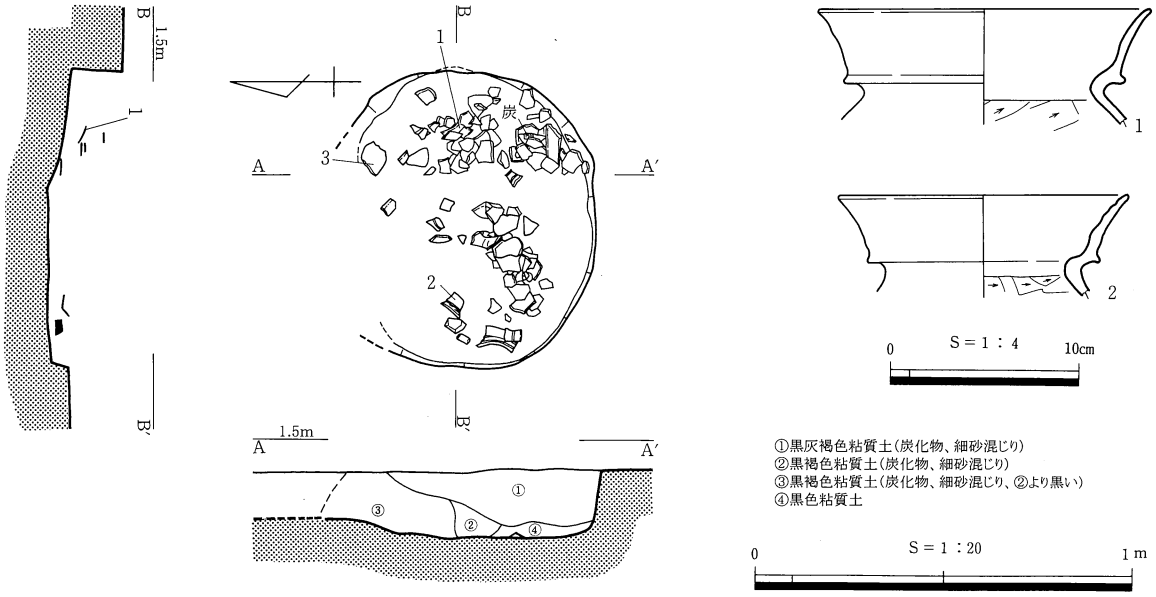
ＳＫ266（第110図・図版29）

国道２区Ａ21グリッドＮＷ区に位置する。長径1.15m、短径95.5cmを測る検出面、底面ともにほぼ円形状の土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは11.1cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は４層に分層できたが、黒灰褐色土を基本とし、下層は砂が卓越する。埋土中には礫、炭化材及び獣骨が混入しており、土器片が散らばった状態で検出された。遺物の出土レベルは底面近くから埋土上層まで幅がある。中央部の底面直上と東側の埋土下層からは甕（１、２）が出土している。

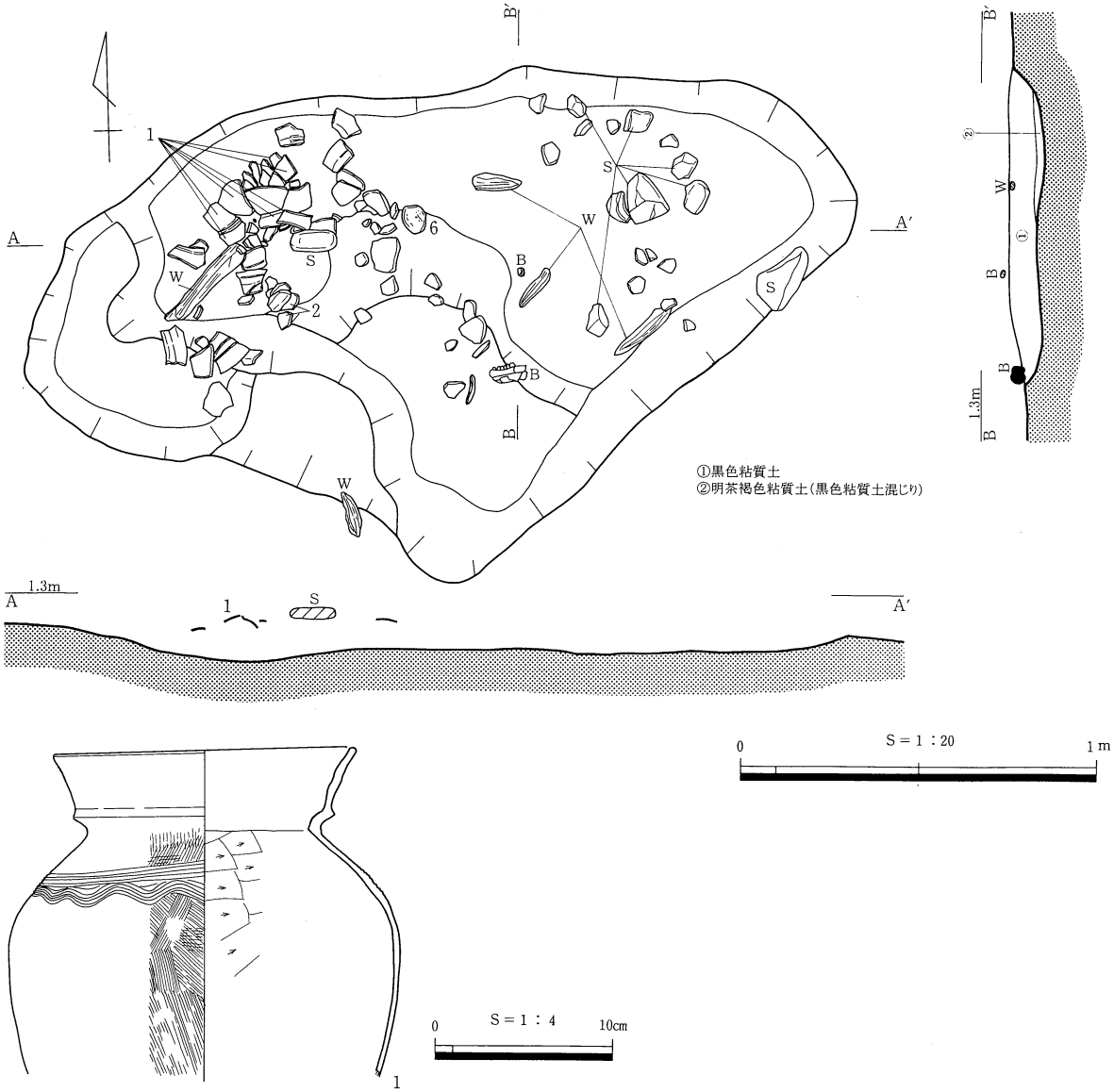
（１）、（２）は、ともに外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向に突出する。ともに口縁部内外面はヨコナデ調整で、胴部外面はハケ調整、胴部内面はケズリ調整である。（２）は、胴部外面にハケ状工具による波状文が１周以上巡る。

ＳＫ267（第111図）

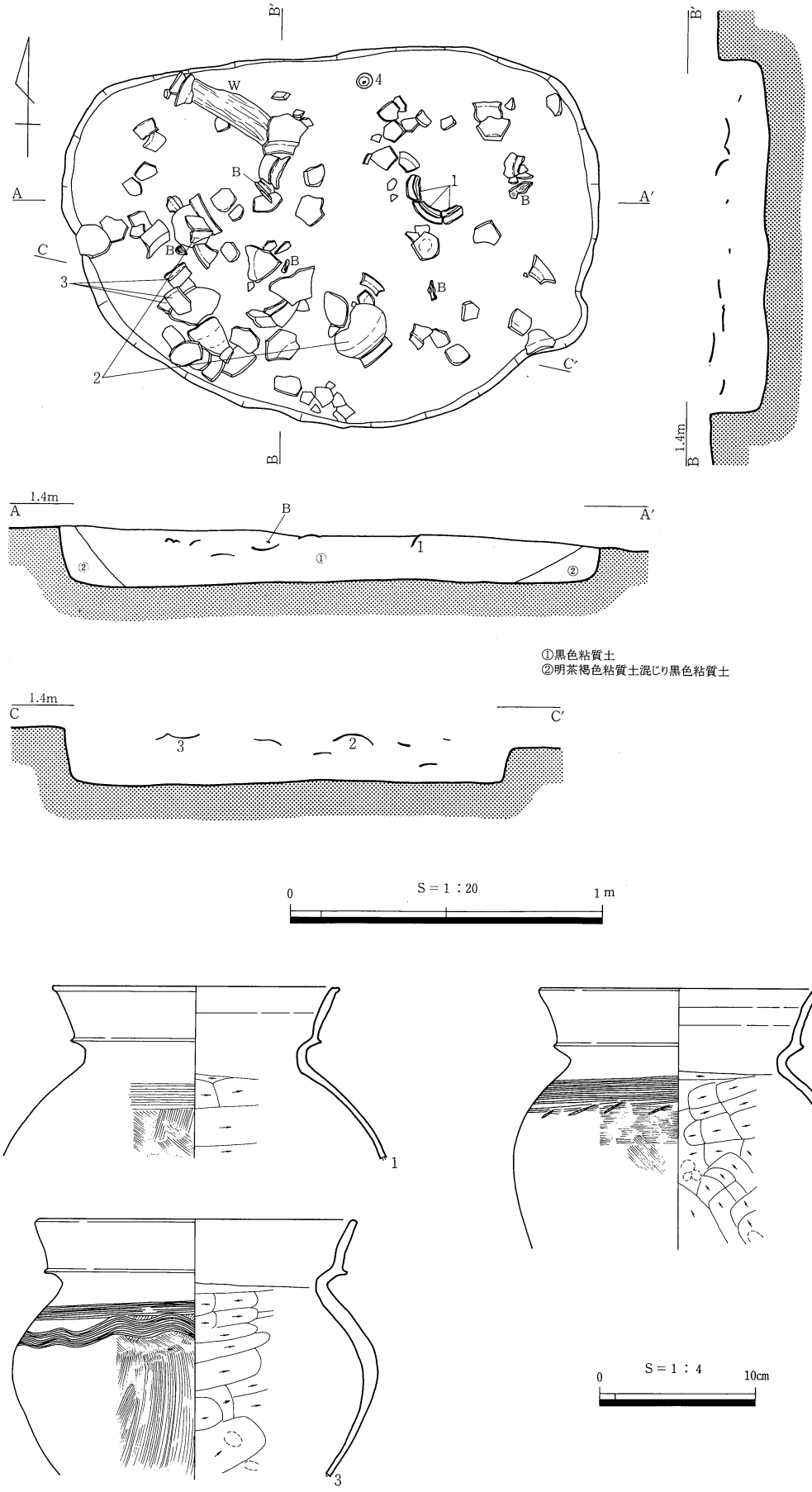
国道２区Ｂ21グリッドＳＷ区に位置する。遺構の西側がトレンチで切られているため全体の規模は不明であるが、長径92.8cm、短径75cm程度のほぼ円形状の土坑と思われる。検出面からの深さは10.5cmで、断面は北側に緩やかな立ち上がりとなる逆台形状を呈する。埋土は黒灰褐色粘質土を基本とし、断面中央部にはブロック状に貝混り層が堆積する。木片数点が底面近くで出土しており、①層と②層を区切るように横たわっているものもある。埋土中から器台（１）が出土しており、受け部内外面にミガキ調整を施し、脚台部内面をケズリ調整している。



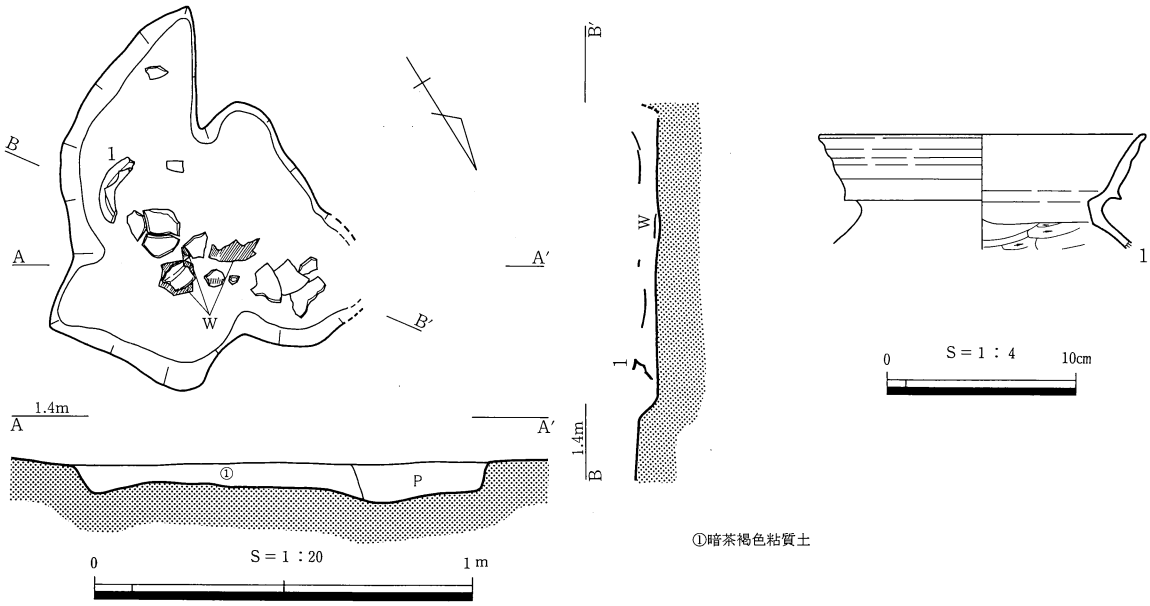
第106図　ＳＫ262及び出土遺物



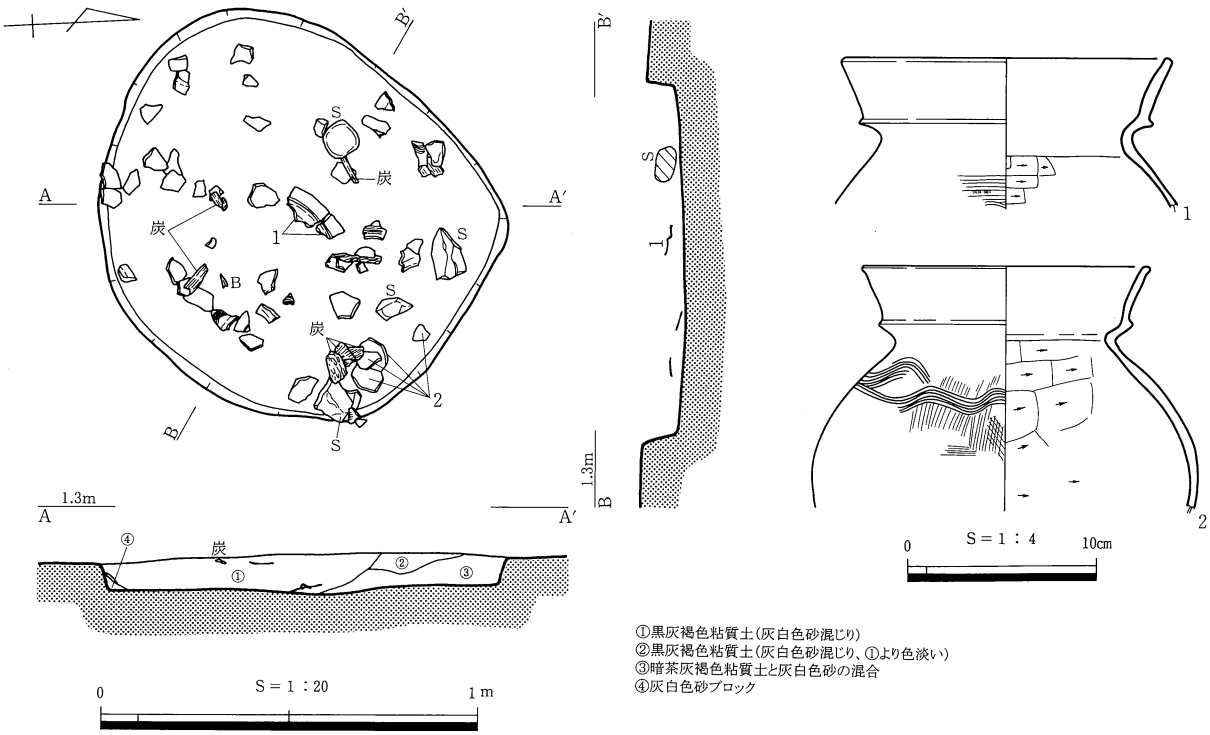
第107図　ＳＫ263及び出土遺物



第108図　ＳＫ264及び出土遺物



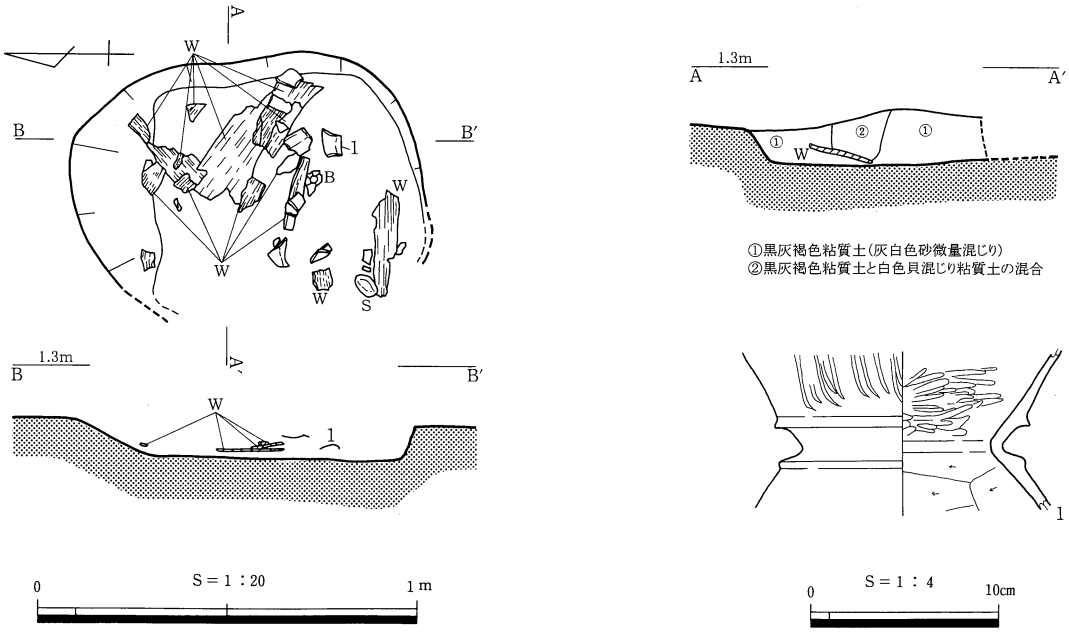
第109図　ＳＫ265及び出土遺物



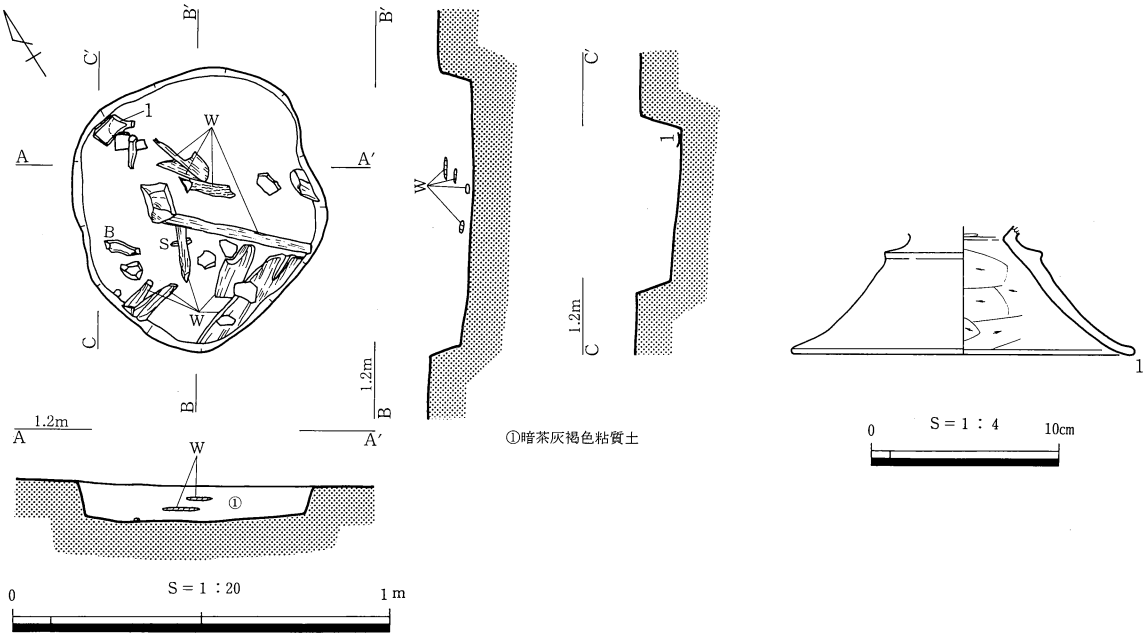
第110図　ＳＫ266及び出土遺物

ＳＫ268（第112図・図版29）

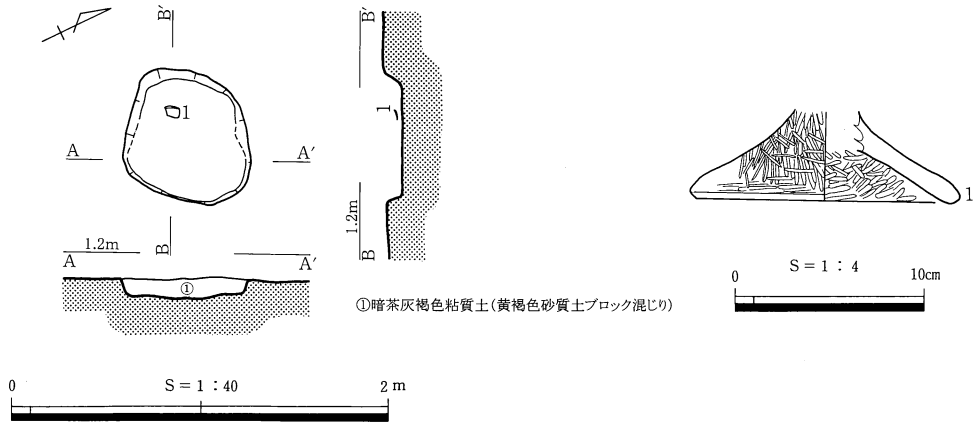
国道２区Ａ20グリッドＮＷ区に位置する。長径70.0cm、短径67.2cmを測り、検出面、底面ともにほぼ円形を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは11.8cmを測り、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色土の単層で、木片や獣骨が混入している。遺物は、北側隅の底面直上から器台脚部（１）が出土している。（１）は、筒部内面をミガキ調整し、脚部内面をケズリ調整している。筒部のあまり縮まらない形態である。



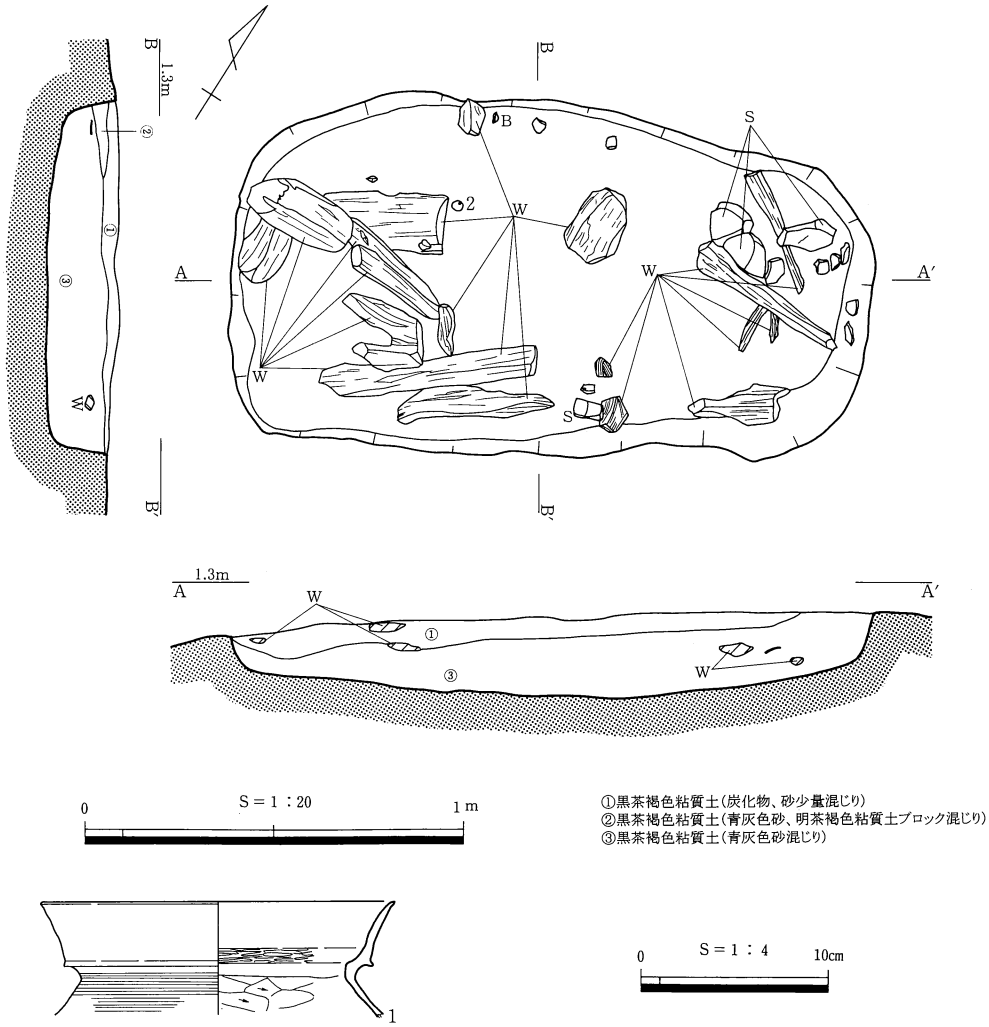
第111図　ＳＫ267及び出土遺物



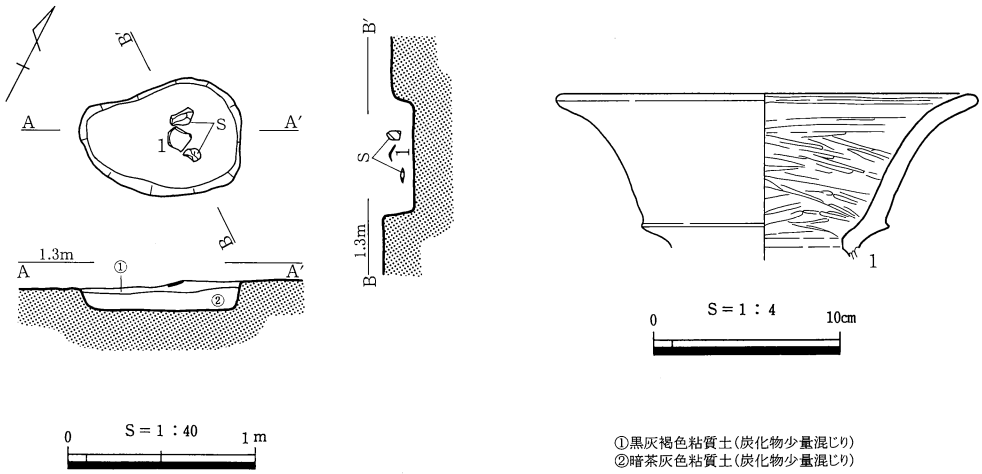
第112図　ＳＫ268及び出土遺物



第113図　ＳＫ269及び出土遺物



第114図　ＳＫ270及び出土遺物



第115図　ＳＫ271及び出土遺物

ＳＫ269（第113図）

国道２区Ａ20グリッドＮＷ区に位置する。長軸79.5cm、短軸69.5cmを測り、検出面、底面とも不整方形状の土坑である。検出面からの深さは10.5cmで、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶灰褐色粘質土の単層である。遺物は、東側の底面から３cm程浮いた位置で器台あるいは高坏の脚部（１）が出土している。内外面ともに密にミガキ調整している。

ＳＫ270（第114図・図版30）

国道２区Ｃ20グリッドＳＥ区に位置する。長軸1.71m、短軸93.5cmを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形状を呈する土坑である。検出面からの深さは22.5cmで断面逆台形状を呈する。埋土は黒茶褐色粘質土が３層に細分され、①層には炭化物が少量混じる。埋土中には、加工木片や自然木片、自然礫が混入している。遺物は、埋土中から甕（１）、土玉（２）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、端面上端を細く収め、下端は斜め下方に突出する。口縁部内面はヨコナデされるが、一部にミガキ調整が残る。胴部外面にはハケ状工具による平行沈線が巡り、内面はケズリ調整である。

ＳＫ271（第115図）

国道２区Ｂ20グリッドＮＥ区に位置する。長径85.5cm、短径59.5cmを測り、検出面、底面とも不整な楕円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは15.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は２層で、いずれにも炭化物が少量混じる。遺物は、遺構中央部の埋土上面から器台受部（１）が出土している。受部内面はミガキ調整で、筒部内面をケズリ調整している。

ＳＫ272（第116図・図版31）

国道２区Ａ21グリッドＮＥ区に位置する。南東側は排水溝で切られており、検出面、底面ともに不整な形状を呈する。検出した範囲では、長軸1.25m以上、短軸65.5cm、検出面からの深さは19.5cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面逆台形を呈する。埋土は３層に分層でき、黒色系の粘質土を基本とする。埋土中には木片が混入している。南側の埋土上層より壺の胴部（１）、東側隅の埋土上層より甕の口縁部（２）、骨鏃（３）が出土している。また、中央部やや東側の底面直上からは２ヶ所で炭化米が検出された。

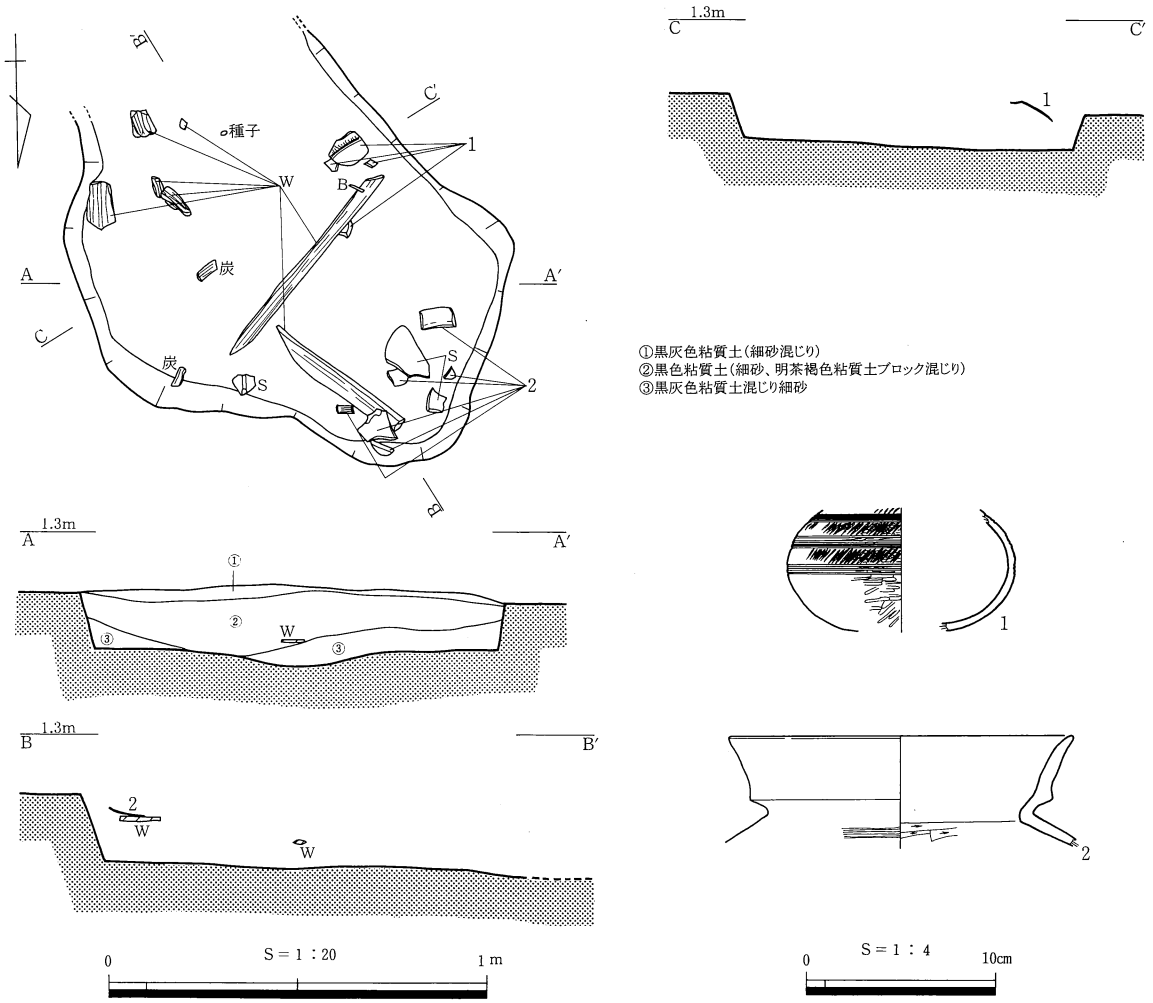
（１）は、寸の詰まった球形の胴部を持つ壺で、外面を平滑になるまでミガキ調整しており、２段の貝殻腹縁による連続刺突文を、３、４条の沈線３ヶ所で仕切っている。（２）は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向にやや突出させる。口縁部内外面はヨコナデされる。胴部外面はハケ調整され、内面はケズリ調整である。

ＳＫ273（第117図）

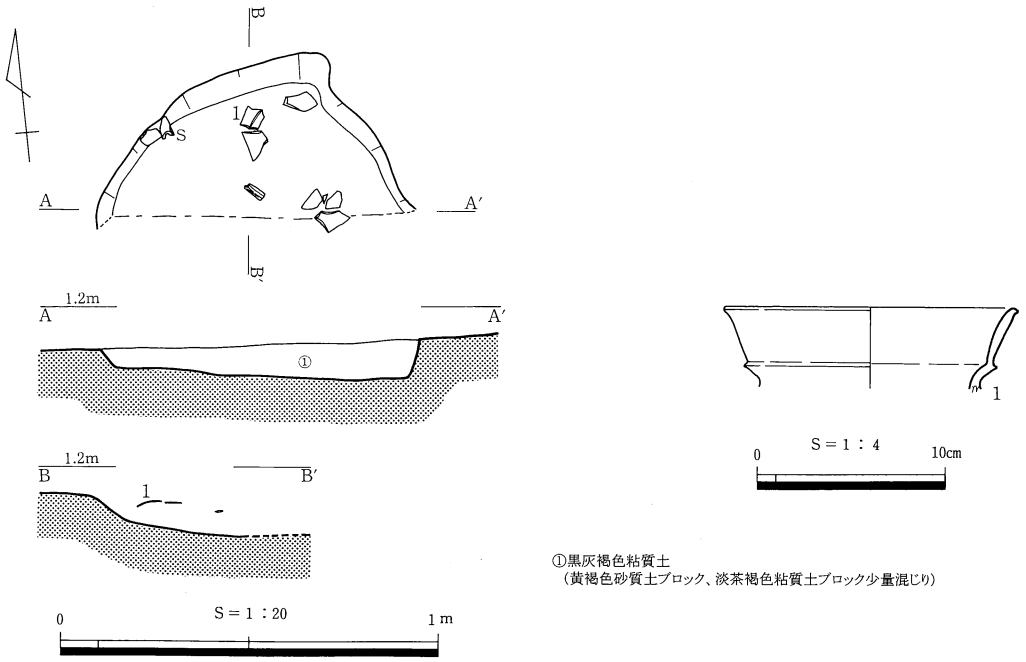
国道２区Ｂ20グリッドＮＷ区に位置する。南側をトレンチに切られ、全体の形状は確認できなかったが、円形を志向する形状と思われる。検出した範囲では最大幅83.5cm、検出面からの深さ11.5cmを測る。底面は東側方向にやや傾斜するが平坦である。断面はほぼ逆台形状を呈し、埋土は黒灰褐色土の単層である。土器片は全体に底面から浮いて出土しており、北側の埋土上層からは甕（１）が出土している。（１）は、外傾する口縁部で、端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させる。口縁部内外面は、ヨコナデされている。

ＳＫ274（第118図・図版31）

国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。南側には同時期のＳＫ275が近接する。東側はトレンチによって切られ、全体の形状は確認できなかった。検出した範囲では、長軸1.61m、深さは最大で19.5cmを測り、西側に張り出し部分のある不整形な土坑である。埋土は、暗灰褐色粘質土が僅かな混入物の差異によって３層に分層され、埋土中位から下層にかけて加工木片、自然木片がまとまって検出された。遺物は、南西隅で埋土下層中から器台受部（１）の破片が拡散し検出されたほか、埋土中中程からは低脚坏の脚台（２）が出土している。（１）は内外面ミガキ調整、（２）は内面をミガキ調整する。



第116図　ＳＫ272及び出土遺物



第117図　ＳＫ273及び出土遺物

ＳＫ275（第119図・図版32）

国道２区Ｂ18グリッドＳＷ区に位置する。長軸1.12m、短軸70.5cmを測る検出面、底面ともやや不整な隅丸方形状を呈する土坑である。北側には同時期とみなされるＳＫ274が近接する。底面はテラス状の平坦面を経た後、中央付近でピット状に落ち込む。よって、断面形は概ね逆台形状を呈すが、中央部分が更に逆台形状に突出する形状となる。検出面からテラス状の平坦面までの深さは28cmで、最深部までさらに14cm深くなる。埋土は暗茶褐色粘質土が砂の混入の有無により２層に分層される。ピット状の落ち込み部分より上位の②層中からは、自然礫、加工木片がややまとまりをもって出土している。これらより下層から土器片が出土しており、甕（２）、器台（３）のほか、中央落ち込み部の埋土中から甕（１）が検出された。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端を丸く収め、下端はやや斜め下方向に突出させている。胴部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。

ＳＫ276（第120図・図版31）

国道２区Ａ17グリッドＮＥ区からＡ18グリッドＮＷ区にまたがる位置にある。長軸1.57m、短軸83.5cmを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形状を呈する土坑である。検出面からの深さは24cmで、断面逆台形を呈する。埋土は、暗灰茶褐色粘質土が微量な混入物の差によって３層に分層され、①層には炭化物が混じっている。遺物は、土器が東側に片寄っており、①層上面から③層にかけて斜方向に流れ込んだような出土状況である。中央部からやや西寄りでは、加工木片が③層の底面付近からまとまりをもって出土しており、土器に先行する埋積という印象である。土器は、甕（１～６）、低脚坏（７）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端を丸く収め、下端は横方向に突出させている。胴部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。

ＳＫ277（第121図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。東側はＳＫ279の、西側はＳＫ299の上層にあたる。南部が調査区外へ広がるため全体の形状、規模は不明である。検出した範囲では長軸残存1.22m、検出面からの深さは最大で14.5cmを測る土坑である。底面には起伏がある。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単層で、炭化物が多量に混じっていた。遺構西側の埋土中から、甕の頸部から肩部にかけての土器片（１）が出土している。（１）は、外面ハケ調整後波状文を施し、内面はケズリ調整である。

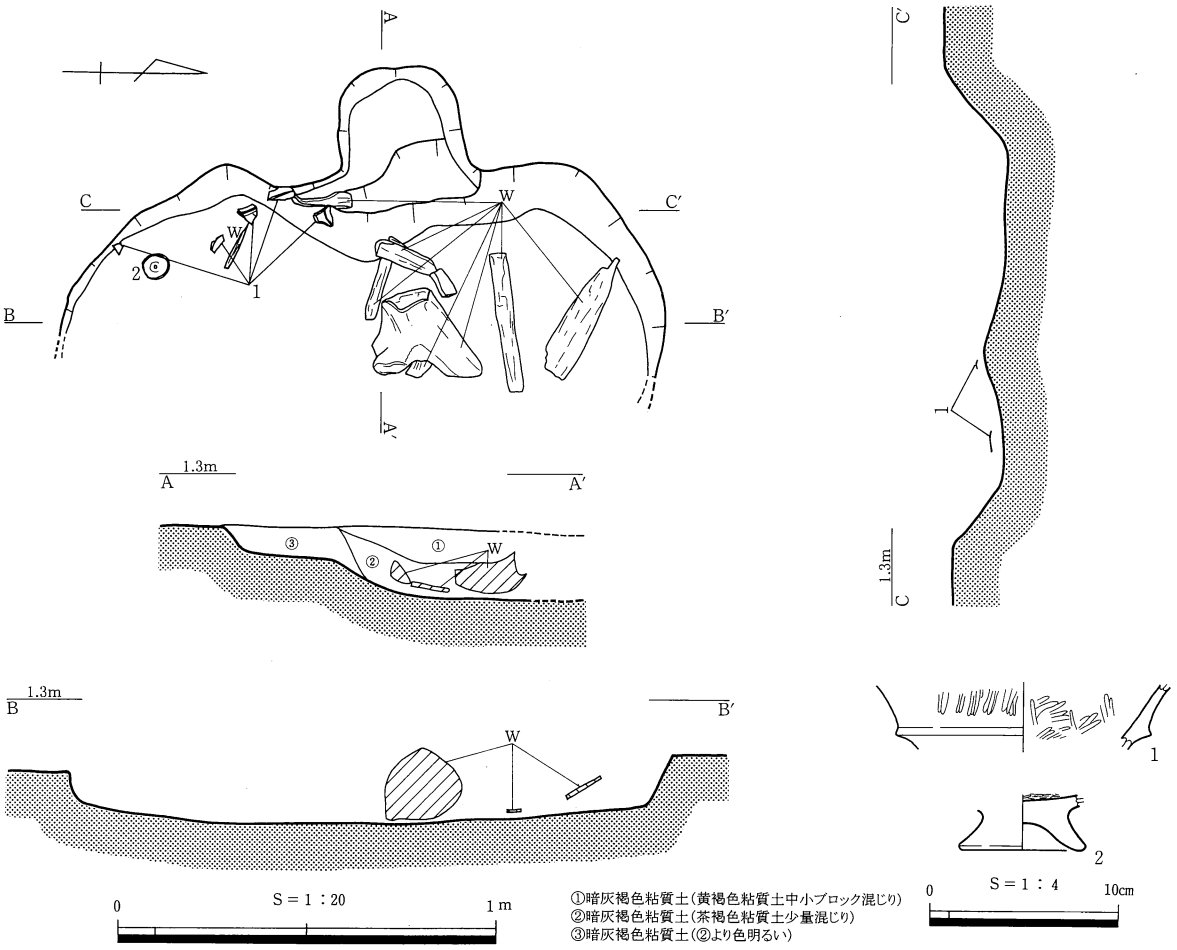
ＳＫ278（第122図・図版32）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区からＢ27グリッドＳＷ区にまたがって位置する。長径77.5cm、短径69.5cmを測る検出面、底面ともに楕円形を呈する土坑である。底面は平坦で、検出面からの深さは12.5cmを測る。断面形は逆台形状を呈するが、西側の立ち上がりがやや緩やかである。埋土は暗茶褐色粘質土と灰茶褐色砂の混土を基本とし、炭化物の有無により2層に細分できた。遺物はほぼ遺構中央部から北側にかけて出土しており、検出面上面では甕（１）と器台受部（１）の破片が出土している。中央部底面直上からは、長さ12cm、幅６cmの礫が１点検出された。

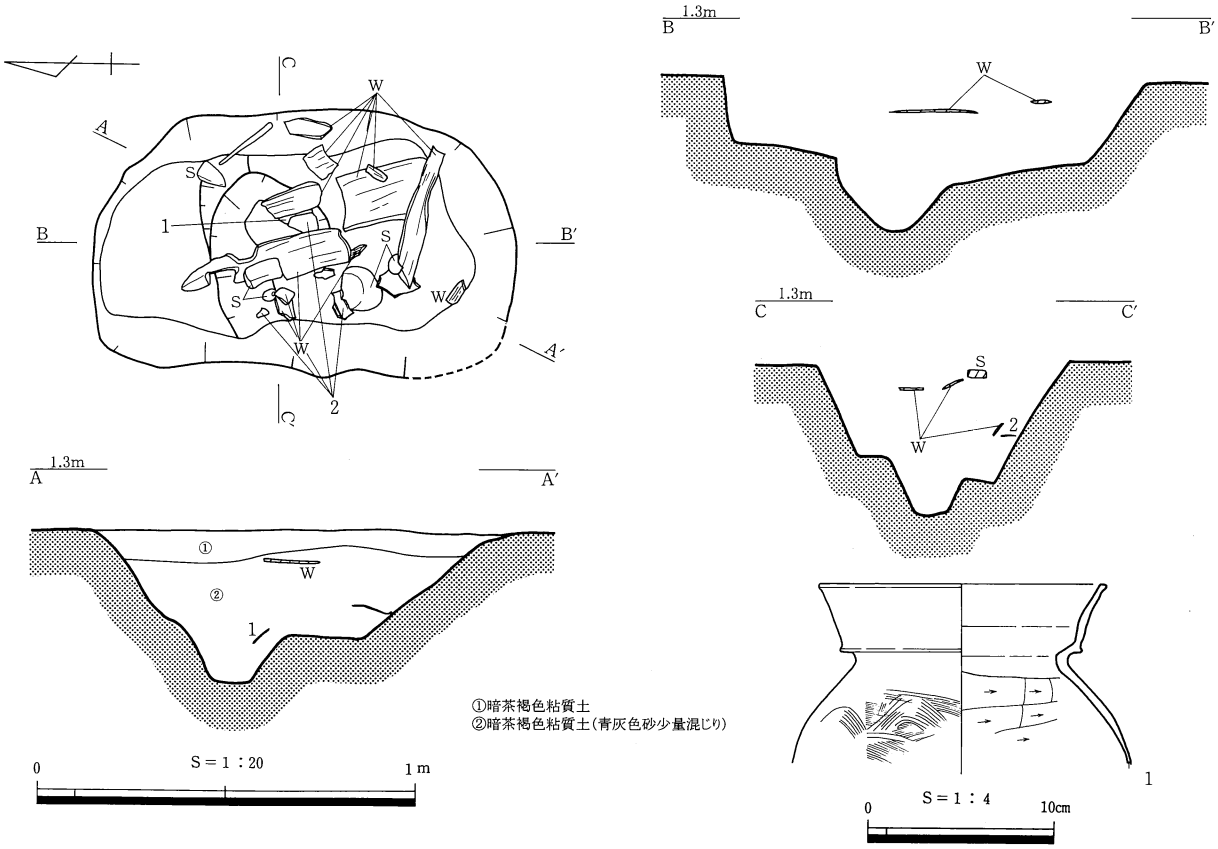
（１）は、外反する口縁部で、端面上端を細く丸く収め、下端は横方向に突出させる。口縁部外面には、貝殻腹縁による押し引きの波状文を施し、口縁部内面はミガキ調整し、端部をヨコナデして消している。肩部内面はケズリ調整後、ミガキ調整を加えている。（２）は外反する受部で、内面にミガキ調整を施している。

ＳＫ279（第123図・図版33）

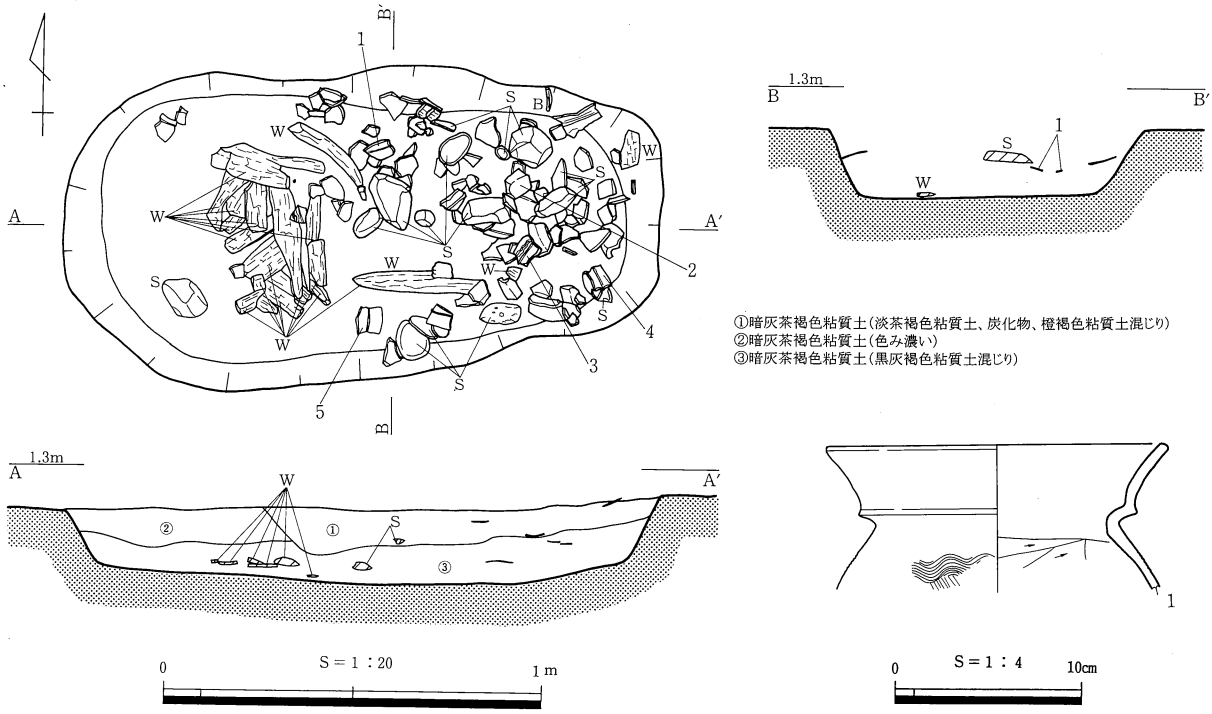
国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置する。長軸49.0cm、短軸40.5cmを測る検出面、底面ともにやや不整な隅丸方形を呈する土坑である。東側はＳＫ277の下層にあたる。底面は平坦だが、南側にやや下がる。検出面からの深さは5.5cmで断面逆台形状を呈する。遺物は遺構内に拡散しており、底面直上から埋土上面にかけて甕（１、２）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出している。胴部は、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。



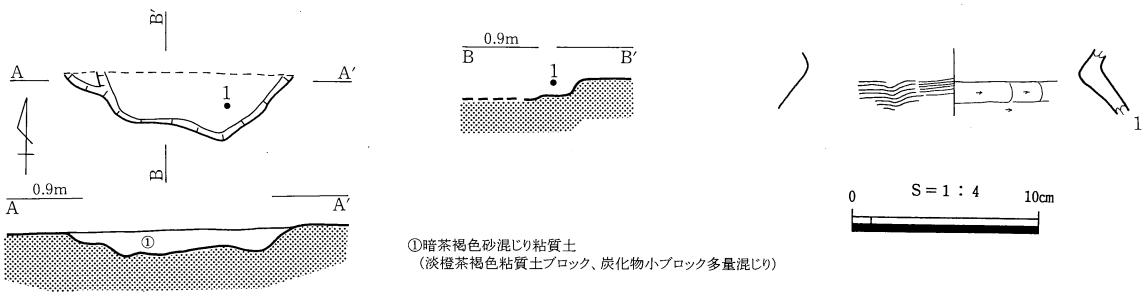
第118図　ＳＫ274及び出土遺物



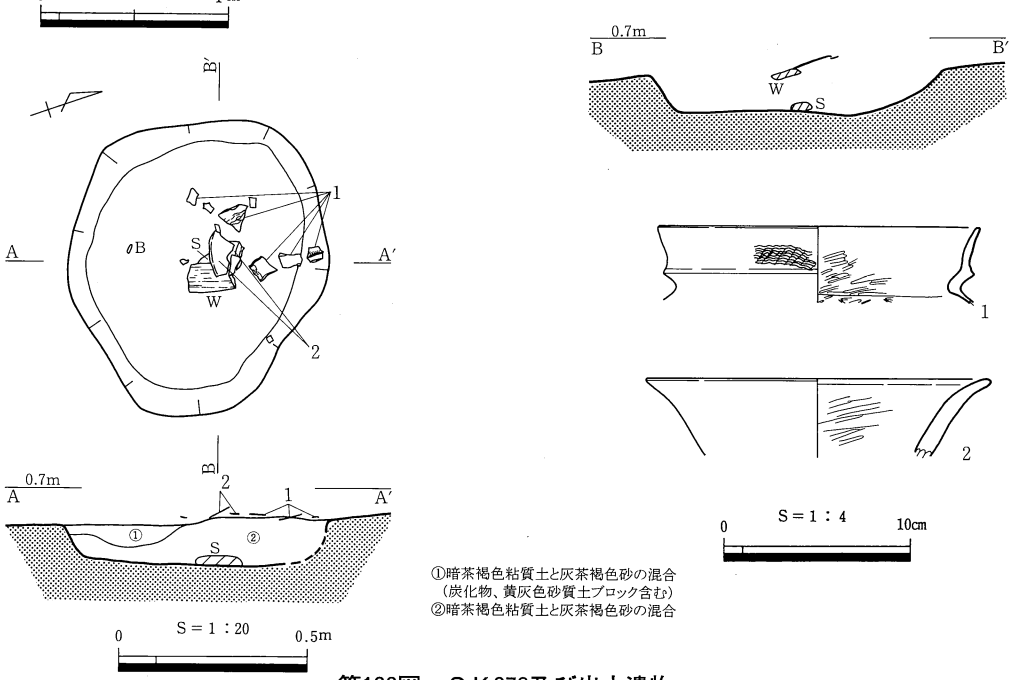
第119図　ＳＫ275及び出土遺物



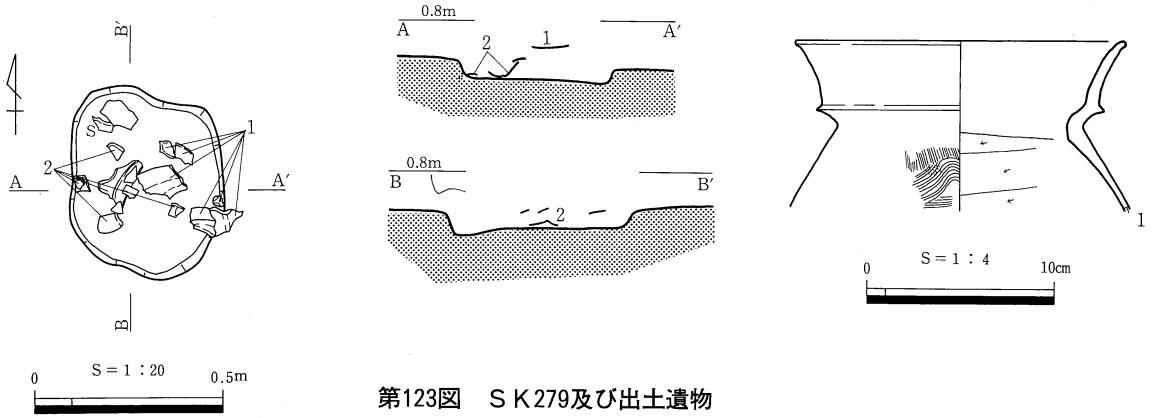
第120図　ＳＫ276及び出土遺物



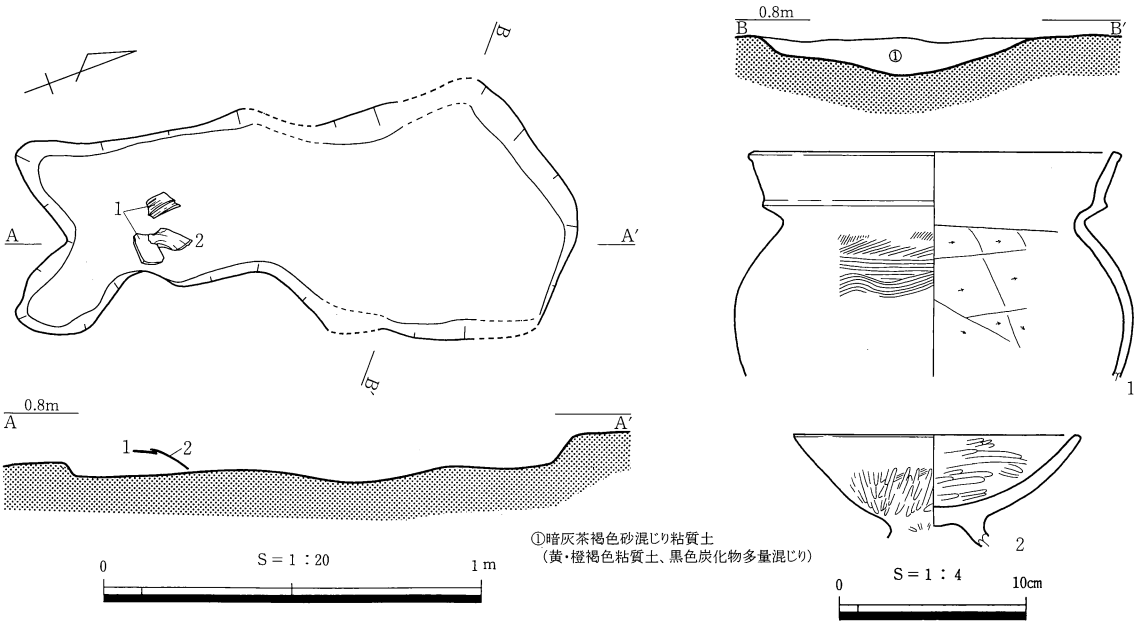
第121図　ＳＫ277及び出土遺物



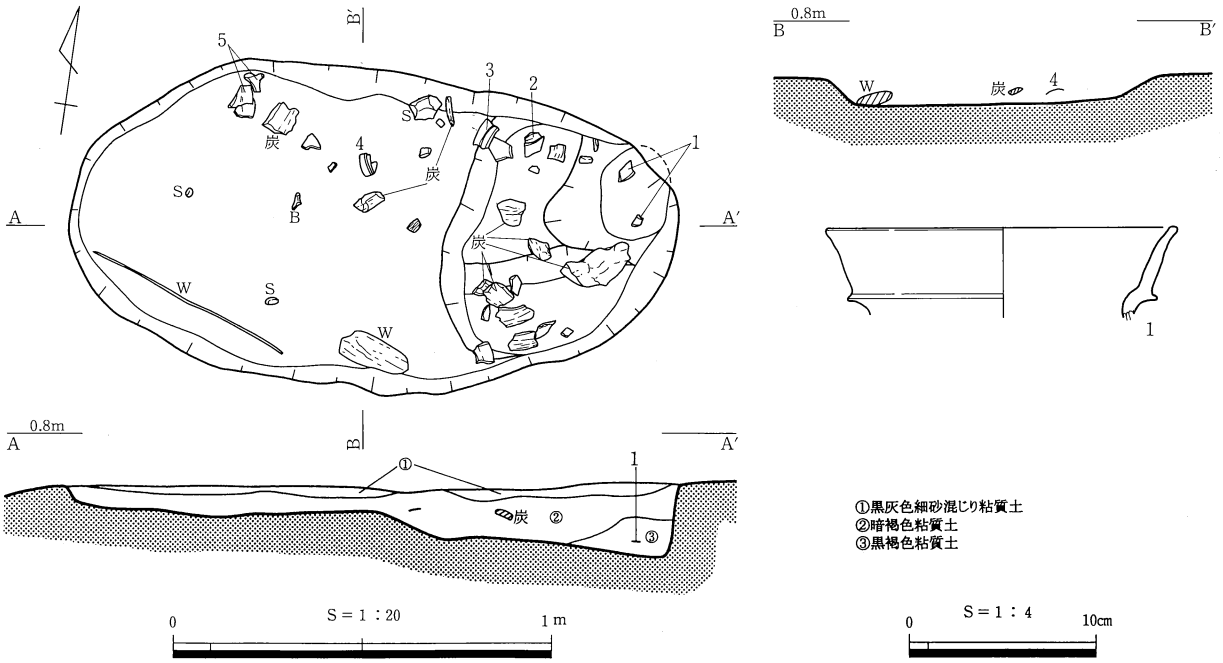
第122図　ＳＫ278及び出土遺物



第123図　ＳＫ279及び出土遺物



第124図　ＳＫ280及び出土遺物



第125図　ＳＫ281及び出土遺物

ＳＫ280（第124図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置する。長軸1.35m、短軸42.5cm、検出面からの深さ12.5cmを測る検出面、底面ともに不整形の土坑である。埋土は暗灰褐色砂混じり粘質土の単層であり、炭化物が多量に混じっている。遺物は南側から出土しており、甕（１）と低脚坏の坏部（２）が折り重なるように出土した。

（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出し、鈍い稜をなす。胴部は肩が張り、外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文を施し、内面はケズリ調整する。（２）は、口径に対し体部の深い坏部で、外面ハケ調整後ミガキ調整し、内面ミガキ調整を施す。

ＳＫ281（第125図・図版33）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区からＮＥ区にまたがって位置する。長径1.61m、短径84.5cmを測る長楕円形状を呈する土坑である。底面は、西側から中央部まで深さ７cm程度の比較的平坦な面を経た後、東側に向かって落ち込む。東側では深さ最大19cmを測る。埋土は３層に分けられ暗褐色粘質土を主体とする。遺物は、東側の落ち込み部下層の③層から甕の口縁部（１）が、北側の埋土中程で甕の破片（２～５）が拡散し、出土している。炭化米、炭化物が東側の底面上を中心に検出されたほか、不明鉄器片も東側落ち込み部の埋土中程から出土している。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は細く丸く収め、下端は斜め下方に突出する。

ＳＫ282（第126図・図版33）

国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区に位置する。長径1.18m、短径54.8cmを測る長楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは４cm、断面形は逆台形状を呈する。南側には同時期のＳＫ288が近接している。埋土は２層に分層される。遺物は概ね①層中からの出土で、土器片が散乱した状態である。南東部の埋土中程から甕の口縁部片（１）を検出した。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出する。

ＳＫ283（第127図・図版34）

国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区からＢ28グリッドＳＷ区にまたがって位置する。長径2.16m、短径92.2cmを測る楕円形状を呈する土坑である。南西側に深さ４cmの平坦な段があり、これよりさらに19cm深まる落ち込みが続く。再び３cm高くなって北東側の平坦面となる。埋土は２層に分層でき、炭化物混じりの②層が主体である。②層上面では炭化物の広がりが検出され、埋積途上での火焚き行為が想定される。遺物は底面から浮いた状態で出土しており、南東側の落ち込み部の埋土中からは甕（１）が、また中央部やや北東からは器台受部（２）が散乱した状態で出土している。北東隅の埋土中程からも甕（３）が出土した。

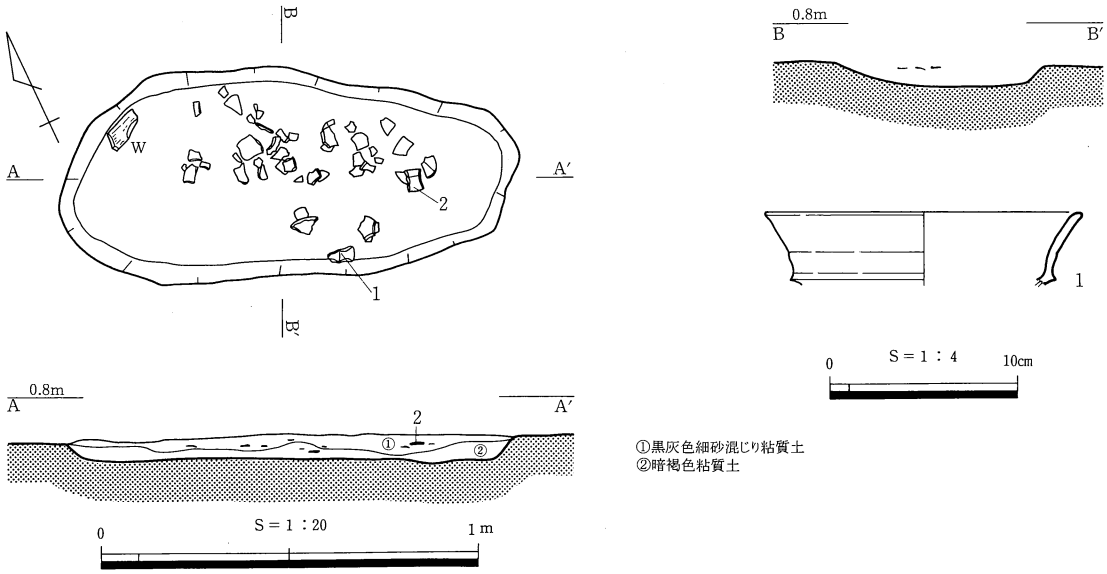
（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整であるが、外面に波状文が巡る。端面上端は平坦で、下端は横方向に突出する。外面ハケ調整後ハケ状工具による波状文と平行沈線を施し、内面はケズリ調整する。（２）は、口縁端部が強く外反する受部で、内面ミガキ調整を施す。

ＳＫ284（第128図・図版37）

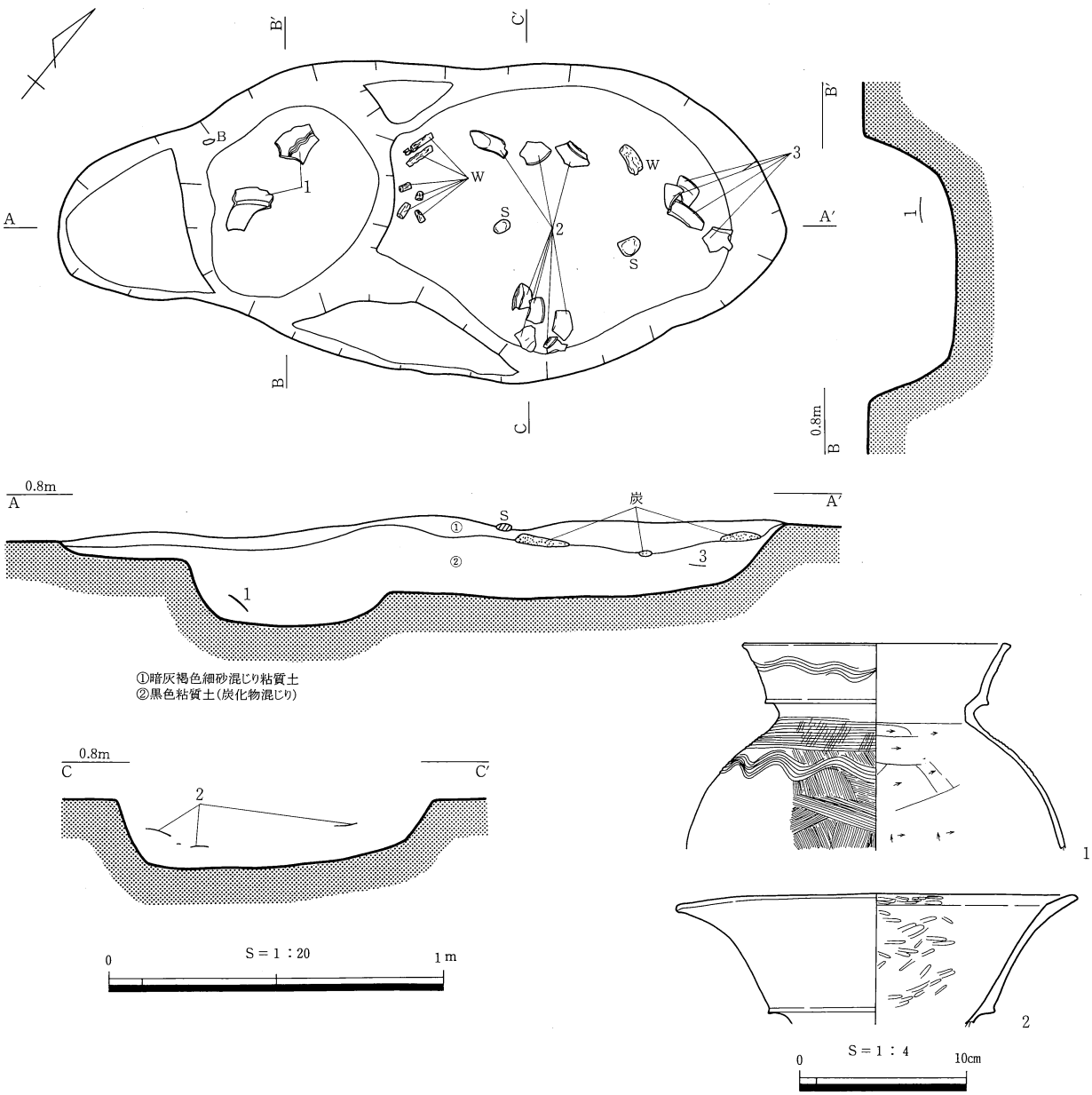
国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置する。東南隅はＳＫ295の下層、南側はＳＫ235の上層にあたる。東側をＳＫ285で切られているが、検出面・底面ともに不整な隅丸長方形を呈する土坑である。長軸1.7m、短軸87cmで、検出面からの深さは11.5cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土は暗灰色細砂混じり粘質土の単層で、北側の底面上で炭化物の集積が検出された。遺物は出土していない。

ＳＫ285（第128図・図版34）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区からＳＥ区にまたがって位置する。長軸3.19m、短軸51.5cmを測る、東西に細長い土坑である。遺構東側ではＳＫ284を切っている。底面は連続面ではなく、東側ではテラス状の平坦面をみたあと落ち込み、西側に向かって長さ1.3m、幅20cm程度の細長い平坦面が伸びる。その西側にはピット状の落ち込みがあり、更に深くなっている。検出面からの深さは最大で27.5cmを測る。埋土は２層に分層でき、暗灰色粘質土を基本とする。遺物は埋土中①層から出しており、甕（１、２）、骨製の針状刺突具（３）、不明鉄器片、



第126図　ＳＫ282及び出土遺物



第127図　ＳＫ283及び出土遺物

礫、木片などが検出されている。（１）は、外反する口縁部で、外面ヨコナデ調整、内面ミガキ調整されているが、ミガキを部分的にナデ消している。端面上端は細く丸く収め、下端は横方向に突出させる。（２）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出し、鈍い稜となる。頸部外面には貝殻腹縁による押し引き連続刺突が施され、内面はケズリ調整している。

ＳＫ286（第129図・図版34）

国道３区Ｂ28グリッドＳＷ区に位置する。東側が調査区外に広がるため全体の形状・規模は不明である。検出した範囲では最大幅89.5cm、深さ18.2cmを測り、本来楕円形状を呈するものと思われる。壁面の立ち上がりは、概ね緩やかである。埋土は、黒茶褐色砂混じり粘質土の単層である。遺物は埋土中から壺（１）が出土している。（１）は、口縁部がやや外反気味に長く立ち上がり、口縁下端が横方向に突出する。口縁部内外面ともにナデ調整で、肩部内面はケズリ調整している。

ＳＫ287（第130図・図版35）

国道３区Ｂ28グリッドＳＷ区に位置する。長径1.96m、短径１ｍを測り、検出面、底面ともに隅丸長方形的な楕円形を呈する土坑である。底面は、中央やや北で僅かな落ち込みがあるものの、ほぼ平坦である。検出面からの深さは25.5cmで、断面逆台形状を呈する。埋土は２層に分層され、暗灰色系の粘質土を基本とし、①層には炭化物を多量に含んでいる。遺物の出土レベルは底面近くから埋土上層まで幅があり、破砕された土器片が加工木などを交えて、遺構全体に拡散している。検出された土器は、壺（１、５～７）、甕（２、３、８～15）、高坏（16）、器台（４、17）と器種が豊富で、個体数も他の土坑に較べて多いと言える。このほか、土玉（18、19）や勾玉状に加工した軽石製品（20）が出土している。

（１）は、外傾気味に直立する単純口縁で、肩部外面に波状文が巡る。内面はケズリ調整をナデ消している。（２）は、外反する口縁部で、端部を丸く収め、下端は突出しない。（３）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は丸く収め、下端は横方向に突出する。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線を施し、内面はケズリ調整する。底部は尖り気味の丸底である。（４）は、鼓形の器台で、口縁端部が平坦面をなす。受部内面ミガキ調整で、脚部内面はケズリ調整する。

ＳＫ288（第131図・図版36）

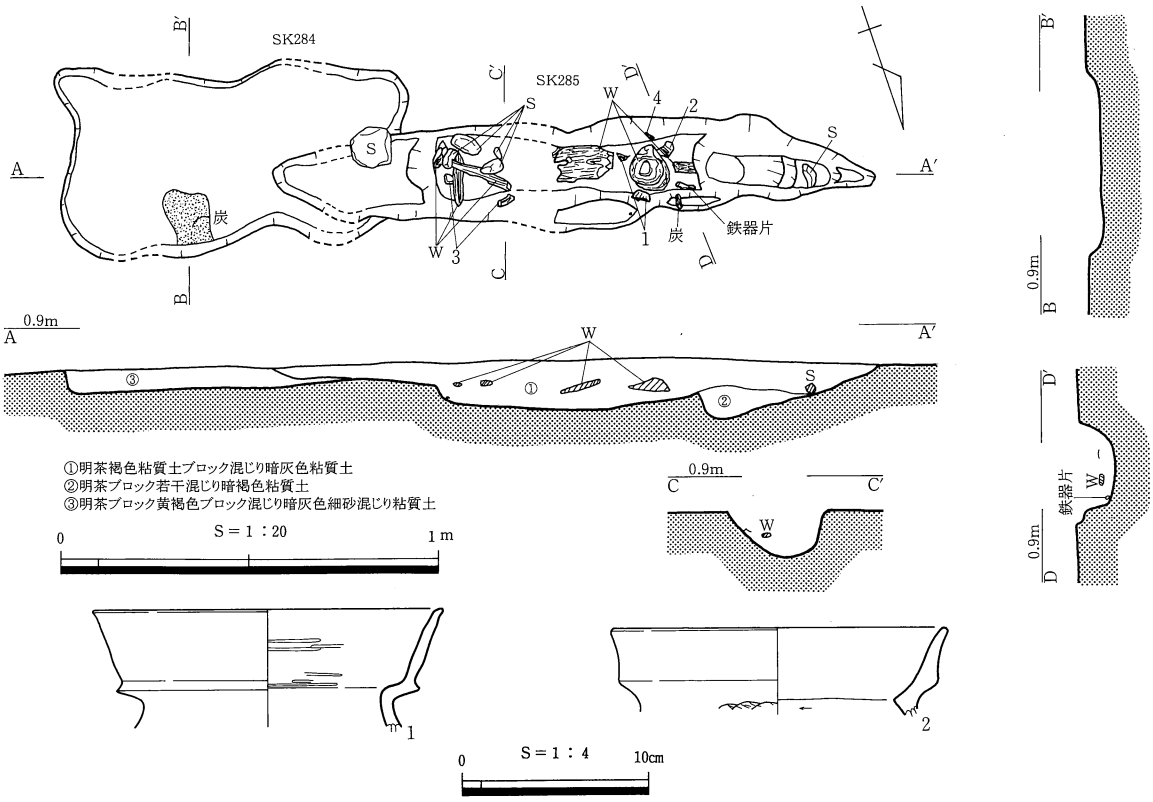
国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区に位置する。長径1.41m、短径63.5cmを測り、検出面、底面ともに長楕円形状を呈する土坑である。壁面の立ち上がりは緩やかで、断面皿状を呈する。検出面からの深さは最大25cmを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土が混入物の差によって２層に分層され、①層には炭化物が多量に含まれていた。遺物は、概ね埋土中程から上層にかけて出土しており、東側では加工木片や角礫が検出され、西側では20cm長の角礫や加工木片に混じって甕（１）が破砕された状態で出土している。（１）は、直立する口縁部が端部で外傾するもので、下端は突出しない。

ＳＫ289（第132図）

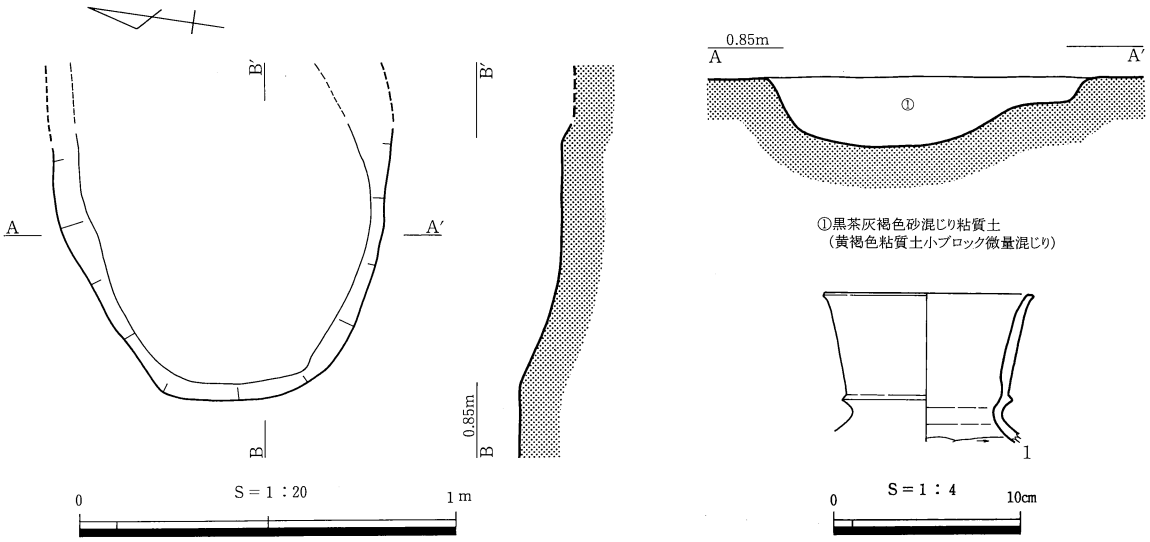
国道３区Ｂ27グリッドＳＷ区に位置する。土器溜まり状に検出したが、本来は土坑を伴うものであったと思われる。土器は、ほぼ50cm四方の範囲で折り重なるように検出され、出土レベルに幅がある。甕（１、３～５）、器台（２）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は尖り気味に収め、下端は突出しない。胴部は肩が張らず、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線と波状文を施し、内面はケズリ調整する。（２）は、鼓形の器台で、外面緻密なミガキ調整、内面ケズリ調整で、口縁端部内面はヨコナデし、筒部は内外面ともにナデ調整である。

ＳＫ290（第133図）

国道３区Ｂ28グリッドＳＷ区に位置する土坑である。南側と東側を排水溝で切られている。検出面からの深さは5.5cmを測り、底面は調査区外に向かって緩やかに上昇している。遺物は埋土中程で甕の口縁部（１）が出土している。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は尖り気味に収め、下端は突出しない。頸部内面はケズリ調整する。



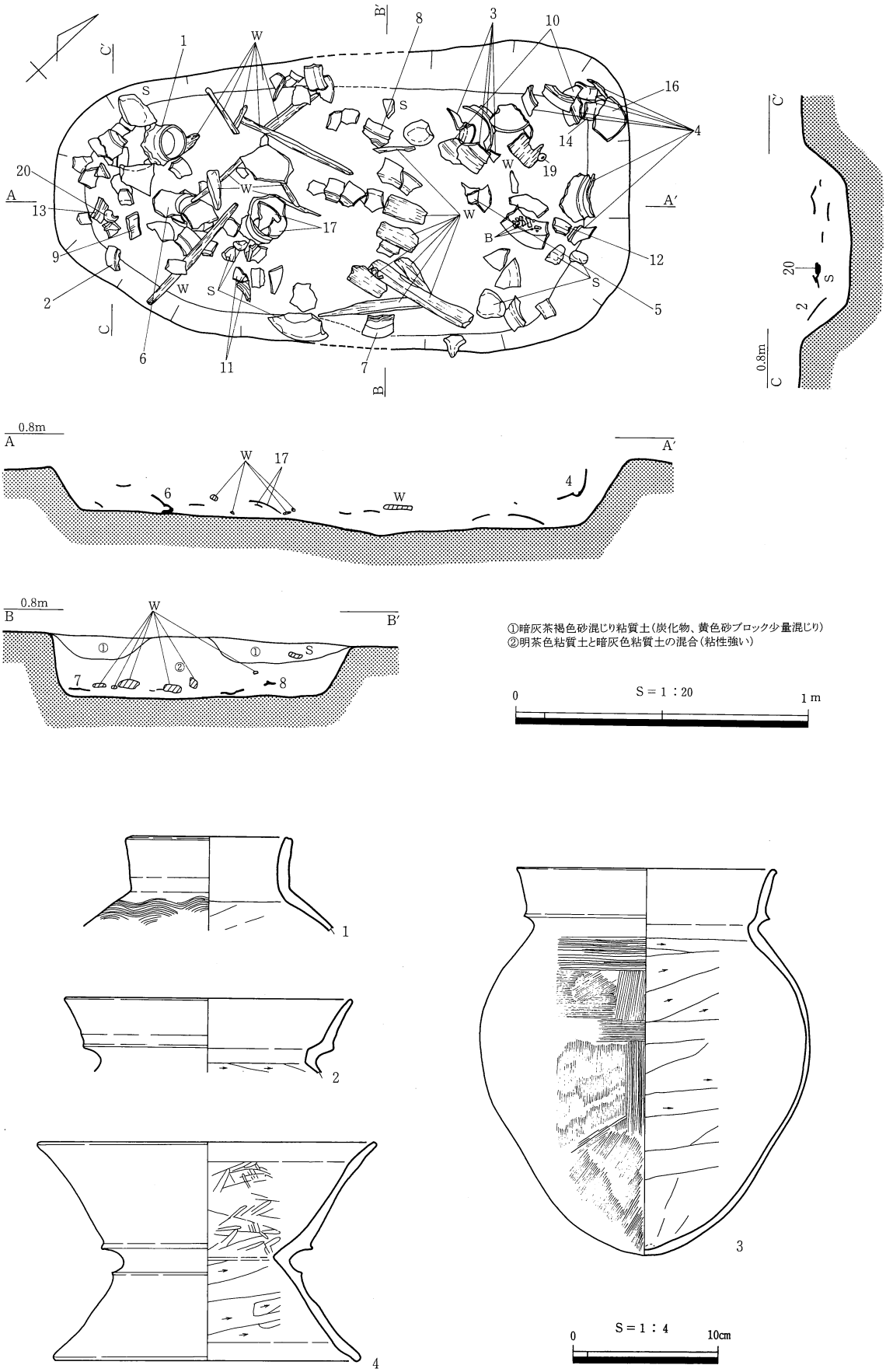
第128図　ＳＫ284、285及び出土遺物



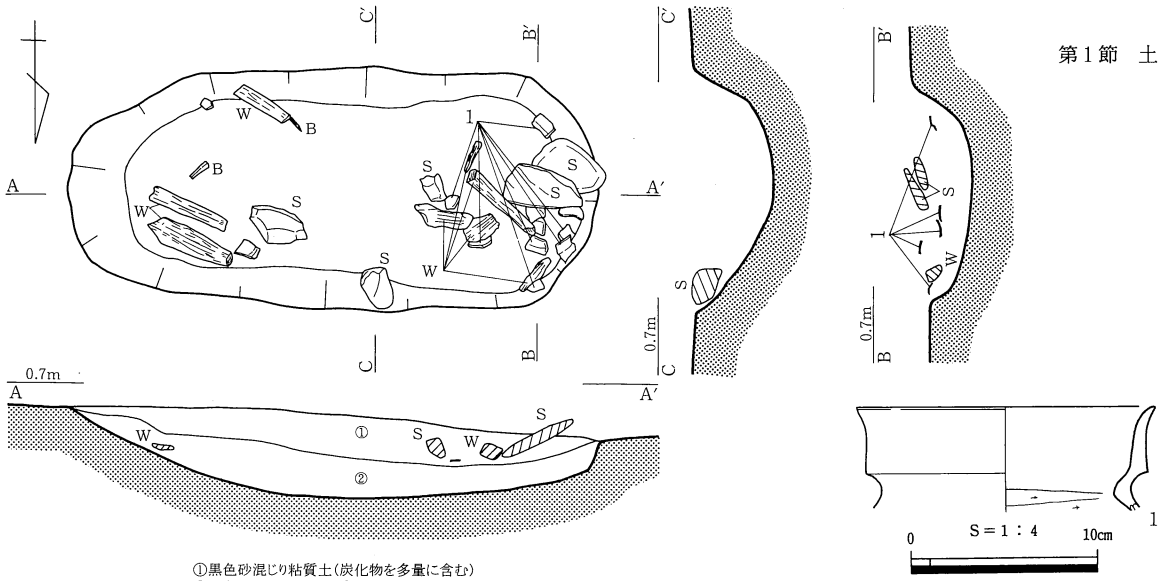
第129図　ＳＫ286及び出土遺物

ＳＫ291（第134図）

国道３区Ｂ27グリッドＳＷ区に位置する土坑である。土層断面観察用のベルト中から検出されたため、北側と南側の形状、規模は不明であるが、72cmの幅で検出した。壁面の立ち上がりは西側で検出面から緩やかに傾斜したあと、更に10cm程度落ち込み幅30cm程度の平坦な底面へと続く。深さは最大で19.8cmを測る。埋土は４層に分けられ、暗灰茶褐色系及び黒灰色系の砂混じり粘質土を基本とする。①層には炭化物が少量混じり、④層中底面直上から、人頭大の礫が検出されている。遺物は遺構中央部からやや東側に片寄り、甕（１）が破砕された

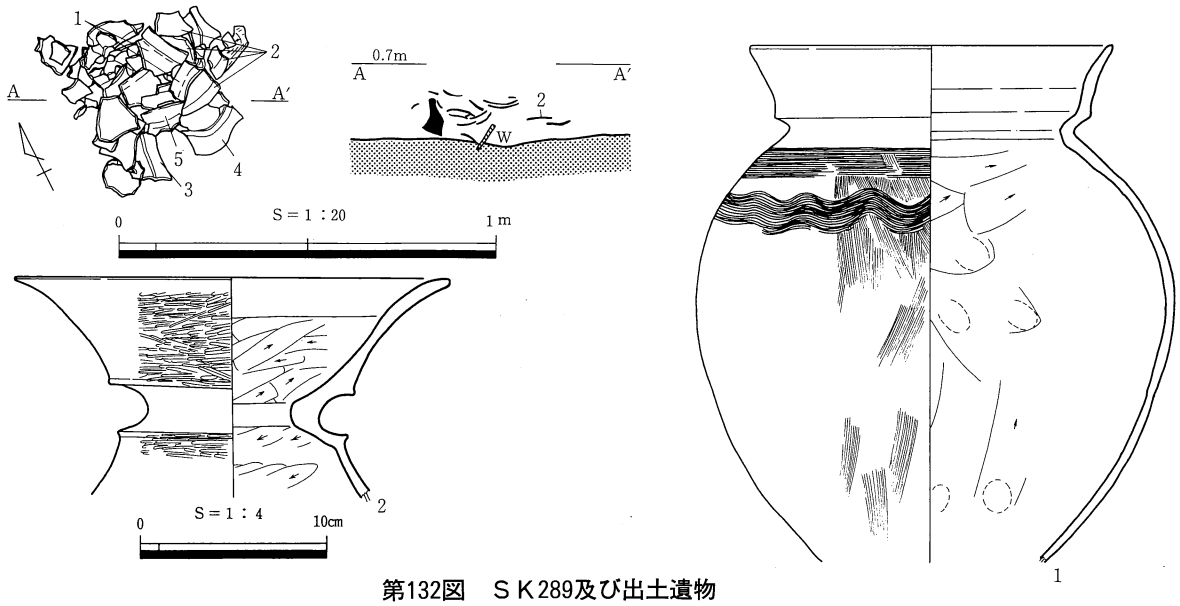


第130図　ＳＫ287及び出土遺物

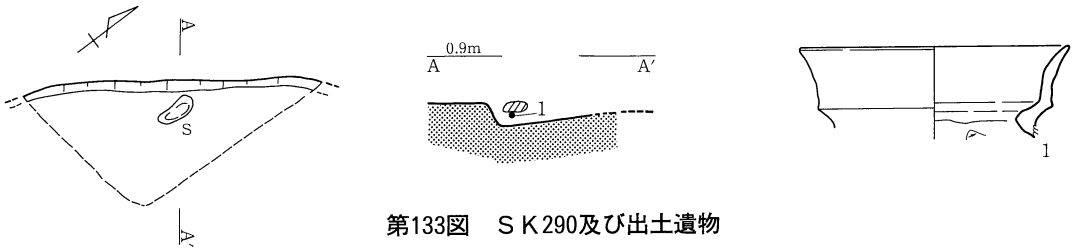


①黒色砂混じり粘質土(炭化物を多量に含む)
②黒色砂混じり粘質土(①より砂を多く含む)

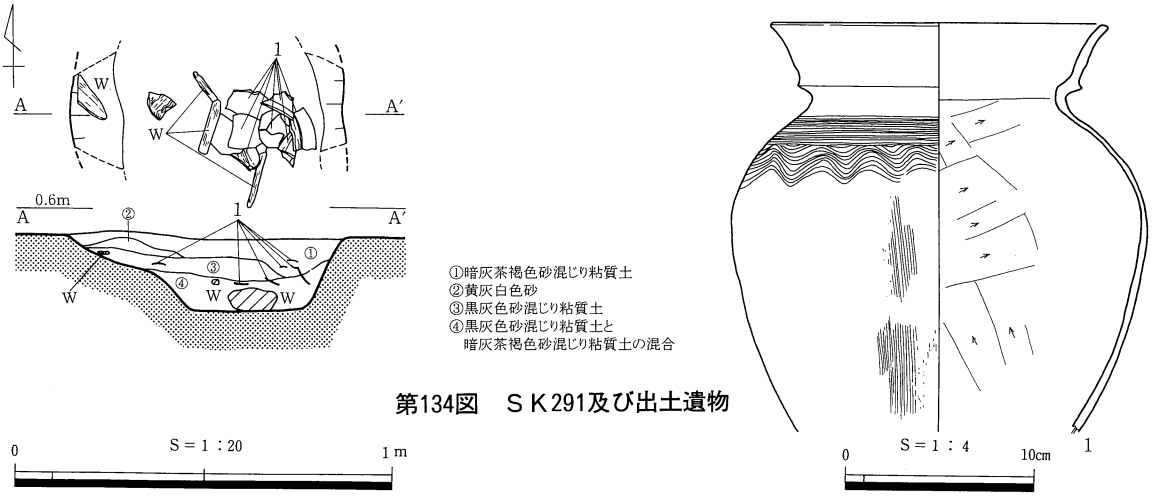
第131図　ＳＫ288及び出土遺物



第132図　ＳＫ289及び出土遺物



第133図　ＳＫ290及び出土遺物



①暗灰茶褐色砂混じり粘質土
②黄灰白色砂
③黒灰色砂混じり粘質土
④黒灰色砂混じり粘質土と
　暗灰茶褐色砂混じり粘質土の混合

第134図　ＳＫ291及び出土遺物

状態で埋土中程から検出された。（１）は、外反する口縁部で、内外面ヨコナデ調整である。端面上端は細く丸く収め、下端は横方向に突出する。胴部は肩が張り、外面ハケ調整後ハケ状工具による平行沈線と波状文を施し、内面はケズリ調整する。

ＳＫ292（第135図）

２区Ｂ18グリッドＳＥ区に位置する土坑である。北東側でＳＤ34を切っている。土坑の上方には２m四方ほどの範囲でナスビ形着柄鋤（１）（２）（３）、栓形建築部材（４）（５）、板材、角材、自然木などが集中しており、その下方にテラス状の浅い段が付随する不整な長楕円形状の土坑が位置する。木器溜りの検出レベルは1.1～1.2m、土坑検出面の標高は1.1mである。土坑は長径1.94m、短径1.1m、テラス部分の深さは約10cm、土坑最深部は60cmを測る。底面は東側に向かって緩やかに傾斜している。土坑の北東側にはピット状の落ち込みがみられ、検出面からの深さは45cmを測る。埋土は非常に水分を多く含んだ灰茶褐色粘質土で、切りあい関係にあるＳＤ34や周辺の土坑の埋土とは土質に著しい差異がある。完掘後、土坑底面からの湧水を確認しており、井戸として使用された可能性を考える。

ＳＫ293（第136図）

国道２区Ｂ21グリッドＳＷ区に位置する土坑である。西側をトレンチで切られており、全体の形状は不明であるが、長軸49.7cmの不整な楕円形状を呈すると思われる。壁面の立ち上がりは南側でやや急となり、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは9.5cmで、不整な逆台形状の断面形を持つ。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で、木片を含む。遺物は出土していない。

ＳＫ294（第137図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区に位置し、ＳＤ34、ＳＤ35を切っている。長径1.19m、短径48.5cmを測り、検出面、底面ともに不整な楕円形状を呈する土坑である。底面は平坦で、断面逆台形状を呈する。検出面からの深さは19.5cmを測る。埋土は暗茶灰褐色土の単層で、炭化物が混じる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ295（第138図・図版35）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＫ284、ＳＡ15の上層にあたる。長軸1.71m、短軸59.5cmを測る不整形な土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは15.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土が２層に分層され、①層には炭化物が多量に混じる。遺物は出土していない。

ＳＫ296（第139図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる土坑である。南側は、排水溝に切られている。検出した範囲では、幅99.5cm、深さ13.5cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、暗茶褐色砂混じり粘質土が混入物の差によって４層に分層された。①層には炭化物が多量に混じる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ297（第140図）

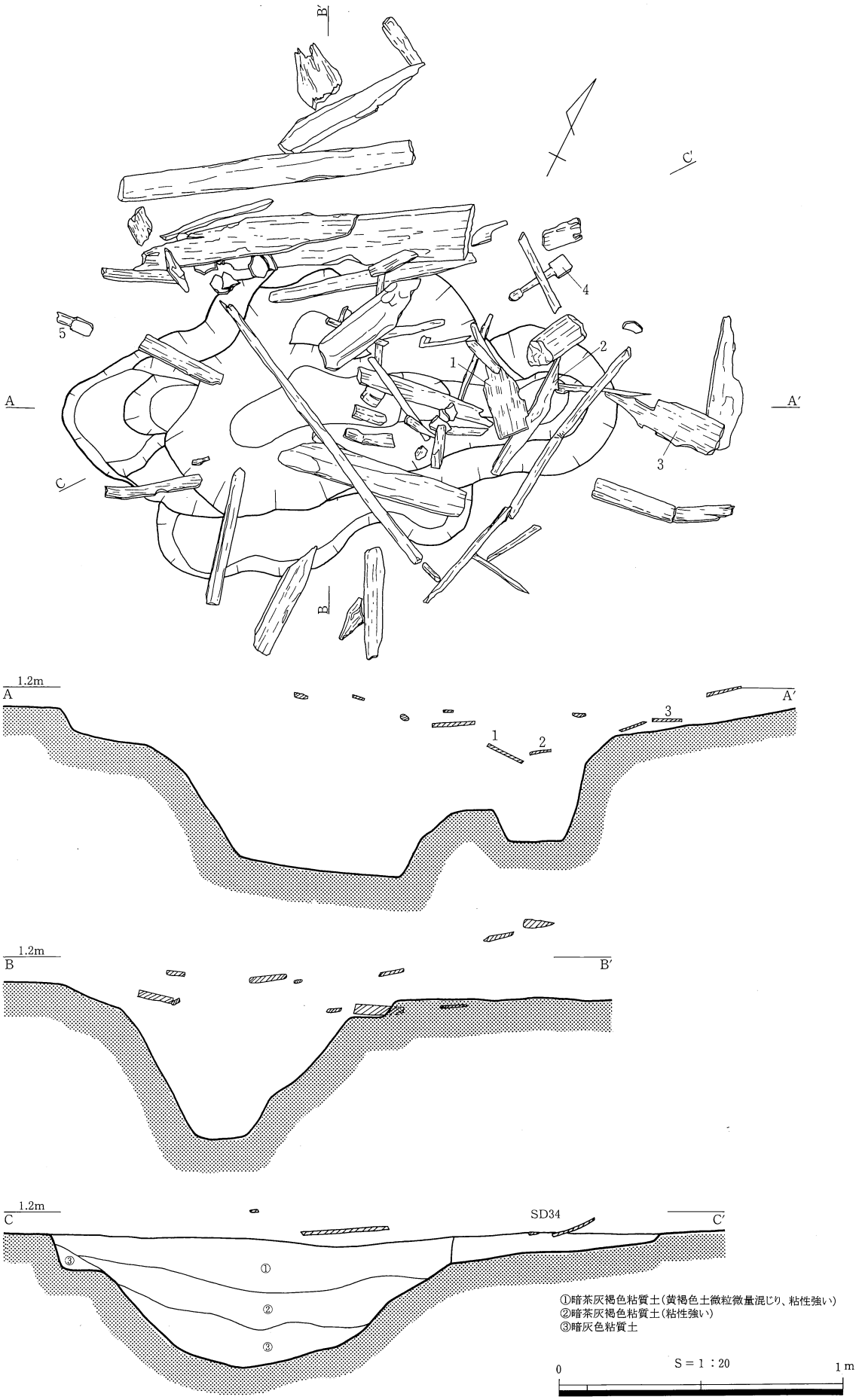
国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置し、ＳＫ241、ＳＡ15の上層にあたる。径45cm程の不整な円形状の土坑である。断面皿状を呈し、底面は平坦である。検出面からの深さは4.5cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ298（第141図・図版36）

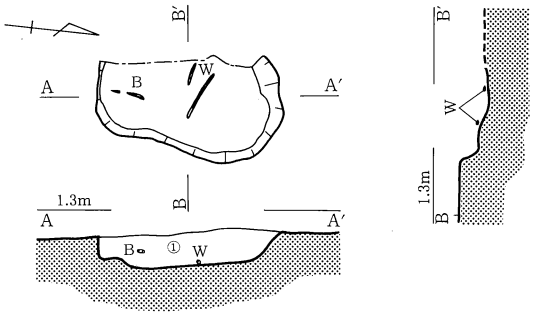
国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる土坑である。北側はトレンチで切られ、全体の形状・規模は不明である。1.1mの長さで検出し、深さは最大で7.5cmを測る。断面の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦である。断面形は逆台形状を呈する。埋土は２層に分層できるが、暗灰色系の粘質土が基本となる。遺物は、中央部の埋土中から壺か甕の頸部（１）、底面近くから鉄器片（２）が出土している。（２）は鋳造鉄斧の破片の可能性もあるものである。

ＳＫ299（第142図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＷ区に位置し、ＳＫ277の下層、ＳＫ236、241、ＳＡ15の上層にあたる。長軸1.64m、短軸1.05mを測る検出面、底面ともに不整形な土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは10cm、断面の形状は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単層であり、炭化物が混じる。小礫が検出されたほ

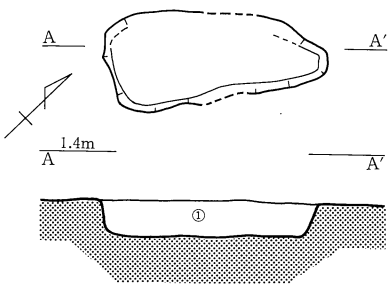

B′
C′
4
5
2
1
A
A′
3
C
B
1.2m
A
A′
3
1
2
1.2m
B
B′
1.2m
C
SD34
C′
③
①
②
③
①暗茶灰褐色粘質土(黄褐色土微粒微量混じり、粘性強い)
②暗茶灰褐色粘質土(粘性強い)
③暗灰色粘質土
0
S＝1：20
1m

第135図　ＳＫ292



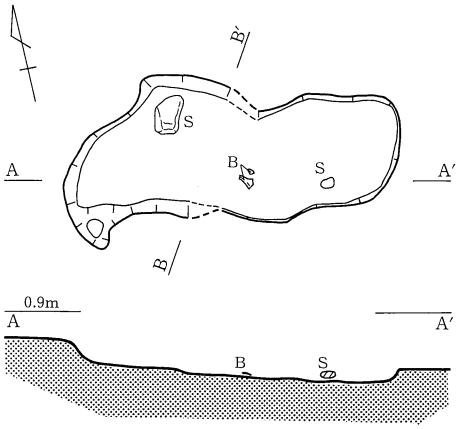
①暗茶褐色粘質土

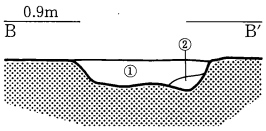
第136図　ＳＫ293



①暗茶灰褐色粘質土(炭化物混じり)

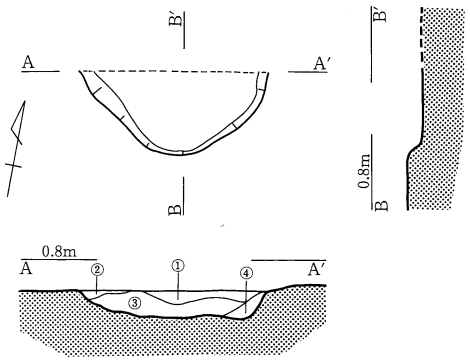
第137図　ＳＫ294





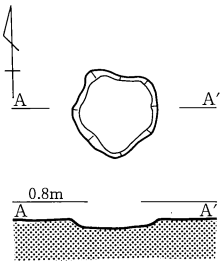
①暗茶褐色砂混じり粘質土(炭化物多量混じり)
②暗茶褐色砂混じり粘質土

第138図　ＳＫ295

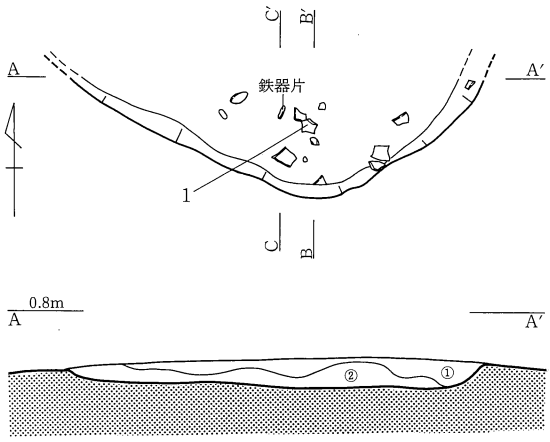


①暗茶褐色砂混じり粘質土(炭化物多量混じり)
②暗茶褐色砂混じり粘質土
③暗茶褐色砂混じり粘質土(やや粘性強い)
④暗茶褐色砂混じり粘質土(やや粘性強い)

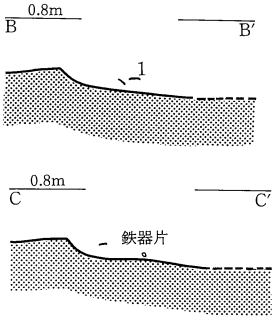
第139図　ＳＫ296

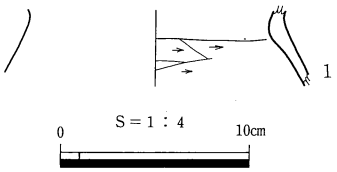


第140図　ＳＫ297



①暗灰色砂混じり粘質土
②暗灰褐色粘質土





第141図　ＳＫ298及び出土遺物

かは、遺物は検出されなかった。

ＳＫ300（第143図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にある土坑である。南側は排水溝に切られているため、全体の形状、規模は不明である。95.5cmの長さで検出した。底面はほぼ平坦で、深さ最大17cmを測り、断面は弧状を呈する。遺物は出土しなかった。

ＳＫ301（第144図）

国道３区Ｂ28グリッドＳＷ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる土坑である。北側と東側は排水溝に切られているため、底面部分は遺存しておらず、全体の形状、規模は不明である。長さ69.4cmにわたって検出し、深さは最大32.6cmを測る。埋土は３層に分層され、灰茶褐色系の粘質土を基本とする。遺物は出土していない。

ＳＫ302（第145図・図版37）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる。長径69.5cm、短径62cmを測る楕円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは最大で17.5cmを測り、底面が傾斜する。埋土は２層に分層される。遺物は出土していない。

ＳＫ303（第146図）

国道３区Ｂ26グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる土坑である。北側は排水溝に切られているため、全体の形状、規模は不明である。50cmの長さにわたって検出し、深さは最大で10.5cmを測る。断面は弧状を呈する。西側の埋土中では、礫が集中的に検出された。遺物は出土していない。

ＳＫ304（第147図）

国道３区Ｂ28グリッドＳＷ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる。長径80cm、短径59.5cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11.5cm、断面逆台形状を呈する。埋土は黒灰褐色土を基本とし、３層に細分される。遺物は出土していない。

ＳＫ305（第148図・図版37）

国道３区Ｂ27グリッドＳＥ区に位置し、ＳＡ15の上層にあたる。ＳＫ288が南東側に近接する。長径47.3cm、短径38.9cmを測るやや不整な円形状を呈する土坑である。底面は東側が深くなっており、検出面からの深さは19.5cmを測る。埋土は黒色砂混じり粘質土が２層に分層され、①層には炭化物が多量に含まれている。①層中からは加工板材が、②層中からは径14cmほどの平石が検出されたほかは、遺物は出土していない。

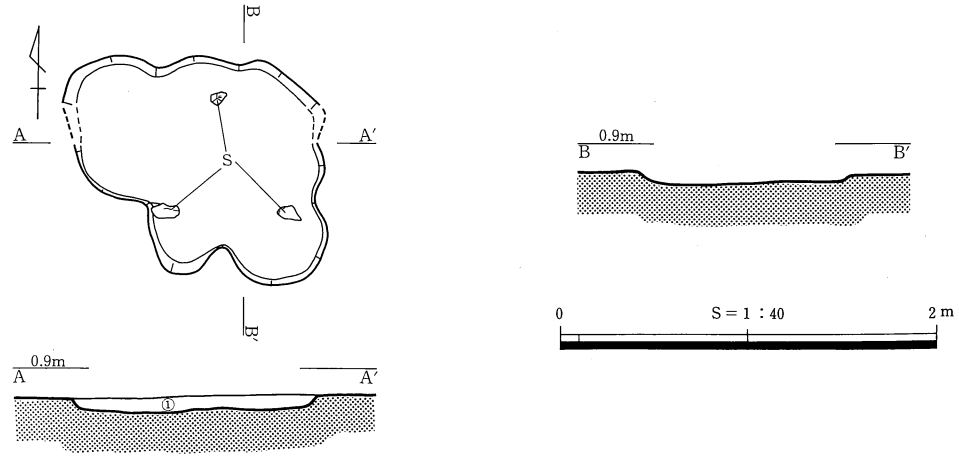
ＳＫ306（第149図）

国道３区Ｂ27グリッドＳＷ区に位置する。ＳＡ15より上層から掘り込まれている土坑である。土層断面観察用ベルト中から検出されたため、北側と南側の形状は不明である。底面は東側で僅かにテラス状の平坦面をみたあと、西側に向かって６cm程度落ち込む。検出された範囲では最大幅98.6cm、深さ37.5cmを測る。埋土は６層に分層されるが、灰茶褐色砂混じり粘質土と暗灰茶褐色砂混じり粘質土に大別され、概ね炭化物が含まれている。加工板材が埋土中から出土したほかは、遺物は出土していない。

第２節　溝、杭列

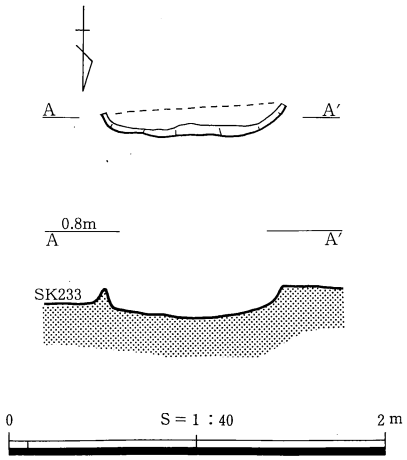
ＳＤ34（第150図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区からＢ19グリッドＳＷ区にかけてに位置する。中央部やや北西側でＳＫ294に、中央部やや北東側でＳＤ35に、さらに南側ではＳＫ292に切られている。東西９ｍ、南北６ｍの範囲で緩やかな「Ｌ」字状に伸びる溝状遺構である。全長11mを測る。遺構中央部は最大幅1.6mで、両端に近づくにつれ幅が狭くなっている。底面は平坦で、検出面からの深さは10cmから15cmを測る。埋土は２層に分層され、暗灰褐色粘質土を基本とする。①層には炭化物が混じる。遺物は、北側肩部寄りで高坏（１）、器台（２）が検出されたほか、西側底面から土玉（３）が出土している。

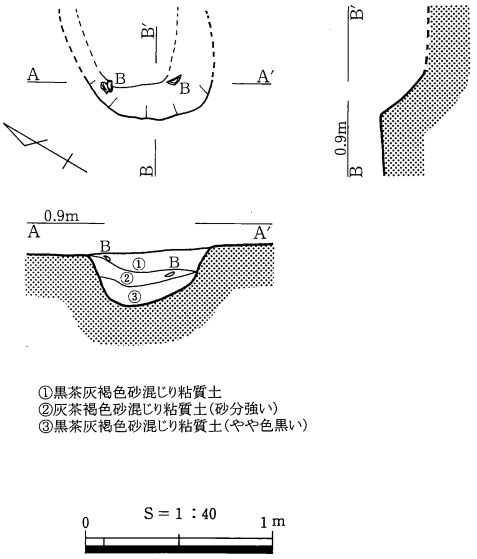


①暗茶褐色砂混じり粘質土（橙色粘質土小ブロック、炭化物混じり）

第142図　ＳＫ299

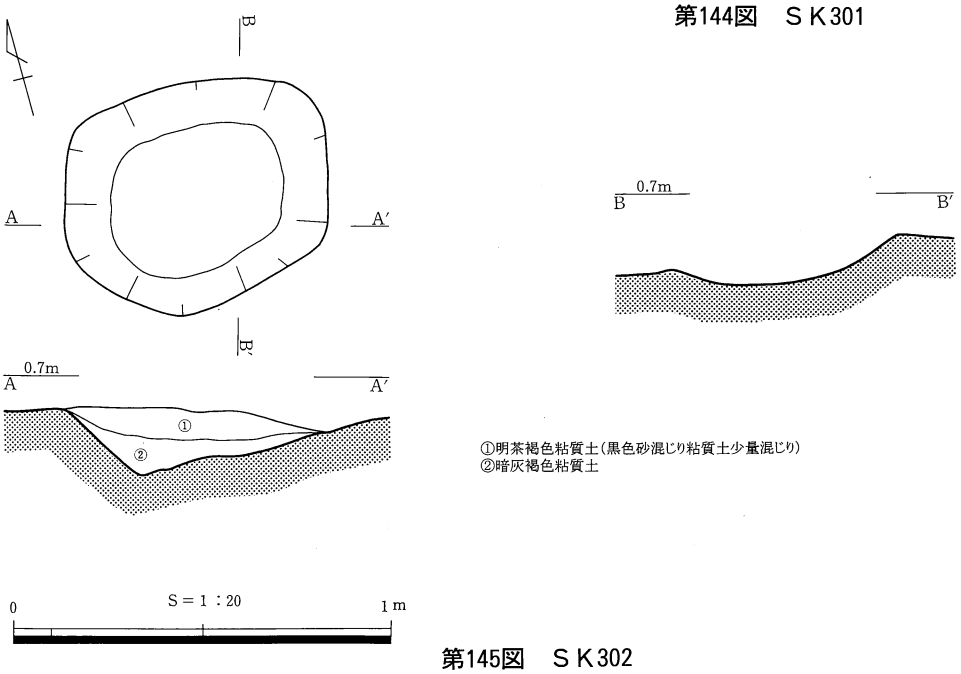


第143図　ＳＫ300



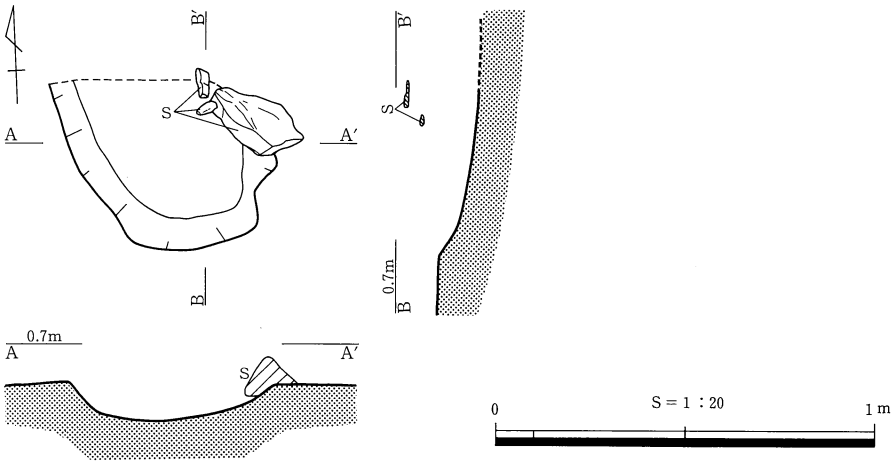
①黒茶灰褐色砂混じり粘質土
②灰茶褐色砂混じり粘質土（砂分強い）
③黒茶灰褐色砂混じり粘質土（やや色黒い）

第144図　ＳＫ301

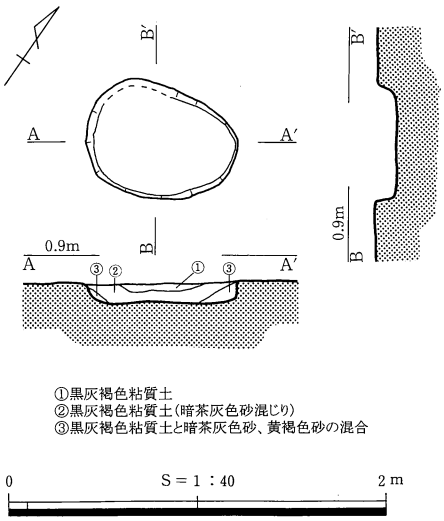


①明茶褐色粘質土（黒色砂混じり粘質土少量混じり）
②暗灰褐色粘質土

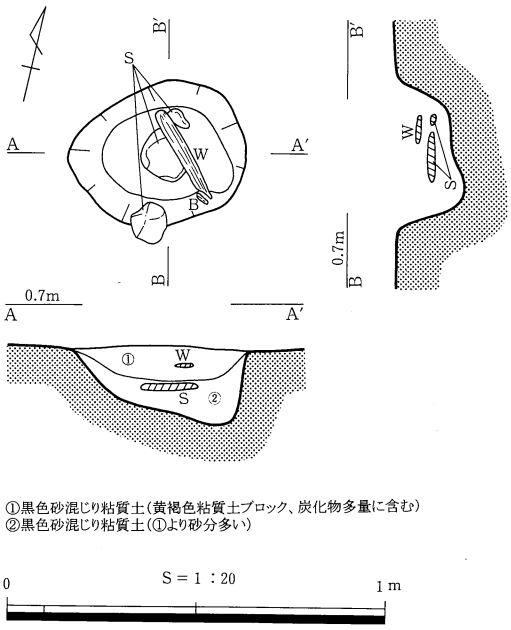
第145図　ＳＫ302



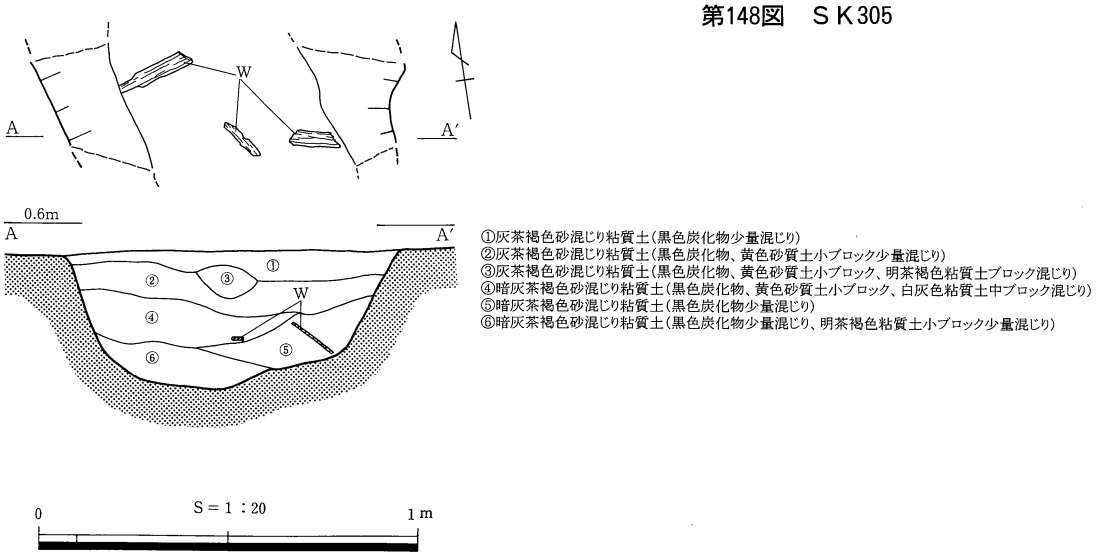
第146図　ＳＫ303



第147図　ＳＫ304



第148図　ＳＫ305

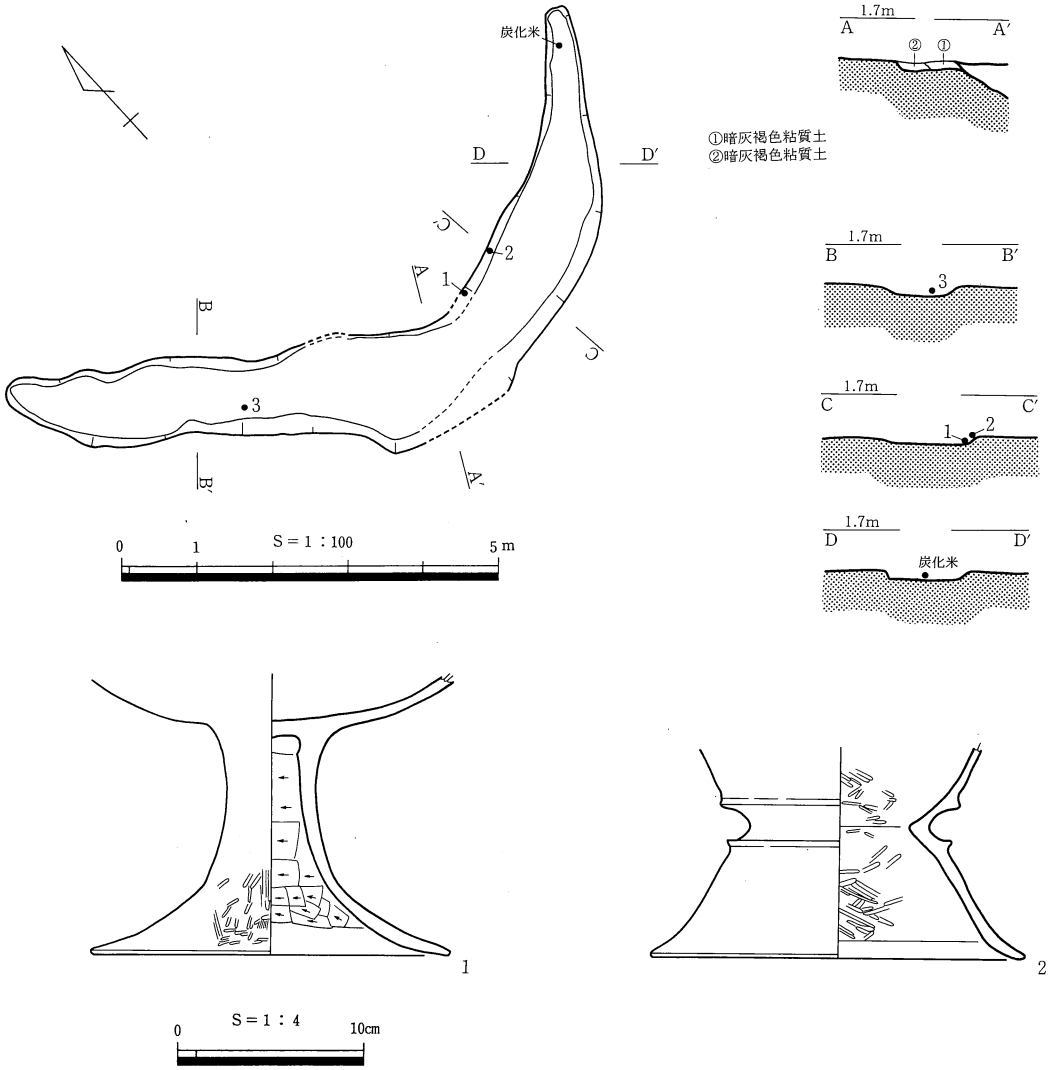


第149図　ＳＫ306

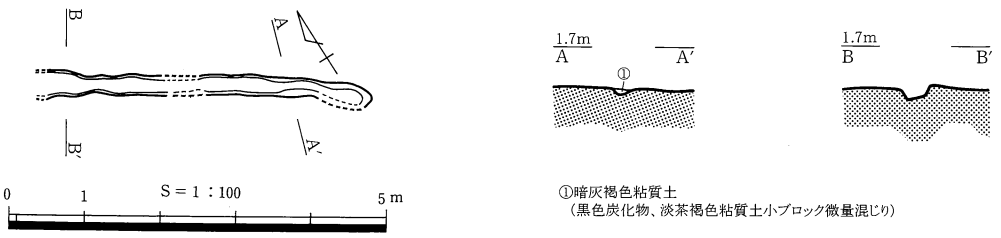
（１）は、口径の広い皿形の坏部を有する高坏で、坏部と脚部を接合する円盤充填部分が剥離して遺存していない。脚部外面上方はハケ、ミガキ調整後丁寧にナデ調整しており、下方はミガキ調整が残る。内面はケズリ調整し、端部はナデ調整している。（２）は鼓形器台で、口径に対し器高の高い器形である。外面ナデ調整で、内面ミガキ調整を施し、底部端部はヨコナデしている。

ＳＤ35（第151図）

国道２区Ｂ18グリッドＳＥ区からＮＥ区にかけて位置する。遺構北西隅はＳＫ253と切りあっているため、形



第150図　ＳＤ34及び出土遺物



第151図　ＳＤ35

第152図　ＳＡ12～14

状は確認できなかったが、検出した範囲では長さ4.3m強、最大幅40cm強を測る細長い溝状遺構である。中央部ではＳＫ294に切られ、南東部ではＳＤ34を切っている。断面の立ち上がりはわりあいはっきりしており、底面は南側から北側にかけて緩やかに傾斜している。検出面からの深さは10cm程度である。埋土は暗灰褐色粘質土の単層で、炭化物も微量に混じっていたが、遺物は出土しなかった。

ＳＡ12～14（第152図・図版38）

２区Ａ21～23グリッド北側からＢ21～23グリッドの南側にかけて位置する杭列である。Ａ、Ｂ21グリッド付近の西側部分と、Ｂ23グリッド付近の東側部分の２群に大別でき、Ａ21グリッドの北側を北西から南東へ向かって約７ｍ延びる杭列をＳＡ12、Ｂ21グリッドの中央から南東に向かって約3.5m延びる杭列をＳＡ13、Ｂ23グリッドに位置し北北西から南南東方向に直線的に延びる杭列をＳＡ14と呼称する。ＳＡ12、13の検出面の標高は0.75m前後、杭の頂点の標高は1.2m前後である。ＳＡ14は、平行する２条の杭列に横板が付随するものである。検出面の標高は0.5m前後、杭の頂点の標高は0.7～1.0mである。横板は杭の頂点より10cmほど下位に設置される。一枚の横板の設置には３～４本の杭が用いられている。ＳＡ12～14とも転用材と思われる角材、板材が用いられており、使用された用材に規格性はみられない。

ＳＡ12の約50m東に同時期の杭列である３区のＳＡ15が位置するが、間をＳＤ36、37に遮られるためか、杭列の方向は一致していない。また、ＳＡ12～14の周辺には方向性を持たない杭が多数点在するが、これらと杭列との関係は不明である。ＳＡ12～14は氾濫堆積土中から検出されており、この堆積層は多量の木製品と土器を包含するが、杭列に伴う遺物を判別できなかった。

ＳＤ36、37（第153、154図・図版39）

ＳＤ36は３区Ｂ25～26グリッドにかけて位置する、木器溜りを伴う溝状遺構である。調査区の西側五分の一ほどの範囲を占めるが、北東から南西方向に直線的に延びる遺構の上端によって溝の方向が推定されるが、全体の規模は不明である。検出した範囲内での長さは約９ｍ、幅4.3m、深さは15cm前後である。溝の底面には流水によって刳られた痕跡と思われる不整形なくぼみが数箇所認められ、南側の大きなくぼみは浅く緩やかに南へ向かって傾斜していく。

ＳＤ37は、ＳＤ36の東側を切って平行に延びる溝状遺構である。検出した範囲内での規模は、長さ８ｍ、幅70cm、深さは８cm前後である。ＳＤ36、37の検出面の標高は0.5m前後である。

ＳＤ36の埋土は細砂・炭化物を含む暗灰色系の粘質土であり、ＳＤ37の埋土は黒褐色系の粘質土である。溝の形態や木器の集積状況などから、いずれも非常に緩やかな水の流れ、あるいは澱みが想定される。

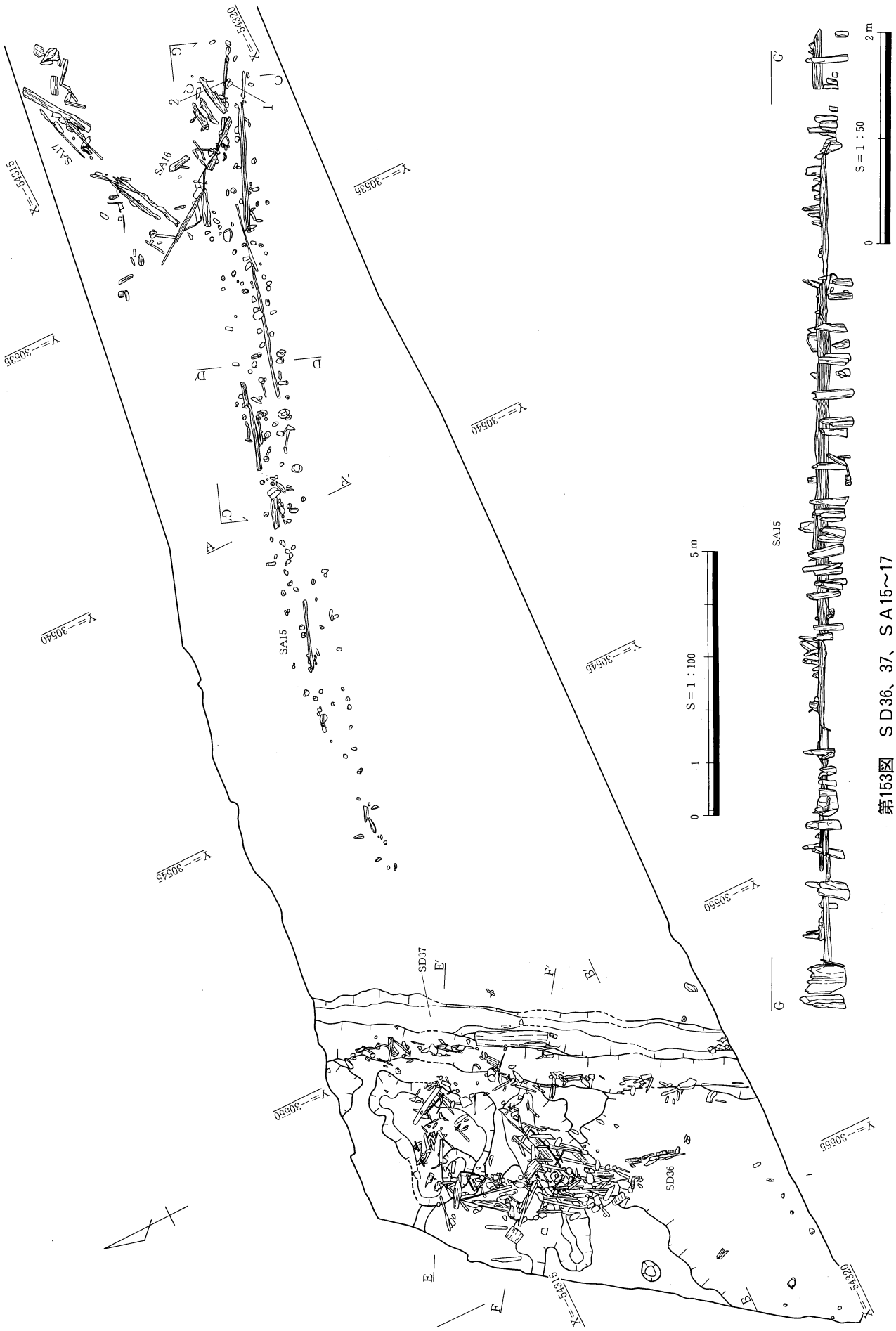
木器溜りは溝の北側部分に集中し、南北4.5m、東西３ｍほどの範囲に広がっている。底面の窪んだ箇所に重なりあう木器は大半が板材、角材、破材で、その遺存状況は当遺跡出土の他の木器に比べ著しく腐食の進んだものである。

土器は埋土中から大量に出土している。土器片はローリングを受けた痕跡がなく、遺存状態は良好である。これらはＳＤ36内の水の流れが非常に弱まった段階、あるいは流れがなくなり、澱みながら埋没していく過程の中で混入したものと考えられる。

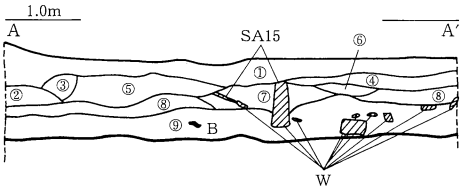
ＳＡ15～17（第153、154図・図版40～42）

３区Ｂ26～28グリッドに位置する杭列である。ＳＡ15は調査区の中央から東側にかけて縦断し、北西から南東方向に16m延びる。ＳＡ15の北側にはＳＡ16、17が位置する。ＳＡ16は北西から南東方向に向かって4.1m延び、ＳＡ15とは30°の角度で交差する。ＳＡ17はＳＡ16の北東側に直交するかたちで接し、北東から南西方向に４ｍ延びる。横板の重なり具合からＳＡ16はＳＡ15よりも古い段階のものと判断でき、杭列はＳＡ17、16、15という順に構築されたと考えられる。ＳＡ15の検出面の標高は0.3m前後、杭の頂点の標高は0.7m前後、ＳＡ16、17の検出面の標高は0.2～0.3m、杭の頂点の標高は0.5m前後である。横板は杭の頂点より10～20cm程下位に設置されている。

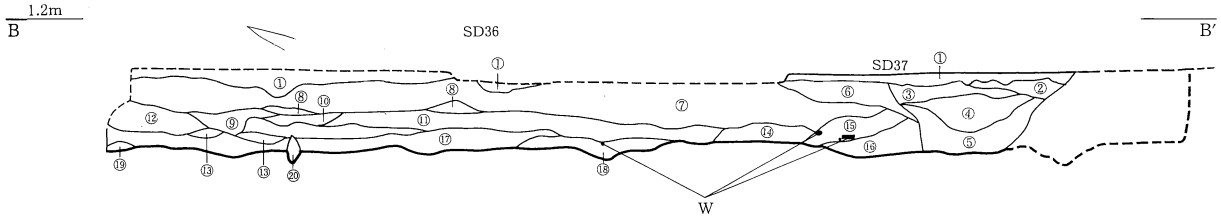
基本的にＳＡ15～17は、平行する２列の杭列に横板が付随する形態のものと考えられる。遺存している横板の



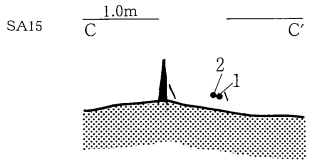
第153図　ＳＤ36、37、ＳＡ15～17

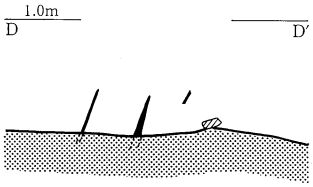


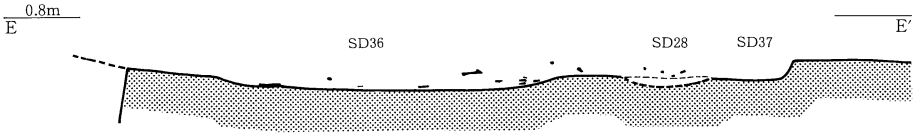
①灰茶褐色砂混じり粘質土（炭化物小片、明橙茶粘質土微小ブロック多量混じり）
②灰茶褐色砂混じり粘質土（炭化物小片、明橙茶粘質土中小ブロック少量混じり）
③灰茶褐色砂混じり粘質土（①＋黄灰色砂混じり）
④灰茶褐色砂混じり粘質土（①＋黄灰色砂多量混じり）
⑤暗灰茶褐色砂混じり粘質土
⑥灰茶褐色砂混じり粘質土（④よりやや砂分少ない）
⑦灰色粘質土（黄灰色砂密に混じる）
⑧灰茶褐色砂混じり粘質土（炭化物少量混じり、粘性）
⑨灰茶褐色砂混じり粘質土（炭化物橙色土＝酸化土しみ状にあり）

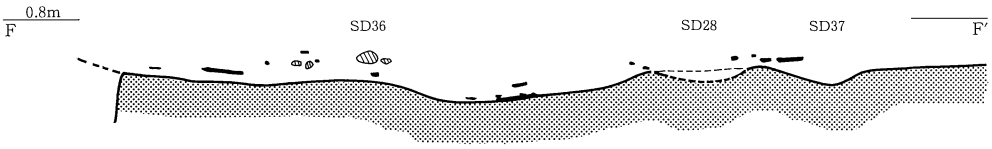


①暗褐色粘質土（明茶褐色粘質土ブロック混じり）
②黒褐色粘質土（細砂混じり、SD37埋土）
③黒褐色粘質土（細砂混じり、②層より暗い、SD37埋土）
④黒色粘質土（SD37埋土）
⑤黒茶褐色粘質土（炭化物混じり、SD37埋土）
⑥黒茶褐色粘質土（細砂混じり、SD37埋土）
⑦暗灰色粘質土（細砂、炭化物混じり）
⑧暗灰色粘質土（細砂混じり、炭化物混じり多い）
⑨暗灰色粘質土（細砂、炭化物、黄色礫混じり）
⑩暗灰褐色粘質土（細砂、炭化物混じり、⑪層より粘性強い）
⑪暗灰褐色粘質土（細砂、炭化物混じり）
⑫暗灰褐色粘質土（細砂混じり、⑩・⑪層より褐色味強い）
⑬暗灰褐色粘質土（細砂混じり、炭化物、灰混じり多い）
⑭暗灰色細砂（暗灰褐色粘質土混じり）
⑮暗灰色細砂（暗灰褐色粘質土、黄灰色細砂、炭化物混じり、SD28埋土）
⑯暗灰色細砂（暗灰褐色粘質土、明茶褐色粘質土ブロック混じり、SD28埋土）
⑰暗灰褐色粘質土（細砂混じり、⑩～⑬層より暗い）
⑱暗灰褐色粘質土（細砂混じり多い）
⑲暗茶灰色粘質土（細砂混じり）
⑳暗灰褐色粘質土（細砂混じり）



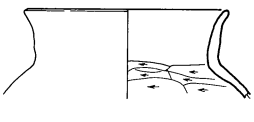


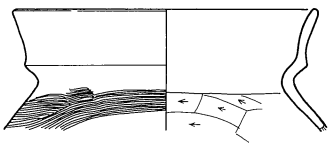




断面黒塗りは木製品、斜線は礫

S＝1：50
0　2 m





0　S＝1：4　10cm

第154図　ＳＤ36、37、ＳＡ15～17断面図、土層図及び出土遺物

規模は長さ1.5m前後、幅15cm程度、厚さ１～２cm程度である。使用される杭に規格性は見られず、角材や板材の転用材が用いられている。杭列の内側は砂の濃密に混じる灰色粘質土が堆積し、杭の外側には、内側に比べ砂分がやや少ない灰茶褐色粘質土がみられる。

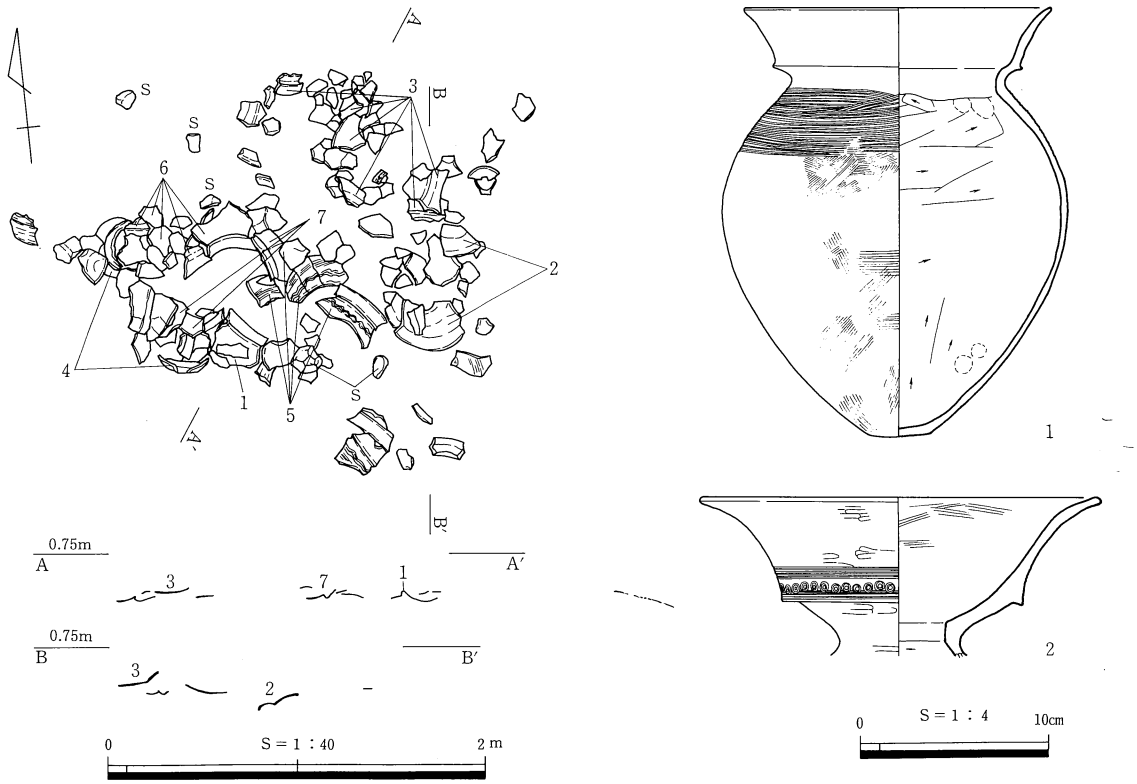
ＳＡ15の東端の杭の根元付近からは壺（１）、（２）が出土している。遺物はＳＡ15の２条の杭列と横板で区切られた内側から出土しており、遺物の時期はＳＡ16、17のやや上層に位置する土坑ＳＫ282、288と同一である。ＳＡ15の内側は本来流路であった可能性が考えられ、このことは土層断面とも齟齬をきたさない。ＳＡ15の西側には横板が見られず、また土層断面においても流路の立ち上がりを確認していないが、杭の方向からＳＡ15の一部と判断した。土層断面による確認は出来なかったが、ＳＡ16、17もＳＡ15と同様の形態を呈することから、小さな流路の護岸施設であったものと考える。杭列の内側では角材、破材などが木器溜りを形成していたが、これらの木器の一部はＳＡ15の杭、横板を内側から支える用材であった可能性もある。

（１）は外反気味に直立単純口縁の壺である。外面及び頸部内面はナデ調整、肩部内面にはヘラケズリがみられる。（２）は肩部にハケ状工具による波状文が施された甕である。口縁端部はまるくおさめ、口縁下端部は水平方向にわずかに突出し、鈍い稜をなす。口縁部の内外面及び頸部外面はナデ調整、肩部内面にはヘラケズリが施される。

第３節　土器溜

土器溜７（第155、157図・図版43）

３区Ｂ26グリッドＮＷ区に位置する。大量に砂を含む黒色粘質土中で検出された。５ｍ西に同時期の土器溜８が位置し、ＳＤ36の上端ラインからは東へ１ｍほど離れている。1.3m四方の範囲に甕、器台など７個体分の土器



第155図　土器溜７及び出土遺物

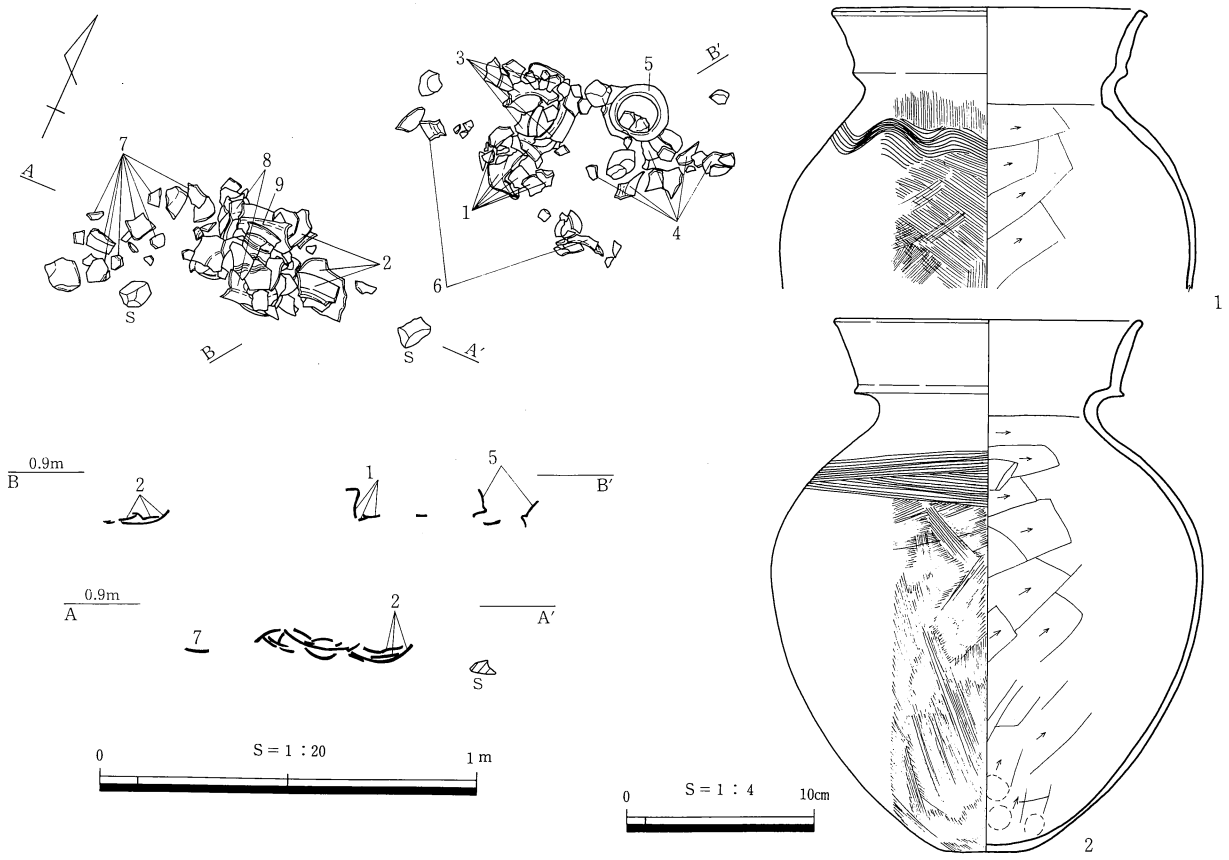
片が集積している。土器の接地面の標高は0.6m前後である。甕、器台は潰れ、地面に貼りついたような状態で出土した。土坑である可能性を考え、土器溜り周辺の精査を行なったが、掘り込みは確認できなかった。

（１）は肩部にハケ状工具による平行沈線文を施した甕である。口縁は外反し、上端部はまるくおさめ、下端部は水平方向にわずかに突出する。器形は倒卵形を呈し、非常に小さな底部を有する。内面は頸部と底部付近に指頭圧痕が認められる。（２）は器台である。口縁部は大きく外反し、口縁外面下方は２段の平行沈線文とその間を連続する円形スタンプ文で装飾される。外面にはヘラミガキがみられ、口縁部内面はハケメを施したのちナデ、頸部内面はヘラケズリが認められる。

土器溜８（第156、157図・図版43）

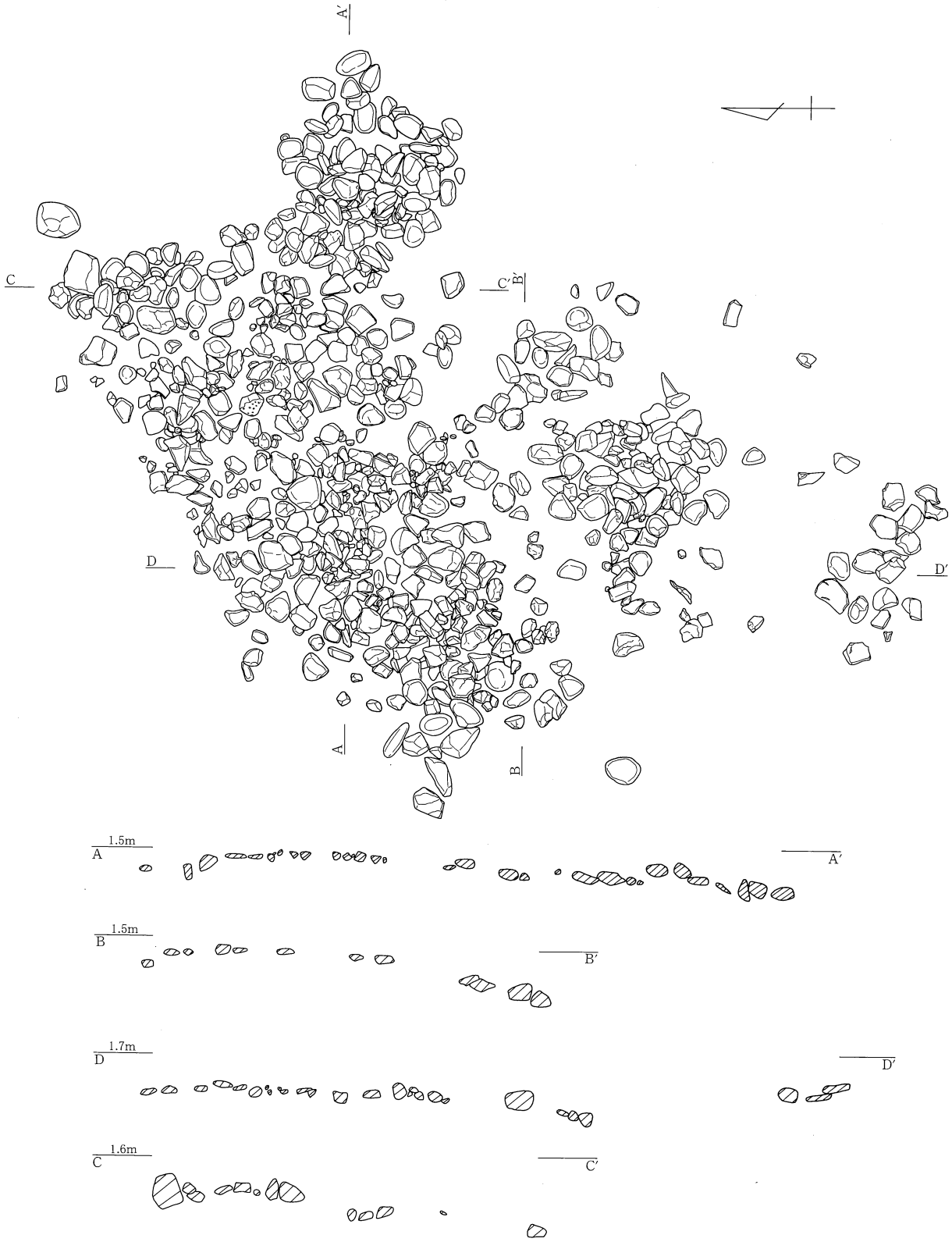
３区Ｂ25グリッドＮＥ区、調査区の北西隅に位置する。黒色砂混じり粘質土中で検出された。ＳＤ36の上層に位置し、溝が埋没したのちに営まれたものである。南北２ｍ、東西50cmの範囲内に、土器の集積が２ヶ所に認められる。北側で５個体、南側で４個体の甕を検出した。土器の周囲でこぶし大の自然礫も数点検出している。土器の接地面の標高は0.75mである。南西側の土器群は破砕の程度が甚だしく、口縁、胴部片とも潰れて折重なり、地面に貼りついた状態で出土しているのに対し、北側の土器群は遺存状態も比較的良好で、口縁部のほぼ全周する甕が３個体、口を上に向けた状態で検出されている。土坑である可能性を考え、土器溜り周辺の精査を行なったが、掘り込みは確認できなかった。

（１）は肩部にハケ状工具による波状文を施した甕である。外反する口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、端部には平坦面をもつ。肩部から胴部の外面はハケメ、内面はヘラケズリがなされる。甕（２）は倒卵形を呈し、非常に小さな底面をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、口縁端部はやや丸くおさめ、口縁下端部は水平方向へつまみ出される。頸部から底部まで外面にはハケメが施され、肩部にはハケ状工具による沈線文が巡る。内面の頸部以下はヘラケズリが施され、底部内面には指頭圧痕が残る。

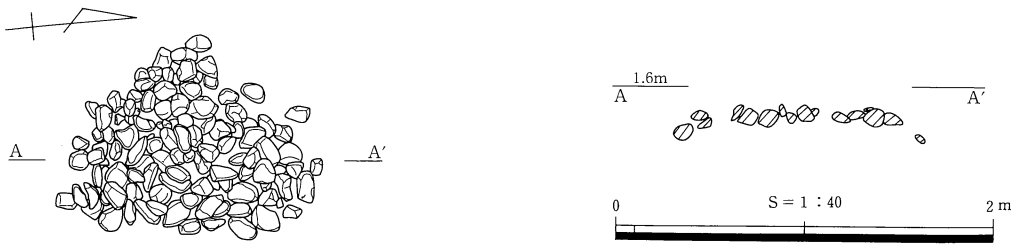


第156図　土器溜８及び出土遺物

第157図　集石2及び出土遺物



第158図　集石３



第159図　集石４

第４節　集　　石

集石２（第157図・図版43）

国道３区Ｂ25～26グリッドにかけて位置する集石である。ＳＤ36東岸の上層に、人頭大からこぶし大の大きさの礫が帯状に並ぶ。集石は、北東から南西方向に長さ約7.5m、幅1.2mで延びる。礫の接地面の標高は、南西側で0.5m前後、北東側で0.65m前後である。集石は、円礫や板状安山岩などの角礫を主体に構成されているが、一部敲石、砥石、凹石などの石製品も含まれる。

集石はＳＤ36埋没前後に設営されたものと思われるが、ＳＤ36の護岸として機能しない在り方である。集石２とＳＤ36の方向の一致や、同時期の土器溜７、８の形成など、集石の周辺では他の場所では見られない様相を呈しており、ＳＤ36を意識した遺構形成が窺える。

集石２に伴う遺物としては甕（１）がある。口縁端部は平坦面をなし、口縁下端部は水平からやや下方に向かって鋭くつまみ出される。肩部には波状文が施されている。

集石３（第158図・図版44）

国道１区Ｂ15グリッドＮＷ区からＣ15グリッドＳＷ区にかけて位置する。長軸2.73m、短軸1.8mの範囲に、拳大から人頭大の礫を集積するものである。長軸方向は北東－南西方向を指し、平面形態は長方形状を呈する。検出レベルは標高1.38～1.60mの間にあたる。中央部が高く、縁辺が低くなる、断面弧状を呈する形状である。遺物包含層中からの検出のため、遺構に伴う遺物は判別できなかった。

集石４（第159図・図版44）

国道１区Ｂ14グリッドＳＷ区に位置する。長径65cm、短径51cmの範囲に、拳大の礫を集積するものである。平面形態は楕円形状を呈する。検出レベルは標高1.5～1.55mの間にあたる。中央部が高く、縁辺が低くなる、断面弧状を呈する形状である。遺物は出土していない。

第5章　古墳時代以降の遺構

第1節　土　　坑

ＳＫ307（第163図・図版45）

国道２区Ｂ18グリッドＮＷ区に位置する。遺構南東部をＳＫ310に切られている。長径1.60m、短径1.05m、深さ13.5cmを測る楕円形状の土坑である。底面はほぼ平坦で、断面逆台形状を呈する。埋土は２層に分層され、炭化物を含む黒色砂混じり粘質土が主体である。遺物は、甕（１）、勾玉形土製品４点（２～５）、土玉（６）が出土している。勾玉形土製品４点のうち３点は、土坑の北（４）、西（２）、南（３）の各壁面裾部で出土しており、東側では出土を確認できなかった。埋土中出土遺物の中から（５）を捕捉したが、本来四方に置かれたものであると推察する。土玉（６）は（３）に近接して出土しており、土坑東側で炭化材が検出されていることとも合わせ、何らかの祭祀行為に関連する作為的な遺物配置が窺われる。

（１）は、埋土中から検出された甕で、外反する口縁部を有する。端面上端は平坦面をなし、下端は横方向に突出する。口縁部内外面はヨコナデ調整し、肩部内面はケズリ調整している。（２）～（５）は、長さ2.3～3.9cm、幅1～2cmを測る。（５）がもっとも小型軽量で重さ2.4gを量り、（４）が最も大型で重さ9.5gを量る。手捏ね成形で粗雑な作りだが、いずれも穿孔させて勾玉形の形態をとっている。遺構の時期は、古墳時代前期である。

ＳＫ308（第164図・図版46）

国道２区Ｃ19グリッドＳＥ区に位置する。長軸1.12m、短軸96cmを測る隅丸方形状を呈する土坑である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは11.2cmを測る。埋土は黒茶褐色粘質土の単層である。径3～22cmの平石が、多数埋土中から検出されたが、いずれも底面より浮いた状態にある。（１）は、埋土上層から検出した脚台部である。体部内面をケズリ後ナデており、脚部内面はケズリ後ミガキ調整を加えている。（２）は骨角製の漁撈用刺突具と思われ、北東部の底面付近で出土した。遺構の時期は、古墳時代前期である。

ＳＫ309（第165図・図版46）

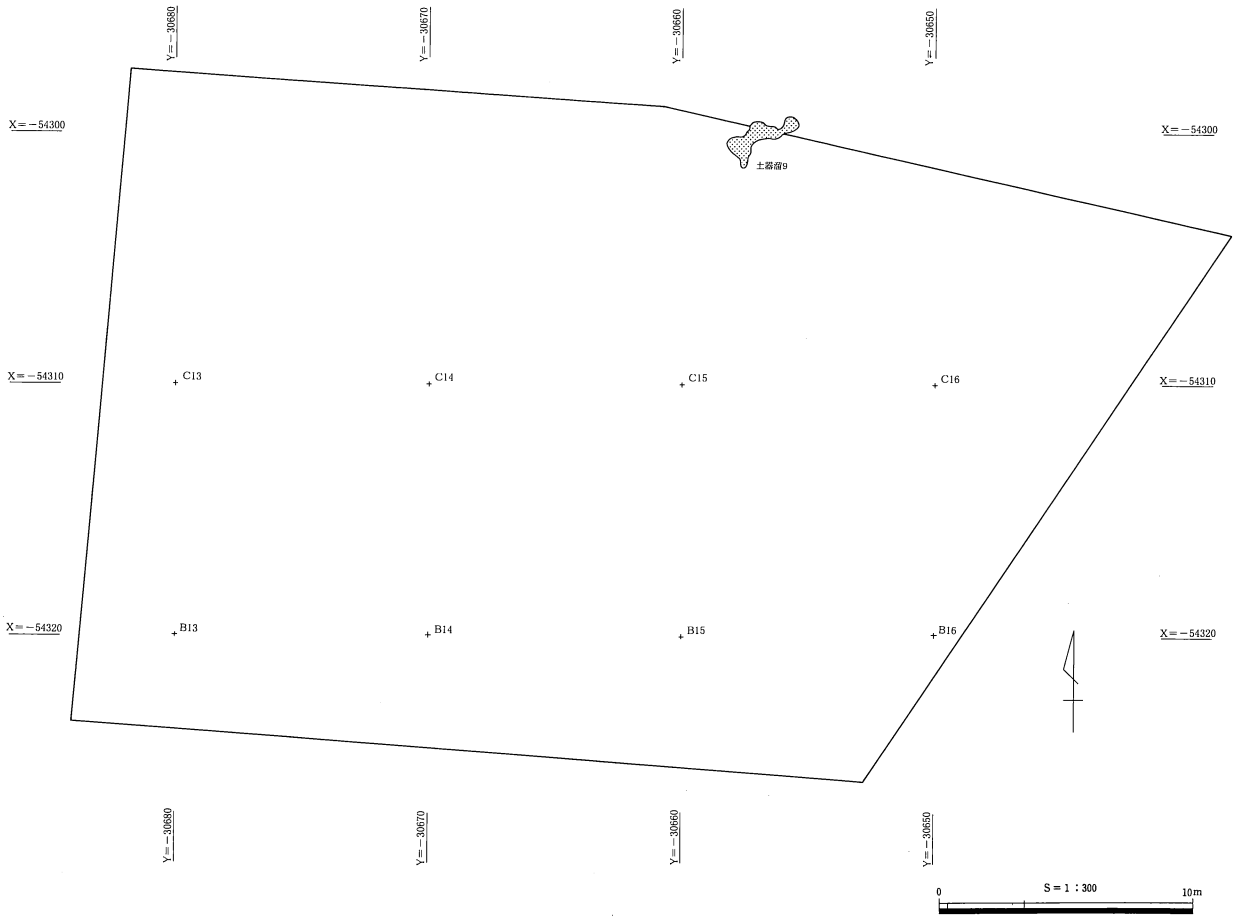
国道２区Ｂ20グリッドＮＥ区に位置する。長径71cm、短径57cmを測る楕円形状を呈する土坑である。底面は、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜しており、検出面からの深さは、南東側で11cmを測る。埋土は２層からなり、暗灰褐色細砂混じり粘質土を基本とする。（１）は埋土上層から検出された甕で、複合口縁が形骸化して単純口縁的形態を呈する。胴部外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。遺構の時期は古墳時代中期である。

ＳＫ310（第166図・図版46）

国道２区Ｂ18グリッドＮＷ区に位置している不整形な土坑である。遺構の北西側はＳＫ307を切っている。また東端はピット状の落ち込みで切られている。長軸1.3m、短軸81cm、検出面からの深さは7.5cmを測る。底面は平坦で、断面形皿状を呈する。埋土は微量な混入物の差によって暗灰褐色粘質土が２層に分層される。②層には炭化物が少量混じる。遺物は、底面から浮いた状態で出土しており、（１）は土師器の甕（１）で単純口縁をなす。胴部外面ハケ調整で内面粗いケズリ調整を施す。土玉（２）、石庖丁（３）、ガラス小玉（４）も埋土中から出土しているが、これらは前代のものが混入したものと考えられる。遺構の時期は、古墳時代後期である。

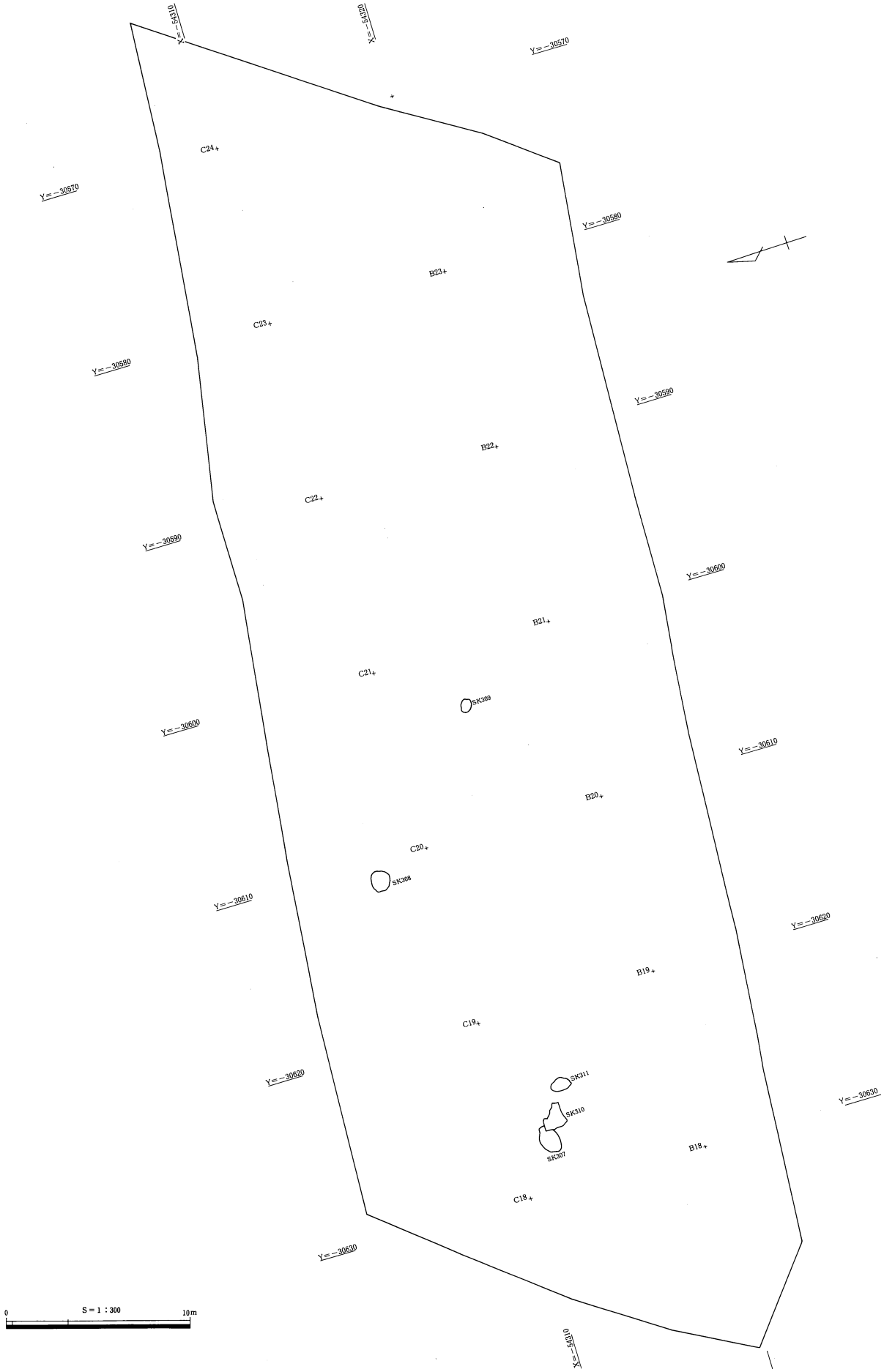
ＳＫ311（第167図）

国道２区Ｂ18グリッドＮＥ区に位置する。長径1.1cm、短径70cmを測り、検出面は楕円形状、底面は不整な円形状を呈する土坑である。検出面からの深さは47cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土が２層に細分される。埋土中より、須恵器の坏蓋（１）が出土している。体部を欠き、天井部のみである。外面はヘラ切り後ナデ調整し、内面は同心円タタキが残る。７世紀代に比定される。

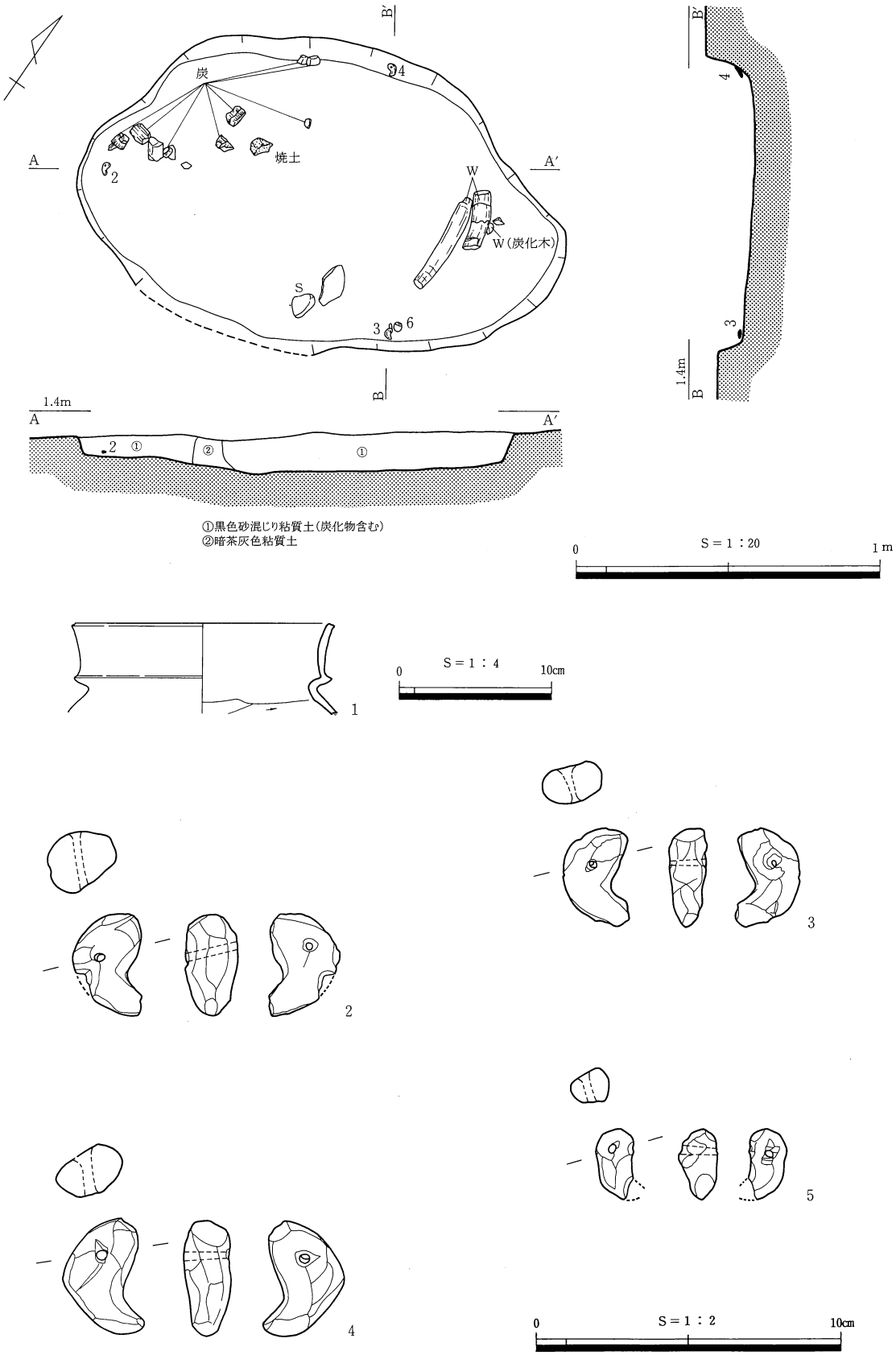


第160図　古墳時代以降１区遺構配置図

第161図　古墳時代以降３区遺構配置図



第162図　古墳時代以降2区遺構配置図

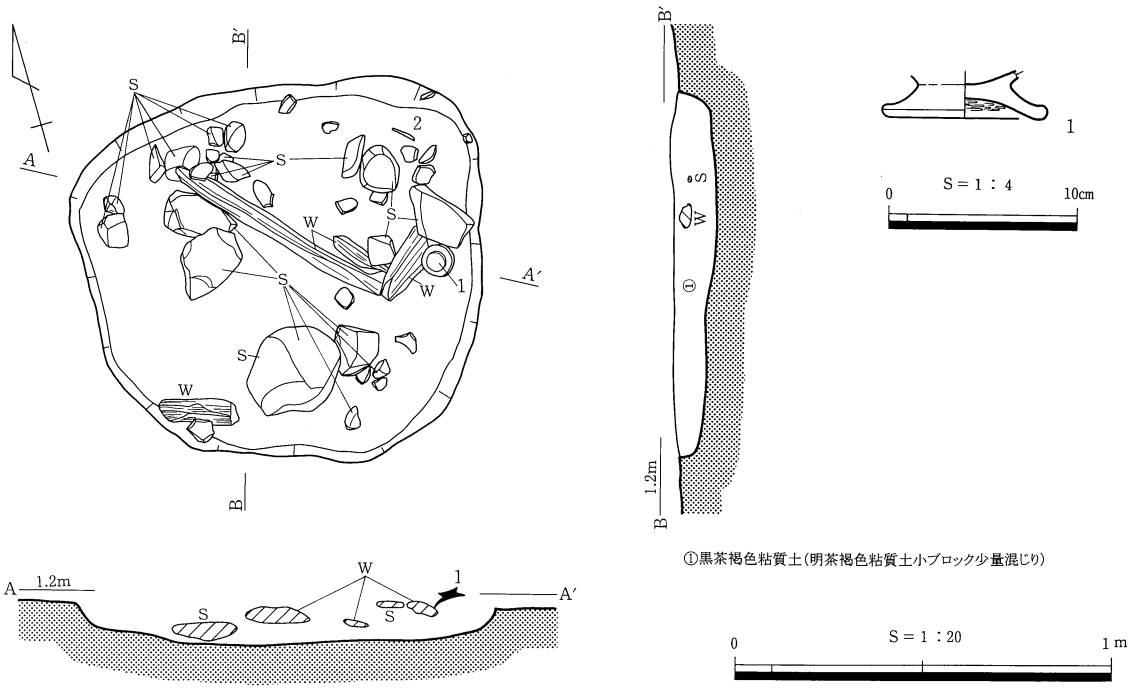


第163図　ＳＫ307及び出土遺物

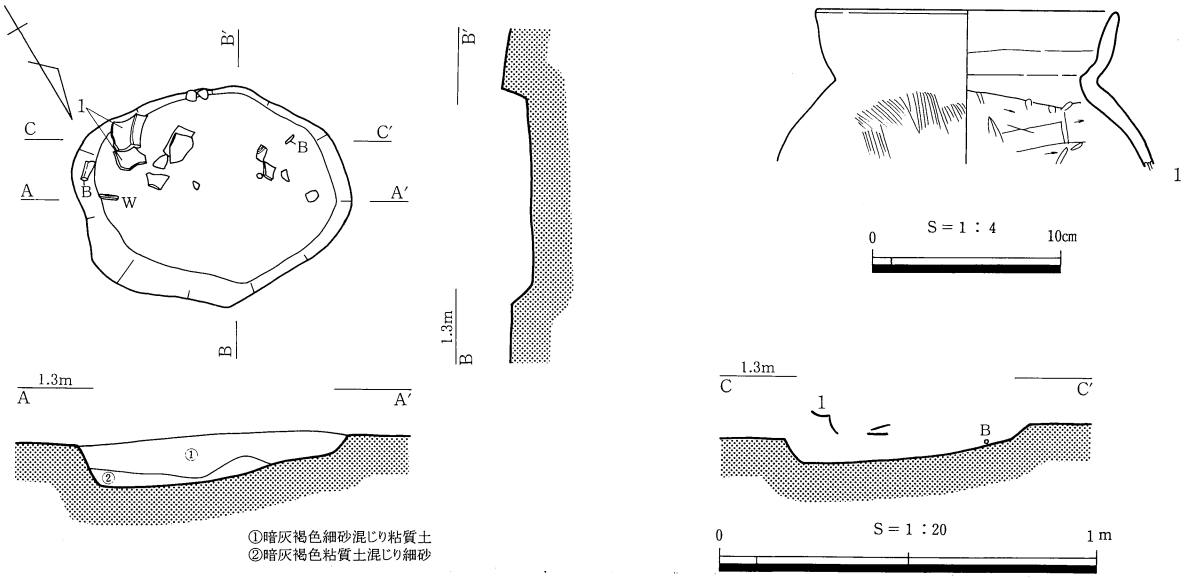
第2節　土器溜

土器溜9（第168図・図版47）

国道1区C15グリッドNW区からD15グリッドSW区にかけて位置する。調査区の北側壁中央裾部にあたる。北側にさらに広がる可能性もある。Ⅰ層中で検出されたが、土坑は確認されなかった。土器は、標高1.18m～1.42mの24cmの間で検出されているが、完形のものが含まれており、設置面の標高が、1.18m～1.20mにあたる



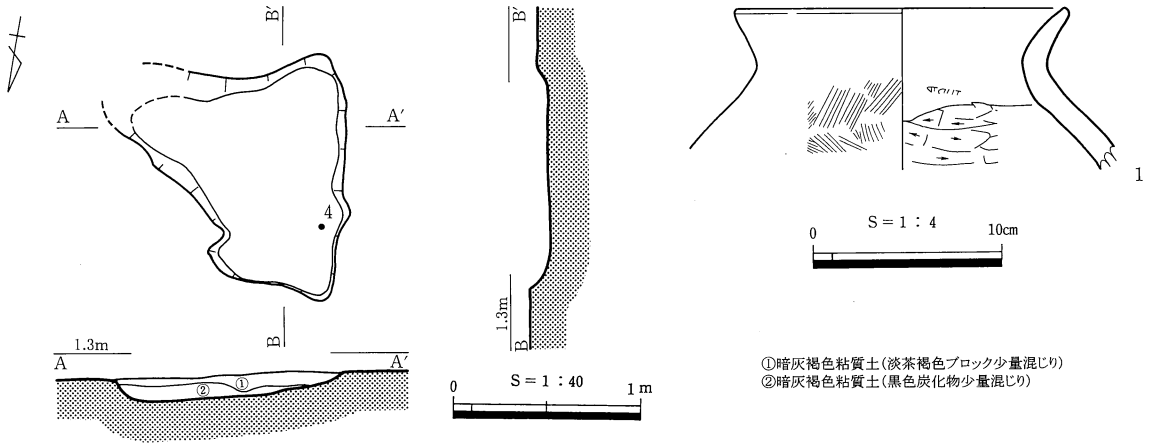
第164図　ＳＫ308及び出土遺物



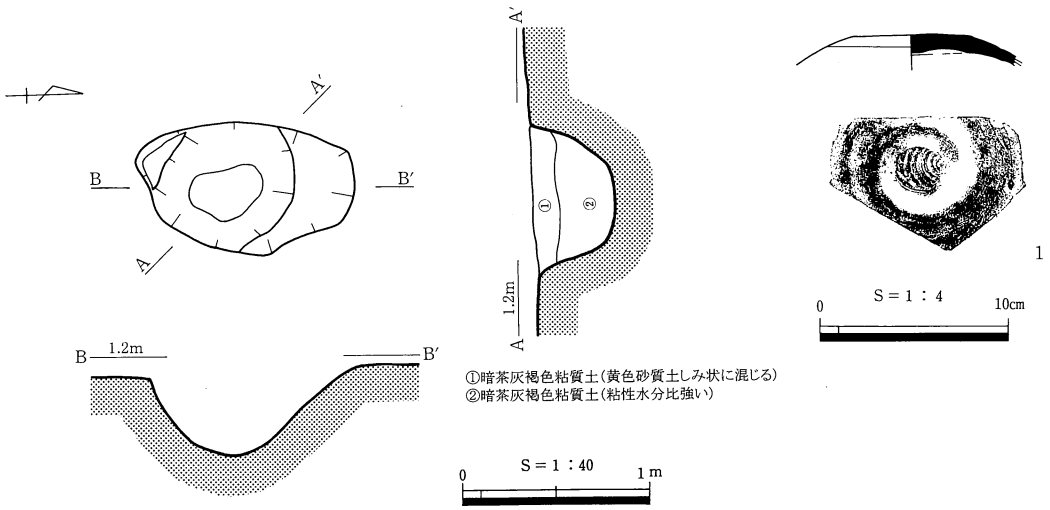
第165図　ＳＫ309及び出土遺物

ものが多い。東西2.78m、南北1.94mの範囲に13点の土器が検出された。特に明確なまとまりを示すわけではなく、散在した状態にある。甕（１、２、９、10)、小型の甕（４、12、13)、壺（５～８)、小型の壺（３、11）からなる。甕と小型の甕は破砕した状態にあるのに対し、壺と小型の壺は多少の破損はあるものの、概ね完形に近い状態で検出された。

（１）は、外反する口縁部で、端面上端を摘み出し気味にし、下端は横方向に突出させる。内外面をヨコナデする。胴部は肩が張り、倒卵形を呈する。外面ハケ調整で、肩部にヘラ状工具による刺突文が巡り、内面はケズリ調整を施す。（２）は、外傾する単純口縁で、端部を面取りする。内外面をヨコナデする。胴部は肩が張らず、球形に近い形状を呈する。外面ハケ調整で、内面ケズリ調整を施し、底部に指押さえがみられる。（３）は、胴部に比して長く外傾して伸びる口頸部で、内外面ナデ調整を施す。胴部は寸の詰まった球形で、外面細かいハケ調整、内面ケズリ調整、底部に指押さえがみられる。（４）は、やや内傾気味に立ち上がる口縁部で、下端は斜め下方に突出する。内外面ヨコナデ調整である。胴部は球形を呈し、外面ハケ調整後、肩部にハケ状工具による波状文と平行沈線が巡り、その下部にヘラ状工具による連続刺突が巡る。内面はケズリ調整で、頸部下と底部に指押さえがみられる。遺構の時期は、古墳時代前期に相当する。



第166図　ＳＫ310及び出土遺物

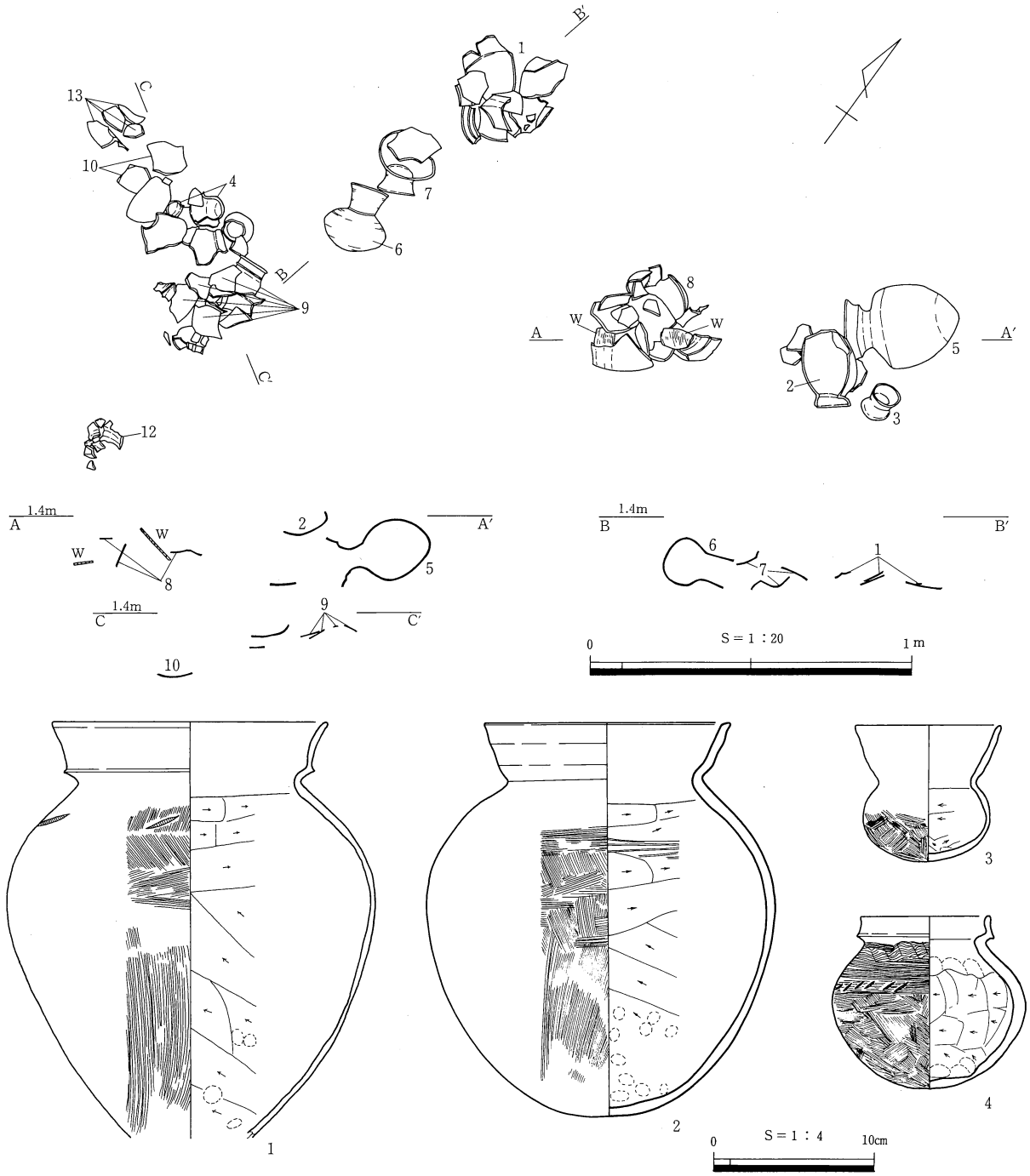


第167図　ＳＫ311及び出土遺物

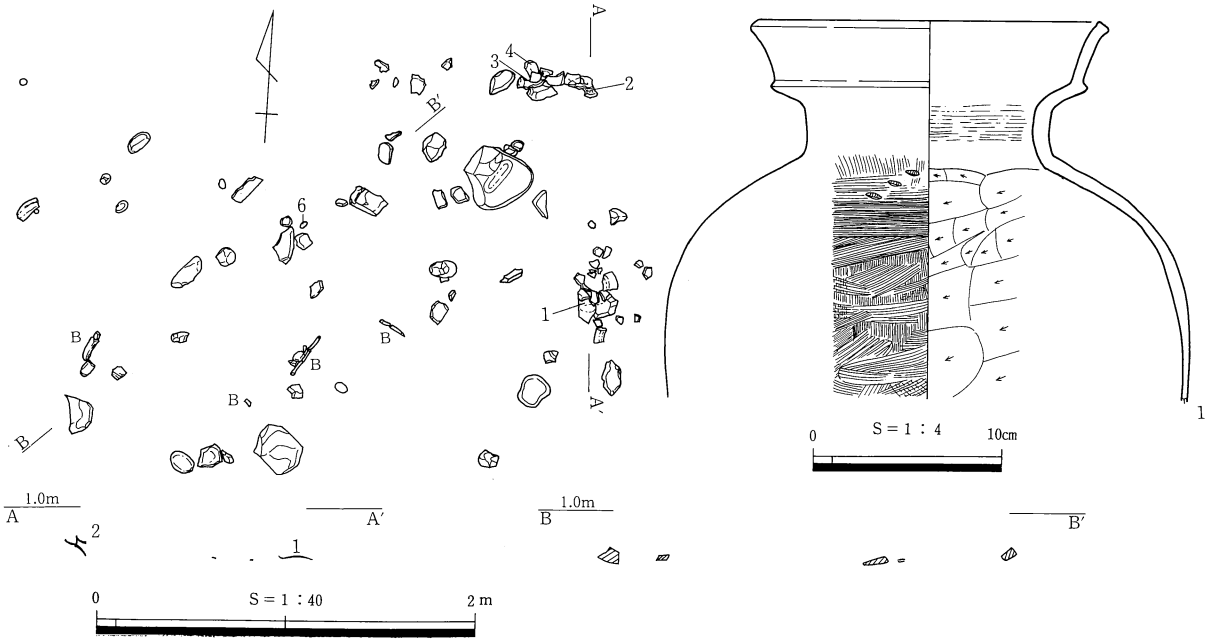
第3節　集　　石

集石5（第169図・図版47）

3区B25グリッドのＳＥ～ＳＷ区に位置する。南北2.5m、東西3.5mほどの範囲に人頭大～拳大の角礫、円礫が点在する。礫の接地面での標高は0.7～0.75mである。集石2南西端の延長線上に位置するが、レベル的には10cmほど高い上層にあたる。集石を構成する礫は大半が自然礫であるが、砥石3点、敲石1点、凹石1点が含まれる。また集石の中央付近からは骨玉1点が出土している。ＳＤ36の埋没後、作為的に配置されたものと考えるが、その性格は不明である。集石5に伴う遺物としては壺（1）が挙げられる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、平坦面を有する口縁端部はわずかに内側へつまみ上げられている。口縁下端部は水平方向につまみ出され、鈍い稜をなす。肩部にはヘラ状工具による刺突が数ヶ所みられる。遺構の時期は、古墳時代前期である。



第168図　土器溜9及び出土遺物



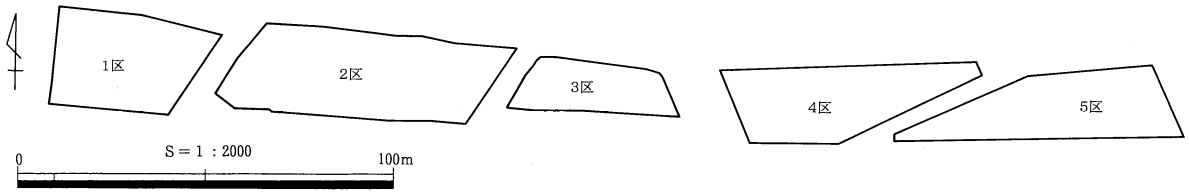
第169図　集石５及び出土遺物

第６章　関連諸分野の成果

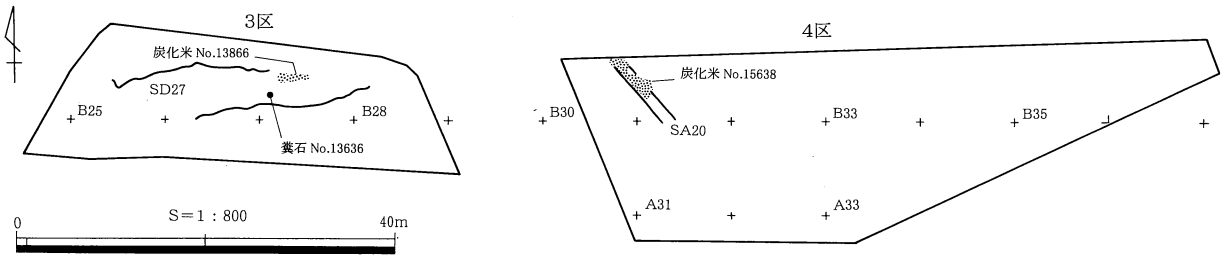
第１節　はじめに

当章では、国道調査区３～５区で採取された資料をもとに行われた、４件の自然科学的分析、及び研究の成果を報告する。本報告書は１区から３区までを対象としたものだが、資料の採取地点が次年度報告の国道調査区４区、５区にも及ぶため、採取地点について若干の説明を行っておきたい。国道調査区全体の配置については、『一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　青谷上寺地遺跡１』の第１章で触れているが、下図の第170図にも配置図を掲載した。３区の概要については本報告書２～５章を参照していただくとして、４区、５区の概略について述べておきたい。４区では、海成層の上層に弥生時代前期の遺物を包含する湿地堆積層が形成され、弥生時代中期にいたって一部に集石などの遺構が築かれるようになる。弥生時代後期後葉段階に、片側にのみ矢板列を設けるＳＤ11類似の大規模な溝ＳＤ38が築かれる。この溝が次第に堆積し、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃には埋没し、上層に土器溜が形成されるようになる。この時期、ＳＤ38の東側に15m程度の距離をおいてほぼ平行するＳＤ39が築かれ、これ以東５区にいたるまで、遺構の数、遺物の出土量は激減する。第３節で報告するが、５区から採取された土壌資料からイネのプラント・オパールが検出され、よってＳＤ39以東が弥生時代中期～後期の段階に水田化されたことが確認された。５区では、海成層の上層に弥生時代前期の遺物を包含する砂層が堆積し、その上層から湿地の堆積が始まる。４区同様中期～後期の段階に水田が形成される。

「第２節　青谷上寺地遺跡の炭化米特性と稲作起源」に係る資料は２点で、No.13866の炭化米資料は、国道調査区３区のＢ27グリッドＳＷ区、ＳＤ27の埋土中で、北岸とＳＡ11の間から検出されたものである（第27図、第171図）。検出層は弥生時代中期後葉に相当する。No.15638の炭化米資料は、国道調査区４区のＢ30グリッドＮＥ区～Ｂ31グリッドＳＷ区、ＳＡ20の杭列、横板の間隙に堆積していたもので、弥生時代後期後葉に相当する（第171図）。第３節～第５節に係る資料は、いずれも国道調査区５区から採取されたものであるが、それぞれ節末に「補遺」を設け、検出層位等について記述した。なお、国道調査区３区Ｂ27グリッドＳＷ区、ＳＤ27の弥生時代中期後葉に相当する埋土中から糞石（No.13636）が出土し（第171図）、これを分析した結果、人間由来の鞭虫卵が多量に検出された。分析結果については、『一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　青谷上寺地遺跡１』の「第９章　関連諸分野の成果　第３節　青谷上寺地遺跡出土糞石の微遺体分析」に掲載している。



第170図　国道調査区１～５区配置図



第171図　３、４区資料検出地点